アクセサリー(改訂版)

ふぇんす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アクセサリー（改訂版）

【Ｎコード】
Ｎ６２７６Ｊ

【作者名】
ふぇんす

【あらすじ】
高校生の輝はある日不思議なペンダントを拾う。ペンダントは異世界への鍵。『劣等感』、そして『嫉妬』を根本に持つ輝は異世界をどう生き抜くのか？

日常の終わり（前書き）

稚拙な文章ですが、読んでいただけるとありがたいです♪

日常の終わり

キーンコーンカーンコーン…。

乾いたチャイムの音が昼下がりの校内に響く。それは無機質に、でもどこか『日常』を感じさせるメロディーで。チャイムは最近終わった改装工事のお陰でキレイになっている校舎に少しの余韻を残して消えた。

「今日はここまでだな」

黒板に描かれた図形の横に難解な数式を綴っていた数学教師の手が黒板からチョークを離すと、それを合図にしたかのように生徒達は筆記用具をしまった。

「ここは重要だから各自復習すること」

数学教師は少し疲れた顔で教室を去っていく。もしかしたらチャイムの音を一番心待ちにしていたのは彼かも知れない。

「今のヤツわかった？」

「あー疲れたぁー」

「やっと帰れるぜ…」

最後の時間である六時間目の数学が終わり、思い思いのことを口にしながら一息つく生徒達。ざわざわざわと、若干のやかましさ。

コレもいつもの光景。変わらない日常。およそどこの高校でも見られる光景だ。

「んあ…やっと終わったぁー。よく寝たぁー」

俺は大きく欠伸をしつつ腕をぐーっと上におしやって体を伸ばす。そして無駄な抵抗だとは思っているが、黒板の難解な数式を真っ白なノートに写すべくペンを握る。

もー本当に数学はイミわかんねぇな！はぁ…もういいや。

俺はノートに写すのを諦めてペンを机の上に放り投げた。

数学は中々の強敵で、俺は授業の内容についていけずに寝た。まぁ要するにふて寝だ。我ながら情けないことこの上なし。

あーあ、俺にも数学を楽々看破できる脳ミソがあればなぁ。

てなことを寝起きの心地よい倦怠感の中で考えていると突然教室のドアが開き、うちのクラスの担任の先生が入ってきた。

「ホームルーム始めんぞー！席つけー！」

担任の呼び掛けに教室内に散らばっていた生徒がワリと素早く席についた。

教師の言うことを素直に受け取ろうとしない現代人な生徒達が担任の言うことには従ってるのだから、うちの担任は信用が有るんだろうな。ま、今回の場合は「疲れているから早く帰りたい」っていう

のも大きな理由だと思うけど。
その信用の有るらしい担任は教壇に立つと、生徒がみんな席についたのを見て、出席名簿を開いた。ホームルームを始まりだ。

「ま、皆も早く帰りたいだろうしさっさとホームルーム終わらすから静かにしてろよー。…まず明日の――」

あ…駄目だ。眠いわコレ。全然頭に入ってこない。寝過ぎだな。
俺は諦めて頭を机の上に投げ出した。

「――――……だから、忘れないように！」

先生の声で目を開く、時計を見る。机の下でこっそりと開いた時計はさっきから一分くらいしかたっていないことを示していた。
ようやくハッキリと目が覚めてくる。もう先生の話も終わりの方だ。
もうすぐ来る春休みや終業式の話だったような。途中寝ながら聞いてたし、詳しくはわからんけども。

「よし。連絡はそれだけだな」

先生は持っていたプリントを教卓の上に置いて生徒に改めて向き直る。そして生徒皆が待ちに待った一言。

「じゃこれで終わりまーす。号令よろしく！」

先生の許可を受けた前の席の男子が自ら立ち上がりながら号令を掛ける。

「きりぃーつ」

ガタガタっ！
椅子がやかましく音をたてる。今日は掃除がないので椅子は机の上にあげなくても良いようだ。
俺は周りに倣いスクールバックを肩にかけて立ち上がる。

「礼ー」

気の抜けたような号令と同時に「さよならー」や「オレ今日部活」等定番の言葉で教室が埋め尽される。

「やっぱ数学難しいなぁ」

本当に難しかった。お陰でたっぷりふて寝させてもらったよ。
俺がそうやって今更のように一人ぼやいてると隣の席の友達から「そりゃ授業寝てたら難しいだろ」と笑われながらツッコまれた。

うん、反論出来ない、ね……。

俺の名前は久喜（くき）　輝（あきら）。都内の高校に通う高校一年生。
華の高校生とまではいかないけれど。俺はこんな風に恐らくごく平均的な男子高校生の毎日を過ごしていた。

ガタンゴトン、と電車は心地好い揺れを乗客たちに与えつづける。
俺は愛用のヘッドフォンで音楽を聴きながら電車の席の角に座っていた。
駅までは友達と一緒だったが、俺の地元である峰尾町方面の人が一

人もいないので今日もいつもと同じく独りで電車に乗っていた。
そんな俺は電車に揺られながら何気無く自分が座っている方と逆の方の窓を見た。
夕日が眩しい。

もう夕方か…。夕暮れ時って言っても冬は日が落ちるのが早いからな。時計を見る限りまだまだ帰宅ラッシュには時間が早いので車内はがら空き。ちらほらと他の同校の学生がいるくらいだ。

「ウザくなってきたな…」

目に髪がかかる。最近は長くなってワックスとスプレーを併用している。いい加減切ろう。長いとセットするのに時間かかるし。

峰尾まで乗り換えもなくて俺がぼーっとし始めたとき、ガララ、と車両間を移動する時に使う扉の音がした。知ってるとは思うけどあの扉が開閉時に立てる音は結構大きい。ヘッドフォンを通してでも聞こえるくらいだ。
俺は無意識に顔を扉の方に向けた。すると扉から出てきた少年と目があった。
お互いに驚きの顔になる。
知ってる顔だ…！

「あれ、輝じゃん！」

向こうから懐かしい声で声をかけてきた。
隣の車両から来た茶髪で短髪の、制服を着た少年が手をこっちに振りながら近付いてくる。制服は俺のモノとは違うので他校生だということがわかる。

俺は彼が近付いて来るのに合わせて立ち上がった。

「よぉ、一樹か！」

俺は、よお、と言いながら手を少しあげて彼に挨拶をする。

今車両を渡ってきた少年、一樹は中学の頃からの親友だ。ちなみに名字は橋山。一樹は地元から離れた都心の高校に通っている。学校の場所が違うので本来の帰宅の時間は各々違うのだが、多分俺がふらふらコンビニとかよって駅まで歩いたせいでいつもは会わない彼と遭遇したのだろう。

「久し振りだな！暫くぶりだろ！」

「そう、だな！」

久し振りの友達との再会に自然と笑みが溢れてくる。

確か最後にあったのは中学の卒業後の春休み。最後の思い出づくりとしての花見だ。今はもう三学期も終りの方の3月なので、その頃から数えると、約一年会っていない計算になる。

一年。結構長い間会ってなかったってことは話題が尽きないわけで。思い出話に向かうこともなく、高校に入ってからの話をしていた。

まぁ、俺は深くは話せないけどな。

「……ってなったんだよ～」

「ハハハッ！なんだそれ！」

一樹の面白い失敗談に大声で笑って周りの乗客ににらまれる。俺は少し後悔してから、でもまた小さく笑う。

一樹は相変わらずだった。昔の友達が変わらずにいてくれるのは結構嬉しい。

昔はずっと馬鹿やってたなぁ。修学旅行のおもいで等が思い出された。

本当に懐かしい。

確かに一年位でともいえるが。

高校に入ってからの長い一年間を経験した俺には懐かしさで心がいっぱいだった。

あれから一年にもなるのか。他の皆はどうしてっかな?変わって無いかな?過去へ向けた疑問はとどまることを知らない。

「あ、そうだ」

急に一樹は思い付いた表情になった。

「輝…久しぶりにネタあるぜ」

一樹が雰囲気を変えて言う。何だろう?胃をえぐられるような不快感―恐怖―を感じるようで、とても懐かしい雰囲気だ。

「…ネタ…?」

俺は一樹の言葉に疑問を返す。

ネタ…?

俺は必死に中学時代の記憶を探った。一樹は俺が全然思いだせそうに無いのを見て呆れた顔をする。

「忘れたのかよ?…都市伝説の話だって!」

得意気に一樹が放った一言で、また俺の中学の頃の記憶が蘇った。中学の頃仲間で集まって都市伝説や怖い話を語りあう遊びをしていたことを思い出す。丁度あの頃は流行ってたんだよな。

そんでもって…。一樹のお陰で色んな事件に巻き込まれた。

俺は怖い系の話は苦手で、中学の頃もずっと聞き役だったな。ま、たまに話す側にもまわったけど。

「都市伝説かぁ。懐かしいなオイ。大変だったけど楽しかったよな?」

得意気な一樹に弱気を悟られるのが嫌で強がってみせる俺。心の中では、怖かった色んな事件の記憶を思い出さないように必死だった。

「で?」

俺は一樹の話をうながした。

「どんな話だよ?」

あーあー。強がっちゃって俺。知らねぇぞ。コレじゃ中二の頃と何もかわんねぇや。

話を進めるように俺に言われた一樹が軽く笑みを浮かべて待ってましたとばかりに話し始めた。

「じゃ話すぜ。まぁよくある埋蔵金の話なんだけどさ」

あ、埋蔵金ってことは怖くないやつだな。
俺は少し安堵した。少なくとも説明のつかないような怪異ではないわけだ。

「そんで？」

余裕が出てきた俺はさっきとは違って気楽な思いで一樹の話を更に促す。

「あぁ。その埋蔵金が俺らの町、峰尾町に。しかも峰尾山から流れる川にあるらしい。ってことは？」

俺らが住む峰尾町とは、その名の通り、峰尾山の近くにあるからそんな名前になっている。
「その川は峰川だな？」

一樹の問掛けに俺も軽く笑みを浮かべて答えた。
峰川は峰尾町の中心部を流れる川で、これもまたその名の通り峰尾山から流れる川だ。この町はシンプルで良い。

一樹が話を続ける。

「そゆこと。んでもって峰川って輝の家の近くだよな？」

「ああ、そうだ。今度みてみよっかな。その話ネットで拾ったのか？」

俺は話の信憑性を求めて噂の出処を一樹にきいた。

「そうそう。いやぁーこれで我が町も全国区だな！」

一樹は自慢している。が、ネットじゃちょっとな。

とはいえ家の近くに埋蔵金とは悪くない話だ。まぁ所詮都市伝説なんだけど。うん、やっぱり信憑性なんてあるわけないか。

一樹も俺と同じことを考えていたのか残念そうに言う。

「ま、都市伝説だけどね！多分『本物』でも無いだろうし。あぁー。金欲しいなぁ！」

一樹の気持ちも分からなくないけど。実際欲しいモノだって一杯あるし。でも普通に暮らしてて大金が入るわけがない。そんなことがあったら不景気になんかなりゃしないワケで。

しばらく考えてる風の一樹が急に口を開いた。

「そうだっ、全財産を宝くじに当てれ…」

「やめとけ。ほら駅ついたぞ！」

俺は一樹のバカげた考えを切り捨てて席を立った。徐々にスピードを落とす電車、無機質なアナウンスが流れる。

俺と一樹は電車を降りて、ホームを歩いていく。

背後に電車の発進する音を感じながら改札に向かった。

「そんな金が欲しかったら働くんだ！バイトとかで！」

俺は一樹に説教してみた。が、意味無いだろう。あの一樹だし。

しょげたふりをする一樹は定期を取り出して改札を通った。

「はぁー。人生うまく行かないねぇ久喜君」

「…そうですねぇ橋山君」

俺らは改札を通って外に出る。外に出るとすでに陽は落ちていてかなり寒かった。

途中まで一緒に歩いていた俺達も、分かれ道で別れて各々家路に着いた。一樹と別れてまた一人になった俺はマフラーをしっかり巻きなおした。

電車の十分ちょいじゃまだまだ話し足りないな。そうだ、明日遊びに誘ってみよう。

ヘッドフォンを耳当て代わりのようにして俺は真っ暗な空の下を家に向かって歩き始めた。

サァーー……。

川の水が流れる清廉な音が聞こえる。

「この川にどうやって埋蔵金隠すんだろなぁ」

今考えてみると馬鹿馬鹿しい話だ。川に埋蔵金なんてあってもソッコーで錆びるだろ。
一樹と別れた所から家に向かって暫く歩くと件の峰川に差し掛かる。
そして俺は川の横の土手道を歩いていた。
街灯の数が少ないからかなり暗い。一時期はこの暗さが怖くて怯えながら歩いたもんだ。
そしてさらに寒いので俺は少し足早になる。

「寒ぃー。3月は充分冬だな。…当たり前か」

誰に向かって言うわけでもなく独り言。

昼は最近暖かくなってきたのにな。もう3月か。早いもんだ。
川の水は闇に暗く染まっていたが、所々街灯に照らされて水の持つ清らかさを見せていた。

キラッ。

「ん？」

街灯の光や水の反射とは別に何かが光った気がする。しかも川の方からだ。

いつもならそんなことがあってもそのまま帰るのだが、埋蔵金の話を聞いていた俺はまさかとは思いつつも、その光が見えた方へ歩いて行った。
まぁ本音を言うと、５００円玉とかの小銭があるかも知れないと期待していただけだったんだけど。

「よっと」

俺は土手を河原へと降りて行く。土手はそれなりに急なので、うまく片足に体重をかけてブレーキをしつつゆっくり降りていく。何度かころげ落ちそうになったけど、俺は無事に河原までたどり着いた。

「やっぱ川の近くはすげぇ寒いな！ん？…これは…？」

黒い絵の具を溶かしたような色の川の水の中、河原に近い所からぼんやりと光が見えている。これが光の元か。

「…なんだこれ？」

俺はそのぼんやりとした光を放つ物を水から掬い上げた。冬の川水が厳しく俺の手を冷やす。
よくみると何らかのアクセサリーの用だ。

「冷たー。…これはペンダントか？」

光を放っていたそれは俺の手の中におさまると少しずつ光を失っていった。

目の前でおこった不思議につい沈黙してしまう。

「……」

そのペンダントは銀色で細いチェーンの先にこれまた銀色のリングが付いていた。少しチョーカーっぽくもある。
見たことのない不思議なデザインをしている上に、どこかの言葉なのか知らないが異国感たっぷりの文字も彫られていた。ハッキリ言って不気味だ。不気味すぎる。怪しさ全開。

「ま、まぁ埋蔵金とまではいかないけど、パッと見は高そうだな。明日一樹に見せてみよう」

不気味な空気をかきけそうと無理やり少し明るめに声を出してみた。

何となく…だけど俺はそのペンダントに惹かれていたのかも知れない。

その時はいくら不気味でも手離そうとは思えなかったんだ。

「おおぅ！」

川の冷たさと濡れた手に吹いてきた一陣の風に思わず身震いする。

「それにしても寒いなぁ」

俺はそう呟きながら冷たい水と冷たい風のせいで凍えた右手でその銀のペンダントをズボンのポケットに大切にしまい入れた。

制服のポケットに滑り込んだそのペンダントは人知れず妖しく銀色に輝いていた。

翌朝。

俺はベッドの中でゆっくりと目を開ける。
さっきまで見ていた幸せな夢の残照を楽しみながら時計を見ずにもう一度目を閉じる。

いつもの朝の慌ただしさは無い。今日は休み。土曜日。

「……」

土曜日は良い。
休日というのもあるけど、明日も休みだという余裕が大好きで堪らない。

ヴー。ヴー。ヴー。

寝起きで布団の中でぬくんでいた俺は、愛用の黒い携帯が鳴っているのに気付いて、携帯を手にとった。

「……誰だ?」

携帯を開いて見るとメールが一件入っていた。どうやら一樹からのようだ。
俺は寝ぼけ眼でメールを開く。
内容は至って簡潔で、今日遊べるか?というものだった。

昨日の時点で既に遊ぼうと考えていた俺は昨日手に入れたペンダントの事もあり、遊べるということを一樹にすぐに返信した。
俺は携帯を閉じるとすぐにベッドから這い出て出かける用意をしていく。
暗い紺のゆるいジーンズに、黒のロングで半袖のシャツを着て、そ

の上に白いパーカーをはおった。
そして部屋の鏡の前に立つ。

……うん。

まぁ、友達に会うだけだし、無難な格好だろう。

「よし」

財布と携帯、ＭＰ３にイヤホン。もちろん忘れずに昨日ひろったペンダントもポケットに滑り込ませた。
二階にある俺の部屋を出て階段を降りる。居間に顔を出したが誰もいない。

まだ、寝てるみたいだな。でもたまの休日だし、起こさなくてもいいか。

俺は食卓に「夕飯までには帰る」とメモ帳に走り書きで書き置きをして、家族を起こさないようにそっと家を出た。

「まだ来てないのか」

ここは俺の家の近所の公園。さっきメールのやり取りで決めた一樹との待ち合わせ場所だ。だが肝心の一樹の姿は見えない。

「しかたねーな」

俺はベンチに座って一樹を待つ。と同時に何の気なしに周りを見た。

やはり休日ということで家族連れが公園で遊んでたり、親子がキャッチボールしたりしている。微笑ましい限りだ。
視線を正面に戻すと俺の座っている向かいのベンチではカップルがいちゃついてた。
何も考えずについ、いちゃついてる様子を見ていたら、カップルの男の方と目が合い軽く会釈された。

「ハハ……」

苦笑いで会釈を返す俺。

どうも居辛くなった俺はベンチを立って、少し場所を変えるべく歩き始める。

まぁ、平和ってことなんだよな。

休日の昼は冬の日にも関わらず暖かかった。

「春の訪れなのかはたまた地球温暖化の影響なのか…」

独りごちてると、昨日電車で再会した茶髪短髪が走って近づいてきた。

「おーい、輝ぁー！」

手をブンブンこっちに向かってふっている。一樹は少し暑かったのか長袖をまくっていた。

…いや、暖かいとは言ったけど腕をまくるほどではないよ一樹…。

「よぉ。少し遅いじゃねぇかよ」

俺は軽く一樹に文句を言う。

「悪ぃ悪ぃ！ちょっと二度寝してた！」

「二度寝って…。グダグダじゃねーかよ、お陰でこっちは気まずい思いをだな…」

「まぁ、許せよ」

俺はわざとらしく大きめに溜め息をつく。そして二言三言話して俺達は公園の中を歩き始めた。

早速俺は銀色に煌めくペンダントを出して一樹に見せて、昨夜河原で起きた事を話した。

「――……でペンダントが光ってたんだよ。で、コレがそのペンダント」

すると一樹が「俺もおんなじようなことがあった」と言って、ポケットから指輪を出した。

その指輪には紅い宝玉がはめこまれていて、宝玉は不思議な輝きを放っている。

少し驚きながらも俺はペンダントと指輪を見比べた。

指輪とペンダントという種類の違いはあるけども、俺は二つの装飾やデザイン等に何か似たものを感じた。何より、彫られている文字が似ている気がする。

まぁ……あくまで『気がする』だけだが。

「それ…どこで拾ったんだ?」

不気味に思って俺はペンダントをしまいながら一樹に聞いた。一樹も指輪をしまいながら答える。

「いや…。それがな。昨日お前と別れた後、急にコンビニ行きたくなってさ。本屋の隣のコンビニって行く途中に峰川あんじゃん?そこでお前が言ったような事が起きて。んで好奇心で拾った」

「そっか…。つか好奇心て!」

俺は一樹にツッコミながらもさらに不気味さを感じていた。

似てる…。

この指輪とペンダントの装飾だけじゃなくて拾った状況まで似てる。もしかしたら本当に埋蔵金ってこれのことなのか?

だとしてもコレはあまりに…。第一彫られている文字が日本語じゃないし。

「…まぁ考えても仕方ないさ!分からなさそうだしな。んで後で出来そうだったらさっさと換金でもして忘れちまおう!」

深く考え込もうとする俺に向かって一樹は笑顔で言った。

「…そう、だな」

俺も口元に軽く弧を描く。
こういうのは考えないのが一番。
そんでもって今俺達に必要なのは『不思議アクセサリー』じゃなくて遊ぶ金だからな。

それから不気味なことを忘れようとするように中学の頃のノリで街に出てカラオケやゲーセンで遊んだ。

「いやー遊んだねー」

一樹がスッキリした表情で笑いながら言った。だが声はガラガラだ。
もちろんカラオケで歌いすぎたのが原因。

「何より久しぶりだったしな！…あのアクセサリーが何だったのかは結局分かんなかったけど…。ま、暗くなってきたしそろそろ帰るか」

俺も一樹と同じく声はガラガラだ。

「でもやっぱ気になるな…。もう一度峰川の河原に行ってみないか？何かわかるかも」

『不思議アクセサリー』に意外と興味を持っていたのか一樹はそう提案した。

「…まぁ良いけど」

『本物』かもなとは思いつつ、断る理由もないし俺も少なからず興味はあったので河原に行くことに賛成した。

サァーー……。

昨日と同じく控え目な川の音が聞こえる。癒される音だ。

「河原に来たのは良いけどこれからどうする？」

俺は一樹に聞いた。

川はいつものように太陽の光を乱反射しているだけで、昨夜の奇妙な輝きを発してはいなかった。

「やっぱ拾ったとこに行くべきかな？」

一樹は疑問を疑問で俺に返した。

「そーだなー」

暗かったし拾った場所覚えてないけどな。

夕日がダラダラ歩く二人の陰を長くする。河原全体が夕焼け特有の雰囲気に包まれていた。

明らかな変化が起こったのはその時だ。

「…！」

いきなりポケットの中に存在感を感じた。
具体的には表現できないが、ペンダントが存在を主張していることは確かだ。

流石に焦った俺はあわててペンダントを出してみた。
するとペンダントがぼんやり光っている。それは確かに昨夜の川で見つけた時の銀色の光。

「おい、一樹、これ見てみろよ」

俺は手のひらの上で光るペンダントを凝視しながら一樹に声をかける。

「いや、輝、俺のも光ってるぞ」

その声に一樹を向き直ると一樹の手のひらの上の指輪からもぼんやりとした光が出ていた。
ただしその色は俺の銀色と違って赤。一樹の指輪にはめられている宝石の色だ。

「…！おいっ！地面が！」

指輪の光に呼応するように、俺達の立っている地面が突然俗にいう魔法陣を浮かび上がらせて光ってゆく。

俺の所は銀、一樹の所は赤で。アスファルトの色が変色して光っている。
魔法陣を型どる図形や線ははどんどん増えて、複雑なものになっていった。

「うわっ、なんだこれっ？」

「わかんねぇっ！光が強くなってる！『本物』にしちゃあ性質（たち）が悪い！」

足元から掌から。
俺達を包む銀と赤の光は徐々に強くなっていく。

ついに俺の目には銀色の光以外見えなくなった。

「うわっ！」

何も見えねぇ！

キィーーーン！

さらにびっくりするような高音が響いてきた。
俺はとっさに耳を両手で塞ぐ。

これは、耳鳴りか…？
うるさくて鼓膜がおかしく…！

「うわあああ！」

カッ！

直後、二人のいたところに閃光が走り、二人の姿が消えた。

二人の足元に浮かんでいた魔法陣の跡もない。
二人がいた形跡の跡形も、何も無い。

サァーー……。

ただ一つ変わらないのは、峰川を流れる水の音。
水の流れる清らかな音だけが空になってしまった土手に延々と流れていた…。

未開の地

「う…」

服越しに土の感触。
そーっと目を開くと鬱蒼としげる木々の隙間から光が射し込んでいるのが見えた。
それにしても。

「うう…暑い……」

俺は唸るような声を上げる。徐々に意識がハッキリしてきた。
俺はゆっくりと上体を起こして周りを見渡す。

「…はい？」

驚きで変な声が出た。

……どういうこと？

俺の周りには、青々と生い茂った草木が鬱蒼と生い茂り、見渡す限りの自然がある。文明の欠片も見当たらない。
極めつけには頭上からギャーギャーとよく解らない鳥獣の鳴き声すらする。

「は？は？は？」

俺は無駄に「は?」を連発しながら立ち上がって辺りをもっとよく見回す。

人間本当に焦ると意味不明な行動に出るという事をこの時ほど理解したことはない。

「何だよコレーー!!」

俺、久喜輝はジャングルにいた。

俺は恐怖と焦りと意味不明によって汗ばんだ脳で必死に今の状況を整理する。

あの怪しいアクセサリーが発光して、そんで…。

と、そこで思い出した。

「…あっ、そうだ、一樹は?さっきまで一緒にいたからきっと近くにいるはずだ。よし。まずは一樹を探すぞ」

俺は声を出して状況を整理する。こういうときは声を出した方がパニックにならずに済むのでいいらしい。誰が言ったかは知らんけど。

「大丈夫だ。大丈夫だ」

言いながら俺はそばに落ちているスクールバッグを拾って、夕暮れのジャングルを一樹を探して歩き始めた。

「一樹ぃー！誰かぁー！いないのかよぉー！」

俺の声はジャングルにこだまして響いては消える。

たまに聞こえる物音は鳥のモノばっかりだ。

「くそ…！」

進んでも進んでも辺りの景色は全くかわりばえがない。その上、日がいよいよ落ちてきた。

「はぁ、はぁ」

慣れない悪路に、歩いても変わらない景色、ジャングル特有の蒸し暑さ…。

そして一番キツかったのは…。

「おーい、誰かいないのかー？…はぁ」

誰もいないという孤独だった。

俺は体力的にも、精神的にも限界を感じ始めていた。

「ああくそっ！全然進んだ気がしない！」

自棄になって草木相手に悪態をついても疲れるだけだった。

俺はやりきれない理不尽と焦りを無理やり抑えて近くにあった大木

の太い幹に寄りかかる。

「…何でこんな目に…。……ちょっと休憩しよう」

幸いにも俺は一樹と遊んでいた時にペットボトルを買っていたので今のところ水には困らない。

俺は寄りかかっていた大木の幹から少しずつずりさがり、大きく盛り上がった根に座り休む。そしてため息をついてからペットボトルのお茶を飲んだ。

「ヤバいな…。暗くなってきた…」

ジャングルは静かに闇に包まれていく。
日中はうるさいくらいに聞こえていたハズの鳥獣の鳴き声も全く聞こえない。
わずかに虫と風の音が聞こえるのみだ。

「……。ふわぁ」

俺は大きく欠伸をした。そして携帯の画面を開く。圏外どころかぶっ壊れてしまったようで液晶は真っ暗。仕方なく腕時計を見た。

ジャングルに来た時からもう何時間も歩き続けている。

正直、疲れた。
そして凄く眠い。

伸びをしてみたり頬をつねってみたりしても目は冴えてこない。もう限界だ。

「疲れた…少し眠ろう…」
少しだけだ、大丈夫。
野宿に抵抗はあるものの、俺の睡魔は不安を押しきった。
俺はパーカーのフードを深く被る。
そして今この現実が夢であってほしいという希望を胸に、目を閉じた。
静寂に満ちていたジャングルの夜。その静寂の中に一つの寝息が混ざる。
静寂と闇は混ざりあい、俺を不気味な空気で包んでいた。

……きて……。
……起き……。
声がする。
誰の声？
……起きて……。
「――……起きて！」
「…う。まだ暑い…。」
俺はゆっくり目を開けた。

肌にまとわりつく熱気は変わらない。もう既に朝になっていたようで、目に当たる朝日が眩しい。

ちょっと寝るだけのつもりだったのに…。

「良かった…」

女の声がする。

さっきから俺を起こしていたらしい声だ。

「…うん、良かったね…。……。…って、え!?」

徐々に意識がハッキリと覚めてきた俺は驚いて飛び起きた。

誰だ?コイツ?

目の前に高校生の、灰がかった黒色の髪を持つ女の子がいた。肩まであるセミロングの髪。顔立ちからすると日本人の様ではある。

結構綺麗で、幼さの残る、美人というよりは可愛い顔だった。

どこかの学校の制服を着ていて、俺はそれを見てこの女の子が高校生だと分かった。

「……!」

微かに感じる既知感。

輝はその女の子の顔をじーっと見て思い出そうとする。

…何かこの子、懐かしいような…。知り合い?いや、初対面だよな?……って。

ぼーっとみとれていた俺はハッとして、その女の子から飛び退いた。

「誰だ？何だ？」

つか何だ！？この状況！？意味わからん！

「ご、ごめん、驚いちゃったかな？」

その女の子はゴメン、と慌てて謝る。

「私は天見舞（あまみまい）です。気付いたら周りがジャングルで…。…やっと人に会えた…」

軽く自己紹介したかと思うと、その女の子、舞はうつ向いて今にも泣きそうな表情になった。恐らく今まで独りで心細かったのだろう。

「え？いや、こっちこそゴメン、俺は久喜輝だ。何でジャングルにいるのかは分かんないよ。えーっと、よろしく天見さん？」

俺は舞が泣きそうなのを見て慌てて自己紹介をした。

しかし肝心の舞はすでに泣き始めている。

罪悪感を感じる俺。

「な、泣かないでよ」

俺は必死に慰める。

涙をせっせと拭いながら頷く舞。

「…舞でいいよ。こっちこそゴメン、ここで初めて人間に会ったから安心しちゃったみたい…」

俺は泣き止んだ舞を見て少し安心して、そっか、と曖昧に頷いて立ち上がった。

「大丈夫か？」

俺は舞に手を差し伸べる。

「あ…、ありがとう」

舞は俺の手を恐る恐る取ってゆっくりと立ち上がった。
俺は服についた土を払いながら舞に向き直る。

「え、何？舞…も迷っちゃってるの？」

初対面の女の子に呼び捨てはどうかと思ったが、舞でいいと言われてるのにあえて、天見さん、と呼ぶ勇気もなかった。

「うん…。ここ、何処だろ？」

舞は指を唇に当てて不安げに辺りを見回している。
そんな舞に俺はまた見とれていた。

知ってる。
でも思い出せない。
目の前の少女は大切だったはずだった。

駄目だ！思い出せない！

「輝…どうしたの？」

「ん、いや、何でも」

いつの間にか険しくなっていた顔をなるべく自然に微笑みに戻して俺は舞から視線を反らした。
舞は依然として不思議そうな表情を崩さない。

「とりあえずは歩いて進むしかないよね？」

舞は俺に背を向けてゆっくり歩き出す。

「そうだよな…」

俺は舞の後ろ姿に記憶を刺激されながらも、頭をフルフルと振って気をとりなす。

今はそんな事を考えてる暇はない。

「早く行こっ？」

振り向いてきた舞に俺は早歩きで追い付く。

そして俺達は二人でジャングルを進み始めた。

歩き始めてから数十分。
やっぱりというかさっぱりジャングルの終わりは見えてこない。

「舞はどこから来たの？あ、俺は東京なんだけど。東京っても外れの方だけどね！」

「私は新潟から…だよ」

「新潟なんだー」

うーん。新潟か…。

東京からは遠すぎる。あの既視感は俺の思い違いだったのかな？

「新潟にしては訛りが無いよね？」

新潟にしては、といっちゃあ失礼だが。

「うん。ちょっと前まで東京にいたから。親の仕事の都合で引っ越したんだよ」

舞が微笑む。

引っ越したのなら知り合いの可能性は無くはないけど。

「久喜くんは高校生ですか？」

「あ…輝で良いよ。そう、高一だよ。舞も高校生だよね？」

「うん。私も一年だよ、もうすぐ二年だね」

本当にどうでも良いような他愛もない話。

でも舞と話している内は昨日みたいに心が壊れそうになるほど焦ったりはしない。

正直、安心できる。

「…？」

舞が突然足をとめた。

「どうした？疲れた？」

「ううん」

舞は首を横にふる。

「ねぇ。人の声みたいなの聞こえない？」

「マジか？」

俺も耳を済ましてみる。

すると遠くから「他にも人間は居ないのか？」という人の声や、ザッ、ザッ、という、草を踏みしめる複数の足音が聴こえてきた。

…これは！

音を聞いた俺は舞を振り返る。舞も喜びで自然と笑顔になっていた。

「人の声だ！行こう！」

俺達は声の元に向かって走り出す。

「おーい！」

声のする方に走っていくと、３、４人の人が歩いているのが見えた。

「すみませーん！」

舞も必死に呼び掛ける。

するとその３、４人の集団の先頭を歩いていた青年がこっちの声に気付いて足をとめた。

「あ！皆！人がいるぞ！」

ジャングルの中、草木が少ない所を選んで、五人の人が円になって話し合っている。
もちろんその中の内二人は俺と舞だ。

「じゃあアンタらも気がついたらいきなりここにきたってのか？」

と言いながら、先程集団の先頭を歩いてた青年は真剣な顔で俺と舞に問いかける。
そして若干忌々しそうに金色のペンダントを懐から取り出した。

「…まぁ十中八九これが絡んでるんだろうけどな」

ペンダントを睨むようにしてその手に持っているこの青年の名前は狛江空（こまえそら）と言うらしい。どうやら俺と同い年のようだ。
茶髪で、中々の顔立ち。俗に言うイケメン、か。

「でも、他にも人がいてホントに助かったよ」

話している様子から快活な人物だとわかる程表情豊かだ。
その豊かな表情も今は真剣味を帯びている。この状況について考え込んでるみたいだ。

「で、どーするの空？気が付いたらいきなりジャングルって…」

空の横からポニーテールの女の子が話をふってきた。

確かにボニテの女の子の言う通りだ。おおよその方向性を決めとかないと具体的な行動を取れない。
これからどうするか、決める必要がある…。

話をふったボニテの彼女の名前は白石綾香（しらいしあやか）。空とは長い知り合いで、まぁ要するに空の幼馴染みらしい。

彼女は部屋着なのだろう、ジーパンにTシャツというシンプルないでたちだ。
この子も高一。
ここには高一しかいないのか？
なんとなく、元気、と言う言葉が似合う雰囲気の子だ。

空と綾香は別々にあの不思議なアクセサリーを拾って、光に飲み込まれてここに来たらしい。
空は部活帰りの公園で。
綾香は学校の花壇に落ちていたのを拾ったという。

で、気がついたらジャングルでしかもお互いが真横に倒れていたと。

運命を信じたくなるような話だよな。ホントに。

「確かに、そうですね。なんとか元の場所に戻る方法を考えないといけませんね」

丁寧語で綾香の問いに返答したこの眼鏡をかけた青年は成瀬速人（なるせ　はやと）と名乗っていた。

パッと見でわかる程の美形。

速人のことは空も綾香もしらないそうだ。

ジャングルで出会ったらしい。

ジャングルが暑かったのか、彼は上に羽織っていたであろうシャツを手に持ってピタ目のインナーTシャツを着ていた。

大学生。高一ばっかじゃなかった。

彼は大学のゼミの教授との食事の時、同席していた『教授の知り合い』とやらに不思議なアクセサリーを渡されたらしい。

そして翌日、研究の続きをしようと大学に向かってる途中で気を失い、気がついたらジャングルにいた。らしい。

俺は勝手に速人のその外見（メガネ）と話し方（丁寧語）から理系のイメージを持っていたのだが、研究といっているので多分間違いないだろう。

「何をするにももっと情報があると良いんだけどな…。…俺たち3人も今朝ここに来たばっかりで状況がわかんねぇんだよ」

と空がため息混じりに言う。

そうだな、と俺は相槌を打って話し始めた。

「俺は昨日の夕暮れ位からジャングルにいた。けど結局抜け出せなくてさ…。幾ら歩いても草木が生い茂ってるしよ。正直しんどかった」

自分で言って俺は苛立った。もちろん、この状況に対してだ。
舞は俺の言葉を捕捉するように続ける。

「私もそんなところです。それで朝になって歩いてたら輝を見付けて…」

皆さんと合流しました、と舞は話を締めくくった。

「…やっぱりみんなまともな情報持ってねぇか…」

腕を組んで空が残念そうにいう。

「でもこれから行動していくためにも大まかな状況と目的だけでも決めておこう。良いよな?」

問いかける空に全員がうなずいた。

「じゃあ今のところやるべき事としては、
・ジャングルから脱出
・他の人間の捜索
って所でいいな?」

空が話し合いで決めた事をまとめた。

「そうだな（だね）」

俺達も同意する。

が、俺には一つだけ言っておかなければならないことがあった。

「ちょっといいか？」

俺は皆に呼び掛けた。

呼び掛けに応じて皆は俺の方を向く。

「悪いな、ひとつだけ。……俺の友達の一樹、橋山一樹もここに来ているかもしれないんだ。皆知らないか？」

皆は「知らない」と首を横に振った。

見付けていたら合流してる、と。

「そうか…」

俺は肩を落とす。

一樹はここには来てないのか？

あからさまにしょげた俺を見て空は「よし、じゃあ橋山君を探すのも手伝おう。皆もそれでいいよな？」と言って、それに舞と速人と綾香も頷く。

「すまない、本当にありがとう！」

俺は皆に感謝した。

出会えたのがいい人ばっかりで助かった…。

それにしてもどこにいんだよ一樹！

「よし！一応目的も決まったし、取り合えずジャングルを抜けるために進もう！」

元気のある声で空は皆を励ます。前向きな空の姿勢にも励まされ皆は少し微笑む。

空が声をかけると皆が笑顔になる。例えるなら太陽。

皆は彼について歩いて行く…。

俺もあそこまで前向きになれたらな。

俺は自嘲ぎみに微笑んだ。

「輝ぁ！行くぞ！」

空の声だ。

いつのまにか俺を置いて出発してたみたいだ。

俺は空に苦笑いを返しながら謝る。

「…！悪い、ボーッとしてた！すぐ行く！」

謝った俺は、一人置いていかれないように走って空達を追い掛けた。

コイツラと一緒なら、もしかしたら…。

そんな希望を持って。

木々や奇抜な色の花を持つ植物が鬱蒼と生い茂るジャングルの中を一列になって歩く五人の姿があった。
その中で一番後ろにいる俺は白いパーカーを脱ぎ、腰に巻いて歩いていた。

「暑いー」

パーカーを脱いで黒いロンT姿になった俺はうだるような暑さに文句を垂れながらうなだれた。

再び燦々と太陽が上りジャングルのは蒸し暑くなる。今まで冷暖房器具がある現代日本で育ってきた俺にこの暑さはしんどすぎる。
それだけじゃない。

「はぁぁ」

迷惑かもしれないから皆には言っていないが。

……何より腹減った。

昨日の夜からお茶しか飲んでない。二食抜くだけでこんなにキツイとは…。

「確かに暑いよな…」

先頭を切って歩いている空は俺の文句を聞いて、しかしそれでも弾んだ声で言う。

「…でもさ、俺実は小さい頃こんな冒険に憧れてたんだよね」

「空…こんな暑い時に更に暑苦しいこと言わないでよ…」

すかさずツッコんだ綾香は空の後ろで呆れる。

空は振り返りながら綾香に反論する。

「良いんだよ！冒険は男のロマンなんじゃー！な？速人、輝？」

「私は冒険は本で充分かと思いますが…」

「はらへ…いや、俺暑いのはカンベン」

同意を求められた速人と俺は苦笑いを空に返しながら答えた。

「何が『男のロマン』なんですか？」

ほらみろ、と言わんばかりの綾香にまた空が反論する。

さっきから何回も見てきたパターンだ。

その様子を俺と舞は後ろからみていた。

「あの二人仲良いよね」

という舞に、

「また始まった。ホントに仲良いよな。まぁこうなっちゃ…どっちも暑苦しいけど」

と俺は答えた。

そんな会話をして、微笑ましく空と綾香を見ている舞とさすがに疲れてきた俺の少し後ろで速人は立ち止まって耳を済ませていた。

「……この音は」

速人は今だに漫才の様に言い争う空と綾香の声とは別に川が出す水の音を聞き取っていた。
そして前を歩いていく俺達四人にすぐさま声をかける。

「皆さん！」

速人がしゃべくってる皆を制す。

「耳を済ませてみてください。水の音が聞こえませんか？向こうに川があるかもしれませんよ」

「マジ？水あんの？」

空は喉が渇いていたようで、とても喜んでいる。その横で綾香も嬉しそうな顔をしている。空との漫才で綾香も喉が渇いていたみたいだ。

「それに川をくだれば多分ジャングルから脱出出来ますよ」

速人が眼鏡を、クイ、と上げながら言った。

「よっしゃ川までいっちょくせーん！」

駆け出す空。

「空。逆ですよ」

速人は空の馬鹿具合と元気に呆れて微笑みながら小さくため息をついた。

ザザァーー……。

爽やかで少し鼻につく潮の香りがする。

「…青い海…」

「…白い砂浜…」

「…眩しい太陽…」

「…ジャングルから抜けたのは良いけど、海じゃん？」

速人がジャングルで川の音を聞き取ってから約一時間。

俺達五人は川で水分を補給したあと、速人のいう通り川を下ってきたのだが、特に人に出会う事もなく、どこかの町につく事もなく、普通に海についた。５人の後ろにはすぐジャングルが続いている。

「どうする？またジャングルに戻るか？」

空が青い海から後ろの木々に目を移しながら言った。

「正直、ジャングルにはもう戻りたくないなー」

俺は額を流れる汗をぬぐいながら訴える。

つか、腹も減ったし疲れたしで正直もう限界だって…。

着ている黒いロンTも汗でぬれて少し肌にまとわりついていた。

「私も疲れちゃったよぉ～、空ぁ～」

綾香ももうジャングルは散々の様だ。

そんな周りの様子を見て舞は「少し休みませんか？」と空に提案する。

空は現時点で一時的に指揮権を持っている。これは最初の話し合いで決めたことだ。

「速人もそれでいいか？」

「ええ、構いませんよ」

「じゃあ休憩すっか！」

空は砂浜の真ん中にあった日陰になりそうな大きな岩の隣へ腰を下ろした。

ザァーー……。

砂浜の真ん中の岩の元で5つの影が腰を下ろしていた。

太陽が強く光を地上に送っている。その熱は砂浜に吸収され砂浜は更に熱くなる。

俺達はその日光と砂の熱から逃れるために大きな岩の陰に座って休んでいた。

「ここどこなんだろうな？」

空は呟いた。

きっと皆がずっと考えていた疑問だ。

「これじゃ日本なのかも分かんないよね」

舞の声は不安げだ。

「植物からして多分日本じゃないよな…。速人もそう思うだろ？」

輝がジャングルに咲いていた奇抜な色の花を思い出しながら速人に聞いた。

「そうですね。何にしてもこのアクセサリーの影響でこんな所についてしまったのは間違い無いでしょう」

速人が自らの指に嵌めた指輪を見ながら溜め息をついた。

その横で、「何でも良いけど早くうちに帰りたいー」と綾香がごねている。

それから暫くは空と綾香と舞の三人がお喋りをしている横で、俺と速人はこれからのことについて話していた。

「やっぱり、人を探すしかないよな…」

輝は腕を組んで考える。

が、いくら考えても出てくるのは既出の案ばかりで、状況を打開できそうなものは一つも出てこない。

「ええ、早くしないといずれ体力的にもきつくなってきますし」

そう速人がうなずいた時、その異変は突然起こった。

「なんだこの揺れ?」

突然空が立ち上がって周りを見渡す。

「揺れ?」

俺は座ったまま地面に意識を集中させる。

……!

……!!

確かに遠くから何度も繰り返して振動が伝わってきていた。

だが、広い砂浜には振動の元になるようなモノは何も無い。

…!!!

「徐々に近付いてきてるな。地震か？」

立ち上がりながら俺は厭な予感に襲われる。
続いて皆も立ち上がって辺りを見回した。
原因は分からないが確実に近付いてきている。
一定のリズム。近づく震源。

まさか！

「…地震じゃない…これは足音だ！！」

！！！！！

叫ぶ空の声をかき消すような衝撃。さっきまで歩いてきたジャングルの方からだ。五人はジャングルの方を振り向く。警戒する。

「……」

！！！！！

そして一瞬の間の後、白い砂浜が大きく揺れた。

「グガァーーッッ！！！」

足音が聞こえてきたジャングルから特大の咆吼が起こって五人の耳をつんざいた。
突然襲ってきた鼓膜を震わす暴力的な轟音。

「グガァーーッッ！！！」

破壊音ともとれるようなその獰猛な鳴き声はさっき5人が歩いていたジャングルの中から聞こえてきた。

「グガァーーッッ！！！」

バキッ！バキッ！

「来るぞっ！」

木を折り倒しながらジャングルから出てきたそれは、まるで西洋の鎧、甲冑を着けたトリケラトプスの様な姿をしていた。

「うっわっ！何だよアレ！」

思わず声が大きくなる。

は？は？は？何だよあのモンスターは！

「でっけ…！」

身構えた空はその鎧トリケラトプスを見上げながら言う。

舞と綾香は悲鳴をあげ、速人は呆然として突っ立っていた。

「バォオォォーッッ！」

鎧トプスは天を仰ぎ見て再び吠えた。

甲冑のような黒い甲殻が太陽の光に反射して鈍く光る。

そしてその鎧トプスは俺達を睨むと体高約３ｍはあるだろう巨体で突進してきた。

「皆避けろぉー！」

俺達は横に飛び退いて辛うじて突進を避けた。

黒色の弾丸のように突進した鎧トプスはさっきまで俺達が日よけにしていた大きな岩を轟音と共に粉々に砕いて盛大に土埃をあげて止まった。

「こんなん食らったら洒落んなんねぇよ…！」

俺はすぐに立ち上がって、後退りをした。

岩粉々だぞおい…。

鎧トプスは、ダンッ！ダンッ！と砂浜をふみならして暴れている。

踏み鳴らす度に小さな地震が起きる。

その獰猛で凶悪な姿に、俺は一瞬、死を覚悟した。

その時。

「…！」

俺の胸から、いや、性格には『あの』銀色のペンダントからぼんやりとした銀色の光が出てきた。

「これはっ！」

周りを見ると皆のアクセサリーもそれぞれ光っている。

俺は慌ててペンダントを取り出す。銀色の光とペンダントのトップのリングに刻まれている不思議な彫刻（デザイン）が目に入る。

瞳に映る銀光。

俺がこのペンダントを拾った原因になった光。
俺をこんなワケわからん所に飛ばした光。
俺は怒りと祈りを込めてペンダントを両手で強く握った。

こんな場所に飛ばしやがって！責任もって助けてくれよ…！

その瞬間、ペンダントが少し輝きを増した。

「…！」

俺の周りに銀色の帯が集まってくる。いや、帯じゃない。これは風だ！

風に色が！？…空気の流れが見える…！

銀色の風は俺の体に纏わり、俺を中心として渦を巻く。

体が軽いっ！力がみなぎってくる！何だこれ？魔法か？

俺には不思議な力がペンダントから湧いてきているのがわかった。

…いける！

掌に力を込める。
掌に力を、風を集中させるイメージ。

俺に纏わって渦巻いていた銀色の風が掌に集まり、手のひらサイズの小さな竜巻が生成される。

「うおおおお！」

手のひらを突き出す。

銀色の風は手のひらを離れて鎧トプスへと向かっていく。

放たれた風は空気を切るように進み、薄く鋭くなって銀色の風の刃と化す。

しかし。

…キィーン！

俺の放った風の刃は鋭い音を立てて鎧トプスの黒い鎧に弾かれてしまった。

「くそっ！全然だめじゃん！」

鎧トプスは俺の攻撃に全く気付いていない。俺の攻撃なんて気にするまでもないってのか？

でも何となく掴めてきた…。

くじけずに俺はまた風を掌に集める。さっきので感覚は覚えた。

風は輝に応えるようにもう一度掌に集まっていく。

…よっしゃ！

「まだまだぁ！」

今度はさっきよりも確かな手ごたえを感じながら風を放った。

…キィーン、キィーン！

しかし意図も簡単に弾かれる風の刃。

ならばもっと力を込める！

何度弾かれようと懲りずに風の刃を飛ばし続けた。

だが鎧には傷一つつかない。

それでもめげずに風の刃を放ち続けていたら体から次第に力が抜けていった。

「くそ！」

体…が…。

ふらふらする。

足元がおぼつかない。

魔法を使うと疲れるのか？

身体中がだるい。目が霞む。

霞む視界に移るのは俺に狙いを定めた鎧トプス。

くそ、ついてねぇ…。

「グルルルウウゥ…」

まるで狂暴な狼のように唸る鎧トプス。

眼光鋭く俺を睨む。

「くそっ…！体がっ…！」

力を使った反動で体が疲労で動かない。立っているのがやっとだ。

もう駄目か！？くそっ！死にたくねぇ！

霞んだ視界に恐怖の涙が浮かびさらに霞みがひどくなった。その時。

「これでも…くらいやがれっ！」

空の声。

カッ！

同時に閃光。

「！？」

空の声と共に鎧トプスの眼前に強い金色の光が炸裂した。

金色の光は5人に柔らかく、しかし怪物には鋭く降り注ぐ。

「閃光弾ですか…！考えましたね空！」

速人の声がする。

空は視覚への攻撃という手段をとった。

「いくら装甲が堅くても、目は守れねえハズだ…！」
「ギャァオォーー！」

突然の閃光に目を焼かれ、混乱した鎧トプスは再び足を踏み鳴らし、地震を起こしながら、ジャングルの方に狂ったように逃げていった。

「…助かった…」

空は安堵の溜め息をつく。

「…やったぁー！」

「よく土壇場であんなものをつくれましたね」

空の周りに勝利を称えて皆が集まる。

「輝が風を操っていたように、俺は光を操れるみたいだ」

「じゃああの閃光弾は空の能力だね！」

空を祝福している皆のところへ少し遅れて駆け付けようとした舞は俺がさっきから全く動かないで立ち尽くしている事に気付いて振り返る。

舞が俺を呼びに行こうと歩き始めた瞬間。

「う…く…」

目の前が暗くなる。

これが、気絶ってのか。

ドサッ。

「輝！？」

堕ちていく意識の中で舞の声が微かに聞こえる。

頬に当たる砂浜が熱い。

そうか。俺。

もう――――。

小さな亀裂

「……う…ん…」

目を開く。
眼前に白くて清潔感のある天井が広がっていた。
ふかふかな布団がかけられている。
俺はベッドの上で仰向けになっていた。

「あれ…？俺は確か…」

もう一度まぶたを下ろして記憶を辿る。
昨日ジャングルから突如襲ってきた鎧トプス。
全力を出したが手も足もでなかった。

薄れゆく意識の中で見たのは、まばゆい金色の光と森へ逃げ帰る黒い鎧の巨体。

シーツを強く握る。
無力感と空に対する劣等感がわいてきた。

……。

それよりここは何処だ？
ベットに寝かされてるって事はきっと近くに人がいるはずだ。

俺はベットの上で上体を起こす。パーカーは脱がされていた。
とりあえず辺りを見回す。
壁も天井も清潔な白。
置いてある家具もシンプルで淡白だ。

病室、か。
まぁ実際俺はぶっ倒れたし…。

「最近気絶多いな…」

俺は目頭を強く押さえた。
自分の非力には本当にあきれる。

一杯に広げられた窓から降り注ぐ朝日に照らされて壁紙の白が輝いている。その白さは俺の心を少しだけ癒してくれた。

…あんま暗くなっても仕方ない、か。

不意に足音が聞こえた。
部屋のドアの方からだ。
足音はドアの前で止まる。

コンコン。

軽快なノックの音。

キィーー……。

ノックの音に続いてドアが部屋の外から開けられた。

入ってきたのは舞だった。

「…よ、よぅ」

俺は左手を軽く上げて苦笑いで挨拶をする。舞はホッとしたように一息ついてから、微笑んだ。

「みんなー、輝の意識が戻ったよ！」

舞がドアの向こうに向かって声を張り上げた。

ドタドタドタ！

舞の呼び掛けから少し間を開けて響く複数の足音。
他の皆も部屋に入ってきた。

「輝！気が付いたか？」

皆が部屋に入ってきてすぐに空が声をかけてきた。
つい先程まで空に対して強く劣等感を感じていた俺は大した理由も無いけどつい目を伏せてしまう。

「……おぅ。無事だ」

「……？」

空はそれに気付かなかったようだったが、舞は俺に対して怪訝そうな表情を向けてくる。

最悪、気付かれたかもしれない。

「輝、どうしたの？」

舞が小声で聞いてきた。

「いや…何でもないよ」

俺は舞の追及を誤魔化す。「何もない」ともう一度呟くように言ってみた。

舞に対してだけじゃなく、自分に対しても。

…この劣等感は、言わないでおこう。

俺は必死に笑顔を作る。多少ぎこちない笑顔かもしれないけど、舞なら俺が誤魔化したがっていることをわざわざ追及しようとはしないだろ。

「大丈夫」

もう一度呟くように言ってみた。

「そんな事が、あったのか…」

さっきまで寝かされていたベットに座って俺はうなずいた。

さっきまで脱いでいたパーカーを再び羽織る。

皆は思い思いの場所で部屋にいて、意識のなかった俺に今までの状況を伝えてくれていた。

空たち皆から聞いた話をまとめると。

俺は一日近く意識を失っていたらしく、鎧トプスと戦ったのはもう昨日のことになってるらしい。昨日、鎧トプスとの戦いのあとに突然倒れた俺を介抱していたら、近くの村の漁師が来た。村に運んでくれる。というので、村に案内してもらって今に至る。とのことだ。

そして、もうひとつ。衝撃的なことを聞いた。

この村民の話を聞く限りここは日本でないばかりか、地球ですら無いというのだ。

「マジかよ…。じゃあここは何処なんだよ？火星かオイ？」

ウケを狙った一言も、皆の真剣な雰囲気に流されてしまった。

「…どうやら俺たちはいわゆる『異世界』ってヤツにきちまったみたいだ…」

空はただただ事実のみを告げている。それは空の真剣そのものの表情から十二分に伺えた。

「……」

空は嘘を言ってない？

思わず体が硬直する。

それにあわせて周りの４人も沈黙した。

「嘘だろ…！」

鎧トプス、あの明らかなモンスターが出てきた時には、まさか、とは思った。

だが、ハッキリと「地球じゃない」と告げられるとキツイものがある。

「これからどうするんだ？」

俺が焦りの汗でふやけた脳でやっとひねり出した言葉。

視界の焦点が定まらない。頭がぐるぐるする。意味がわからない。

イセカイ？何だそれ。

誰もが口を閉ざす中、速人が、何をするにも…、と説明を始める。

「…ここで動くには情報が少なすぎますね。まずは情報収集、といった所でしょう」

「じゃあここから北にある王都がいいんじゃない？」

綾香も速人の情報を捕捉して続けた。

…というか。

「王都…？って何でそんなこと知ってるんだ？」

俺は不思議に思って聞いた。

王都に情報があるなんて話、聞いてないハズだが。

「あ、輝が寝てるときに村の人たちに聞いたんだよ」

横にいる舞が綾香の代わりに優しく答えた。明らかに俺に気を遣っている。

「そっか」

舞の意思を汲み取って俺は軽く口元に弧を描いてうなずいた。胸にチクリと何かが刺さる。

俺、完全にお荷物かよ…。

また無力感が湧いてきた。
同時に申し訳ない気持ちも。

「じゃあとりあえずこの大陸の中で一番でかい国の首都に行って情報を集める。ってことでいいよな?」

空は全員の意見をまとめて言った。ま、他に選択肢もないが。

「わかった。なるべく早く首都に着きたいな…。なんだったら今日中にこの村を発とうぜ?」

ベットから立ち上がり、思うように力の入らない足もとが震えるのを抑えながら俺は強がって答えた。

焦っていた。

俺のせいで遅れてる。頭フラフラする位じゃ休めねぇよ。

俺が震える足で立ち上がった時。

「でしたら大変な旅になるでしょう」

と扉の奥から聡明そうな声が聞こえた。

「？」

俺は頭の上に、はてなマークを浮かべる。

誰だ？

ドアから部屋に入って来たのは、いかにも、な感じの老人だった。

例えるなら老子。

その目は優しさと慈愛に満ちていた。

「私はこの村の村長です。甲冑龍（かっちゅうりゅう）を追い払って頂いたお礼も兼ねて旅支度は私らでしましょう」

「甲冑龍？」

「昨日のトリケラトプスみたいな怪物のことだ」

聞き返す俺に空が簡単に説明した。

「はい。どうでしょう？恩返しも兼ねて」

再び提案する村長。

俺達は顔を見合わせる。

４人の顔を見ると、皆が「この人は信用できる」と言わんばかりに

頷いたので４人に判断をまかせることにした。
判断をまかせる、つまりは。

「お願いします！」

確かに初対面の人に色々頼むのは不安だ。
だけど素人だけで旅支度とやらは無理な気がした。

それに、皆も信用してるみたいだし。

――……。

村長に旅支度をお願いしてから約３０分後。

村長に言われて俺達は村の集会所と呼ばれる建物にいた。

集会所の中はオフィスや学校の会議室のように、部屋の真ん中には長机が『ロ』の字に置いてあり、議長などが普段座る（と思われる）少し豪華な椅子まである。

きっと普段の村会議なんかでもここは使われるんだろう。

その少し豪華な椅子の後ろの壁にはこの世界の地図と思われる大きな紙が貼ってあった。

「やっぱ、夢じゃないんだな」

あの鎧の怪獣も、このアクセサリーも。現実なんだな…。

実感する。

この地図が示している。
俺は本当に『異世界』とやらに来てしまったんだと。

俺は、本当に家に帰れるのか？

重く苦い不安が鉛のように鈍く腹にのし掛かってくる。
開け放たれた窓からは爽やかな風がふいて俺の長い髪をなびかせる。
まだ昼前。特有の気だるい陽光も差し込んでいる。
きっと、窓から外を見れば雄大な自然が見えてくるだろうに、集会所にいる全員は窓の外を見ようともしない。
窓から吹き込む薫風だって素晴らしいものだ。

でもそんな素晴らしいハズの全ては俺の不安を取り除いてはくれない。
むしろ、余計に怖くなる。

ここは地球じゃない？
じゃあどうすりゃいいんだよ！

もう二度と、元の世界の人には会えないのか？

「…くそ。最悪だ」

誰にも聞こえないように小さく悪態をついて俺は会議室の席についた。
皆もそれぞれ椅子に腰掛け、村長を待つ。
全員着席してすぐに、村長が集会所に入って来て、あの地図の前にある例の少し豪華な議長の椅子に座った。

そしていきなり村長が頭を下げた。

「昨日は甲冑龍（かっちゅうりゅう）を追い払ってくれてありがとうございます」

甲冑龍とは昨日戦った鎧トプスの事だ。

頭を上げて村長が続ける。

「アレは元々この地域には居ないはずなんですが…。村でも被害が相次いでいた所です、皆さん、本当に助かりました」

「そんなお礼をいわれるほどでもないですよ」

空は笑顔で照れたように頭を掻く。

こんな状況で、帰る方法もわかんないってのに浮かれてやがる。

すかさず綾香が、

「空！調子に乗らないでよね。いっつも調子に乗って失敗するし…」

と浮かれる空を諫める。

また空＆綾香の『お騒がせタイム』だ。

何でコイツラは平気でヘラヘラしてられるんだ？

他の人を見る。

舞も速人も微笑ましく見ていた。

端から見れば和気あいあいとした雰囲気なんだろう。

それが、無性にムカついた。

「俺は調子になんか乗ってね…」

「そんなことはどうでもいい！」

俺は勢い良く立ち上がって空の言葉を遮る。座っていた椅子がやけに大きな音を立てて倒れた。

「もう俺は早く帰りたいんだよ！」

お前等の漫才なんか見たくねぇんだ！

声を張り上げて怒鳴った。

俺の心には怒りと憔悴がある。

その怒りの中に空に対する劣等感やら嫉妬やらが混じっているのは自分でもわかっていた。

「はぁ！？いきなりなんだよ！？」

空がムッとした顔で勢い良く立ち上がる。

口を開いて何か言い返そうとしてくる――……。

「お二人ともやめて下され！」

危険な雰囲気を感じ取ったのかすかさず村長が俺と空の間に割っていって、いざ口論が始まるのを止めに入ってきた。

「話を聞くところ大変な思いをなさってるのは分かりましたが、今は争うべきでは無いでしょう！？もっと他に、話す事があるハズです！」

村長が止めようと説得しても、俺も空もは椅子から立ち上がったま

まで互いに睨みつけて動かない。
険悪な雰囲気。

「二人とも一回座ってください。村長の言った通りです。問題山積の今こんなときに、内輪で揉めている場合では無いんですよ?」

速人が村長を助太刀して俺と空を制そうとする。

「……」

「……」

敵意剥き出しで睨みあう。

ふざけんな。俺は一歩も引かねェ。

ガタッ!

突然空が椅子に座った。

「分かったよ…速人。…輝、お前の気持ちも知らずにふざけてた俺が悪かった。ゴメン!許してくれ!」

空が両手を合わせて俺に謝ってきた。

俺に全員の視線が集まるのを感じる。ここで引け、と訴えられているのがアリアリとわかる。

くそっ。

「……。俺のが悪かった、よ」

俺は倒した椅子を戻して座りながら呟くように小さな声で謝った。

何で俺が謝んなきゃ…！

ハッキリ言って不満だ。

でも皆の視線を無視して意地を張り続けることはできなかった。

「……」

気まずい沈黙が流れる。

その沈黙を破ったのは舞だった。

「じ、じゃあ、仲直りもしたことだし、村長さんの話聞こっ？ね？」

舞がぎこちない笑顔でその場を取り繕う。

彼女が出来る最善の方法だったろう。

だが、少しピリピリした雰囲気は変わらず集会所に立ちこめていた。

その緊張の空気を取り払おうと村長は一つ大きな咳払いをして話を始めた。

「…では、話しましょう。まずはこれを見てください」

村長はあの豪華な議長の椅子を立って、後ろの大きな地図の、大陸と思われるものの一つを指で差した。

その大陸は地図の真ん中より南西に位置している、台形の右上に角がついたような形の大きめの大陸だった。

「この大陸が現在地のロック大陸です。さらに」

村長は大陸の左下の端を指差す。

「ここに我がサウル村があります」

村を示す点のような記号のような印の周囲は緑色に塗られている。ジャングルを示しているんだろう。近くにもう少し大きな町があるみたいで、村と町を結ぶ直線には緑色が塗られていない。

きっと街道があるんだ。

さらに村長は大陸の右の方を指差した。周囲は草原、ここサウルの村から向かうには大きな川や大山脈を越えていかないと行けないっぽい。

村長はその遠方の都市を指で指し示しながら5人に向き直る。

「そしてここがあなたたちが情報を求める為の目的地である、王都の」

含みを持たせるようにたっぷりとした間を持って村長は続けた。

「バルクです」

遠い、な。

俺はまた少し不安を覚える。

今、俺たちがいるところは大陸の南西のサウルという村。目的地は遥か東に位置する王都バルク。

大山脈を一つ、こえなくてばならない。
地図を見る限りではお世辞にも近いとは言えない距離だ。

「バルクに向かうのならまずは街道沿いにあるシュヘルという町へ向かうといいでしょう」

村長が地図のサウルのすぐ近くの位置を指した。
地図にはサウルとシュヘルを結ぶ街道がえがかれている。
見る限り、短距離直線一本道だ。

「わかった。とりあえずはシュヘルへ向かえばいいんだな？」

「はい。そうです」

空が最後に確認して村長が答えて、この会はお開きになった。

――……。

ここは王都バルク。
多くの人々が住まう大都市だ。
そのバルクの中心には王宮がある。

巨大な城だ。
高さだけでも３００ｍをゆうに越える高さ。
敷地の広さは計りしれない。

豪奢な飾りもあれば、武骨で実用性のある尖塔や砲台がある。

その王宮のこれまた巨大な門から自らも馬に乗り、騎馬兵団を連れて出てきた齢３０前後の男がいた。

男は黒い鎧を纏い、腰に日本刀とおぼしきものを差している。
眼光鋭く、顔には軍人特有の厳しさがにじみ出ている。

彼が率いる兵の数は約５０。丁度十個小隊ができる数。
その男の元へ銀色の鎧を身に纏った王宮の近衛兵士が駆けてきた。

「ラルガ将軍！反乱軍は王都の遥か遠い南西、シュヘルへ逃走中との情報が入りました！…ここバルクからは遠いのでフォルの駐屯兵に任せた方が得策かと」

「…うむ。承知した。だがフォルの駐屯兵は動かさずとも良い。私が直々に反乱軍に罰を与えよう」

「ですが…！」

「私を信用しろ。確実に排撃して見せよう。王には安心するよう言っておけ」

ラルガと呼ばれた男は近衛兵にそう伝えると、後ろの騎馬兵団を振り返った。

「今こそ我が『力』を示す時！心してかかるぞ！」

「「オォー！」」

腕を高く天に突き上げる兵士たち。

叫び、雄叫び、力強く。
王宮前の広場に閧の声がこだまする。

閧の声に満足気に笑うその男、ラルガは王が居るであろう城を見ると、闘志をみなぎらす。

王よ…！私は将軍などという立場には決して甘んじぬ！

奸雄と呼ぶべき気概を有するラルガの目には野心が宿っていた。

――……。

「色んな武器があるみたいだな」

一人納得しながら空は剣を持ち上げ、鞘から刀身を抜く。
剣は両手で持つ片刃剣だった。
直剣だが硬さに問題はなさそうだ。
空は剣を鞘に納める。
剣は重いが、空は腕力があったので片手でも扱えそうだ。

ここは村の武器庫。

村長曰く、「街道沿いは野党が出やすいから、自衛のために武器を持っていった方が良い」そうだ。

空はまだ剣を物色していたが、どうやら先程の直剣に決めた様だ。

その向かいで俺、輝はずらりと並ぶ武器の中から一本の槍を手にと

った。ヒンヤリとした柄の感触が気持ちいい。
槍は約２m。鉄製だが余計な装飾もなく軽い。
これなら、まぁ扱えそうだ。

「少し重いけど、相手と距離を取るなら最適かもな」

大分へタレた理由だけど、怖いもんは仕方無い。
第一盗賊って現代社会で言うなれば強盗だろ？
無理無理！戦ったら即死だって！

「私は弓かな！こう見えて弓道部なんだよね！」

弓が並んでる方から綾香の楽しそうな声が聞こえる。

「そうなんだぁ。弓道ってかっこいいよね」

続いて聞こえた舞の声には綾香に対する尊敬の念が滲んでいた。

「舞は何にした？」

矢筒を背負った綾香がそんな舞に聞き返す。

「私は…。あくまでも自衛用だからこれにする」

そう言って舞は武器が入っている棚からナイフを取り出した。
短い刃渡りのナイフを3本ほど懐に入れて、腰に刃渡りの長めな２本のナイフ、短刀を差した。

その後ろでは速人が蔵番の人と掛け合っていた。

武器のことで話しているようなのだが、距離がある上こそこそと話しているので聞こえない。
でも速人の満足そうな表情を見る限り心配は無さそうだ。

「村の皆さん。本当に助かりました。旅支度まで手伝ってもらえて、ありがたい限りです」

速人が俺達の代表として村の人に御礼の挨拶をしている。

「いえいえ。元の世界に帰れると良いですね」

ふと村長が真剣な面持ちになって速人の黄の指輪を見た。

「あなたたちが持っているアクセサリーには強い力があります。特に空さん」

村長が空を見る。

「あなたの金色のペンダントの『光』の力はとても強い。そして特別だ。どうか安易に使わないよう」

「分かりました」

空はペンダントを握り村長の言葉に頷いた。
俺達は再び村民にお礼を言って、シュヘルへと街道を歩きだした。

――……。

タタッ！タタッ！

王都近郊の草原地帯を走る騎馬の一団があった。

「計測係！」

ラルガは少し後ろを走っている計測係の新兵を呼ぶ。

「はい！どうなされましたか？」

「シュヘルまで後幾日かかる？」

「はい！約半月と思われます！」

緊張した面持ちの新兵は答えた。

「一週間…」

「？」

「一週間だ！シュヘルまで一週間で間に合わす！」

「ですが…。『大河川』を渡る為のフォリア橋が反乱軍に壊されてまして…」

ラルガは不適に笑う。

「ならば『大河川』上流の山地、『大山脈』を通る！」

「ですが『大山脈』には狂暴なドラゴンが…！」

「構わぬ！襲われたのなら我が力をもって捻じ伏せよう！」

そう新兵に言いはなったラルガのたずなを握る手の指には不思議な彫刻（デザイン）の指輪が煌めいていた。

――……。

夕暮れの暖かい光が照らす街道。様々な形の石が敷き詰められて舗装されている。

その石敷の街道を俺達はサウルから北東の方角にあるシュヘルに向かって歩いていく。

俺達を率いて歩く腰に剣をつけた少年が手をあましたように腰の剣の柄をいじりながら呟く。

「なんだよー。折角武器貰ったのに使う機会なんてねーよ」

不満そうに呟いているとはいえ、その腰の剣を抜かないのはその少年、空の良識だろう。

「空、武器なんてものはなるべく使わずに済む方が良いんですよ」

速人が不満そうな空を諌めて続ける。

「それより日が沈むまでには町につきたいですね」

街灯などの据え付けの明かりがない街道を夜になる前に抜けないと、暗くなってから野盗に襲撃されやすい。それでなくとも夜の道を歩きたいとは思わない。

「もう夕暮れ時だもんな」

速人に諌められて、ちぇ、と拗ねている空のやや後ろで俺は槍を担ぎながら真っ赤な天を見上げた。
黄昏時の太陽は赤く輝いている。その煌めきは元の世界で、川沿いの土手で感じたものと同じだった。

夕陽を薄目で見ている俺の隣で舞がふと微笑みかけてきた。

「キレイだね」

「うん、ホントに。太陽はどこの世界でもかわんねぇな」

俺は薄目を続けて太陽を眺める。

「輝って、夕陽好きなの？」

「うぇ？何で？」

「だって輝すっごく穏やかな顔してるもん」

舞に言われて慌てて表情を普通に戻す。
そして戻してから、逆に自嘲するように笑った。

「ハハ。俺、夕陽とか太陽とか、すっげぇ嫌いだったのにな」

「え？」

俺の言葉の真意を正そうとした舞の言葉。

少し、言い過ぎたか。

俺は太陽が好きじゃない。全てを優しく照らすと表現される光は余計なことまで明るみに出す。

本当に優しいのは、闇だ。

そんなことをいきなり舞に言うわけにもいかないだろう。

俺は舞の問いを流して太陽から目を逸らして、街道の先を見た。

「町まで後少しみたいだな」

木の影から山の麓に町の家々が見えた。

俺は続ける。

「それにしても槍、ミスったな…。これ持って歩く羽目になるとは」

俺は槍を担ぎなおす。

無理に笑って話題を変えようとする俺。

「あはは。確かに町じゃ浮いちゃうかも」

舞は無理やりな話題に乗って笑い、俺への追及を止める。

ありがたい。

今度は俺も素直に笑った。

「『かも』ではなく。『確実に』浮きますね」

速人の声。

いつの間に後ろにいたようで笑顔でしれっと毒を吐いてきた。

「はっきりいうなって！」

俺は速人に突っ込んだ。

「おーい！早くしろよー！」

「置いてっちゃうよー？」

空と綾香が街道の少し先で呼んでいる。

いつの間にやら離されてしまったようだ。

「二人も呼んでいるようですし、町についたら宿も探さなくてはいけませんからね、少し急ぎましょうか」

速人が不意に優しい表情になって俺と舞をうながした。

「すぐ行く！」

俺は空と綾香に向かって叫んだ。

「ふーっ。やっと町の入り口が見えてきたぜ…」

溜め息を吐きながら空が言う。
頭上の空は完全に夜の闇に染まっていて、澄んだ空気を通して星々が爛々と輝いている。

「でもま、野宿はしなくて済みそうだな」

俺は槍の穂先に巻いてある布をいじりながら言った。
もちろん穂先に布を巻いてるのは事故防止のためだ。
間違えてサクッ！とか洒落になんないので槍の刃先には布を巻いておいている。

シュヘルの入り口だと思われる門を通ろうとすると町の入り口の横にいた鎧を着た警備兵が、「待て！」と俺達に声をかけてきた。

「…君達はサウルから来たのか？」

「はい。そうですが」

代表して速人が答える。
警備兵は一瞬怪しそうな顔を見せていたが、速人の指にはめられた指輪を見てすぐにうなずいた。

「サウルの村長から話は聞いている。まず先に町長の邸宅に行ってほしい」

「分かりました。町長宅はどちらですか？」

すると警備兵は入り口の門からすぐの少し大きな家を指差した。

「そこの家だ。ここまでの旅、ご苦労」

そう言って警備兵は敬礼をしてまた街の入り口の門から街の外を見張り始めた。

「ありがとうございます。お勤めご苦労様です」

速人も敬礼とまではいかないが、会釈をして町に入っていく。
4人もそれに続いて会釈をし、町にはいる。
警備兵は無言で5人に挨拶を返した。

コンコン。
乾いた木の扉を叩く音。

速人は町長宅のドアをノックした。

「すみません。サウルから来た者です。警備兵からこちらに来るよう話を聞いてきました」

少し間を開けてその木製の扉が開いた。
扉から出てきたのは町長の婦人かと思われる女性だった。

「ようこそ。疲れたでしょう? とりあえず中に入ってください」

柔らかく微笑んで、俺達を屋内へ招いた。

俺達は婦人に案内されて、応客室の様なところに通された。

「ここで座って待っていてください」

「分かりました」

婦人に言われてソファーに座る。

婦人はそれを見た後に、主人を呼びに家の奥へと戻っていった。

暫くして、４０代位の男が応客室に入ってきた。

きちんとした身なりをしていて、わずかな時間の立ち居振舞いしか見ていないが、それでもその言動は上品だった。

きっと彼がシュヘルの町長なんだろう。

「どうも。私が町長のニーグです」

町長だと名乗る中年の男、ニーグは一礼して、俺達と向かい合うようにソファーに座った。

「それで、早速ですが用件とは何でしょう…？私達は宿をまだ決めていないので手短にお願いしたいのですが…」

速人がなるべく失礼の無いように、だが手早く訪ねる。

俺は元の世界からそのまま着けていた腕時計を見た。

９時３０分ちょい。確かに今から宿を探せるかは不安だった。

そんな様子を見た町長は「宿の心配なら大丈夫ですよ。うちに泊まっていってください」と言った。

そして続けて言う。

「用件も明日話しましょう。そのアクセサリーについてのこともあるので長くなりそうですし、皆さんお疲れでしょう？」

町長は俺達に柔らかく微笑みかける。

代表者の速人が俺達を振り返る。と皆で縦に首をふった。

歩き続けて俺ももう疲れきっている。町長の提案に乗ることがベストに思えた。

「ありがとうございます。ではお言葉に甘えさせていただきます」

「ご遠慮無く。部屋は2階です。どうぞくつろいでください」

抜け落ちる破片

翌朝。

俺達が朝の支度を軽く済ませて二階の寝室から階段で下に降りてくるといい香りが漂ってきた。

「お、うまそー！」

香ばしい匂いに空がはしゃいでいる。

確かに、いい匂いだ。

階段を下りたすぐの部屋に置かれている大きめなテーブルの上にはおいしそうな朝食が七人分置かれている。そしてそのテーブルにはニーグさんが座っていた。

階段を下りてきた俺達に気付いたニーグさんは微笑んで挨拶をした。

「おはようございます。まずは朝食を召し上がって下さい。その後でお話があります」

台所から出てきた町長の奥さんも俺達の姿を見つけると軽く頭を下げる。

「腕によりをかけて作りましたよ」

「んじゃいただきまーす！」

そう言うと間発入れず空がテーブルについてパンにかじりついた。

余程腹が減っていたのだろう。片手にパンを、もう片手ではフォークを握って朝食をむさぼっている。

「ほうひあ？いんわうわあいほ？」

頬に食べ物を詰めながら空は茫然としている俺達にむがもごと問いかける。

おそらく、どうした？皆食わないの？と言っているんだろう。

「はぁー…」

そんな空の様子を見た綾香がため息混じりの呆れた声で言う。

「空…少しは遠慮を知りなさ…」

グ～～……。

綾香のお腹から聞こえたかわいい音に皆が綾香に視線を集めた。

綾香の顔が見てて面白い位にみるみる赤くなっていく。

「ま、まぁ昨日は夜食べてなかったし？今は仕方ないよね！」

綾香は慌ててそう言って取り繕う。

「ははは。元気な音ですねぇ」

速人が綾香に笑顔でさらっとしれっと毒を吐いた。

「う、うるさい！」

そう言って綾香も空のいる朝食のもとへ急ぐ。

「似た者同士…だな」

「かわいいじゃん？」

「本当、『かわいい音』でしたねぇ」

俺、舞、速人は順にそう言って、空と綾香に続いて階段を降りた。

――……。

「あー、満腹だぁ！」

空が満足そうにお腹を擦っている。

「美味しかったねー！」

舞も満足げだ。

実際非常においしかった。レストランで出されても違和感を感じない程だ。

さすが腕によりをかけただけのことはある。

「どうもありがとう！」

町長婦人もほめられて上機嫌だ。

「…ふう」

俺は一息つくと、周りを見渡した。

そろそろ、聞くか。

皆朝食をとり終わったようなので、俺は会話の切れ目を狙って町長に聞いた。

「あの…そういえば話って何ですか？」

「…そうですね。ではさっそく、話しましょう」

町長が今までの朝食の和やかな雰囲気とは違う真剣な面持ちになって話し始めた。

「あなたたちに話したい事は２つあります。まずはそのアクセサリーの事です」

「このアクセサリーを知ってるのか？」

空は胸元の金色のペンダントを。

速人は黄色の宝石が嵌まった指輪を。

舞は水色の宝石が嵌まった腕輪を。

綾香は緑色の宝石が嵌まったイヤリングを。

俺は胸元で怪しく煌めく銀色のペンダントを。

それぞれ見る。

「はい。昔、とはいっても私の先代の町長の話なんですけどね。もう60年以上昔のことです」

町長は一息ついてまた話を続ける。

「このアクセサリーは持ち主に魔法を使う力を与えます。あなたたちも心当たりがあるはずです」

脳裏に砂浜での戦いの記憶が蘇った。

あの時の風を集める感覚が蘇る。そしてまた思い出す、無力感と劣等感。

はぁー。いつまで引きずってんだよ俺

「あの」

町長の説明の途中で速人が口を開いた。

「すみません。質問ですが、魔法とはこの世界において普通に使われているのですか？」

速人の質問は俺も気になっていたことの一つだった。俺は町長に視線を送る。

町長は深刻な表情で話し始めた。

「魔法はあります。失われつつありますが…。魔法を使うには才能が必要なのです。しかし、まれに産まれてくる魔法の才能のあるものは王宮へ連れていかれて、兵士となるべく育てられるのです。村や町には魔法の才能の判別をするための魔法使いが2、3人いるだけです」

更に続けて町長が言う。

「そのアクセサリーは魔法の才能のない人にも魔法を使うことを可能にします。そして我々にはそれを造る技術はありません。ですからサウルの村長はあなたたちが他の世界の住人だと分かったのです」

「このアクセサリーで異世界の住人であることを証明できるんですね」

速人が町長に確認すると、町長は軽く頷いて、ある程度の教養のある者にとってはですが、と付け加える。

「なあ？つまりはアクセサリーがあれば魔法を使えるってことだよな！」

町長の話を聴いて空は目を輝かせている。楽しそうな声が少し耳障りだ。

「アクセサリーを持ってる俺にも魔法が使える…！魔法を使うにはどうすればいいんだ？」

「簡単ですよ。強く念じるだけです。慣れれば意識しなくても使えるようになりますよ」

町長が空の質問に簡潔に答えた。さらに続けて。

「アクセサリーで魔法を使う場合、属性は固定されてしまいます。例えば、空さんのアクセサリーは確か光でしたよね、サウルの村長

から聞いています。だとすると、空さんは光を主体にした魔法しか使えないのです」

「へぇ～」

わかったのかわかってないのか、金のペンダントを見つめながら空はうなずいている。

「もう一つ、いいでしょうか？」

感心する空の隣の速人がもう一度訊いた。

「先程、『魔法の才能のあるものは兵士になるため』と言っていましたが、この国は戦争中なのでしょうか？それともただの常備兵ですか？」

戦争、という現代日本において非日常の言葉に俺達は体をこわばらせた。

「速人さん、鋭いですね。私が話したかったもう一つのコトとは、その『戦争』についてのコトなのです」

町長はふぅ、と溜め息をついてまた語り始めた。

「正確にはまだ戦争中では無いのですが、その機運が国内で高まっています。魔法の才能を持つ子供達をとられて国民は国に度々反乱をしているのですが、その反乱軍を僅か一個師団で鎮圧して回り、功績を挙げているものがいます。…彼はここロック大陸から南東にあるラクール大陸に侵攻しようと考えているのです」

ここで町長が一息ついた。
俺達にあらためて向き直る。
そしていきなり頭を下げた。

「お願いがあります、どうか彼を倒して欲しい」

頭を下げた町長の声は悲痛な訴えとなる。

「彼は類稀な軍才だけでなく強力な魔法も使います。その力の源はあなたたちが持っているのと同じアクセサリーの力によるものなのです。国の政策のせいでこちらに魔法使いが居ない今、頼れるのはあなたたちだけなのです！」

「……」

全員に沈黙が走る。
戦争、軍才、魔法…非日常の言葉が口と脳の動きを止めた。

少し間をあけて俺は沈黙を破って声を発した。

「それって俺たちにも危険がつきまとうってことだろ?悪いけど俺は早く元の世界に帰りたいんだ」

死ぬのは怖いに決まってる。
こんな得体のしれないとこで死ぬなんて。嫌だ。

俺の言葉を受けて町長がゆっくり頭を上げる。

「やはり、そうですよね。この世界に来たばかりの人にこんなこと

を頼むのが間違いでした…。この世界の事は私達で何とかしま…」
「俺は！」
今まで黙っていた空が顔をあげて町長の言葉を遮った。
何を言う気だ？
「俺は町長を、この世界の人達を見捨てることなんて出来ない！…
だから、俺は戦いたい！」
空が悲しそうな表情の町長に向けて凛と言った。
その言葉に町長も驚いて顔を上げる。
「はぁ！？空、何言ってんだ？」
俺も町長同様驚いて思わず声をあげた。
軍職に就いている人を襲うということをして無事で済むはずがない。
しかも唯一の勝機であるアクセサリーを相手も持っている。
無事どころか生きて帰ってこれるかどうか。
そんなこともわからないのか？
「そうだよ！何言ってんの？」
綾香も俺に続いて空を説得しようとする。
しかし綾香の説得にも挫けず、空は強い目で皆の方を見た。
「だってよ、こんなに困ってる人達をほっとけるかよ！…それにア

クセサリーが絡んでるってことは俺らの世界の人のせいでもあるんだぞ！」

空が俺達に語りかける。
だけど俺は腹がたつ。

この、偽善者が。

「そんなお前…すげぇお人好しだな」

俺は呆れため息をついて、だが心中よりは柔らかく言って空の言葉をはぐらかそうとする。

「第一お前は軍術の天才とやらに勝って無事で戻ってこれるのかよ？」

「でも、誰かが、俺らの世界の誰かがやらなきゃいけない事なんだ！」

席から立ち上がった空の言葉には強い意志と覚悟が表れていた。

「空…。うん、そうだよね。私も戦う」

綾香は空の言葉につき動かされた。
俺は綾香の心変わりに動揺する。

「いやいやちょっと待てよ！俺らの世界の人っつったって関係ねぇ人だぞ？そんなことのために…」

俺は綾香を必死に引き留める。だけど綾香は目すら合わせてくれな

い。

くそ！

何だってんだ！

「しかし、私達の持っている他にもアクセサリーがある…。これは帰るためのヒントになると思いますよ」

速人が後ろから俺にそう言った。

ヒントだと？

そんなの生きてなきゃ意味無いじゃんか。

「でも、危険だろ？そんなことする必要ないって！」

俺が必死でとめる。

速人はそれでも空についていくという考えを変える気は無いとばかりに、首を横に振る。

そんな…。

ま、舞は…！？

俺は最後の一人、舞をすがるように振り返り見た。

「舞…」

「私も…空くんが正しいと思う。輝、ごめんなさい！」

舞は申し訳無さそうに俺に謝る。

何で…？

「……。死ぬかも、しれないんだぞ？」

「私達が戦争を止めなきゃもっと多くの人が死んじゃうよ…」

「……」

俺は舞の言葉に呆然とする。

何で…？

俺は無言で席を立った。

何でわかってくれない！

俺は空達と距離をとるように部屋のドアの方へ歩いていく。

死ぬかも知れないんだぞ…！

「輝？」

呼び止める空の声が背後から聞こえる。

俺はドアの前で立ち止まって空達のいる方を振り返った。

この場にいる俺以外の全員が俺に哀れみの眼を向けている。

解り合えない。

元から俺は、独りだったのかも知れない。

不意に笑みがこぼれてきた。

「ははっ。そうかよ。皆、そっち側、なんだな？」

力無い笑いと虚ろな笑いが俺の顔を虚しく飾るのがわかる。でも笑みは止まらない。

「輝！そういうことじゃないだろ！」

空が俺を諭そうと呼び掛けてくる。

が、そんな偽善者の呼び掛けは俺には届かない。届くわけがない。

こんなヤツに俺を理解できるわけねえ。

「うるさいっ！」

力一杯に怒鳴る。

この世界に来てからの無力感と空への劣等感。

不純な感情が爆発していく。

俺はドアを蹴破るように乱暴に開けて階段を登った。

――……。

「輝！」

感情を抑えられずにキレた輝を追いかけようとする空を速人がとめた。

「今はそっとしておきましょう。誰もがあなたのように勇気を持っているわけじゃない。それに……」

速人は天井の方向を見る。

ドタドタドタ。

輝が階段を上がる音が聞こえた。

「2階からこの家の出口に行くまでにはこの部屋を必ず通らなくてばならないので輝は逃げられませんよ」

速人が微笑んだ。

「暫くしたら出てくるでしょう。今は一人にするべきです」

――……。

「くそっ！俺が間違ってるってのかよ！？」

俺は2階の寝室で自分の荷物を抱えて座り込んでいた。感情が高ぶる俺の拠り所は元の世界から持ってきたスクールバッグだった。

俺は歯をくいしばる。

俺は間違っちゃいない。

「元の世界に戻ったら誰が死のうと関係ないじゃんか」

俺は槍の穂先に巻き付いている布をいじる。

わかってる。自分だけが助かりたい。そんな考えに皆はついてこない。

でも…！

「死にたくないんだよ…！怖いんだよ…！」

でも、それでも…！

…他の人ごと皆救いたい…か。

ギュッ！

穂先の布をいじる手に力が入る。

「俺は甘えてたんだろうな」

弱々しく笑みをこぼす。

我が儘言ってそれが通らなかったらすぐ逃げる…。

これじゃ子供と変わんないじゃないか。

「……」

でもさ…。

もうここまで来たんだ。

俺は死にたくないし、この劣等感もそう簡単には捨てられない。

「もう戻れない…」

目を瞑ると浮かぶ消えない金色の閃光と皆の顔。
そして頬を濡らす液体。

空たちについていく気はない。

「俺は。俺は…」

絶対に。

「解って貰えないならもう良い」

顔を勢い良く上げる。
部屋の鏡に俺の顔が映り込む。その厭に煌々とした鋭い目はもう俺のモノとは違うように見えた。

あぁ。俺は甘えてるさ。
……だから何だ？それがどうした？

偽善は嫌いだ。

俺の霞んだ視界はヒラヒラとたなびく部屋のカーテンをとらえた。

俺は絶対に。

――……絶対に認めない！

――……。

「出来たぁ！」

舞は自分の掌の上に小さな水の玉を出現させる。
それを見て満面の笑みをこぼす。
「これで皆基本はマスターだな！」

空は自分の事のように嬉しそうに言った。

「皆さん凄いですね。こんなにも早くアクセサリーの力を使いこなすとは」

町長は少し驚いている。

空たちは輝が二階で塞ぎ込んでいる時間を魔法の練習に使っていた。
町長は魔術に覚えが有るようで、空たちに魔術の基本を教えていた。

「膨大なアクセサリーの力を最小限に抑え込む事。強くイメージする事。この二つが基本ですからね」

町長が言った。

「さて、後は輝ですね」

速人が2階の方向を見ながら眼鏡をキラリと輝かせて不敵に呟く。
掌には小さい電気の球がほとばしっている。

「徹底的に教え込もうね！」

舞も小さな水球を操りながら張り切っている。

「二人とも怖っ」

スパルタ！？と加えた綾香のツッコミは二人には届かないようで、
速人も舞も満面の笑みで魔法を操っていた。

――……。

「それにしても遅いなー。そろそろ暇だぞ」

空が昼食の後片付けをしながら言う。
遅い、とは輝の事だ。

「確かに遅いですね…。昼食も冷めますし…。…舞もそう思いませんか？」

速人が舞に訊く。

「心配ですよね…」

舞が速人に応える。
と、速人はイタズラっぽく笑った。

「ではこれを輝に持っていってください」

と言って速人は舞に、お盆の上にのせた輝の昼食を手渡した。

「まっかせて下さい！」

トントントントン。

舞はリズム良く階段を上っていく。

その手には速人から手渡された輝の昼食が乗ったお盆がある。

「輝が泣いてたら慰めなきゃ…！」

舞は呟いた。

コンコン。

乾いたノックの音が廊下に響く。

……。

返事が返ってこない。

「入るよー？」

舞は意を決してドアノブに手をかけた。

ガチャ。

「輝、お昼ご飯持ってき…え？」

舞の視界に入った部屋の中には寝具と輝の物を除いた荷物しかなかった。

そう…。

そこに輝の姿は見受けられなかった。

――……。

「輝ぁー！あきらぁー！」

空たちは先程突然失踪した輝を探していた。

「くそっ！槍とカーテン使って滑り降りるとは…」

空が悪態をつく。

舞が昼食を持って部屋に入ったときには既に輝は消えていた。

カーテンを結んで作ったロープと槍を使って二階の窓から外に逃げ出したようだ。

町長は町の門にいる警備兵に訪ねる。

「輝くんは町から出ませんでしたか？」

「あぁ…。『ちょっと外の空気吸いたい。皆に単独行動の許可は貰ってる』って言ってたので通しましたよ」

警備兵は事も無げに答える。コトの重大さがわかっていないようだ。

「何て事だ…」

町長はその若い警備兵に状況を伝える。

徐々にコトの重大さを理解した若い警備兵は青ざめた顔になって、

輝が向かった方向やら時間やらを詳しく説明し始めた。

――……。

それから五分ほど後。

警備兵達は武装して町の広場に集まっていた。

「ある兵によるとアクセサリーの所有者、輝は町はずれの森に行った可能性が高い。あの森は日が暮れると真っ暗になって捜索が困難になる。その上厄介な怪物まで出る。もう正午も過ぎた。早く見付けるぞ！」

警備兵長が部下の警備兵に指示を出した。

「ったく迷惑掛けやがって！」

空も警備兵に混ざって森へ向かおうとした。

その時。

「動くなぁー！」

という声が遠くからした。

「なんだ？」

「どうした?」

「おい!あれってまさか…!」

ざわめいている警備兵の中の一人が、『彼』に気付いたようだ。

町の外から騎馬軍隊の一師団がやって来る。
その先頭に禍々しい程の覇気を漂わせている男がいた。

「あいつは…『ラルガ』だ!」

禍々しい覇気を纏う筋骨隆々のその男は腰に日本刀を帯びている。

「奴こそがラルガ…!戦争を起こそうとしている者です…!…皆さん!」

町長が憎々しげに言って4人を集める。

「あなたたちのアクセサリーが見付かると危険です!あなたたちはこれから隠し通路で隣町まで逃げてもらいます」

「じゃあ輝はどうするんですか!?」
舞が町長に訴える。

「…今は諦めてください。それより早く!隠し通路はそこの噴水の中です。後は、頼みましたよ」

町長は少し頭を下げて、ラルガのいる方へと向かった。

「くそっ！」

空は町の人の安否を気遣って鈍る足で噴水に向かって歩く。

「今は素直に逃げましょう。相手が多すぎます」

「わかってるよ！」

空たちは噴水の中に飛び込んだ。

町の人々を一か所に集めて統制していたラルガが空達が噴水の中の隠し通路に逃げ込んでいくのに気づく。

「そこの！動くなと言ったはずだ！追えい！」

ラルガは部下に命令を出した。手の空いている兵が二人噴水の中へ向かって行く。

「さて、町長殿。何故こんなに沢山の兵士を集めていたのか説明願おうか？国に反旗を翻す気か？」

「……」

「ち、違います！」

ラルガの質問に押し黙る町長の代わりにあの若い警備兵が弁明しようとする。

だが。

「…違わない」

町長が放ったその一言で若い警備兵の弁明は無駄になった。

「町長！何故！？」

「……」

（済まない。アクセサリーを守るためにも今ここで輝くんの存在をラルガに知られる訳にはいかないんだ）

「無事に、逃げてくれ…」

――……。

タッタッタッ。

空たちは噴水の中の隠し通路を走っていた。隠し通路は暗く、ジメジメしている。灯りは松明によるものだけだ。

「くそっ！狭いし長いな！」

石で舗装された通路は足音がよく響く。

「空！後ろ！」

その足音の中に不自然なもう一つの足音がある事に気づいた綾香が空に訴えた。
後ろからラルガの部下と思われる兵士が剣を携えて走ってきていた。

「やべぇ！追い付かれる！」

空は更にスピードを上げた。
だが、一向に差は開かない。

「こういう時の為の魔法です！…私の指示にしたがってください！」

速人は全員に呼び掛けた後、綾香の方を見た。

「綾香！奴の足をあなたの力で絡めとってください！」

「わかった！」

綾香は耳につけた小さい緑の宝石がはまったイヤリングを軽く触る。

「…行け！」

綾香が念を送ると追ってきた兵士の足元の地面から植物が現れて、兵士の足にツタが絡み付いた。

「くそっ！何だこれは！…奴ら、魔法を使えるのか？」

ツタに足を取られた兵士が悪態をつきながら足に絡まったツタを千切ろうと剣をふるう。

即座に速人が舞を見る。

「今です！舞さん！奴に水をかけてください！」

「わかりました！」

舞も綾香同様に、腕にはめてある小さな青い宝石のはまった腕輪に触れる。すぐに念を込めて掌から水の球を出して動けない兵士に当てる。

「…ちっ！水か！？」

兵士は一瞬怯んだが、かかってきたものが水だと判るとまた足を封じるツタを剣で斬り始めた。

「…終わりです」

自らの指にはまっている黄色の宝石の指輪を触れた速人が自分の指輪に力を込める。

「食らえっ！」

速人が放った電撃は水を通じてツタで動けない兵士に感電させた。

「うわぁぁぁぁ！」

兵士はその場で絶叫して倒れた。

「……」

舞と綾香はピクリとも動かない兵士を見て、恐怖で言葉を失う。

「……！まだ一人います！」

二人とは裏腹に冷静な速人が注意を促す。

もう一人の兵士は剣を持って突っ込んできた。
どうやらさっき倒した兵士に隠れて攻撃のチャンスをうかがっていたようだ。

「させるかよ！」

空は剣を抜くと、金色のペンダントからでてきた金色の光を剣に纏わせる。

「らぁっ！」

空の振るった、魔法で強化された剣はいとも簡単に兵士の剣を砕く。

「ぐぁっ！」

剣を砕かれ、腕を斬りつけられた兵士はその場で倒れた。

すかさず空が兵士に剣をつき立てる。

「ゴメンッ！」

ずぶり、と貫く感覚が空の掌に残った。

「はぁ、はぁ」

４人の息切れの音が隠し通路の中に響く。

「こ、殺した…。殺しちゃった…」

綾香が感電死した兵士を見る。

「それでも…。それでも進まなくちゃいけないんだ」

空は剣を鞘にしまって懺悔した。

「早く奴を、ラルガを止めないともっと多くの人が死ぬ」

綾香は無言で立ち上がり涙を溜めた顔を小さく縦に振った。

その横では舞がこと切れた兵士に辛そうに祈りを捧げていた。

祈りを終えた舞が立ち上がる。

速人は舞が肩を震わせているのを見る。彼女は皆を不安にさせないため、涙を流すのをギリギリで踏みとどまっている。

「もう、いいんですか？」

「…はい」

速人はあえて舞の瞳からこぼれ落ちた涙を見ていないふりをして、空に声をかけた。

「時間が惜しいです、先に進みましょう」

空が光の見える出口を向き直る。

「…あぁ。進もう」

もう一人の少年

とある部屋の一角。ベッドの上で寝ている少年がいた。髪の色は茶色く、髪型は流行っているタイプの短髪だ。
目を閉じていた少年は呻きながら眉をピクリと動かすと、静かに目を開いた。

「……！」

彼は目を覚ますととぼけた顔をして一つあくびをかいた。

「夢だったのか……？」

輝に一樹と呼ばれていた少年、橋山一樹はベットから降りて、そこで始めて異変に気付いた。

「ここは……！俺の部屋じゃない！」

一樹に動揺が生まれる。
ぐるぐると辺りを見回す一樹。

「ここはどこだ？何でこんなとこに？」

『俺の部屋じゃない』『居場所が解らない』と、突然のコトに状況を掴めず焦る一樹のその視界の端にヒラヒラとした物が映った。カーテンが開け放たれた窓からの風を受けてたなびいている。

「……そうだ窓だ！」

ここがどこか分かればかなり助かる。しかももしここが一階ならばその窓から逃げることも可能だ。

一樹はこの部屋が一階であることを祈って窓から外を見た。

「……！……外国か？」

レンガ造りの家。
荒い石敷きの道路。
道を走る馬車。
そして遥か遠くに水平線。

窓の外には映画で見た少し昔のヨーロッパの港町のような景色が広がっていた。

「何だよ……ここは……」

一樹は呆然とした表情で窓から港町の景色を見渡している。
少し遠くに大きな船が見える。蒸気船のようだ。港の様子からどうやらここは近代国家ではないように思える。

一樹のいる部屋はどうやらこの港町の中でも丘の上にあるようで、お陰で見通しは良いが窓から外に出たら飛び降り自殺になってしまうだろう。

ふわ、と潮風が吹いてきて一樹の茶髪をなびかせる。

「海か……」

潮風は一樹の思考をしばし麻痺させて古い記憶を揺り起こした。

（燕……。俺は……）

『燕』という人物を思い浮かべ、暫くボーっと外を見ていた一樹はふと思い出す。

「あっ！そうだ！ケータイ！」

携帯があれば電話やメールで助けが呼べる。

一樹はポケットから携帯の感触を感じとり、笑顔になる。どうやら携帯は取られてないようだ。

「へっ！携帯を取らないなんて間抜けな誘拐犯だな」

早速一樹は携帯を取り出して開いた。画面に待受が映る。電池も残っている。

（携帯で日本に電話して助けにきてもらおう！）

１１０番を押し、一樹は携帯を耳に当てる。

しかし。期待したのも束の間。一樹は冷や汗をかきながら携帯を耳から離した。そして画面を見る。

「圏外だ……」

１つもアンテナが立っていないどころか圏外としっかり明記されて

いる。
一樹は必死に携帯を振ったり部屋をうろうろしたりして電波を探すが、画面の表示はずっと圏外のままで変わらない。

「駄目か……」

ガチャ。

一樹が窓辺で電波を探して頑張っていると、突然部屋のドアが開いて使用人らしき女の人が入ってきた。

「誰だ？」

一樹が使用人に向けて身構える。
使用人は一樹が目を覚ましてうろついているのを一瞥すると銀行マンの見本のような深いお辞儀をする。

「おはよう御座います。安心してください。今ジャン様をよんできます」

そう言って、一樹にニコッと笑いかけながら部屋を出た。
また一人部屋に取り残された一樹。

「……なに今の？つか使用人じゃねぇだろ！ガッツリメイドだったろ！ジャン様はオタクなのかよ！？」

「オタク？オタクとは何でしょうか？」

一樹が一人で色々ツッコミを入れていると、いつの間にか一樹の後

ろにいた眼鏡をかけた知的なお姉さんがいて、一樹のツッコミの意味を聞いてきた。

「うおわぁ！誰だお前！」

一樹は驚いてその女性から飛び退く。
その女性はいきなり飛びのいた一樹にも身じろぎ一つしない。

「私はこの港町の豪族のジャンです」

ジャンと名乗ったその女性は飛びのいて警戒している一樹に軽く頭を下げて挨拶をした。

「目的は何だ？身代金は期待できないぞ！」

一樹は自分が誘拐されていることを思い出してジャンに訴える。
だが。

「まだ理解してない様ですね」

とジャンは心底呆れたように言うとため息をついた。

「理解？何をだよ？どゆことだよ？」

一樹は次々と湧いてくる質問をジャンに浴びせかける。
ジャンは、ふぅ、と疲れたように息をはいて説明を始めた。

「まず、誘拐でしたらあなたを縛っておきます。ですから誘拐ではありません」

「あ、そっか」

それを聞いた一樹はそれもそうかと納得する。しかしすぐにまた口を開いた。

「でもこんな変な所に――」

「次に、この場所は、あなたが元々いた世界とは違います」

ジャンは一樹の言葉を遮って続けた。

「……は？」

（コイツ何言っちゃってんの？）

一樹の頭の上に？マークが浮かぶ。

（違う世界？あーはいはいはい。コイツあのメイドといい、イタい奴なんだな、うん）

一樹の頭の上から？マークが消え、その表情は哀れみのそれになった。

ジャンは一樹のその表情を見て更にあきれる。

「ハァ…。信じて無いようね。でもそのアクセサリー、『赤の指輪』をみる限りではあなたは違う世界の人だと思うわ」

ジャンは一樹の指にはまっている赤い宝石のはまっている指輪を指さした。

「…は？指輪？」

一樹はジャンに言われて自分の手を見る。
人指し指に赤い指輪がはめられている。それは彼が輝と同じように峰川で拾ったモノだ。

「……」

一樹は冷や汗をかいて何とも言えない表情をした。

（あれ？俺指輪はめてたっけ？）

一樹は指輪をはめた記憶を探そうと考えをめぐらす。

（指輪、はめてなかったような…）

「…嘘だろ。…あ！」

小さく叫んだ一樹の脳裏に土手での記憶が蘇る。

（あのとき、指輪が光を放ってその時に意識を失って…。じゃあここは…）

「……。マジかよ。え？ホントに？」

一樹は引きつった笑いでジャンに聞く。

「そのアクセサリー、『赤の指輪』は私たちとは違う世界の者が持つ特別なモノよ」

ジャンは、やっと理解したか、という顔をして一気に説明した。

「…やっべー。変なとこにきちまったよ」

呟く一樹。

一樹はジャンの話を信じた様で、引きつった笑いを見せるその額からは冷や汗が流れている。

「あの指輪『本物』だったのか。俺はどうしてこういうことに巻き込まれるかな…。…自業自得、か」

動揺しながらも一種観念したような一樹の後ろの窓から港町を出港した船の汽笛が響いた。

――……。

「出口だ！」

空が後に続いて来る仲間達に呼び掛けた。

空達は地下通路を通ってシュヘルから逃げ出した。

ずっと続いている様な気さえする冷たく暗い隠し通路も空の言う通りすぐそこで終わっていて、松明の薄暗い光ではない、明るい光がその通路の行き止まりに溢れている。

隠し通路のシュヘル側は既に綾香の魔法を使って樹を繁らせて埋め

てある。
恐らくラルガの手下の追手がここに辿り着くことは無いだろう。
速人が行き止まりの突き当たりの壁にかけてある縄ばしごに手をかけた。出口ははしごを登ったところにあるみたいだ。

「このはしごを上れば外に出れるようですね。安全の確認も兼ねて、私が先に上りましょう」

速人ははしごを二、三回、クイ、と引っ張って強度を確認してから足をかけて登り始めた。
速人がはしごを上るとどこかの林の中に出た。地下通路の出口は井戸のようになっている。カモフラージュのためだろう。

（人気がない。待ち伏せも先回りもされていないようですね）

「大丈夫です。上ってきてください」

速人は井戸のそこに向かって呼び掛けた。

林は丁度小高い丘のようになっていて、木が生えていない所から遠くを見ると海が見えた。

「おい！町もあるぞ！」

速人に続いて井戸から出てきた空が指差すその先には町があった。
港町のようだ。

「あの町に行けば王都行きの船が一艘くらいはあるはずです。いってみましょう！」

速人が疲れてきた皆を励ますように言った。

――……。

ゴォォォ……。

大量のモノが燃えていく時の独特な轟音が町の空気を震わせる。町を焼きつくす赤い光がシュヘルの町を飲み込んで蹂躙した。所々から人々の悲鳴も聞こえてくる。

「この町全体が反乱分子だったとはな。残念だよ、シュヘル」

黒い鎧を纏った男は吐き捨てるように言う。

「噴水の隠し通路から逃げた奴らは『アクセサリー』を持っている…。厄介だな。いずれ消してしまおう」

その黒い鎧の男、ラルガは騎馬隊の隊列を整えると、業火に包まれた町を出た。

「まぁ良い。これから国獲りを始めようか」

ラルガは不適に笑った。

去っていくラルガを睨む男が燃えていく我が家の前で歯をくいしばる。

「く…」

燃える町を見て悔しさで強く拳を握る。

「最後の希望だけでも…」

そう呟いて、町の長と呼ばれていた男は町を出立した。

――……。

「結構でかい町だな！」

空が少しばかりはしゃいだ声で言う。

空達はシュヘルからの隠し通路を抜けた後、通路出口の林から見えた港町に向かった。

その港町につくと爽やかな風が彼らの心を洗うように吹いていく。

「海のにおいもするよ！」

綾香がスンスンと匂いをかいで微笑み、続ける。

「海かぁー。去年の夏が懐かしいなぁ。ねぇねぇ、泳げるとこあるかなぁ？」

「ありませんよ。港の様ですからね」

速人はいつもの調子で微笑みながら綾香の期待を蹴った。

「それにあったとしても私達には泳げる余裕はありませんし」
と言って綾香の期待を更に切り捨てた。
「舞～、速人がいじめるよ～」
綾香は舞に助けを求めるように言う。
舞は、よしよしと頭を撫でて綾香を慰めた。
「それはそうと」
ふと気付いたように舞が綾香を慰める手を止めて聞く。
「ここの港にはラルガ将軍の手は回っていないのかな？」
「恐らく大丈夫でしょう。シュヘルからの隠し通路の先にある町、という点では信頼ができると思いますよ」
速人は冷静に答えた。
確かに、隠し通路で繋がっているような町が味方ではないはずがない。
「港についたら後は船で王都へ直行出来るしな！」
と空も続けた。
４人はそのまま町の港に向かって歩いていった。
――……。

そんなこんなで４人は無事に港町（町の看板によればウートと言う名前の町らしい）の船着き場へと着いたのだが、そこで立ち往生していた。

「だぁ～かぁ～ら！このペンダントみろって！」

空は禿げた頭のいかつい船乗りにペンダントをぐいっと見せ付ける。だがスキンヘッドの船乗りは腕を固く組んでただ首を横に振るだけだ。

「うちは異世界だかの住人だろうと反乱軍だろうと王さまだろうと金払えねぇヤツは乗せないの！」

船乗りの素朴だが真摯、そしてもっともな生業への姿勢に空はおろか、速人も反論出来なかった。

「くそ…、ここまで来て金欠かよ！」

そう…。

空達はもうほとんどお金を持っていなかったのだ。

「空、もうやめましょう。これ以上粘っても仕方ありません。一旦出直しましょう」

速人が空を諌めた。

「分かったよ…」

空は渋々ひき下がって、船着き場を後にした。

――……。

「で、どうする？」

空達はウート中央の噴水広場で話し合っていた。

「サウルの村で貰った旅費ももう少しで尽きちまうしな。後は宿代と食費が少しだぞ。…やっぱり輝に半分持っていかれたのはキツいな…」

空が財布を確認してから自分達の貧しさに嘆く。

どうやら輝が逃亡の時に財布からいくばくかのお金を拝借していたらしく、そのせいもあり残額は絶望的なことになってしまっていた。

「働くしかないよね…」

舞が正攻法の意見を出す。

「そうですね…。あまり時間は無いんですけれどね…。…輝、本当にやってくれましたね…」

速人は舞の提案に頷く。

同時に輝への悪態をついた。それを聞いて舞は複雑な表情をする。

「でもどうやって仕事見付けるの？」

と綾香。

「……」

その質問に答えられない皆はすぐに沈黙した。

「…かくなる上は追い剥ぎでもしますか？」

速人が笑顔で犯罪行為を勧める。
勿論眼鏡は怪しげに光っている。

「さすがにそれは…」

「ダメでしょ…」
舞＆綾香がわりと本気でツッコんだ。
速人ならやりかねない。

「あ…」

そんな3人をおいて周りをみていた空がふと何かを見付けて3人に呼び掛ける。

「おい…！あれなんてどうだ？」

空の指差す先には『雇用・求人』と書かれた木製の掲示板があった。

「仕事の1つぐらい見付かるっしょ！」

「確かに…。よく見つけましたね。とりあえず見てみますか」

――……。

「えー何々。…モンスター退治？」

「素人の私達には危険すぎますね、却下です」

「じゃあ洞窟探検！」

「却下」

「ぬわぁー！じゃあ何なら良いんだよ！」

掲示板の前で空と速人が日雇いの仕事を探している。
空はどうやら冒険がしたいようで割合危険そうな仕事を選んでいくが、速人が普通の判断力で次々と却下していく。

「早く決めないと日が暮れてしまいますよ？」

速人がわざとらしくため息をつきながら言った。

「それは速人が却下するからだろ！」

空は少し怒って言う。

ちなみに他の二人、舞と綾香はさっさとレストランでのウェイターの仕事を貰って、荷物を置くために先に宿に行っていた。

「っ分かったよ！じゃあもう速人の決めたので良いよ！」

空はしびれを切らして、すねたように言った。

「そうして貰えると助かりますねぇ。…ではこの仕事にしましょう」

と言って速人が見付けた仕事は、『明日隣町から来る客人の護衛』という仕事だった。
空は仕事の詳しい内容を読み上げる。

「え～っと、依頼人は町長。街道の関所から町までの要人護衛？楽しそうじゃん！速人！見直したぜ！」

空は嬉しそうだ。
さっきまで悪かった機嫌も治っている。

「そぉですか、それは良かった。…では私はその依頼人の所に行って話をつけてきましょう。空は先に宿に行って下さい」

速人がにこやかに言う。

「え？どうして？俺も行くよ！」

「空には明日何かあったらの為にしっかりと休んでもらいたいのですよ」

「そうか！ありがとうな！じゃあ先行って休んでるよ！」

空は速人に手を振りながら笑顔で宿に向かって走り出した。

「はいはいーではまた後でー」

走り去る空を見て速人は口角を上げる。
彼は知っていた。
この依頼の難易度が低いことを。

（街道の関所までは５ｋｍ程度、それまでの道もよく整備されているらしい。これなら危険もないでしょう。空には悪いですが『護衛』と言うよりは『お出迎え』と考えた方が良いですね）

速人は眼鏡をクイと上げて軽いもんだ、という表情をした。

「さて、依頼人のところに行きましょうか」

速人は一人呟いて夕暮れの町を歩き始めた。
夕暮れの町を家へとかけていく子ども達を縫うようにして噴水広場を抜ける。

（危険を避けて…か）

速人の脳裏に危険から逃げて今はここにいない少年の顔がよぎった。
苦い表情をする速人。

（…ですが今は安全が第一です。空もわかってくれるでしょう）

眼鏡をクイッと上げた速人は、暗くなる前に、と歩みを速めた。

――……。

平和という文字そのものが似合いそうな街道を歩く２つの影。他には人が一人もいない。辺りは背の低い草が生えていて見晴らしも良く、野盗やモンスターの隠れる場所もない。
天気は快晴、雲一つない清々しい空だった。

「何が護衛だよ！これじゃただのお出迎えじゃないかぁ！」
ふくれっ面で昨夜速人の考えた事をばっちりいい当てる空。

「まぁまぁそう言わずに。いい天気ではないですか！まさに護衛日和ですねぇ」

したり顔でシレッとそう言ったもう一人は速人だ。

「なぁにが『護衛』日和だよ！これじゃどう見たって遠足だろぉ！」

空が、騙されたー！、と悔しそうな顔をする。
速人はまぁまぁと空を適当になだめた。

「うー。…そんで、誰を護衛するんだよ？」

空は投げ遣りに、そして若干ふてくされながら仕事の内容を聞く。

「ウートの町長の客人の某という輩です。関所に行けば分かるらしいですよ。…ほら、関所の門が見えてきました。空、相手は客人です。失礼のないようにお願いしますよ？」
「へいへい。分かってるよ」

念を押す速人に適当な返事をして空は門へ向かってズンズン進んで行った。

門に近付くと件の客人と思われるフードを深く被った男が衛兵と何やら話をしているのが見えた。

その様子を見た空は、

「あれだろ?…おーい!護衛ですよー!」

と大声で客人に呼び掛ける。

速人はそんな空の非常識に隣で顔をしかめると、空の無礼を詫びようと客人の男の所にかけていった。

「すみません。彼は色々と疎いので大目に見てもらえないでしょうか」

客人の所に着いた速人はすぐに深々と頭を下げた。

「いえ、いいんですよ。それより2人とも無事で何より。綾香さんと舞さんは別行動ですか?」

無礼も気にしない様子で、軽く笑いながら親しげにそう言って男は深く被っていたフードをおもむろに上げた。

「あ、あなたは…。シュヘルのニーグ町長ではないですか!ご無事で何よりです…!」

速人が驚いて頭を上げてニーグ町長を見る。

ニーグは少し痩せてやつれていた。

それが旅の疲れから来るものなのか何か他の原因があるのかはわからない。

「…それで、あの後ラルガはどうしましたか?」

速人は恐る恐る聞く。

ニーグは苦笑いを返した。

「そのことで色々と話すことがある。さぁ、まずはちゃんとウートの町のジャン町長の所まで案内してもらおうかな？仕事だろう？」

「おう！まかせろよ！」

追い付いてきた空がガッツポーズで言った。
客人に対する言葉としてはあんまりだ。

「はぁ…。空、あなたには一度礼儀というものを叩き込んだ方がいいんでしょうか？」

敬語を使おうとしない空に速人が呆れた。
ニーグは微笑む。

「ははは。さぁ、行きましょうか」

――……。

「いやぁー、沢山もらえたね！」

綾香が嬉しそうな声で笑いながら言う。

「これなら船も乗れるね！」

舞も気分上々だ。

二人はレストランでのウェイターの仕事を終えて、空と速人との待ち合わせ場所であるウートの噴水広場に向かって歩いていた。

二人の喜びようを見るに、中々の稼ぎになったらしい。
綾香が噴水のある広場に建っている時計柱を見た。噴水広場に着いた二人は辺りをキョロキョロと見回す。
「待ち合わせ場所って噴水広場でいいんだよね？」
「うん。きっともうすぐ来るよ」
噴水広場の時計柱は既に待ち合わせの時刻が過ぎている事を示していた。
「女を待たせるとは…。この遅刻もどうせあのバカ（空）のせいでしょ」
ふくれっ面をする綾香。
そんな綾香の様子を見て舞が微笑む。
「綾香ってさ、空くんとホントに仲良いよね。…ちょっと気になるなぁ」
「ち、違うって！ただの知り合いだよ！」
綾香は舞の言葉に赤面しながら必死に否定する。
「顔、真っ赤だよ？」
舞が意地悪に笑う。
そんな話をしていると遠くから声がした。

「おーい！悪い、待たせちまった！」

空の声だ。

空が駆け寄ってきた。後ろから速人もついてくる。

「すみません。仕事が長引いてしまって遅れました」

速人が時間に遅れたことを謝罪した。

既に時間はもうそろそろ夕暮れというときで、結局空と速人は待ち合わせの時間よりもそれなりに遅れてきたのだ。

「いいんですよ速人さん。恐らく悪いのは空ですから！」

綾香が空を指差す。

「な、何でだよ！俺はちゃんとやったぞ！」

空は綾香に抗議する。

と、空と綾香が賑やかに騒ぐ様子を舞は微笑んで見ていた。

「ちょっと舞！何ニヤニヤしてんの！？」

綾香が微笑む舞に指摘する。

「ゴメンね、さっきの話の後でつい笑みが…」

と言って舞はまた微笑んだ。

「さっきの話？何はなしてたんだ？教えー―」

「皆さん楽しそうですが少し落ち着いてください。この町、ウートの町長が私達に話があると言うので呼びに来たんですよ」

速人が空の疑問を遮って言った。

「ウートの町長が、話？」

「はい。話です。待たせては失礼です。早く行きましょうか」

――……。

「皆さん、久し振りですね！」

幾分疲れた笑顔で空達を出迎える男。昼間のぼろぼろの服装からちゃんとした服装に召しかえていた。

その姿を見て舞と綾香が驚く。

「ニーグさん！どうしてここに？」

町長宅についた４人を出迎えてくれたのはシュヘルの町の町長のニーグだった。

「話は中に入ってからしようか」

ニーグはドアを開けて４人を招き入れた。

４人が町長宅に入ると、シュヘルの時と同じように応接用と思われる簡素な部屋に案内された。

その部屋では眼鏡をかけた知的な女性が座って待っていた。

「彼女がウートの町長の、ジャンさんです」

ニーグに紹介されたその若く知的な女性は眼鏡を上げて挨拶をする。

「どうも、ジャンです。正確には町長ではなくこの町の豪族ですが。町長の公務も兼ねているので町の皆からは町長と呼ばれています」

「えーっと、よろしく（うわー。この人めんどくせぇー）」

空はジャンに苦い顔をしながらぎこちなく挨拶を返した。

新たな仲間

シュヘルの町長宅のと同じく簡素なウート町長宅の応客室に6人の人が集まって話し合っていた。
内4人は空たちで、他2人はシュヘル町長のニーグとウート町長のジャンだ。

「そういえばニーグさんはシュヘルの町の公務はいいんですか？」

お互いに自己紹介を終えた後に舞がニーグに訪ねた。シュヘルの町長であるニーグには本来すべき仕事があるはずだ。
舞はシュヘルに何かあったのではと心配だった。

「あぁ…」

元気無くそう答えたニーグは暗い顔をしている。

「シュヘルは…。ラルガに焼き付くされた…。その事についてをジャンに伝えに来たんだ」

突然の報せに全員驚いた。

「シュヘルが…？何でだよ！…俺達を逃がしたからか？」

空に恐ろしい考えがよぎる。

「俺達のせいでシュヘルの皆は…」

空の表情が徐々に驚きから怯えへと変わった。
そんな空の考えを遮るようにニーグが否定する。

「空君、それは違います！シュヘルは元々反乱軍の町だったのです。空君達が気にする事ではありませんよ！本当は…」

そこまで言ってニーグはハッと気づいたように言葉を止めた。しまったと言わんばかりの顔に空が疑問を抱く。

「…本当は？」

覗き込むように聞き返す空。

「いや、何でもありません」

顔をしかめたニーグはそう言って手を振り、慌てて誤魔化す。

だが、ニーグは誤魔化しながらも『本当』のことを思い出していた。

あの時。
空たちを隠し通路に逃がしてからのことだ。

久喜輝を探すため町の広場に集められた警備兵達。
それを見たラルガに、警備兵を集めた理由を問われた時、ニーグはあえて何も答えなかった。
もし答えたら久喜輝の居場所がラルガにバレる上、最悪久喜輝はラルガに殺される可能性があった。

『町の平穏』と『輝の生存の僅かな可能性』。

この二択でニーグは『町の平穏』を捨てて『輝の生存』をとった。

例え町が滅ぶ原因が輝のせいであったとしても、無関係なイセカイの住人である輝に死を強要出来なかった。

きっとそれを今話したらこの場にいる空達は輝の事を憎むだろう。

ニーグはそんな複雑な思いを無理矢理な笑顔で誤魔化していた。

そしてその笑顔を止め、ニーグはジャンに向き直る。

「ジャン町長、そこで折り入ってお願いがあります。…シュヘルの生き残りの難民をウートに受け入れてはくれませんか？」

言って、頭を下げる。

ニーグの真摯な願いの言葉。

「当たり前ですよ、ニーグさん、頭をあげてください。実をいうと難民の受け入れはシュヘルが焼かれたという伝令を受けた時から決定されてます。ウートはシュヘルの味方です」

ジャンがニーグの肩に手をおいて、微笑みながら言った。

「ありがとうございます！この恩は絶対に返します！」

頭を上げて感謝の言葉を紡ぐニーグの目からは涙が溢れていた。

――……。

シュヘルの滅亡の事実を知った空達4人はジャンの家で話を聞いた後、宿に戻って体を休めていた。
その宿の一室から怒りに満ちた声が聞こえる。

「にしてもゆるせねぇな、ラルガの奴！」

空はふかふかなベッドのクッションに思い切り拳をぶつける。クッションには拳のあとがついて、少しすると元に戻った。

「いくらなんでもシュヘルを全部焼く必要は無かっただろ！」

荒れる空を冷静に見据える速人。女子である綾香と舞は別室にいるので、空をなだめられるのは速人だけだ。
速人は空の怒りに共感しつつもあくまで冷静をつとめる。

「空、ラルガを倒すにもまずは王都まで情報を求めに行かなくてはなりません。その為には――」

「明日の船にのるために早く寝る。だろ？分かってるよ」

幸い船もジャンが町長権限で明日の一番便をとってくれていた。

「わかってるさ。今の俺たちじゃラルガは倒せない。わかってるんだ……」

やりきれないもどかしさに押し黙る空。流れるしばしの沈黙。

「……それよりも、気になることが一つあります」

空が落ち着いたのを見て、速人が静かに声を発する。

「……気になること？何だ？」

「輝の事です」

速人は問いかける空に簡潔に答えた。

「輝ぁ？……いいよアイツはもう。勝手にすれば良いだろーが」

そんな空の言葉を聞いて速人は溜め息をつく。

「確かにそうですが。空もニーグさんの話を聞いたでしょう？もしかしたら、を覚悟しなくてばならないのですよ」

空の脳裏にニーグの言葉が蘇る。

「輝くんが向かった森は一般人には危険な森です。あの森には集団で襲ってくるライツという獣がいるのですよ。下手を打つと傭兵ですら生き残れません」

ニーグは後悔の表情になって続けた。

「アクセサリーの力を使いこなせない限り、戻ってくることは無いかと……」

空は歯を食いしばった。

裏切った相手のことを思いやれる。その甘さが彼の弱さであり、強さでもあった。

「……気分悪い、もう寝るぞ！」

ふてくされるように毛布にくるまる空。

「そうですか。ですが警戒を怠らないようにはしましょう。この世界は危険です。彼はそれを身を挺して教えてくれたんですよ」

「…分かってるよ…。…おやすみ」

「おやすみなさい」

かつての仲間である輝を欠いて、彼らの夜は刻々と過ぎていった。

――……。

「ただいまー」

疲れた声でウート町長宅に入ってきたのは茶髪の少年、橋山一樹だ。その腰には短めの剣を二本帯びている。

彼はウート町長宅の応接室へつながるドアを開けた。

応接室ではニーグとジャンがシュヘルの難民受け入れについての話をしている。ジャンは一樹に気づいて話を中断した。

「一樹、王都への出航は明日の一番船でとっておきましたよ」

ジャンが一樹に伝える。

その言葉に一樹は複雑な表情をした。

「そうですか…。じゃあ、出発は明日になりますね。…今まで本当にお世話になりました」

一樹はジャンに礼を言う。少し涙ぐんでいる。
この世界のことや、魔法のこと。何もわからない自分を何日もの間保護してくれた。感謝の気持ちをストレートに涙が表す。

「……ジャン。彼は？」

応接室にいたニーグはジャンに一樹の事を訪ねる。
ジャンが答えようとするのを止めて涙を拭いた一樹が前に出た。

「橋山一樹って言います。あなたがニーグさんですね、会えて光栄です」

一樹は自己紹介をする。
ニーグも席を立って頭を下げた。

「一樹もアクセサリーを持ってるの。今日まで師をつけて魔法の練習をさせていたのよ」

ジャンは説明する。

「初めまして一樹君、君もイセカイの子なのか…」

ニーグも頭を上げて挨拶を返した。

「君も、ってことは俺の他にも俺の世界の奴がいるってことだよな？」

「あぁ、四人程、もう宿に戻っちゃったけどね。彼らも明日の一番船を使うからきっと会えると思うよ」

ニーグは答えた。

「…！…じゃあその中に久喜輝って奴いなかったか？俺の友達でさ！探してるんだよ！」

一樹は少し希望に満ちた顔でニーグに聞いた。
それに対してニーグは渋い顔をする。

「輝くんは…」

ニーグがジャンを伺い見るとジャンが頷く。
それを見たニーグは一樹に、ソラ達には既に話した、輝の向かったライツのいる森についてを話す。

ニーグの話す内容を聞く内に一樹の表情は希望から絶望のそれになった。

「嘘だろ…」

「でもまだ死んだと決まった訳じゃない。希望を持ってくれ」

ニーグが一樹を慰める。
一樹は何も答えずに震えている。

「…明日は早いからもう忘れて寝なさい」

落ち着いた優しい声でジャンが言った。

一樹も今は悲しむより魔法の練習で疲れきった体を休めるのがベストだと分かっていたのでジャンに従い寝室に向かった。

「お休みなさい」

「おやすみなさい」

一樹の声には覇気がなかった。

――……。

「一樹くんは輝くんの友達、なんだろう?…今さらだが、彼に輝くんのことを告げるのはまだ早かったのでは?」

ニーグがジャンに聞く。

「…そうね。早いかも知れないけど。でもいずれ知ることなら早い方がいいわ。それに一樹なら大丈夫よ、きっと」

ジャンは答えて手に持っている紅茶のカップを机のソーサーの上においた。

――……。

バタン。

一樹はジャンに与えられた部屋のドアを震える手で閉めた。

（輝が、死ぬ？）

「…くそ」

一樹は全ての始まりであるアクセサリー、赤の指輪を指から取って地面に叩きつけようと指輪を握った手を振り上げる。
が、寸前で力無くその握った手をおろした。

「…輝は、生きてる」

そうだ。
俺たちはどんな怪異に出会っても生き延びてきたじゃないか！
だったら俺は。

「探そう、輝を」

話によると輝も王都に向かっているらしい。
だったら俺も王都に行けば…！

「輝、死ぬなよ」

真っ暗な部屋の中で一樹は覚悟と共に小さく呟いた。

――……。

ウートの港には船に乗る人、見送る人などでたくさんの人が詰め掛けていた。
おかげで本当に早朝か？と疑うほど賑やかだ。

「よぉボウズ、船代は持ってるか？」

「ボウズって言うな！金はちゃんと持ってる」

空達は船乗りに船代を渡して、王都行きの大きな船に乗った。

辺りはまだ朝靄に包まれている。

この船は朝一の船なので時間が早い。

空達もこの船に乗るために早起きしたのだ。

「でっかい船だな」

「王都までかなりかかるらしいからね。客船みたいなもんでしょ」

「取り合えず客室に荷物を置きに行きましょうか」

速人の薦めで客室に向かう４人。

王都まではかなり距離があるので、寝泊まりするための客室が沢山あった。

船室の中は他の客で賑わっている。

「…えーと、２１３号室は？…あった！」

空の部屋は船の廊下の突き当たりの様だ。

その隣に、綾香、舞、速人の部屋が続く。

「じゃあ荷物置いたら甲板に行こうぜ！」

集合の約束をして空が部屋に入ると、６畳程の部屋にベッドと必要最低限の家具があった。

洗面所には備え付けのトイレや小さいが風呂もある。

かなり充実した部屋だ。これもジャン町長の配慮なのだろうか。

「さてと、早速甲板に行くかな！」

空は荷物を置くと町長の計らい（多分）に感謝しながら部屋を出た。

部屋の外の廊下はまだまだ乗客でごった返している。

空は人込みをかき分けて階段を登り、やっとのことで甲板にたどり着いた。

「はぁー。すげぇ人だったな！」

空は独り呟くとそのまま甲板を歩く。

甲板は約２０ｍといったところか、中々の広さだ。

今は甲板に人が全然いない。乗客は皆準備が忙しいのだろう。

空の他に少年が一人手すりに寄りかかっているだけだ。

空は甲板に既にいた、その手すりに寄りかかっている少年に話しかけることにした。空はこれから王都までの航海の間に、この船に乗っている大勢の乗客の中のからも情報を仕入れておきたい、と思っていたのだ。

「もう少しで出港だな」

空は手すりから海面を見ている短茶髪の少年に話しかけた。

「そうだ…ですね。どちらに向かわれるんですか？」

その短茶髪の少年は明らかに不慣れな敬語で答えてきた。

「敬語はいらないよ、あ、俺は狛江空、王都に行くんだ。よろしくな」

空は握手を求めながら挨拶と共に行き先を教えた。

「…！…俺は橋山一樹、俺も王都行きだ。…ていうか名前からするとお前は…日本人か！？」

一樹は空の握手に応じて少し期待に満ちた声で空に問い掛けた。

「ああ！そうだ！」

空も驚いている。

「そうか、ニーグさんが言ってたのって君達のことか…」

一樹は出港の前日、ジャンの家でニーグが話したことを思い出した。同時に輝の生存の確率が低い事も思い出した。

輝の情報を聞くには今しかない、と一樹が思った瞬間。

「おーい！空ー！」

と空を呼ぶ声がした。

空たちに駆け寄ってきた2人（綾香と舞）は一樹の方に向き直る。

「えっーと?」

綾香は誰?という顔をしている。

「あ、俺は橋山一樹、日本人だよ。ヨロシクな」

一樹は微笑みながら自己紹介をした。

そのあとに綾香と舞は各々驚きながらも自己紹介を返した。

「それより速人はどうしたんだ?」

「何か情報集めて来るって」

空の疑問に舞が答える。

一樹は速人、という言葉に反応する。

「速人って…。メガネかけてる奴か?」

「あ、ああ。そーだよ。…何で知ってるんだ?」

一樹は町長の家に下宿していたので、一昨日の夜に、仕事(護衛)の話で速人が町長の家に来てた事を話した。

「じゃあ速人とは一応知り合いなんだ?」

「んー。話しては無いし、見ただけだけどな」

ボォーーッ！

４人が話していると、すぐそこから鳴っているからだろう、とても大きな音で汽笛が鳴った。

そろそろ出港のようだ。

徐々に動き出す船、港では別れを惜しむものたちが集まり手を振っている。

一樹はその中に町長のジャンとニーグを見付けた。

一樹は叫ばずにいられなかった。

短い間だが自分を預かってくれたのだ。

魔法も、剣の使い方も教えてくれた。

「俺、頑張ってもといたトコに帰るよ！今までありがとう！」

一樹の発した言葉は単純だが素直で大きな感謝が込められていた。

――……。

出港してから約１時間。

情報収集も終わった速人も甲板にいる空たちと合流して今後のことについて話し合っていた。

「やっぱり問題はラルガ将軍だな」

空は唸る。

天候は良好。航海日和だ。その眩しい日差しと海風がが空の髪をなびかせている。

「話によるとラルガは魔法だけではなく、その武勇でも国中にしれわたっているそうです。下手な小隊だったら一人でその上一瞬で片付けてしまうそうですよ」

速人は聞き込みで得た情報を言った。

「小隊を一人でって…。ホントに倒せるのかな？」

舞はそんなラルガの武勇伝に少し脅えている。

「あのさぁ」

一樹はふと、声を上げた。

「皆ってアクセサリーの力はどのくらい使えるの？」

一樹を除く４人が顔を見合わせる。
お互いに苦い顔をしている。
そこまでマトモには使えない。
苦い顔はそう訴えていた。

「一応少しは…」

と空が自信なさげに言った。

それもそのはず。空たちが最後に魔法を使ったのは隠し通路でラルガの部下を足止めして、倒すために使ったのが最後だからだ。

あれからもう二日もたっている。

「…そうだと思った、だから俺が魔法教えるよ」

一樹はジャンに、他のアクセサリーを持ってる人がほとんど魔法を使えないことを教えてもらっていたのだ。

「ホントか!?それは助かる!」

「ああ。これから次の停留港に着くまでミッチリ鍛えてやんよ!」

一樹は得意そうな顔をして頷く。

船が王都に着くまでまだまだかかる旅のはじまり。

潮風が5人を撫でた。

代償と出逢い

「バレずにすんだかな？」

呟いて俺はシュヘルという町の門を振り返る。門には若い警備兵がいたが、適当に嘘の言い訳を並べたてたら通してくれた。

甘い警備だ。

お陰で俺はシュヘルの町長やソラたちに見つからずに町を出ることが出来た。

俺は町を振り返るのを止めて街道を歩き始める。

「……街道沿いに逃げたら追いかけられて捕まっちゃうかもな……」

ふとそう思った俺は立ち止まってスクバから地図を取り出した。ソラたちの荷物から頂いたモノだ。他にパンやお金を拝借させて貰った。

彼らには恨まれそうだがこの異世界で袂を別れてまた再会できるとは思わない。

……もう、会えない。か。

自業自得なだけに悲しくなる。

ため息をひとつ吐いた俺は気をとりなして地図を広げた。

地図によると、今歩いている街道の左側に繁っている森の中を通って行けば『フォル』という町につくらしい。

うん。お金はあるんだ。

この『フォル』っていう町で王都まで行くための装備を整えよう。

よく見ると、鬱蒼と生えている木々の中に一本の獣道が続いている。

この道を歩み始めたらもうソラたちとはお別れだ。

だけどどうせ。

「もう戻れないんだ……！」

俺は獣道を踏みしめるように一歩進む。

俺のやり方を貫いてやる！

小さく決意をして俺は森を先へ先へと歩いていった。

――……。

しばらく森を進む。明るかった森の入口とは打って変わって、もう昼過ぎだというのにあたりは薄暗い。

「……腹、減った」

そういえば昼飯を食っていない。

俺は一息着いてバックの中をあさる。そしてバックの中から固いパ

ンを出して食べた。
唾液で少しずつ溶かしながら飲み込んでいく。
腹が減ったら何でも旨いというのは本当みたいだ。
俺は食べながら地図を出して見てみた。
「歩き始めてから一時間か」
まだ遠そうだ。
口の中をペットボトルに詰めた水で流す。
「野宿はゴメンだな。急ごう」
俺が荷物をまとめてまた進み始めた。
その時だった。
ガサッ！
「！？」
近くの草むらから妙な音。俺は思わず身構える。
「……動物でも、居んのか？」
平常心を装った言葉とは裏腹に、俺は動物以外の可能性を考えていた。
確か、サウルの村長は野盗が出るって言っていた。

「まさか、な。……でも」

この草むらに隠れているのが野盗だと思うと恐怖で胃がすくむ。

すると。

ガサッ、とまた音を出して突然草むらから栗色の毛をした一匹の動物が現れた。

その動物は膝の高さ位の大きさの鼠のような動物で、まぁ見ようによってはかわいいかも知れない。

「でかっ！……ビビらせやがって……」

飛び出してきたのが動物だとわかって俺はため息と共に少し力を抜いた。

その瞬間。

「キシャーーー！」

その動物がその鼠のようなかわいい容貌とは似つかわしくないグロテスクな程長い牙を剥き出しにして威嚇してきた。

「うわぁ！？」

ビックリして一気に二メートル程後ずさる。

俺は身に危険を感じて、穂先の布をとると槍を構えた。

さっきから牙を剥き出しにしているその獣はスゴい勢いで突進してくる。

「うわあぁあぁ！」

ブォン！

振るった槍が奇跡的にその獣に当たった。
刃の部分ではなく柄の部分に当たったようで、獣は少しも血を流してはいない。だが、それでもその獣を地面に叩きつけるには十分な衝撃だったみたいだ。

獣は倒れながらもゆっくりと立ち上がる。また突進してくるつもりかも知れない。
なら、トドメをさすのも今しかない！

「く、らえ！」

その獣が体勢を立て直す前に槍で貫く。

「キシャー！」

その獣の断末魔が薄暗い森に響いた。手には肉を貫いたイヤな感触が残る。

「……結構上手く槍使えたな」

呟きながら獣に刺さった槍を抜いた。獣の血が滴る。鉄臭い。

「もはや魔物だろ……」

槍の穂先に付いた血を近くの樹になすりつけて、再び布を巻こうと

白い布に手をかけた。

だがその瞬間。

草むらからまたガサッ！という何かの動く音。

音がした方を警戒しながら身構える。

「もう一体居るのか？」

ガサッガサッガサッ！

「一体じゃ、無い！？」

再び槍を構えた。

四方からガサガサと音がする。

息をすませ、耳をすませる。相手の出方を伺う。

「キシャー！」

「！」

後ろか！

とっさに振り返った。

「キシャー！」

いや、違う！

四方の草むらからあの獣が牙を剥き出しにして出てくる。

「マジかよ……」

俺はその牙を生やした獣に完全に囲まれていた。
周りには俺に狙いを定める何匹もの獣たち。
今、俺には背中合わせで戦う仲間も、カバーしあえる仲間も居ない。
逃げてきた代償がここに来て回ってきた。

「……やってやる！独りでも生き残って見せる！」

叫えた俺は手始めに目の前のモンスターを槍で突き刺した。

――……。

「はあっ！はっ！…っ！」

俺の顔面を長い牙で貫かんと跳躍する化けネズミ。
俺はそれを槍を振るって叩き落とす。

どちゃっ！と鈍い音を立てて地面に伏せる獣を俺は思い切り蹴飛ばした。

「まだいんのかよ……！」

周りには牙を剥き出しにした鼠の様な怪物の死体が大量に倒れている。

一匹目を貫いてから気が狂うほどの時間戦い続けて倒した。

「キシャーッ！」

「……！」

何度目かもわからない怪物の突進。獣の牙が鋭く光る。
俺はその右から飛び付いてきた怪物に向けて右手をかざした。

「退けぇ！」

叫び、意識を集中する。
俺の右手には銀色の風が集まっていき、小さな竜巻の様になる。その竜巻を怪物に向けて放つと、空気が更に集まっていき、銀色の刃と化した。

右手から放たれた風の刃はその怪物を捉えると、その体を切り刻みながら遠くへ運んでゆく。

風の魔法。
甲冑龍には全く効かなかった力が今は俺を助けていた。
初めて魔法を使ったときは体力をかなりがっつり持っていかれた。
だが俺の体が魔法に慣れたのか、今はそれほど疲れない。

とはいえ、こう長い間使っていると疲労は蓄積してくる。

「キシャーッ！」

「次は左か！」

咄嗟に左を振り返った。さっき右から来たのとタイミングをずらす

ように左から飛んで来る。俺は左手で持っている槍に右手を添えて打ち付けるように払い除けた。

「うらぁっ！」

払い除けられて吹っ飛ぶ化けネズミ。手応えからするともう息はない。

俺は槍を構え直し辺りを見回す。

残り５匹。

５匹は各々間合いをはかって威嚇をしてきた。

「ネズミなんかに殺されちゃ笑えねぇ、よ」

己を鼓舞する。

不敵に笑ってはいるが俺は正直笑える状況ではなかった。

「……ッ！」

足と背中に痛みが走る。

右のふくらはぎと背中を化けネズミの牙に傷つけられた。その傷からは今も血が流れ出しているのがわかる。

でも怯んではいられない。

「だらぁ！」

狙いを定めて突きだした槍に目の前の化けネズミが貫かれる。
同時に視界がぼやけた。
「クソ……！」
目が霞むのは血を流しすぎたからか。
……だとしたら時間がない。
俺は既に屍となった化けネズミから槍を引き抜き更に攻撃にでる。
呼吸を溜めて槍を全力で振り抜いた。
「うらあっ！」
振るわれた槍が弧を描いて残りの４匹の化けネズミを狙う。
だが、満身創痍の俺が扱う槍は４匹を完全には捉えられなかった。
クソ、２匹逃がした。
「うおぉ、後二匹！」
振り抜いた槍を片手で持ち、もう片方の手を逃げた化けネズミの片方に向ける。
狙いを定めて、集中。「死ねぇ！」
鋭い風の刃がそのネズミを捉えた。

「キシャーッ！」

聞きあきた断末魔。

俺はもう片方を勢い良く振り返る。

「これで」

もう一度渾身の力を込めて槍を振るった。

「終わりだっ！！」

だが俺の耳が捉えたのは化けネズミを打ち付ける音ではなく、空気を切る音だった。

ち、外した！

槍をかわした化けネズミは、その素早さを駆使して空振りして隙だらけの俺に襲いかかる。

「キシャーッ！」

瞬間、腹に激痛。

「ぐっ！グァァッ！」

痛みを訴える脇腹を見ると、モンスターが牙を食い込ませている。

痛っ、てえ！

「っそお！」

ズブッ！

槍を震える手で扱って、脇腹に牙を食い込ませている最後の一匹に止めを刺す。

「う……」

俺は手に持つ槍を地面に落として、怪物の牙を掴み、引き抜く。
ズルズルと嫌な感触と同時に脇腹から血が吹き出した。

「――っ！」

シュヘルの町を去る時にパクってきたタオルを血の止まらない傷口に当てる。だがタオルはすぐに真っ赤に染まっていく。

「集……中……」

俺は片手で胸元のペンダントを強く握って力を込めた。
血が止まるイメージ。
傷が癒えるイメージ。

強く目を閉じイメージすると脇腹の痛みが少しずつ引いてきた。恐る恐る目を開くと、淡い銀色の光がペンダントから出て傷口を優しくおおっている。
俺は徐々に魔法の使い方に慣れてきたみたいだ。
強いイメージさえできれば、ある程度はペンダントが応えてくれる。

今使えるのは、風を操って相手に当てる『風の刃』。かすり傷の治療や止血などの『初期治療』。重い槍を長時間振り回して戦う為の

『身体能力の底上げ』。

正直、この三つの能力がなかったらあのネズミのモンスターに殺られていた。

強く握られたペンダントからこぼれ出す銀色の光が傷を癒し、徐々に小さくなる。

赤いタオルを脇腹から話すと、傷口はグズグズだが血は止まっていた。

「何とか止血は出来たな……」

背中と右足の傷も完全ではないが血は止めた。

これなら出血多量で死ぬことは無いだろう。

「ってぇ…！」

痛みが走る。傷口を見ると、その傷口はまだ血が滲んでいた。

やっぱりあくまで初期治療。

早く街に着かないと命が危ないことに代わりはないのかもしれない。

でも。

「……でも、俺は生きてる…」

言葉にした瞬間、何とも言えない喜びが沸き上がった。

そう、俺は戦いに勝ったんだ。

これなら一人でも……。

俺は槍を杖にして立ち上がった。魔法を使いすぎたせいでフラフラする。
やっとの思いで槍の穂先に布を巻き付ける。すると刃に付いた血を拭き取らずに巻いたせいで布は鼠の怪物の血で所々赤く染まった。

「町までもう少しだ。頑張れ！」

俺はバックを持つと自分を励まして、ふらつく足で再び一人の道を歩き始めた。

――……。

それから数時間。
傷ついた体を引きずって森の中を進むと、目の前が急に開けた。
広い道。その脇にはポツポツと民家が建っている。

「つ、いた……」

俺は誰に言うわけでもなくこぼした。

「ここがフォルか……」

俺は一種の感動を持って、眼前に広がる町の名前を呟く。
安堵と喜びがわき出てくる。

同時に、足の力が抜けてひざまづいた。

「力、はいんねぇや」

アクセサリーの魔法を使いまくったんだ、体力的にかなりキてるのが自分でもわかる。

「マズいな、せめて医者を探さないと」

脇腹の傷を完治させる魔法を使うだけの体力はない。

俺は槍を杖にもう一度立ち上がる。

夜明けの陽光が俺の血まみれの姿を照らす。

「はぁ、はぁ」

視界がハッキリしない。

頭もボーッとしてきた。

槍を杖のように使って町へと道を歩いていく。すると早朝にも関わらず道を向こうから歩いて来る人が見えた。

その人は俺の姿を見ると、血相を変えて駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか?酷い怪我ですよ!早く治療しないと!」

かすれた目で声をかけて来た人を見る。

声をかけてきたのは利発そうな背の高い青年だった。

「…この町の、病院は何処ですか?」

疲労で動きづらい喉を震わせて訪ねた。

「すぐそこです、僕が案内します!早く病院に行きましょう!」

――……。

「これで処置は完了です。後は薬と栄養のあるものを沢山食べてくれればすぐ治りますよ」

あの後俺は青年に連れられて、病院の診察室にいた。

「助かりました。あなたは医者だったんですね」

包帯で巻かれた脇腹をさする。薬のお陰で落ち着いていて、ほとんど痛みを感じない。

「そうだよ、僕はこの病院の医者だ。それより――」

その青年は穏やかな顔付き、しかし厳しい声で、

「――君はあの森を突っ切ってきたんだろう？それも一人で」

そう言って医者の青年は俺の脇腹の傷を見る。

「この傷は森にいる『ライツ』というモンスターの牙によってできる独特の傷だからね。……何でこんな無茶をしたんだ？普通なら死んでるぞ」

青年の責めるような目付きに俺は目を伏せた。

「いや……。あの森があんなに危険だったとは知らなくて」

「それにしても君みたいな歳で一人旅かい？仲間はいなかったのか？」

青年は更に鋭く追求してくる。
自分の表情が渋いモノになってくのを感じて顔を伏せたまま俺は、

「仲間はいません」

とハッキリ言いきった。

そうだ。
俺は仲間外れなんだ。

ふと頭を上げると、医者の青年は、少し後悔の表情になっていて、
追求の言葉をとめてくれた。

「……済まなかったね。深入りすべきじゃなかったみたいだ。僕の悪いクセでね。お節介だってわかってるんだけど」

「いや、大丈夫です。心配してくれてありがとうございます」

頭を下げる。と、目の前の青年は大袈裟に椅子から立ち上がった。

「……よし！嫌な思いをさせたお詫びに町を案内するよ！まだ来たばっかりで何も知らないだろう？」

「でも、えーと」

「僕の名前はイースだよ」

「あ、ども。俺は輝です。……じゃなくて、イースさんは仕事いいんですか？」

俺の問いかけに今度はイースさんの笑顔に陰りが入る。

「大丈夫。ウチあんま患者さん来ないからさ」

――……。

そして俺はイースさんに連れられてとある建物の前にいた。
建物は石造りの三階建て。建物の前には馬車や荷馬がつながれている。そしてでかでかと掲げられた『商』の文字。
あきない……？

「ここは一体……？」

「ま、ついてくればわかるよ」

イースさんの言うままついてその建物に入ると、中から一気に話し声や人が動く音が聞こえてきた。

「……！これってお店？」

この世界にもこんなに人いるんだ。

店内は活気づいた賑わいでガヤガヤとすごく騒がしい、昔行った朝市を思い出す。

「そう！色々あるだろ？ここは最近できた店なんだけどね！各地の行商人が集まって品を売っているんだ！珍しいものもあるよ！」

少し自慢げなイースさんは賑わいに負けないよう声を張って言った。

「へえ……」

スーパーとかコンビニとは違う。それぞれの商人が場所を借りて自由に商売をしている。

今で言うテナントに近いモノだろうか？

「そうだ！イースさん、俺見たいものあるんだけど！」

俺も声を張り上げた。

イースさんは大きく頷いた。

「だろうね！旅をするには荷物が少なすぎる！」

そう言って俺が抱えているスクールバッグを指さす。

俺は苦笑いを返した。

金とか地図とかは盗って来たけど、野宿の道具とかは流石に取れなかったからな。

「何処から見る？今日は暇だから付き合ってあげるよ！」

「ありがとうございます！じゃあまずは食料品と、旅に必要な道具を……」

――……。

日も暮れた時間帯になって、俺はイースさんに案内されて町の外れ

に来ていた。

「沢山買ったね」

イースさんは俺のバックのパンパンさをみて苦笑いをする。
スクバはモノが入らないから珍しがった商人に売った。おかげで財布の中も見知らぬ通貨でパンパンになった。

「助かりました、お陰で野宿も簡単に出来そうです」
お店の喧騒に負けないように長時間大声を出していたせいで俺の声はがらがらになっている。

「ホントお世話になりました。ではそろそろ行きます」

「そうか……。一晩ぐらいだったらウチに泊まっても良いんだよ？」

イースさんが提案した。
確かに夜は街道沿いでもそれなりに危険だし、止まらさせて貰った方が良いのかも知れない。

でも……。

「町の案内までしてもらってこれ以上迷惑かけらんないですよ。それになるべく急いで行こうかなって思ってるんです」

俺はイースさんの提案を断る。イースさんも「そうか。残念だな」とだけ呟いてそれ以上は言わない。
沈黙が流れかけたその時にふと、思い付いたようにイースさんが顔を上げた。

「そういえば君はどこに行くんだい？」

「王都のバルクです」

「そうか、長い旅だね」

俺は頷いて、先程買ったモノでパンパンのバックを持ち上げて肩にかける。

「お世話になりました」

「気を付けて」

イースさんが微笑みかけてくる。

俺はイースさんにもう一度頭を下げると町とイースさんに背を向けて街道を一人歩き始めた。

――……。

昇ってきた日が地上の木々にさしこむ。木々の葉を通った光は優しい緑色になり、やんわりとまぶたを透過する。

「んー……」

俺は街道を少し外れた場所で目を冷ました。

フォルの町で買った寝袋から、のそのそとはい出す。

「……っ、やっぱり地面は堅いな。寝違えちまった」

痛めた首を擦って大きく伸びをする。

今俺は、フォルの町を出てその先にある『大河川』を渡るための『フォリア橋』を目指して旅を続けていた。

寝袋をしまい、簡単な朝食を取り終わる。そして無意識のうちにふと空たちの事を思い出した。

どうしてんのかな、あいつら……。
空は今も真っ直ぐ熱血なのだろうか？
綾香は今も元気に跳ね回ってるのだろうか？
速人は今も瓢々と毒舌を吐いているのだろうか？
舞は今も……。

……もう止めよう。

彼等の事を思い出したと同時に、一人でみじめに旅を続けている自分という現実を見つめる。

あの時、空について行けばこんなみじめな思いもしなかったのかな……。

鼻の奥がツンとして、回想を止めた。

「あそこは俺の居場所じゃないんだ。きっと」

自分に言い聞かせるように首を振る。

荷物をまとめ終わった俺は街道に戻ってフォリア橋へと歩みを進めた。

――……。

しばらく歩くと街道の周りを生い茂っていた草や樹が開けて、大きな川が見えてきた。

俺は地図を取り出して見る。

地図によるとこの大きな川は、『大河川』という名前らしい。うん、名前もクソもないな。

だけど確かに名前の通り、川の幅だけでもかなりのモノだ。2、3キロはあるかも知れない。

「……つか、アレ？橋がないな」

地図にはしっかりと『フォリア橋』が描いてあるのにな。

俺は不安になりながらもあたりを見回す。すると、橋があった。

……いや、違う。

「橋作り直してんのかよ……」

作りかけの橋の周りに大工や何故か兵士達がいて、橋を作り直している。

新しい橋の長さは川の半分を越えたぐらいで、まだかかりそうだ。

「これじゃ橋わたれねえじゃん……」

取り敢えず詳しい人に話を聞かないと。

俺は工事現場に近づいていく。大量の木材が加工されてたりするなかで、その作業を指揮している男がいた。

あの人に聞いてみるか。

男は黒い鎧を纏っていて、腰には日本刀らしき剣を帯びている。軍人独特というか、とにかく威圧感が他の大工や兵士とは比べものにならない。

若干怖いが、俺は尋ねてみた。

「すみません、フォリア橋はどうしたのでしょうか？」

自分でも変な弱々しい声がでた。怖い。

鎧の男は俺の声に気づいて顔を向けてきた。そして口を開く。

「フォリア橋は先日反乱軍によって壊されたのだ。……橋を渡りたいのか？」

「はい、どのくらいでなおりますか？」

すると鎧の男は少し考える素振りを見せながら答えた。

「今現在全行程の2／3まで終わっている、この調子で行けば明日の朝には直るだろう」

「そうですか……。分かりました」

参ったな。

顔をしかめる。時刻はまだ昼前。することがなくなってしまった。

考えていると、鎧の男は俺の担いでいる武器を見てきた。

「槍を、使うのか？」

「へ？はい、一応槍使ってます。ある程度は使いこなせますよ」

生きるために必死だったからな。

俺の答えをきいた男は、ふむ、と腕を組む。

「ならばどうだ？明日まで暇なら我が隊の練兵場に行ってみないか？」

突然の提案だった。

練兵場？

兵士が訓練してるのか……。

脇腹を押さえる。

この世界にはライツや甲冑龍のように凶暴なモンスターがいる。それだけじゃない。戦争だって始まるかも知れないんだ。

生き延びるためには、少しでも力が必要だ……！

「……はい！是非！」

俺は鎧の男に大きくうなずいた。

――……。

『大河川』を渡るための橋を造る工事。そこから少ししたところに鎧の男が言っていた練兵場があった。

俺の通っている高校の校庭ほどの広さの広場と、広場の隣に仮設の住宅が何棟か建っている。

恐らく兵士や大工達の仮設寮だろう。

練兵場の入り口まで来ると、入り口で衛兵が声をかけてきた。

「誰だ？一般人は入れないぞ！」

「えーと、工事現場で指揮を執っている黒い鎧の人から紹介されました！」

そう伝えると、衛兵は若干呆れた顔で「またか……」と言って通してくれた。

「またか……。って、こういうことよくあるんですか？」

俺は槍を担ぎ直しながら聞いてみる。

「あ？ああ、まぁな。あの将軍は武器持ってる奴片っ端からここに誘って訓練に混ぜんだよ。……んで最終的に自分の軍隊に入れる」

「へぇ。……でも俺そんなに強くありませんよ？」

槍を使い始めたのだって最近だし。当然だ。

「構わねぇさ。まぁ精々軍隊に無理矢理入れられない様にするんだな！」

衛兵は笑いながら背中を、バシッ、と叩いてきた。

「痛って！」

「まぁ頑張れよ！」

――……。

それなりの広さの広場。

その中心で２０人ほどの兵士が各々の武器を握り訓練をしていた。

皆、洗練された動きをしている。

「……すげ」

思わず口をついて言葉が出てきた。

ボーッと訓練の様子を見ていると、槍を扱っていた一人の兵士がこっちに気がついた。

「おい！客が来たぞ！」

兵士が皆に呼び掛ける。

その声に反応して他の兵士もこっちを見てきた。

事情を説明しないと。

「えっ、と。工事現場の指揮を……」

「ああ、全部言わなくても分かるって」

俺の言葉を遮って、最初に俺に気付いた兵士が駆け寄ってきた。
近付いて来てわかったのだが、彼はとても背が高かった。部隊の鎧に身を包み、その手には槍を持っている。
「取り敢えず自己紹介だな。俺はラーズだ。宜しく！」
「お、おう。俺の名前は輝だ。よろしく」
ラーズが握手を求めてきたので俺も握手に応えながら自己紹介を返した。
――……。
練兵場の中心。
十数人の人に囲まれて、俺とラーズは槍を構えていた。
「じゃあ早速腕前を拝見しようかな！」
ラーズは槍を俺に向けてくる。
一通り体を動かした後、ラーズの提案で俺の実力を見ることになった。
「……。お手柔らかにお願いしますよ……」
心臓が早鐘だ。腹の奥が渦巻くような嫌な気分。
そういえば対人戦なんて初めてだ。今まで武道もやったコトはない。

一対一の威圧感は半端じゃない。

だけど目の前で構えているラーズは今までもこの様な型式で戦った経験があるのか、かなり落ち着いている。

兵士であるラーズに対していうのはアレだが、なんというか、槍を構える姿が様だ。

緊張が張りつめる中、一人の兵士が前に出てくると、手を大きく振った。

「始めっ！」

スタートの合図だ。

「もらったぁ！」

「……ぐっ」

スタートと同時にラーズが踏み込みながら槍をつき出してくる。

俺はそれをギリギリで弾いた。

……反撃しなきゃ。

「らっ！」

弾いた流れで槍を振り下ろしラーズを切りつける。が、易々と避けられてしまった。

俺はめげずにもう一度穂先で袈裟に斬る。ラーズは当たり前のように一歩下がる。俺の斬撃はラーズの体に届かない。

若干の隙が出来た俺の右肩にラーズの槍が迫る。俺はまたかろうじてその槍を弾いた。

斬る。避ける。
突く。はじく。

その度に周りの兵士達は盛り上がる。

またラーズの槍が迫ってきた。

「……うっぐ！」
体をひねって避ける。愛用のパーカーの裾をかすってきた。
さらに襲い来るラーズの追撃を食らいそうになながらも慌てて退いて距離を置いた。

「くそっ！」

守るので精一杯だ。

しばしば反撃を織り混ぜても、相手に攻撃が全く届いていない。

なんでだ？
何でコイツの攻撃は俺に届いて俺の攻撃は届かないんだ？

「客人！このままだと負けるぞー！」

外野から励ます声がする。

外野には俺とラーズの動きの違いが分かっているんだろうか？
そうかも知れない。

余裕は無いけどラーズの動きを良く見てみよう。

「っだぁ！」

開いた距離を詰めてラーズが攻撃を仕掛けてくる。

……見極める！

槍、振りかぶる幅は小さい。

「っぶねぇ！」

しゃがんで避ける。

すぐにラーズはまた槍を小さく振りかぶった。

「……！」

しゃがんだ俺の目はラーズの足元をとらえた。

強い踏み込み！

これだ俺に足りないのは！

「ぐっ」

俺は横に転がりながらラーズの攻撃を避ける。そして素早く立ち上がり、もう一度距離をとった。

緊張した俺の頭がフル回転する。

俺は反撃を恐れるあまり、最小限の踏み込みで的を捉えようとしていた。

けどそれだと防御には有利でも、攻撃では相手に避ける余裕と反撃の余裕を与えてしまう。

構え直す。
ラーズと視線が会う。

瞬間、今度は俺から攻撃を仕掛けた。

ここだ！
ここで強く踏み込む！

が、足が強く動かない。

……怖い。

踏み込むということはより相手に近づくということだ。

「……く！」

俺はまた踏み込めずに浅い斬撃を繰り出した。ラーズには勿論のごとく避けられる。
俺は槍をすぐさま引いて、ラーズの反撃に備えた。
すると、対峙するラーズの表情が緩んだ。

「逃げるだけか？」

「……！」

バカに、しやがって！

俺は引いていた槍をラーズに向けた。

小さい振りかぶり。

次は、足の踏み込みだ！

だが足が動かない。

「くそぉ……！」

まだ怖いのかよ俺！

もう惨めな思いはしないんだろっ！

脳裏に様々な記憶が蘇る。

鎧の様な甲殻に阻まれ、力尽きるまで風の刃を放っても甲冑龍にかなわなかったこと。

そんな甲冑龍をいとも容易く追い払った空。

空を選んで離れていく４人の姿。

大量のライツに囲まれて一人で死にかけながらも戦ったこと。

胸が、熱くなる。

動けよ！

踏み込めよ！

俺の足！

力強く動き出す。強く深くラーズに向けて踏み込んだ俺の足はそのまま体を前へ前へと力強く運ぶ。

「う、おおおぉっ！」

槍を強く振り抜いた。
外したら確実に反撃を食らう背水の陣。

「……っ！」

俺の渾身の一撃とかち合ったラーズの槍は遠くに吹き飛んだ。

俺は驚いているラーズの喉元に素早く槍をつきつける。

「……勝った！俺の、勝ちだ！」

喜びが溢れてきた瞬間、今まで息を飲んで見守っていた外野が盛り上がった。

手を差し出すとラーズは力強く握ってきた。

「……やられたよ。完敗だ」

ラーズは手を借りて立ち上がりながら言った。

「最後の踏み込み良かったぜ客人！」

横から外野で見ていた兵士が俺の肩を叩きながら話しかけてくる。

「どうだ？うちの部隊に入隊しないか！？お前さんまだまだ未熟だけど素質あるぜ？」
今度は後ろからだ。
振り返ると、先程入り口にいた衛兵だった。
気になって見に来てくれたのだろうか。

「すいません。俺はすることがあるから……」

「そうか、残念だな。まぁオジサンは入隊をいつでも待ってるぜ！」

そう言ってその衛兵も肩を叩いた。

――……。

影が長くなる頃。

俺は訓練で疲れきった体で練兵場の入り口にいた。

「……来て、よかった」

身体中に今も残る戦いの感覚が俺に自身の成長を訴えてるようだ。

「……ありがとうございました」

小さく呟くようにお礼を言って練兵場を出て行こうとすると後ろから呼び止められた。

「オイ！」

ラーズの声だ。

振り返るとラーズは鎧を脱いだ私服姿で立っていた。もう訓練は終わったのだろうか。

「輝！またお前と戦える日を楽しみにしてるからな！名前は、覚え

とくぜ！」

そういうとラーズは拳を握ってこっちに向かってにつき出してくる。

「あぁ！」

俺も同じく拳をつき出す。

再戦。次も全力で戦いたい。

「また、戦おう！」

そう言って俺は後ろを向き、また歩き出す。

拳が少し、重くなった気がした。

――……。

空を闇の帳が覆うなか、俺は完成した橋の近くで焚き火を焚いている。

寮に泊まるように誘われはしたものの、流石にそこまでお世話になるわけにもいかない。だから今日も川辺で野宿だ。

「疲れたな。……もう寝るか」

そろそろ寝ようかとしたとき、完成したばかりの橋に誰かがいるのが見えた。

目を凝らすと、それは昼に会った鎧の男だった。

……そういえば名前聞いてなかったな。練兵場使わせて貰ったし、お礼も言わないと。

俺は新品の長い橋の入り口近くで夜風をあびている男に近付いていく。

男は昼に着ていた黒い鎧を今は脱いでいた。

「我が隊の兵は手強かっただろう？」

声を掛ける前に声を掛けられた。

「はい、全然敵いませんでしたよ」

少しびっくりしつつも俺は答える。肩をすくめていると彼は不敵に笑う。

「大活躍だと聞いたのだがな」

「いや、それほどでも」

褒められてつい顔がニヤける。

つい数時間前には自分がこの人に怯えていたのが嘘のようだ。

きっと練兵場での戦いが自信をくれたんだ。

「……そういえば名前、聞いてませんでしたよね？あ、僕は久喜輝です」

「私はラルガだ。この国では将軍職に就いている」

ラルガさんはそう言って手を差し出してきた。俺もそれに応えてお互いに握手をする。

……ん？

ラルガさんの手に指輪が嵌っている。
何だろう？この指輪、見覚えがある様な……？

指輪をじっと見ていると、ラルガさんが「どうした？」と声をかけてきた。

「いや、何でもないです」
笑って誤魔化す。
そうか、と言ってラルガが口を開く。

「私も明日が早い。そろそろ休ませてもらおう」

「そうですか、ではお休みなさい、ラルガさん」

ラルガさんはゆったりと歩いて去っていった。

俺はラルガさんの去った橋で彼のはめていた指輪について考えていた。

何処かで見たと思ったんだけどな……？

そう何処かで。
この世界のモノに心当たりを持つなんて不思議だ。

「……まぁ良いか。疲れたしもう寝よう」

疑問は解けないまま、俺は考えるのを諦めて寝袋に潜り込んだ。

覚悟

翌日。

軍営を片付ける作業があるラルガさんとその部下達は出発に時間がかかるという事なので、俺はお先に完成したばかりの橋を渡る事にした。

木製。所々鉄を使ってあり、しっかりと固定されている。

なんというか、良い仕事してるな。

バックと槍を担ぎ歩き始めた。橋の終わりはかなり遠い。橋も河も、無茶苦茶な大きさだ。

「長いなー」

俺は一人呟いてから、思い立って橋の欄干から身を乗り出す。

「はっや……」

下を流れる河の流れ。こんなに大規模な河なのに激流のような速さだ。

「すげぇな」

この一言に尽きる。

それでも歩いていると橋の終わりが見えてきた。と同時に俺は最後の数十mを走って駆け抜ける。

「うお……」

長い橋を渡りきるとと目の前には一面に広がる草原。緑。静かな風。

視界を遮るものは、所々申し訳程度に生えている木々だけだ。

「これは……」

綺麗だ。

こんな景色初めて見た。

風が吹く度に波打つ草はまるで海のよう。

晴れ渡る空も心地よい。

心が、洗われる。

俺は目一杯深呼吸してから街道を歩き出した。草の匂いが肺に広がって行く。

少しだけ、俺にも旅を楽しむ余裕が出来ていた。

――……。

しばらく歩く。

もう振り返っても橋は見えない。確かに進んでいることに満足した俺はまた前を見た。

「……ん？」

疑問が口をつく。

俺は街道の先の方の上空に怪しげな飛行物体を見つけた。

何だろ、あれ？

逆光のせいでよく見えない。

俺はさらに目を凝らす。

そいつはどうやら羽ばたきながらゆっくり地面に体を降ろしていっているようだ。

羽ばたいてるし、鳥か？

いや……何かがおかしい。

少し、近づいてみよう。

俺は慎重にその羽ばたいている何かと距離を詰める。

「……！」

何がおかしいかは近付くにつれてわかった。

縮尺がおかしい。

鳥にしては大きすぎる。

３ｍもあるような大きさの黒い影。絶対普通の鳥なんかじゃ無い！

無意識にネズミの化け物『ライツ』を連想してしまった。

「やっぱり、この世界は危険だ」

俺はまたも小さな呟きを漏らし、素早く辺りを見回した。

どっか、隠れるところ無いか……？

だが一面の草原には隠れられそうな所は一ヶ所も存在しない。

そうこうしているうちに、その巨大な鳥が地面に舞い降りてきた。

「……うそだ」

巨大な鳥と言ったが、訂正しよう。

ヤツが羽ばたきながら地面に近づくにつれてその正体がわかってきた。

鳥のような大きく逞しい翼。爬虫類のように長い尻尾に業火のように紅い鱗。

大きく開いた口からは鋭く輝く白い牙がはみだす。

「やっぱりこの世界は危険だ！」

鳥なんてかわいいもんじゃない！

アレは神話や伝説、更には小説やマンガにも出てくる、超有名なモンスター。

ドラゴンだ……！

そのドラゴンは欠伸をしながら小さく火を吐き、地面にゆっくりと

その四本の逞しい足を預ける。

「流石にマズいって」

俺はしゃがんだ状態のまま少しずつ後ずさりを始めた。

ネズミの化け物で死にかけた位の俺じゃ、あんなドラゴンと戦ったら瞬殺だろ！

だが、気配を消し、音を立てないように逃げようとしたその時。

金属特有の高い音がした。

音の元を見ると、俺の長い槍の柄が地面に勢いよくぶつかっている。

顔を上げると、ドラゴンは音のした方。……つまり、俺を睨み付けていた。

「グオオォォ！！」

そして翼を再度広げ、ヤツは羽ばたきながら突進してきた！

「うっわぁ！」

俺は必死の思いで横に飛び、ドラゴンの突進を避ける。

速い！

これじゃ逃げられない！

俺は即座に立ち上がり、体を軽くするためにバックをそこら辺に投

げた。

「やるしか、ないか」

声が情けなく震える。足なんかもっと震えている。

だけど俺は、槍を構えた。

ライツに勝った。
ラーズに勝った。
自信を持てよ俺。

「大丈夫。倒せる」

もう一度。
今度は声が震えない。

突進が空振り崩した体勢を直したドラゴンが俺を睨む。ここに来て初めて俺はドラゴンとしっかり対峙した。

目測だが、ドラゴンは俺のもつ槍二本分、約四メートルの大きさ。マンガやゲームとは違って、思ったより小さい。

まめだらけの手で槍を、ギュッ、と強く握る。

ドラゴンはこちらをなおも睨んでいた。そして顎を大きく開け、羽を広げる。

「ガァァァー！」

俺は息を飲んだ。

小さいと思っていたはずのドラゴンは、羽を広げると驚異的な大きさ。

迫力にそのまま硬直しそうになったが、ドラゴンが前足をこっちに叩きつけて攻撃しようとするのを見て、また横に飛び退いた。

「…っぶね」

体勢を立て直し、槍を構えなおす。

ドラゴンの前足に鋭い爪があった。触れただけでも肉を削ぎ落とされそうだ。

俺は少し後ろに下がり、距離を一定にとって睨み合いを続ける。

「……ちっ！」

相手の出方をうかがっても仕方ない！

今度は俺から動いた。

右手で槍を持ち、空いている左手をドラゴンに向けて風の刃をうちだす。と同時にドラゴンに向かって走った。

風の刃はいとも簡単に前足で弾かれてしまう。

だが、前足が上がった隙に上手く懐まで入った俺は槍を強くドラゴンの白い腹部につきだした。

「っらあ！」

槍は何とか刺さったものの、傷が浅い。堅すぎて槍の刃が進まない。

「くそ」

全然刺さんねぇ！

俺は急いで槍を引き抜き、また間合いをとる。

しかし堅い。柔らかそうな腹部でさえこれじゃマズいな。

「……！」

ドラゴンがまたもや前足で薙ぎ払おうとしてくる。

とっさに後ろに下がる俺。避けたのも束の間、ドラゴンは大きく羽を広げた。

何をする気だ！？

俺はしっかりと槍を構えて攻撃に備える。

するとドラゴンはその羽を羽ばたかせると、口から火を吹いた。火は羽ばたく風で更に勢いを増し、炎になる。

「！……ガチか！」

ドラゴンの有名かつ伝統的な攻撃方法、火炎ブレス攻撃。

避けきれない！

俺は空いてる左腕を犠牲にして体を守りながら左側に回りこんだ。

「……ぐっ！」

腕が焦げてる！痛え！

それでも回りこんで槍を突きたてようとするが、左腕の痛みでまともに槍を扱えない。

やむなく俺はまた後ろに下がった。

俺は胸元のペンダントに軽く触れて、魔力を引き出す。左腕を銀色の光が包み、少しずつ焼けただれた皮膚が治ってくる。

同時に疲労がたまった。

あまり、魔法には頼れない。

防戦一方だ、でも無茶すると怪我じゃ済まない。

第一攻めるにしても腹部が駄目なら……。

後は羽か、口の中か。

目の前でドラゴンは小さく火を吹いた。

口は無理だな。火がコワイ。……ならば。

俺はもう一度ドラゴンの近くまで踏み込む。

「羽だ！」

俺は槍のリーチを最大に使って、遠くから羽を狙った。

が、それを軽々と避けるドラゴン。

「……く」

届かねえか。

ラーズとの戦いの時もそうだったけど……踏み込みが足りない。

完全に空振った。

「……！」

気づくとドラゴンの尻尾が目の前まで迫ってきていた。

俺は慌てて槍を引き、尻尾を受け止める。

「ぐっ！」

衝撃。

バキッ！

不吉な音がした。

手元を見ると、上半分が完全に消し飛んだ槍があった。

槍が、唯一の武器が、折れた。

「マジかよ……！」

刃の部分が無くなって随分軽くなってしまった槍を持って立ち尽くす。

辺りを探すと、吹っ飛ばされた槍の上半分が遠くに転がっている。

刃の部分は見事に粉ごなになっていた。

ヤバい。あれじゃあもう使いもんになんねぇ……。

……どうする？もうペンダントでしか戦えないぞ？

しかし風の刃はさっきいとも簡単に弾かれたばっかりだ。

成す術が、無い。

「グォォォーー！」

目の前には咆吼をあげる赤いドラゴン。

手に持つのは上半分が吹っ飛ばされた槍。

絶望的な状況。この言葉が相応しい。

……結局。ちょっとやそっとの時間じゃ変われなかったのか、俺は……。

手の力が抜けた。

カラン。

街道の石に金属の棒がぶつかって甲高い音を立てる。

俺は、面白いくらい弱いまんまだ。

足の力も抜けていった。

疲れた体が崩れ、俺は地面に座り込む。

「……死にたくなかったな」

目に涙がたまる。

「グガァァー！」

攻撃的な咆哮。厭な爆音。ドラゴンが前足で鋭く狙ってくる。

恐怖に目を固く閉じた。

こんな訳も分かんねぇとこで終わりかよ。

「……諦めるのか？此処で？」

目を瞑った闇の中。低い覇気のある声が後ろから聞こえた。俺は驚いて目を開く。

同時に、威圧感。

俺をここまで追い詰めたドラゴンの前足がその声の主に怯えて硬直し、鼻先で止まる。

力なく振り向くとそこには、後ろに兵士を率いた声の主。

ラルガさんがいた。

「失せい！」

低い怒鳴り声。

それと共にラルガさんが右手を横に振ると、直接触ってすらいないのにドラゴンはいとも簡単に吹っ飛んだ。

原理はよくわからない。ただこれだけは言える。

強力すぎる……魔法だ。

吹っ飛んだドラゴンのもとへと近付くラルガさん。

腰におびた日本刀を抜く。鉛色の輝きが冷ややかだ。

けど、あの独特の曇りは……。再刃された刀？

対するドラゴンは、ラルガさんとの圧倒的な力の差を前にして、逆に恐怖を取り払うかのように一吠えした。

「……っ！」

追い詰めているのはラルガさんなのに、戦慄が走る。

生への渇望。覚悟、というヤツだ。

「……ぬんっ！」

ラルガさんが一声だして、日本刀を振るう。太刀筋は、全く見えない。

しばしの静寂。

瞬間、俺には何が起こったのか分からなかった。

突然ドラゴンが血を噴き出して崩れるように倒れる。

「去らば、竜の子よ」

ラルガさんが恐らく死んでいるであろうドラゴンに言い放った。

日本刀についた血を紙で拭き取り、鞘に納める。

俺は涙を拭いた。

「……助かった」

生きてる。俺は。

「ラルガさん」

俺はお礼を言おうと立ち上がってラルガさんに近付いた。

「本当に、たすかり――」

――バキッ！

突然で、意味が解らない。

衝撃が頬を通して頭全体に伝わる。ラルガさんが、俺を殴ったのだ。

「久喜輝、何故戦うことを諦めた？何故逃げることすらしなかった？何故諦めた？」

ラルガさんが冷たい怒りを帯びた声で問い掛けてくる。

「そ、それは……」

俺は迫力に思わずどもった。ラルガさんが、ずい、と距離を詰め、胸ぐらをつかんできた。

「今貴様がしようとした事は！自ら死ぬことだ！生きることは！戦うことだ！逃げることだ！諦めた時点で死を覚悟しろ！」

ラルガさんはまだ何か言いたげだったが、率いていた兵士に「行くぞ！」と言うと、俺には一瞥もくれずに行軍を進めていった。

――……。

ラルガさんが俺を殴り、そのまま去ってしばらくしてから、俺は、

草原に寝転がっていた。

何で、諦めた？

いまだにラルガさんの叱責の問いの意味を考えている。

「体から勝手に力が抜けた。……いいや違う」

絶望したからだ。

生き延びれる可能性が無い、と判断したからだ。

すぐに、折れる。

俺の心は。

あの赤いドラゴンが死ぬ間際に響かせた咆哮は、生きたいという思いが溢れてた。

あれが覚悟。

甘っちょろい俺には真似できない。

殴られた頬をさする。

「……いてーなクソッ」

不意に笑みが溢れてきた。

俺、カッコ悪。

腹筋を使って勢い良く起き上がる。

やっぱり、仕方ねえよ。
怖いもんは怖い。この臆病な性格のせいで仲間だって捨ててる。筋金入りなんだ。

そんな急に変われない。
目を閉じる。

「臆病のまま、行けるとこまで行こう。……答えはこれで充分」

昼下がりの草原に優しく風が吹きはじめた。

――……。

草原を北に向かって進む一団。

「あの少年、どうなりましたかね？」

一人の兵士がラルガに話しかける。

「後は奴次第だ」

ラルガは一言いうと、少し眉間にしわを寄せる。

（……おかしい。本来ドラゴンは『大山脈』で親と共に行動する筈だが。親とはぐれて迷いこんだのか？それにしては……）

「考えていても仕方がない、か。今はそれ以上に大事な事がある」

ラルガは後ろを振り返る。

シュヘルで強奪した武器や馬、食糧。
橋の袂でスカウトした兵士達。

ラルガ率いる一隊は今や一個の軍隊となり、北へ北へと進んでいく。

『国盗り』の旗を掲げて。

暴龍と光

「よし！じゃあ次いくぞ！」

一樹は両手に剣を構えて声を張り上げる。

空達が航海を始めて5日目。

雲ひとつ無い穏やかな空の下、海洋をゆったりと航行する客船の甲板では、一樹が空に魔法と戦闘の訓練を施していた。

「い、一樹。ちょっと休憩しないか？」

いつでも元気な空が珍しくへばり気味になっている。

それほど、ハードなのだ。

「ん……、そうだな。もう昼だしな」

休みたいという空の提案に一樹は剣を鞘に納めながら頷いた。

一樹の言葉に空が安堵のため息をつく。そして空も一樹に倣って長剣を腰の鞘に納めた。

現状、一樹の訓練を受けているのは空だけである。

舞と綾香と速人は早々に一樹の訓練をクリアした。

魔法は精神的な穏やかさが無いと使いこなせない。練習とはいえ、

戦いながら穏やかさを維持するのは集中力に乏しい空の性格上、困難な事だった。

剣をしまった一樹が船内に歩いていくのに空もついていく。

一樹が船内のドアを開くとそこには何台ものテーブルが置かれている大きな部屋が広がっていた。

船の食堂だ。

昼を少し過ぎた時間の為、テーブルに座る客の数が少なくなってきている。

「あ、空達戻って来たよ！」

窓際のテーブルについていた三人の内の一人、綾香がポニーテールを揺らしながら立ち上がった。

「疲れたー！」

「飯めしっ！」

綾香の姿を見つけた空、一樹も順にそう言いながらテーブルにつく。

「全くご苦労様です」

速人は優雅にティーカップを啜りながら棒読みで二人を労った。

「棒読みかよっ！ひでぇ！」

速人にツッコむ空。速人は素敵な笑顔で空をからかっている。

「く……」

「そんな不機嫌な顔してないでご飯食べたら？お腹空いてるんでしょ？」

膨れっ面の空に綾香は昼食を勧めて、意味深に笑顔になった。

「それにしても空が一番魔法苦手なんてねー。大抵のコトは出来るのにねー」

「うるせー。難しいんだよー！」

結局綾香にもからかわれた空はテーブルに突っ伏す。

「二人とも仲良いね。あ、傷、治すよ」

微笑みながら二人を宥めた舞が立ち上がった。舞は一樹と空の近くまで行って青の腕輪に触れて魔力を引き出す。

彼女の手のひらに薄い青の光がまとわり、その光は手のひらを中心として一樹と空の全身を優しく包んだ。

みるみる内に、特訓でついた傷が癒えていく。

舞は一樹の特訓で、攻撃に向かない『水』の魔法の特性、『回復』の初歩を会得していた。

「サンキュー」

「ありがとう」

口々にお礼を言う二人。

舞は首を横に振る。

「お礼いいよ。コレも私の訓練だし」

そして笑顔。

健全な男子だったら見とれてしまうかも知れない。

「む……」

その様子を見た綾香は少し頬を膨らました。先ほどの空とそっくりだ。

「平和ですねぇ……」

速人が笑顔で小さく呟いた。そして不意に真剣な顔になる。

（……ですが、ラルガに対抗するためにはまだまだ力が足りない。王都に何かしらのヒントがあればいいのですが……）

「どうした速人？眉間のシワ凄いぞ？」

速人のムツカシイ雰囲気に気づいた一樹が不思議そうにきいた。

「ええ、表情筋のトレーニングです」

ぬけぬけとさらりと誤魔化しスルーする速人。一樹は何も聞けなくなった。

――……。

遅れて昼食を取った空と一樹も食事を終え、五人は団欒していた。

「もうそろそろ『チル』に着きますね」
速人は思い出したように言う。

『チル』とは、空たちの乗った船が王都バルクに向かう前に食料と燃料を調達するために寄る港町だ。

「うん、明日には着くって」

舞は食堂の椅子に座ったまま欠伸をかいて伸びをした。

「……じゃあ明日までに終わるように訓練再会すっか！な、空！」

一樹の手が空の肩に置かれる。

「うぇっ！ちょっと休もうぜ？」

「ダメダメ、時間ないんだからよ」

席をたった一樹は嫌がる空を引きずって甲板へと出ていった。

「ご愁傷さま……」

綾香は苦笑いで空に手を合わせた。

コト、とカップが置かれる音。その音を合図として速人は立ち上がる。

「さて、私達は明日に備えて荷物の準備でもしましょうか？」

速人が残った二人、舞と綾香に微笑みかけた。

五人は明日、寄港地のチルに着いたら少し船から降りるつもりである。

速人が聞き込みをした乗客によるとチルは『王都行きの船がとまる』ということもあり、かなり栄えた街らしい。

人が多い、とは情報も多い、ということだ。

この世界のこと、ラルガのこと、『アクセサリー』のこと。彼らには調べたいこと、調べるべきことは沢山ある。

3人は空と一樹を甲板に残して、各々自分の客室に戻って行った。

――……。

一方一樹と空は甲板で魔法と戦闘の訓練をしている。

片刃両手剣を構える空。

対する一樹は二刀流。

「『アクセサリー』の力を引き出して自分の中に満たすイメージ！良いか？」

一樹はそう言って軽くおさらいをする。空は小さくうなずいた。

「おっけ、いくぞ！」

空は魔力で体をスピードアップさせると一樹に剣で切りかかる。

が、一樹は左の剣でいとも容易くそれをいなすと右の剣を素早く空の喉元につきつけた。

「まだまだ、もっと速くなれるハズだ！」

「くっそう！まだまだ！」

空は喉元に突きつけられた剣を弾き、体勢を立て直して距離をとる。

そして、空いている手を一樹に向けた。かざす手のひらの前方に金色の光の球体が現れる。

「行けっ！」

空が一喝すると光の球体は『光の弾丸』となって一樹に向かって走る。

一樹は一瞬ビックリした様子を見せるが、両手に持つ二本の剣に魔法で炎をまとわせるとそれをクロスさせて『光の弾丸』を受け止めた。

光の弾丸は一樹の剣の炎に焼かれ、消え失せる。

「光のエネルギーの塊か！けどまだ弱いな！」

「くそ！もう一回だ！」

空はもう一度体に魔力を満たして、一樹に向かって走り出した。

――……。

翌日。

５人の乗っている船は無事に港町チルに到着した。チルはウートやシュヘル、もちろんサウルよりも大きく、活気がある。王都へ向かう船のほとんどがチルに停泊するため、貿易や造船業を基盤とした発展を遂げているのだ。

客船が無事に止まると、空たちは各々武器と荷物を持って陸に降りたった。

「揺れない地面懐かしい！」

綾香が嬉しそうにはしゃぐ。

「そうですね。では早速、やるべき事をやってしまいましょう」

久しぶりの陸地への感想も淡白に、速人は街がある方へと歩み始めた。

それに続く４人。

「なぁ、何処行くんだ？」

空は速人に聞く。

速人は船の乗客から情報を聞いているので少しは詳しい。行き先を聞くなら速人だと空は判断した。

「情報専門の店があります。そこに向かいましょう」

「お店？」舞は速人の言葉に首をかしげる。

「あぁ、情報屋みたいなもんだろ。多分」

速人の代わりに一樹が答えた。

――……。

薄暗い店の中で、五人を相手に中年の男性が呆れながら首を振る。

「だから。何度も言ってるだろう。金を貰わないと情報は渡せない。ラルガ将軍の情報は特に、な」

情報屋のおっさんは空たち五人に当たり前のコトを言って、その薄暗い店から追い出した。

「……だぁー！また金かよ！毎回こうだな！」

情報屋に追い出されて店のすぐ外で空は『だぁー！』と頭をかきむしる。

当てにしていた情報屋はチルの大通りから道を一つ外れたところにあった。だがまたもや金欠。

ウートで日雇いで働いた金に一樹がジャンに貰った金を足してもラルガの情報を買うことは叶わなかった。

国のトップに近い将軍の情報は安くはない。

情報屋を追い出された五人は薄暗い裏通りで立ち尽くしている。

「足んない……か。でもないもんは仕方ないもんな」

一樹は渋々だが諦めたような言葉を発した。
綾香と舞も締観したように口をつぐむ。

「……そうですね、今回は諦めましょう」

速人も残念そうなため息をつき、５人は情報屋を後にした。

――……。

街を歩く空たち。
チルはかなり栄えている街なので人の往来が多い。大勢の人々を避けながら進んで行く。
空はまだ情報屋への文句を垂れていた。

「少しぐらい教えてくれたって良いじゃん」

「今回はしょうがないよ。日雇いで働こうにも船が停泊する時間はそんなに無いし」

舞があからさまに落ち込む空を慰める。

「そうそう！次だよ次！王都で情報集めよ！」

綾香は明るい声で元気付けた。二人の励ましに小さく笑う空。

「むー。……うん。そうだな。王都で情報集めれば良――」

「――きゃあああああ！！！」

空の言葉を遮って、人混みの中から突如叫び声が響いた。

「……！！……何だ！？」

周囲を警戒する一樹。

往来を歩いていた人々も不安げに動きを止める。

「あっちから聞こえたよ！」

綾香は悲鳴の方向に指をさした。

「行ってみましょう！」

速人に急かされ五人は悲鳴が聞こえた方へ向かう。

逃げる町の人々の流れに逆らって進んで行くと、空は人の隙間から、それを垣間見た。

巨翼に業火を連想させるような赤い鱗を持ち。

鮮やかな赤に対比するように白い牙が顎から覗かせるその獣。

――『ドラゴン』。

「おい、あれって！」

「あぁ、もしかしなくてもアレは……『ドラゴン』だ」

驚愕し興奮する空よりも比較的落ち着いていた一樹もその獣をドラゴンだと認める。

「一樹？ドラゴンのこととしってるのか？」

「いや、知らないけど。……どうみてもアレは」

５人は逃げる人混みを逆流して、遂に人の流れを抜けた。

「どう見ても……ドラゴンですね」

速人が火を吹いて威嚇するドラゴンを目の前に冷や汗を流しながら言う。

その体は１０ｍという巨大なもの。輝と対峙していたドラゴンの大きさの比ではない。

「……こんなのが暴れたら街の人に被害が及ぶ！……皆！倒すぞ！」

空は怯まずに叫んだ。

他の仲間は恐怖に一瞬ためらう。

だが空はそのまま剣を抜き、人々が逃げてしまって誰もいなくなった広場を、ドラゴンに向かって走る。

空は手をドラゴンにかざした。空の胸元のペンダントが共鳴するように金色の光が溢れだし、かざした手のひらには金色の球体が現れる。

一樹との訓練でも見せた『光の弾丸』。

「くらえッ！」

手のひらを払うように押し出すと『光の弾丸』が空の元を離れてドラゴンへ向かっていった。

光を放ちながら進むそのエネルギーの固まりは、銃弾のように速く目標にぶつかる。ドラゴンの鱗に着弾したその瞬間、凝縮された光のエネルギーが爆発した。

「グオオォォォ！！」

ドラゴンは大きく咆吼をあげながら、『光の弾丸』の衝撃に耐えきれずにその巨体を退けぞらせる。ドラゴンの後ろにあった木が、倒れ込む巨体を支えきれずに音をたてて簡単に折れた。

「よっし！訓練の成果だッ！」

仰け反るドラゴンを見て空がガッツポーズを決める。

「すっげぇ……」

空から少し離れた所で唖然とその様子を見ている一樹。

空の力は一樹の予想を遥かに越えた強さだった。

（訓練の時に撃ってきた『光の弾丸』とは威力が桁違いだ！！……魔法の威力は意思に比例する。……町を、護りたいんだな）

一樹は空の想いの強さを感じていた。

（だとしても初心者の魔法でこんなに威力が出るものなのか……？）

「……ねぇ！あれ！」

空の強さを一瞬訝った一樹は綾香が指差す上空を見る。

上空を2頭のドラゴンが飛んでいる。仲間の咆吼を聞いて助けに来たようだ。

速人が顔をしかめた。

「一ヶ所に10m級のドラゴンが三頭……これは不味いですね」

速人は有利に戦うためにどうすればいいかを考えていく。

（敵は手負いのドラゴン1頭に無傷のドラゴン2頭。逆にこちらは5人。2、2、1で分かれて敵を分散させて戦うのが最良……）

速人は4人に向き直った。

「敵を分散させます！敵は合わせて三頭。上空のドラゴンは一頭につき二人がかりで仕留めます」

「残った一人はどうするんだ？」

空が速人に質問する。

「あそこで仰け反ってるドラゴンと一対一で戦うんだろ？」

一樹が空の質問に答えて、腰の二刀を抜き払った。

「……ここは任せろ。俺は一人で行ける！」

「でも！」

空が反対しようとするが、速人に止められる。

「空、時間がありません。今は一樹に従いましょう」

そして速人は仲間たちに向き直った。

「一樹はここでこのドラゴンを！空と綾香はここから離れた所から綾香の弓で1頭の注意を引き付けて下さい！舞は私と来て下さい！……いいですね？」

「はい！」

指示を出された舞は速人のもとに駆け寄る。

「グルル……」

腹に響くような低い鳴き声。

空の『光の弾丸』を受けたドラゴンがまた動き始めた。

「来たな……皆、死ぬなよ！」

一樹の言葉に頷いて仲間達は上空のドラゴンを誘導すべく走り出す。

残された一樹は全身に魔力を満たすと、ドラゴンに向かって走り出した。

――……。

空は綾香と共に先程の広場から離れながら市街地を駆け抜けている。

暫く走ると二人は街の外れに出た。家や木々が少ないので比較的戦い易そうな場所だ。

「ここなら大丈夫かな？」

聞いた綾香に空はうなずく。

「ああ。多分大丈夫だ。……綾香、あのドラゴンの注意を引いてくれ！」

「うん、まかせて！」

綾香は背中に背負った矢筒から矢を取り出して弓を構えた。

上空を飛ぶドラゴンに狙いを定める。

矢でもダメージを与えられる翼を狙う。

キリキリと軋んで弓が反る。

「……当たれっ！」

引き絞られて、ヒュンと綾香の手から飛び出す矢。真っ直ぐドラゴンの翼に向かって飛んで行く。

突き進んだ矢は鋭く風を切ってその薄い翼膜に小さな穴を開けた。

「……当たった！」

翼を矢で傷つけられたドラゴンは弓を構えた綾香と空に標的を定めて急降下を始める。

「綾香！なるべく射ってダメージを与えてくれ！」

「わかった！」

綾香が射ち続ける何発もの矢が、向かってくるドラゴンを捉える。
綾香は翼を狙い、射ち続けた。

「グオオオォォォ！！」

翼をズタズタにされ、ふらふらとドラゴンは地に降り立った。
翼を傷つけられたドラゴンはその目に怒りの焔を宿らせる。

「グガァァ！」

ドラゴンはその長い首を大きく後ろに引き、勢いをつけた。

「マズい！」

空が叫ぶ。

瞬間、ドラゴンは勢いをつけて頭を前に突きだし炎を吐く。

深紅の灼熱。

「きゃあぁ！」

綾香を業火が襲う。

直撃する！

綾香が身を強ばらせた瞬間だった。

「綾香！」

寸前で空が綾香に抱きつく。

竜が吐いた炎が一瞬にして通り過ぎる。

綾香が恐る恐る目を開くと、空は依然として強い力で綾香を抱きしめていた。

空が、自分の体を盾にして炎から綾香を守ったのだ。

「あ……やか、大丈夫か……？」

弱々しい声で話し掛ける空。その背中から黒い煙が出ている。

「……そ、らぁ！」

そんな様子の空を見て綾香は目に涙を浮かべた。

「無事で……良かった……」

綾香を抱く力が弱くなり、ついにはそのままくずれおちる空。

そのまま、ピクリとも動かない。

その傍らで綾香は体を震わせて涙をこらえている。

「……さない」

綾香の吐き出す震えた声。小さい音ながらも大きな怒りを含んでいる。

（まだ、まだ舞の回復魔法なら助かるかもしれない。その為には……）

綾香が顔をあげると目の前に立ち塞がる巨大なドラゴン。

綾香は強く拳を握る。

「…絶対に許さない！」

――……。

速人が空を見上げると丁度、綾香の矢がドラゴンに命中して上空を飛んでいるドラゴンのうちの1匹が進路を変えていった所だった。

「舞。そろそろこちらも注意を引き付けましょう」

速人は一樹のいた広場から少し離れた市街地で立ち止まった。

「え？でもここじゃあ家が壊れて被害が……」

「ですがあまり時間をかけすぎると一樹が2頭のドラゴンを相手にする羽目になってしまいます」

「わ、分かりました。戦いましょう」

速人は舞の了解をとると、自分の腰に着けていた小さなバッグから投擲用のナイフを取り出す。

そして自分の中に魔力、力を流し込むイメージをした。速人の黄色

の指輪がそれに反応して淡い黄の光を放出する。

船上での一樹の魔法練習で習得したのがこの、自らの体に魔力を通して身体能力を上げる技、通称『ドーピング』だ。

魔力を使うので体力を使うが、一樹は覚えておいて損は無い技だと言っていた。

『アクセサリー』の魔力を利用して初めて使えるような難しい技で、対ラルガの為に習った魔法。

（まさかこんなところで使うことになるとは思いませんでしたね……）

ナイフを握る右腕に魔力を集中させて振りかぶる。

「届けッ！」

速人の投げたナイフが上空を進み、飛んでいるドラゴンに当たった。

勿論ドーピング無しでは到底届かない距離。

ナイフを腹部に当てられたドラゴンは速人と舞に向かって急降下する。

「来ますよ……！」

急降下する勢いに乗りながら後脚の鋭利な爪で二人を急襲するドラゴン。

舞と速人はこれをドーピングで素早くよけた。

「あぶなかったぁ！」

舞は改めて、地上に降り立ったドラゴンを見上げる。

高さにして7、8m。

黄色い濁った眼が二人をにらみつけている。

「これは……思ったよりも苦労しそうですね……！」

速人はドラゴンの着地の衝撃でズレた眼鏡の位置を直して苦笑いをする。

「……」

舞は無言で護身用のナイフを構えている。

いくらドーピングで身体能力が上がっているとはいえ、命がけの戦い。舞からは喋る余裕が消えていった。

対する速人はグローブを手にはめて構える。徒手空拳だ。

グローブは分厚い革でできていて、手甲の様に腕を肘の所まで覆っていた。打撃時に強いダメージを与えられるように所々鉄も使われている。

グローブをはめた速人はすぐさまドラゴンの位置と自分達の位置、近くにある家の配置を確認した。

速人は舞に比べて落ち着いている様だ。

（困りましたね……。先程投げたナイフでは傷一つ付いていない…）

続いて速人は自分のバックの中の道具の手持ちを確認する。

投擲用ナイフが9本、鉄線が何十mか、爆薬と爆弾何個か、後は細

々したものがいくつか。
さっきのナイフで無傷なのならば、爆薬と爆弾以外はどれも役に立たなそうな物ばかりだ。

だが、速人は作戦を立てて動き始めた。

「舞！これを」

速人は舞を呼ぶと、爆薬と投擲用のナイフを渡し、作戦を伝え、時間を稼ぐように言った。

了解した舞は爆薬をナイフにくくりつけ、走り出す。

速人はドラゴンから少し距離を置いて、鉄線を刃に結び付けたナイフを地面にさしこんだ。
そして鉄線の端を持ってまた走り始める。

「舞、頑張って下さい」

――……。

ドラゴンが大きく翼を広げる。
そして、口からあふれんばかりの炎を舞に吹き付けた。

「……っ！」

ドーピングでも逃げ切れない程巨大な炎。

舞は水の魔法で、水の盾をつくり、それで防ぎながら避ける。

ドラゴンは続けざまに火を吹き続けるが、舞は全ての烈火をギリギリでかわしていた。

蒸発して小さくなる水の盾。
比例して次第に弱くなる炎。

（速人が言ってたタイミングは今……！）

疲労でドラゴンの炎が弱まった瞬間、防戦一方だった舞が反撃にでた。護身用の小太刀と、爆薬を鉄線でくくりつけたナイフを両手に持ち、ドーピングを最大限に使ってドラゴンの懐に潜り込む。

舞は速人の作戦を反芻する。

（ドーピングで潜り込んで……）

小太刀を腰の鞘におさめる舞。

（爆薬ナイフを口元に……！）

舞は爆薬ナイフをドラゴンの口元に投げ飛ばす。

（全力で距離を取る……！）

そしてすぐさまドラゴンから離れて瓦礫に身を潜め、水の盾を作った。

「グオォ……」

ドラゴンが逃げた舞に追い討ちをお見舞いしようと口を開き、炎を

吐く――。

――直後。爆風が辺りを襲う。

爆薬ナイフはドラゴンの炎に引火して、ドラゴンの頭部の鱗と甲殻をズタズタに吹っ飛ばした。一方舞の作った水の盾も爆発の熱に持っていかれる。

そして、爆風がおさまると、舞は瓦礫から頭を出してドラゴンの様子を窺う。

「……！」

ズドン、と大きな音を立てて巨体がそのまま地面に伏せるように倒れこむ。

（……倒、した？）

ドラゴンは死んだのか衝撃で意識がトんでいるのか微動だにしない。

（……やった！）

「グガァアァァァ！」

「……！」

小さくガッツポーズをしていた舞の耳に大音量の咆吼が届いた。

ドラゴンの頭部への衝撃は、鱗を吹っ飛ばしただけで終わった。

怒りで以前よりも威圧を増すドラゴン。瓦礫に潜む舞の姿を確認すると、グルル、と唸る。

「……そんな……」

絶望を顔に浮かべる舞。

その時、鱗をはがされ無防備になったドラゴンの頭部にナイフが刺さった。

ナイフには鉄線が結び付けられており、その鉄線の先には速人がいた。

「時間、間に合いましたね」

そう言うと速人はその片手に持っていた鉄線を持ったままもう片方の手でナイフを足元に落とす。

ナイフは速人の足元にいつの間にか引かれていた鉄線を切った。

すると所々の地面に刺さっていた鉄線を巻き付けられたナイフがピン、と音を立て抜ける。ナイフを結び付けていた鉄線がキュルキュルと絡み付き、せばまり、ドラゴンを拘束した。

全て、作戦通り。

舞に時間を稼いでもらっているうちに速人がドラゴンを拘束する為のトラップを仕掛けていたのだ。

「幾ら硬くても鱗の下には電流も届くでしょう……終わりです！」

速人は魔法で雷を鉄線に流し込む。

鉄線を通して雷がドラゴンに伝わり、ドラゴンは感電して、瓦礫だ

らけの地面に倒れこんだ。

さっきとは違ってもう、1ミリも動かない。

ふぅ、と息をつく速人。

「……お互い無事でなによりです」

速人は戦いで少しずれた眼鏡の位置を直す。

「……助かったぁ～……」

消耗した舞はその場に力無く座りこんだ。

そんな舞を見て速人は微笑む。

「上出来です……少し、休みましょうか」

――……。

一樹は広場から他のドラゴンの誘導に向かった仲間たちを見送った。

「頼むぜ……皆」

一樹は空の光魔法によって手負いとなったドラゴンと対峙する。

「こっちも始めるか。……いくぞ！」

（手負い、っても一人で行けるか……！？）

一樹は素早く剣を二本引き抜く。ドラゴンに向かって走り出す。

『ドーピング』を使い素早くドラゴンの懐に入り、空が先程光の魔法でつけた傷を狙う。

「……ハアッ！！」

一樹は二本の剣を交差させて斬りつけて、傷を深くえぐった。

痛みを覚えたドラゴンがすぐさま一樹を振り払う。

「……っと」

うまく着地して剣を構えなおす一樹。

（さすがに剣じゃムリがあるな……）

一樹と対峙するドラゴンの傷は大きいが致命傷にはならない。

（このまま『ドーピング』と剣だけで勝てるとは思えない……！）

「グガァ！」

痛みをモノともせずにドラゴンが攻撃を仕掛けてきた。

やはりドラゴンにとって、一樹の攻撃は規模の小さいものなのだろうか。

「！……っ！」

ドラゴンの攻撃を避け続ける一樹。

ギリギリではあるが、巧くかわしていた。
しかしこの広場は一樹の応戦とドラゴンの攻撃でどんどん破壊されていく。
砕ける地面。倒れる建物。
ドラゴンの動きに集中していた一樹は足元に瓦礫があるのに気付かなかった。
攻撃を避けようと足を踏み出した時に一樹は瓦礫につまずいて転んでしまう。
「ぐ……くっそ！」
毒づく一樹にドラゴンの鋭利な爪が迫る。
「……！」
一樹の小さな悲鳴は紅い竜の攻撃の音にかきけされた。
――……。
街の外れで。
空は綾香を身をていして護って倒れた。
そのハズだった。
気が付くと空は真っ白な空間につっ立っていた。

「ここは……」

辺りを見回す。

本当に、何もない。

空には自分が何処に立っているのかすら分からなかった。自らが立っている地面の存在も曖昧。

「……これがあの世って奴なのか……？」

「チガウな。まだオマエはシんでない」

「！？」

後ろからの声に反応して振り返る。

周囲が真っ白なので正確にはわからない。

だが、そこには確かに金色の光を纏った人影があった。

「誰だっ！？」

空はその人影に向かって訪ねる。

よくみると首元に金色のペンダントをつけているのが分かる。が、やはり細部まではわからない。

「オマエにペンダントをトオしてマリョクをアタえてるのはダレだかシっているか？」

光を纏った人影が空にこたえてしゃべりだした。

少年の様だが、独特の訛りがあって少し聞き取りにくい声だ。
空は茫然としてその人影を見ている。そんな空を見て、人影は再び口を開いた。

「……オレだよ。ハンノウうっすいなー」

「……じゃあここは何処なんだ？……俺をあんな世界に飛ばしたのはお前なのか！？」

「あー、そんなイッペンにシツモンすんなよ！」

状況を理解しないまでも意識をハッキリとさせた空が一気に話しだすが、人影はそれをあしらう。

「それに、イマはセツメイするジカンもナい」

「……どういう事だ？」

空は平静を意識して、また疑問をなげかけた。

「イマさ、オマエはシにかけてるんだよ。ずっとこのクウカンにイるオレにはナニがオこってるのかヨくワからナいけどな」

「……ああ」

人影の言葉で更に冷静さを取り戻した空は、綾香を護って代わりにドラゴンに焼かれた事を思い出した。

「……で、ここは何処なんだよ？」

「またそれか？……ドコってイわれてもなぁ」

人影は辺りを見回して両手を軽く上げて見せる。

「『オレ』のセイシンセカイのイチブだ」

「なんだそれ……。出る方法はないのかよ？」

空に聞かれた人影は、そうだった！と言わんばかりに思い出す仕草をする。

「そうそう。トりあえずオマエをココからダさなきゃな」

「出来るのか！？」

跳ねるように反応する空。

あの後の綾香の安否が気になる。

すぐにでも戻らなくてば。

「デれるぜ！……でもな、それはオマエしだいかもシれないな」

「俺……次第？」

ああ、と頷いて人影は空を指さす。

「ショウジキにイってくれ。オマエは、ナニモノかにここまで、ヒンシにナるまでオいコまれたんだろ！」

「……あぁ。ドラゴンの炎にやられた」

苦い顔をしながら空はうつむく。

（綾香を危険にさらしたのは俺の力不足だ……）

その様子を見た人影はウンウンと頷きながらまた話す。

「というコトで、またこんなトコにコないヨウにスコしチカラをワけてやるよ」

「力を……？」

うつむいていた空は顔をあげた。

「ああ、そうだ。でもな、チカラはオモいがナいとヨワいモノだ」

いつの間にか空のすぐ近くに来ていた人影は空の顔を覗き込んだ。

「チカラをツカいこなせるホドのツヨいオモいはアるか？」

「強い、想い」

（綾香……皆……）

空は人影を強い目で見据えた。

「次は絶対に、負けない！……護って、護りきってみせる！！」

決意を込めた空の言葉に呼応するように金色のペンダントから強い光が溢れ出す。強い金色の光に包まれて空の姿はこの白い世界から消え失せた。

空がいなくなり、静かになった空間で人影はニイ、と見辛い笑顔を浮かべて呟く。

「へぇ。あれで『強欲』か。フシギだな。うん、ゴウカクだよ。ソラ」

――……。

街の外れ。

綾香は満身創痍、疲労困憊になりながらもドラゴンに向かって弓矢を引き絞っていた。

矢筒の矢はなくなってしまったので、木の魔法で木製の矢を造って射ち続けている。

だがドラゴンは飛んでくる矢を全く気にしていない。

硬い甲殻と鱗が矢を弾いている。

その目は獲物をもてあそぶ捕食者の目。

（……何でこんなに硬いの！……当たってるのに！）

弓を持ち、狙う手が震える。

深呼吸してまた構える。

綾香には長時間の集中で自らの神経が擦り減ってきているのがわかった。

諦めずに矢を射ち続けるがそれも次第に当たらなくなってくる。
そんな綾香に興味を無くしたのか、ドラゴンはトドメを刺しにかかった。
その強大な顎からは溢れんばかりの炎が。
「グガァ！」
綾香を再び襲う。
「きゃああ！」
襲い来る火炎に綾香は目を強くつぶった。
（助けてっ！空っ！）
「……っ？」
そろそろ炎が来るだろうという時になっても炎どころか熱気すらしない。
綾香は恐る恐る目を開く。
「……大丈夫か？」
そこには炎ではなく。

一人の少年が。

空が瓦礫の上で立っていた。

「そ、ら……？」

「あぁ！心配かけたな！」

空の無事に綾香が喜びの声をあげようとするが、空がそれを制した。

空の背後でドラゴンが再び火を吐き出そうとしている。

「まだ、終わってないみたいだぜ」

そういうと空はドラゴンに振り返りながら剣を強く握り締める。

すると剣が金色の光を纏った。

瞬時に空は『ドーピング』を使ってドラゴンの頭部の下に潜り込む。

「……させねぇよ！」

炎を吐こうと開きかけたその顎を空は剣で下から突き上げる。

光を纏った剣は、硬い鱗や甲殻をも簡単に貫く。光の剣は前に隠し通路でラルガの手下に対して使った時よりはるかに強い光を宿している。

空の光の剣によって口を塞がれ行き場の無くなった炎は、そのままドラゴン自身を焼き焦がした。

「グルルグガァァ！」

断末魔も口を塞いだせいで満足に出せないまま動かなくなる。

空は生気の無くなったドラゴンから剣を引き抜いた。

「空っ！」

本当に、嬉しそうな声で綾香が空の元に駆けてくる。

空は綾香にこたえて手を降るとペンダントを握って一瞬目を閉じた。

そして祈る。あの人影に届くように。

（……ちゃんと護りきったぜ！）

――……。

街の中央に位置する広場で、彼は窮地においやられていた。

「……ハァ、ハァ」

ドラゴンと対峙する一樹。

二本一対の剣も片方吹き飛ばされて一本しかない。

剣を握る右手に力を込めてまた走り出す。

対するドラゴンも一樹が長い時間かけてつけていった傷によって、かなり弱っている。

戦いの始めは頻繁に吐いていた炎も今は全く出ないようで、突進と尻尾による薙払いを繰り返している。

一方一樹は疲れで徐々に速さの落ちていくドーピングで攻撃を避け、粘っていた。
ドラゴンは素早く動く一樹に翻弄されて怒りさらに暴れる。
ドラゴンを中心に円を描くように逃げ続ける一樹には賭けともいえる作戦があった。
逃げていた一樹は一回足を止めて地面に剣で何らかの記号を刻む。
（後、2ヵ所だっ！）
一樹は攻撃を避けながら、ドラゴンを中心とした魔法陣を描いているのだ。
作戦ともいえないようなお粗末な作戦だ。
一樹の足元が一瞬ふらつく。
「っぶね！」
落ちついてドーピングにさらに魔力をつぎ込む。
（もし魔法陣が完成しても、注ぎこむ魔力が無ければ失敗だ）
ドラゴンの攻撃を残った剣で辛うじて受け流す。
攻撃を受け流されてドラゴンが空振っている隙にまた走り出す。
そして足を止め、また地面に剣で記号を刻み込んだ。
（後一つ……！）

その表情に少し希望を取り戻した一樹。
しかし、一樹の体から力が抜けていく。
「……限界か。後少しなのに！」
ドーピングにつぎ込んだ魔力が尽きたようだ。一樹の体が急に重くなる。
後の魔力は魔法陣に注ぐためにとって置くしかない。
（次の地点まで５０ｍ位か。結構キツいな）
走るしか選択肢がない一樹は走り出した。
だがそれをあの紅い竜が許すハズもなかった。
自慢の爪が生えている足で一樹を踏み潰しにかかる。
「……！」
一樹もそれに気付いてスピードを上げる。
（後１０ｍ！）
鋭利な爪が一樹に近付く。
同時に一樹は飛び込む。
（後２ｍ！）
地面に着いて記号を刻むために剣を握る。

しかし、一樹のすぐそこまで足が来ていた。

（……駄目かっ！？）

だが、ドラゴンの足が一瞬止まった。

（！？…チャンスだっ！）

少し疑問を抱きながらも一樹は記号の最後の線を刻み込んだ。

「灼熱の焔よ！！……食らえっ！！」

一樹が魔法陣に魔力をつぎ込むと、魔法陣は一樹の指輪と同じ赤色に輝き出した。

次の瞬間、高熱の焔がドラゴンを包んだ。

元々紅かった鱗は更に紅くなり溶けてゆく。

ついにはその巨大な姿も業火に包まれて見えなくなってしまった。

「……わるい……な。まだ死ねねぇんだ……」

視界が激しく揺れる。

一樹は魔力を使い果たしてそのまま意識を失った。

――……。

速人と舞が市街地を中央広場に向かって歩いている。

戦闘の音はしなくなったものの、仲間の安否が気になる二人は自然と早足で歩いていた。

広場に着くと、既に他の三人が集まっていた。

舞は再会の嬉しさで三人の元へかけていく。

しかし、近寄る途中で舞は一樹が倒れているのに気付いた。

「一樹くん！」

舞のその声で二人が広場まで来たことに気付いた空と綾香は顔を上げる。

「あ！舞！早く治療を！」

「うん！」

舞は懐から護身用のナイフを取り出して地面に大きな円を描くと、所々に記号を刻んだ。

魔法陣だ。

魔方陣は一樹に教えて貰った魔術の一つで、陣を描くことによって魔力の消費を押さえることが出来るらしい。

つまり、少ない魔力で効果的に魔法を使えるのだ。

そしてその魔法陣の中に空、綾香、一樹の三人を入れて、魔力を注ぐ。

舞の腕輪と魔方陣から発せられる水色の光が三人を優しく包むと、傷が徐々に癒えていった。

すると陣の中の一樹も目をさました。

「……う、あれ？」

舞は一樹の意識が戻ったので治療を止める。

一樹は上体を起こして辺りを見回すと、俺が最後かよ、と言ってまた寝転んだ。

「でも皆無事で良かった！」

横で座っていた空も笑顔になる。

「まぁ、空も一樹も助かったのはあたしのお陰だよね～」

綾香は冗談まじりにそう言って立ち上がった。

「ちょっ、空は良いとして俺はいつ助けられたんだよ！？」

一樹は綾香につっこむ。

「……ほら、あの時ドラゴンの足を止めたじゃん！」

「え？……あー」

一樹の脳裏を蘇った記憶がよぎる。

一樹が炎の魔法陣をつくる為の最後の一文字を地面に刻む時、寸前まで迫っていたドラゴンの足が一瞬止まったお陰でギリギリ魔法陣を完成させられた事を一樹は思い出した。

（アレ、綾香の魔法だったんだ……）

「つっこみは気を付けてしましょうね。一樹」

速人が一樹に笑顔でトドメをさした。

「……ぐっ！また傷口が……」

一樹は大袈裟に痛がるフリをする。

そんな一樹の様子に全員で笑った。

――……。

五人はドラゴンの襲撃で滅茶苦茶になったチルの街を港に停泊している船に向かって歩いている。チルの人々は街に戻ってきて、早くも復興に取り掛かっていた。

「…チルはこれから大変ですね」

速人がせっせと作業をしているチルの人々を見て呟く。

「でも皆生きてるんだから」

「あぁ、きっと大丈夫さ！」

舞の言葉を一樹が繋げた。

「そういえばさっき聞いたんだけど、ドラゴンって街まで降りてくる事は普通ないんだって」

綾香が言った。

彼女は先程の戦いで髪を留めていたゴムをなくしてしまったので、ストレートになっている。

「何で街まで降りて来たんだろうな？」

空も疑問に思っているようだ。

空は傷は治ったものの、シャツが焼かれてしまったので街の人にもらった深紅色のシャツを代わりに着ている。

「考えても仕方ありませんよ。今は生きてることを喜びましょう」

――……。

そうこう話して歩いているうちに港までたどり着いた一行。

「おい！」

いざ船に乗ろうとしたとき、誰かに呼び止められた。

振り向くとそこには一人の男性。

「あ！情報屋の！」

空は声を上げた。

「あぁ。そうだ」

「一体、どうしたんでしょうか？」

速人が丁寧に訪ねる。

「ああ、アンタらには街を守ってもらったからな。守って貰ってハイサヨナラは男として、な。まぁ詳しい情報は教えられないが……」

男は懐から手紙の様なものを取り出して速人に渡した。

「それを王都にある一番大きな酒場の店長に持っていけ。ラルガについての情報がある。何、場所はすぐ分かるだろうよ」

それだけ言うと男は「じゃあな」とだけ言い残して去っていった。

――……。

改めて五人は船に乗った。

どうやら空達が一番最後の乗客だったようで五人が乗ってすぐに船は汽笛を鳴らし、出港した。龍による襲撃もあり、チルには最低限の積み荷をしただけですぐに出航してしまった。

徐々に離れていく半壊状態の町を見て空は呟く。

「復興、手伝った方が良かったんじゃないか？」

「大丈夫ですよ。人はそんなに弱くない。あなたの力を貸さずとも自力で復興出来るでしょう」

「……そうだな」

速人の言葉に諭されて空が頷く。
そして空は皆の方を振り向いた。

「……今回は助かったけど王都ではもっと危険なことがあるかもしれない。ラルガだってきっと強い」

懐から金色のペンダントを取り出す。

「今回は力になったこの『アクセサリー』だって敵わないようなヤツがいるかも知れない。……でも、さ」

ペンダントをしまって少し照れくさそうに笑う。

「でも俺らならきっと大丈夫だ！って思えるよ……。だからこれからも力を貸してくれ！」

「うん！」

「もちろんでしょ！」

舞は頷き、綾香は空を小突いた。

「ちょっ、綾香、茶化すなよっ」

「良いじゃねーか空！」

一樹はカラカラ笑う。

そして右腕を突き上げた。

「って事で今日は生き残れたことを祝って宴じゃー！！」

「おー！！！」

楽しそうにはしゃぐ五人の姿は食堂へと消えていった。

湖の祭

日は高く上がり、流れる穏やかな雲が柔らかな影を落とす。草の絨毯続きだった草原が徐々に舗装された道へと変わっていき、代わりに家が徐々に増えてきた。

わずかな傾斜になっている小さな丘を登ると、そこからは町を見渡せた。すり鉢状になだらかな坂道が町の中心部へ向かう。

その町の中心部には巨大な湖が陽光をキラキラと反射させて輝いていた。水源は俺が出来立てのフォリア橋で渡った『大河川』だろう。湖の中央には小ぢんまりとした島があり、そこには遺跡のような石建築があるのも見える。

俺は開きすぎてグシャグシャになった地図を広げた。

うん。間違いない。

ここは『ハリア』だ。王都『バルク』まで、かなり近づいてきた。

「着いた……」

道端にある看板にも『ハリア』と書かれている。看板によると町の真ん中の湖は『ハリア湖』というみたいだ。

まるで『峰尾町』と『峰川』の様だと思ったら不意に顔が緩んでしまう。

「……さて」

手に持っている二本の棒切れの様になってしまった槍を見ながら俺は考える。

まずはめでたく町についたわけだが、どこに行くべきだろう？

槍を直すか買い換えるかする為に武器屋に行かなくちゃならないのはわかっているが。

「っとと」

足がふらつく。

一瞬視界が暗くなっていた。

まともな武器も無く、いつドラゴンやら野盗やらが襲ってくるか判らない状況では、全然眠れなかった。

だから、早く宿屋にも行きたい。それも本音だ。

「……うーん」

こんな状態で武器探したりは大変だな。しばらくここで休むのも有りかも知れない。

先に、宿屋に行こう。

――……。

「う……んー」

うっすらと開いた視界に入り込む西日。
俺はバネの無く小さい、それでいて安心の眠りを与えてくれたベッドから這い出した。

昼間ということもあって宿屋をすぐに見つけられた俺はそのままベッドに飛び込んでそこからぐっすり。
チェックインした昼から夕方までの睡眠を味わった俺は、食料等の重い荷物を部屋に置いたままで壊れた槍を掴んだ。

疲れはある程度無くなってる。夜まで時間はあるし、武器屋を探しに行こう。

「よし」

荷物と戸締りを確認して、俺は宿屋の外へ出た。

町の中心である湖に近付くにつれ、町は栄えていく、すごく活気がある。

だから坂を下って行けば武器屋もあるだろ。

「しかし……」

今までの町とは違ってやけに騒々しい。老若男女関係なく慌ただしく坂道を行ったり来たりしている。

何かあるんだろうか？

「おい。お前」

疑問に感じながら歩いていると、背後から低い声で呼び止められた。

「……？」

振り返ると、無精髭を生やした屈強そうな男が立っている。男は俺が振り返ったのを見て、続けた。

「そのぶっ壊れてるヤツ、サウル製の槍だろ？」

そう言って俺の手の内の棒切れ二本を指差す。

「あ、はい。そうだけど。……こんな棒切れ二本が槍だって、良く分かりましたね」

すると男は「ふん」と微かに笑って自分の後ろを指差した。その人差し指の先には、武器が沢山飾られた店の様なものがあった。

「これでも武器屋だからな。ちょっとよってけ。その槍、普通の職人じゃ直すのに手こずるだろうしな」

それだけ言うと、その男、いや、武器屋の店主は自らの店舗へと入っていく。

「……」

俺は若干呆然とはしたが、道の往来で立ち往生するわけにもいかない。

「じゃあ、お邪魔します」

店主に続いて俺も店に入った。

「ま、座れよ」

店に入ると店主に椅子を勧められた。軽く会釈をして座る。
店の中には色々な武器やら鎧やらが飾ってあり、物々しい。

「うちの商品は全部俺の作った物だ。……と、まぁそんなことはいい。その槍を貸してみろ」

言われて、俺は素直に渡す。もう折れてるんだ。今さら奪われもしないだろう。
しばらく槍の断面を見て、何かに気付いたように驚く店主が俺の顔を覗き込んだ。

「これ、どうやって壊れた？」

店主から目をそらしながら俺は唇を噛み締める。

「……フォリア橋からこの町までの草原で、紅い鱗のドラゴンに折られた」

そう伝えると店主は訝るような表情をした。

「ドラゴン……だと？ドラゴンは『大山脈』から降りては来ない」

「『大山脈』？」

「ああ。ここハリアよりも内陸、『チル』という港町のすぐ近くにある。こちらにはドラゴンは来ない」

「でも確かにドラゴンが……！」

俺が反論しようとすると、店主は手を上げて制してくる。

「判ってる。これを見ろ」

店主が槍の折れた断面を差し出してきた。良く見ると紅い何かの破片の様なものが見える。

「……ウロコ？」

聞き返す俺に店主がうなずいた。

「そう。これはドラゴンの鱗だ。だからお前の言うことは本当なんだろうな。……それで、話があるんだが」

「何ですか？」

店主は突然頭を下げる。

「この鱗、俺に譲ってくれないか？」

ドラゴンの鱗。店主の態度からするとエラク貴重なんだろう。だが、俺が持ってても意味が無いのも事実だ。

「良いですよ。代わりに槍の修理代、少し安くしてくれますか？」

俺の言葉を聞いた店主は勢い良く頭を上げる。

「ありがたい！安くするどころかタダでいい！いや、それじゃ足んないな……。そうだ！」

思い出したように店主はポケットから一枚の紙を取り出して渡してきた。
紙には『ハリア闘技大会申込書』と書いてある。

「これは……？」

「見ての通り闘技大会の申込書だよ。うちに置いてる最後の一枚だ」

「闘技、大会……」

確かに、槍が直るまでは暇だ。けど。

「槍がそれだから武器が無いですよ」

「心配ない。ちょっと待っててくれ」

そう言うと店主は店の奥に引っ込んだ。少しして戻って来た店主の手には刃渡りが肘から手首程の長さの小刀が握られている。
そしてその小刀を俺に差し出してきた。

「俺の最新作だ。これを使え」

「でも俺、槍使いで……」

「大丈夫。闘技大会は遊びのつもりで楽しんでくれれば良い」

店主は俺の手に無理やり小刀を握らせる。

「どちらにせよ丸腰は危険だ。持っておいて損は無いだろうよ」

「じゃあ、ありがたく、使わさせて貰います」

俺は頭を下げて、小刀をベルトに納めた。

「うん。闘技大会の受付は明日からだ。湖の畔に大きな闘技場があるからそこで受付に申込書を出してくれよ」

――……。

「さて、どうしようかな」

取り敢えずベルトに納めた小刀は慣れてないからか少し落ち着かない。

明日の闘技大会ではこの武器を使う。『遊びでいい』とはいえやっぱり、練習しといた方が良いかな。

陽はかなり落ちている。

練習するにも時間はあまり残されてない。

でも、ま。

今考えれば闘技大会の準備だろう。慌ただしく動き回る人々。それに、観光だろうか。湖に向かう人々。

槍も無い。練習する時間も無い。けれど、この活気は嫌いじゃない。

むしろ、久しぶりに楽しい。

「よし。俺も大会を盛り上げる力になろう。……武器の練習なら公園とか無いかな」

張り切って探し回ると、町の中心部から外れたところに手頃な公園を見つけた。

「……あ」

公園の中を見て俺は足を止める。先客がいた。

俺と同じかそれより上の年頃だと思われる少年二人が木刀を手にして対峙している。

明日の闘技大会の練習、かな？

……そうだ。

「あー、明日の闘技大会の練習？」

俺は勇気を出して練習中の二人に声をかけてみた。

すると二人のうち、髪の長い方がこっちに気付いて振り返ってきた。

「ああ、そうだよ！……君も大会に出るのか？」

気さくな笑顔が印象的だ。俺も笑顔でこたえる。

「出るよ。……実は今日町についたばっかりでさ。明日の大会、良くわかんなくて少し困ってた」

「へぇ……。旅人なんだ？」

もう片方の少年も会話に加わってきた。もう片方は髪が短く、クールな印象。

二人とも普段から運動しているのか、細いながらもしっかりと筋肉がついた体つきをしている。

「旅人……みたいなもんかな？王都に向かってるんだ」

「そうか。あ、良かったら練習に交ざらないか？明日の闘技大会の事も教えるよ」

長髪の気さくが練習に誘ってくれた。

ラッキー。まぜて貰おう。

「いいのか？ありがとう！あ、俺は輝だ」

自己紹介すると、最初に話しかけてきた長髪の気さくな方はマーカスと名乗り、もう一人の短髪でクールな方はユリウスと名乗った。

どうやらマーカスは短剣を、ユリウスは長剣を使うらしいことが二人の木刀の長さからわかる。

「輝も短剣を使うのか？」

マーカスが俺の腰に帯びられてる小刀を見て言った。

「ん。ホントは槍使ってるんだけどな。小刀を使うのは初めてだ」

「へぇ、槍使いなんて珍しいな」

ユリウスは興味深そうに言う。

「珍しい。槍使いは軍隊以外であまり見たこと無いな。対人というよりは対モンスターっていうイメージもあるし」

「そうなのか」

基本的に相手にするのはモンスターだから問題ないな。俺にとっては。

「っと、じゃあ早速練習再開しようか。輝はその短剣危ないから鞘に入れたまま使ってくれな」

マーカスが仕切り直して俺に念をおした。

「ああ、わかった」

うなずきながら鞘をしっかりとトめる。
それを見届けてマーカスがまた口を開いた。

「ルールは特にない。相手を降参させるか気絶させるか。使えないとは思うけど魔法は駄目だ。いいな?」

「了解!」

『風の刃』無しで戦えば他に細かいルールは気にしなくても良い、ということだ。

早速ユリウスが木刀を構えた。

「さ、始めるぞ！」

――……。

あの後夜更けまで二人に戦い方を教えて貰いフラフラになって宿に戻って来たものの、すぐにベッドに飛び込んで寝てしまった。

そして翌日。

疲れてはいたけど短時間睡眠が染み付いている俺は朝日が昇るような早い時間に起きてしまった。

「……少し、体動かそう」

俺はまだ低い位置にある太陽が照らす外へ出る。道には人の居ない露店が沢山開かれていた。

マーカスとユリウスによると『ハリア闘技大会』はお祭りの様な側面を持っているらしく、湖の観光も相まって大陸中から人が集まってくるらしいのだ。

「よし、やるか」

宿の前の道の真ん中で俺は手に持った小刀を構え、早速昨日教わった動きを復習する。少しずつ体に染み付く技と汗。ある程度の所で

俺は練習を中断した。
町の人が起きてきて、露店の準備をそろそろと始めたからだ。小刀を鞘に納めて俺は宿に戻った。

部屋に戻って朝食を適当に食べ、体を洗い、朝の細々とした準備をのろのろと終えると陽は大分高くなっていた。

そろそろ行くか。

食料等は置いたままにし、小刀と少しの荷物を持って俺は部屋のドアを開ける。
『朝食を食べたらマーカスの家に行く』。昨夜の約束だ。

宿の主人に部屋の延長を頼み、宿を出る。

「うお」

宿を出ると、外にはびっくりするような数の人がいた。まるで都心の駅前のような人数に、都心とは正反対の生き生きとした活気。
どこかの露店からか漂ってくる香ばしい食べ物の匂い。

正真正銘、お祭りだ。

……見とれてる場合じゃないな。

俺は手に持つ地図を時折確認しながら、住宅街の方へと進んでいった。

――……。

「えーと。次は右か？」

無事に人混みを抜けた俺は、マーカスが昨日書いてくれた地図を手に住宅街をさ迷っていた。

住宅街は似たような建物ばかりで歩きづらい。というか、完全に迷った。人混みが無いのが唯一の救いだ。

軽くため息をつく。

諦めてそこら辺の民家の人にマーカスの家の場所を聞こうとした時だった。

「お、輝か？」

背後から声がして振り返る。すると、ユリウスがこっちに手を軽く振ってきた。

ユリウスの腰には昨日の木刀とは違い、白い鞘に納められた長剣が帯られている。

良かった。

これで迷わなくて済む。

駆け寄ってきたユリウスは不思議そうな顔をして一言。

「あれ。宿から来たのか？方向がおかしいけど」

素直に「迷った」とは言えず、俺は言葉を失った。

――……。

「しかしすごい人の数だな。ここはそうでもないみたいだけど」

マーカスの家に向かいながらユリウスに祭りの状況を伝える。ユリウスはさほど驚きはしない。やっぱ慣れてるからか。

「王国全土から人が来るんだ。闘技大会のある競技場と大通りは夜になると今以上だ」

「うわ……」

今以上？

だったら『歩く場所も無い』が本当になるじゃないか。

呆れた俺の表情が面白かったのかユリウスは俺を見て笑った。

「まぁそうげんなりすんなって。……お、着いたぞ」

「……え？」

思わず俺は息をのむ。

ユリウスの指差す先には一軒の家があった。不思議なのはそれが木製の日本家屋である事だ。立派な庭園まで有って、松の様な木が生えている。

「どうした、輝」

「え、ああ。……いや、何でもない」

俺は訝るユリウスを必死で誤魔化す。

落ち着け。

今までだって『元の世界』に有りそうな家はあった。

そもそも完全に外国人の名前の人が日本語使ってたり時計だって『元の世界』と同じくアラビア数字が使われていた。

今さら驚くことじゃない。

そして考えたってわからない。

……今は、何も考えないでおこう。

「……ああ、そうか」

テンパる俺の横でユリウスが納得した様な声を出した。

「輝は旅人だったな。確かに、こういう家は珍しいよな。俺とマーカス、後、エリスって奴の家もこんな感じだ。……湖の中に小さい島があるのは見たか？」

「ああ。町に入る時に見たよ」

ユリウスは「それだ」と小さく頷いて話を続ける。

「あの島にはな、怪物が封印されてるんだ」

「怪物？」

「ああ。この王国の作られた時代、不思議な槍を持ったとある魔術師があの島に怪物を封印した。……その島の管理を任されたのが俺

やマーカス、エリスの一族の源流。だからその伝統のせいでこんな家に住んでるんだよ」

「そうなんだ……」

良く解らないが複雑だ。

でも、この世界にも『歴史』があるという事はハッキリとわかった。

何か、手がかりになるかも知れない。覚えておこう。

それからユリウスが玄関先でマーカスを呼ぶと、すぐにマーカスが出てきた。

マーカスは昨日は流したままだった長い髪を後ろで束ねていて、やはり腰には木刀ではなく鞘に納められた短刀を帯びている。

「よう輝！……じゃあ早速行こうか」

「そうだな」

マーカスにユリウスが頷く。

「……？どこに行くんだ？」

二人の言ってる事がよく分からない。

闘技大会は夕方からだし、どこに行くのだろうか？

「受付に行くんだよ。大会の直前に受付に行くと混んでて地獄だからな」

ユリウスが説明する。
そしてマーカスが続けた。
「んで、勿論輝は昼まだだよな？受付終わったら一緒に祭回ろうぜ？案内するよ」
断る理由なんてない。
むしろ嬉しい。
「ありがとう！すげぇ助かるよ！」
――……。
「こんな抜け道が……」
俺はユリウスとマーカスの案内で、大通りから少し外れた路地裏を歩いていた。
どうやら人混みを避ける抜け道らしい。
確かに人は全然いない。が、薄暗く、不良とかが溜まりそうな場所だ。
「オレらは昔から大会に出てるからな。こういう抜け道は任せとけ！」
マーカスはトン、と胸を叩いて微笑んだ。
路地裏を抜けると、すぐそこに競技場と思われる建物とその入り口近くに受付があった。受付にはクリーム色の髪の女の子が座っている。

受付で座っている髪の長い女の子はこちらに気付くと笑顔になった。

「あ！マーカス！ユリウス！」

女の子はマーカスとユリウスと面識が有るらしく、手を振っている。

「よおエリス！」

「仕事してるか？」

マーカス、ユリウスも順にそう言うと受付へと手を振り返した。

どうやらあの女の子がユリウスの言っていたエリスのようだ。

「え、と。そちらの方は？」

エリスは小首を傾げて俺を見る。俺は軽く頭を下げて自己紹介した。

「旅人の久喜、輝です」

良く解らないが、何故か敬語になってしまった。

「コイツは大会に初参加だ」

「って事で受付頼むよ」

「うん、わかった！」

横からユリウスとマーカスが助け船を出してくれた。エリスも了解

したのか、俺が闘技大会の申込書を渡すと手元の名簿に名前を書き込む。

「じゃあ武器を預かるね」

「ハイよ」

「わかった」

ユリウスとマーカスは腰の刃物をエリスに渡す。
俺はそれをボーッと見ていたら、声をかけられた。

「輝くんも、いいかな？」

「え？武器預けんの？」

「ゴメンね。きまりなんだ」

俺は軽く拒否った。が、ダメなようだ。

ある程度旅をしてきて、武器を身から離さないことが大事だと解っていたから、正直怖い。
武器を渡すのを渋っていたらマーカスが説明してきた。

「今日の闘技大会には王国の要人も見に来る。反乱軍がそこを狙う可能性があるかもだから武器を預かってんのさ」

反乱軍ね。シュヘルの町長とかもそれに含まれんのかな。
……仕方ない。

「……そっか。わかった」

俺は納得して武器をエリスに預けた。

いざとなったらこっちには『風の刃』がある。大丈夫だ。

俺はペンダントを軽く握った。

――……。

それから数時間は仕事中のエリスを置いて、俺、ユリウス、マーカスの三人でお祭りを満喫した。

そろそろと日が傾き始め、時計を見ると既に時刻は3時を回っていた。

大会が始まるのは5時。

「……緊張してきた」

俺が言うとユリウスは腕時計を見て、マーカスを呼んだ。

「マーカス。そろそろ休息でもとろうか。もう3時だ」

「もうそんな時間か！そうだな、わかった」

頷いたマーカスが俺に向き直る。

「輝、俺達はこれから俺の家で少し休んでから競技場に向かおうと思ってるんだけどお前はどうする？」

「そうだな……」

休むのも良いけど、武器屋に預けた槍の直り具合も見ておきたい。

「俺はもう少し見て回るよ」

時間になったら直接競技場に向かう旨を告げて、俺は武器屋に向かった。

――……。

武器屋に行くと、冷やかしの観光客が武器を物色していた。俺は中から、カン、カン、と鎚を打ち付ける音が響くのを聞いて中へと入っていく。

「すいませーん！この前槍の修理頼んだものですけども！槍どうですかー！？」

武器屋の奥に向かって鎚の音に負けないように大声で呼び掛けると鎚を打ち付ける音が止み、奥から昨日の店主が出てきた。

「あぁ、君か。槍なら順調だ。君の方は小刀、使いこなせるようになったか？」

「一応基本はユリウスとマーカスに……。あ、この二人は俺の友人で」

店主は「へぇ」と頷いて笑顔になる。

「あの二人に教わったのなら大丈夫そうだな」

「……？知ってるんですか？」

聞くと店主はこたえる。

「ああ、あの二人は有名だな。あの島の守護家だし毎年大会で上位に食い込んでる。ま、面倒見もいいしな」

「そっか」

大会上位。昨夜の練習見る限りでは確かに教え方も上手いし、かなり強かったもんな。

店主は笑顔を崩さずに言う。

「言ってもあの二人は特別だ。この大会では低年齢層が勝ち残るのは難しい。君は気楽に戦ってくれ」

俺にプレッシャーがかからないように気を使ってくれてるんだろう。その店主の心遣いは素直に嬉しい。

「はい、分かりました。……っともうこんな時間だ。ありがとうございました！大会、行ってきます！」

「ああ、頑張ってくれ！槍は安心して任せとけよ」

俺は再度お礼を言って店をでて、競技場に向かった。

闘技大会

大会開始のギリギリの時刻。
また道に迷って少し遅刻した俺は受付でエリスから小刀を受け取り、早足で競技場の中へと入っていった。

「本当、すげぇ人だ……」

競技場はひたすらに活気で満ちていた。
だだっ広い広場にきっと試合に使うのだろう約二十メートル四方で区切られた四角が何十個も並んでいて、中央には一際大きな試合場もある。
それをグルッと取り囲むように観客席がある。サッカースタジアムや、古代ローマのコロッセウムなんかにも似ている。

で、俺は何処に行けば良いのだろうか？

「あ、いた！」

「おーい！輝！」

立ち尽くしていた俺に声がかけられる。
声の方を見るとユリウスとマーカスがこっちに手を振っていた。

「お、助かった」

二人に案内してもらおう。

胸を撫で下ろしながら俺も手を振り返した。

「探したぞ、輝。……うーん。そうだな。時間無いからとりあえずついてきてくれ」

「わかった」

言われるままに二人についていく。コロッセウムの内部に観客席の入り口とは別の扉から入った。

内部には細長い廊下が長く続いていて、緩やかにカーブがついている。観客席は試合場をグルッと取り囲んでいたからこの廊下も円形なんだろう。

戦士専用の入り口だったみたいで、廊下は屈強そうな戦士達であふれかえっていた。

廊下の脇には扉が幾つもあって、各々に『第〇〇控室』と書いてある張り紙がしてある。

「輝はここだな」

マーカスが立ち止まって右側の扉を指差す。

「ありがとう、助かったよ」

お礼を言って、控室に入ろうとしたらユリウスに止められた。

「待て、輝はすぐに試合だ。その前に注意事項があるから聞いとけよ」

「注意事項？」

ユリウスの横でマーカスが頷く。

「そう。簡単に言うと２つだ。１つは形式。今年も５００人以上の戦士がエントリー。人数が多いから８ブロックに分けてトーナメントでやる。今日はブロック優勝者が全員でたら終わりだ」

「わかった、けど、『今日は』って？」

口を挟んで質問したら驚いた顔をされた。

「闘技大会は２日かけてやるんだぞ？知らなかったのか？……まあいいや。２つ目は武器。真剣アリだ。つまり人殺しも認められてる」

「……は、い？」

人殺しも認められてる？

恐怖に固まった俺をマーカスが笑いながら叩いた。

「大丈夫。降参すれば終わりだし審判も助けてくれる。そうそう死人なんて出ないよ」

死人は出ない……安心していいのか？

……不安だけど、これもきっと、訓練になる。俺はこれからも独りで旅をして独りで帰る方法を探さなきゃいけない。

俺は小さく覚悟を決めて大きくうなずいた。

「わかった。他には無いのか？」

「特には無いな。あ、そうだ。俺とユリウスはシードがついてるから暫く試合も無いしエリスと観客席にいるよ。何かあったら聞きに来てくれ。何か聞きたいことはあるか？」

そうか、マーカスもユリウスも強いって武器屋の店主も言ってたな。

「そだ。俺のブロックはマーカスとユリウスとは別なのか？」

ユリウスが頷く。

「ああ。俺は第5ブロック。マーカスは第1ブロック。輝は第7ブロックだ。後で控室の壁に貼ってあるトーナメント表見とけ」

その横からマーカスが続ける。

「輝、そろそろ一回戦だ。試合場に向かった方が良い」

そして俺はマーカスとユリウスに急かされて急いで自分の試合場へ向かった。

――……。

「紳士淑女の皆様！今年も遂にこの時期が来ました！今年の戦士達はどのような戦いを我々に見せてくれるのでしょうか！？……いえ、熱い戦いに長い挨拶は要りませんね。では、ハリア闘技大会！スタート！！」

テンションの高い正装の男の大会開始の挨拶が終わると同時に、打

楽器の騒がしい音楽が競技場に鳴り響いた。

「試合、初め！」

俺の試合場についている審判が試合の開始を宣言する。
周りの他の試合場でも戦いが始まっている様で、剣戟ぶつかる鋭い音や一撃に気合いを入れるための掛け声なんかも響き始めた。

その沢山ある試合場の一つで、俺は一回戦の相手を見つめる。

オーソドックスな剣を逆手に持ち俺を見据えている少年。
緊張しているみたいで、全然動かない。

……コイツ、素人だ。

余裕が出来た俺は小刀を抜き、先手必勝を狙って駆け出した。

小刀で少年の胴を真っ直ぐに突く。

「うわ！」

悲鳴に近い声を上げながら少年は俺の小刀を剣で受け止めた。逆手持ちの少年は懐に大きな隙を作る。

俺は隙の出来た少年の腹を右足で跳ね上げる様に思い切り蹴り上げる。

「げほっ」

腹に蹴りを入れると少年の剣から伝わる力が弱まった。

俺は小刀の柄を思い切り少年の手首に叩きつけて、少年が剣を取り落とした所に足払いを入れる。

「う、うわああ！」

そして案外簡単に地面に倒れた少年の喉元に小刀を突き付けた。

「降参しろ」

そう告げると少年はコクコクと首を縦に振り、降参の意思を表した。
命がけの戦いではあるが、極力殺生は避けたい。

「勝者！久喜輝！」

審判が俺の勝利をコールした。

――……。

試合が終わり、俺は戦士控え室へ戻ることにした。

競技場の中の円形の廊下を歩きながら一回戦の相手との戦いを思い出している。

あの戦い方は完全に素人だった。

参加してくるのはなにもマーカス達のような腕の立つ奴等だけじゃないのか。
確かに、旅人がすんなりと参加できる大会だ。ノリや罰ゲームとかで参加したヤツも居そうではあるし、腕試し程度の参加者だっているだろう。

あんまり勝利した記憶は無いが実践経験を積んでる分、俺は有利。

「少し、気楽にいけるかもな」

だけど、そんな甘い認識は控え室に入った瞬間に完全に消え失せた。

廊下を歩きながら他の控え室を覗く限り本来控え室には一部屋あたり十人程が割り当てられている。

だが、俺が部屋に入った時には中に3人しかいなかった。

「……ッ！」

少し驚いて部屋の中を見ていると一人の戦士と目があった。

戦士の腕には、血で赤く染まった包帯が巻かれている。

その戦士が包帯を新しいのに巻き変えながら目があった俺に話しかけてきた。

「……お前、この大会は初めてだろ？」

「あ、ああ。初めてだ」

少し、動揺する。

戦士が交換している新しい包帯が次々と血にまみれていくのを見て、不安になる。

その戦士は俺から目をそらし、包帯を巻きながら話を続けた。

「この戦いは真剣勝負だ。俺は腕で済んだが次は命を獲られるかも

しれない。お前も気を付けろよ？」

言って、ニヤリと笑う。

ゾッとするような威圧感。体が、硬くなる。

もしかしてこの部屋にいた戦士達は試合で取り返しのつかない重傷を負って戦いの舞台から消えたんじゃないのか？

ああ、俺は考えが甘い。こんな所に来るべきじゃなかっ――。

「――おいおいオッサン、あんまり少年をからかうなって」

横から声がした。

同時に金縛りの様な体の硬さは吹き飛んだ。

危ない。あの包帯の戦士の空気に飲まれる所だった。

俺を救ってくれた声の主を見ると、若い二十代くらいの金髪の剣士。

若い剣士は弛く笑う。

「ビビんなよ少年。この大会、そうそう殺しなんて起きない。大ケガだってそんな居ないし、したとしても王国から回復魔法使いが来てるから大丈夫」

そう言うとその若者剣士は俺の肩をトントンと叩く。

「あ……」

その若者剣士に、安心させてくれた事の礼を言おうと口を開きかけた時、控え室の木製のドアが開いた。

どうやら大会のスタッフのようだ。

「久喜輝さん。第１４試合場で次の戦いです。試合は１０分後なので準備が出来たら向かってください」

大会スタッフはそれだけ伝えると「では」と言って控え室を出ていった。

「まぁ頑張ってこいよ久喜輝少年！」

「はい！えーと……」

「俺か？俺はエレックだ。また控え室で会おう！」

俺はエレックと名乗ったその金髪の若者剣士に頭を下げてから試合場に向かった。

――……。

試合場に着くがまだ相手の戦士は来ていなかった。試合場には俺と審判だけ。

「早すぎたかな」

何となく手持ちぶさたな俺は自分の腰に差している小刀を腰から外してみた。昨日からずっと使っている小刀。

鞘は簡素な作りな上、革で出来ているので軽い。

柄にも握りやすいように革を巻いてある。これはマーカスに教えてもらった。

俺は柄を強く握って目を閉じる。

……まだ一日の付き合いだけど、勝たせてくれよ。

願をかけ、腰に再び小刀を戻すと、ちょうど相手がやって来た。

「……！お前は……」

試合場に入ってきた戦士は見覚えのある姿で、手に包帯を巻いている。

そう、控え室にいた手負いのあの戦士だった。

「よォ坊主、さっきは済まなかったな」

そう言ってその戦士は小さな手斧を右手に持った。

「遠慮は要らねぇ、本気でかかってこいや」

自信満々に見える戦士だが、まだ包帯には新しい血が滲んでいる。

こんな状態で戦ったら傷口に良くない。

「でも、その腕じゃ……！」

「舐めるなよ！腕の傷一つで遅れなどとらん！」

相手は自らを鼓舞するが如く大声を出した。

「……！」

俺は思わず一瞬の恐怖に駆られて剣を抜く。

くそっ！

相手は手負いだぞ！？

この位でビビってどうする！

「……では、両方準備も宜しいようなので」

冷静な審判の一声がその場を制した。ゆっくりと審判が腕を高く上げる。

戦いの前の一瞬の静寂。

睨み合う戦士と戦士。

心地よく、でも吐いてしまいそうな緊張感。

そして今、審判の腕が振り降ろされた。

「……試合開始！」

「うおォ！」

審判が腕を振り降ろした瞬間に俺は走り出していた。

相手の武器は手斧。しかも手負いだ。

……なら小刀の速さでカタをつける！

俺は簡単に懐に潜り込むと、右手に持った小刀を相手の喉元に突きつけようとする。

しかしその直後、衝撃と共に俺は吹っ飛ばされた。

「悪いな、俺は格闘も得意だ」

「うぐっ！」

鼻をおもっくそ蹴られた！

糞痛ぇ。

俺は鼻を手で押さえながら立ち上がった。ヌルッとした感触。鼻血が出ている。

視界が痛みで飛びそうになる。前を見ると相手が手斧を構えて走ってきた。

突進の勢いを乗せて振り降ろされる手斧。

俺は辛うじてそれを小刀で受け流す。

斧等の重い武器が相手の時、耐久性の無い小刀での防御に受け止めるという選択肢は無くなる。

だから相手の攻撃は受け流すことが必須。

昨日散々マーカスに叩き込まれた動きで手斧を受け流された相手は当然隙だらけになった。

もう一度その瞬間に小刀を突きつけようとするが、相手がまた蹴りを入れようと足を引いているのを見て直ぐ様後ろに回避した。

ポタポタと鼻血が床に滴り落ちる。

「くそっ……」

相手と再び間合いを取りながら小刀を両手で構えた。

相手に傷をつけないで勝てるほど甘くない。それにこのままだと。

相手は大きく踏み込んできて間合いを詰め、右手で手斧をこっち向かって振る。

もちろん受け流しはしたが相手の空いてる左手が小刀を受け流しに使って無防備な俺を殴った。

このままだと……負ける！

「っハァ、くっそ！」

殴られ、吹っ飛ばされながらも歯を食い縛って起き上がる。

武器が……！

小刀は今殴られた衝撃で俺の手を離れていってしまった。

眼前には勝利を確信して手斧を構える相手。

「さァ、終わりだ！」

再び振り降ろされる斧。

相手が巻いていた包帯がいつの間にほどけたのかヒラヒラと斧の軌跡を描いている。

包帯？……そうだ！

斧が俺を仕留めようと襲いかかってきたその瞬間。

俺は、血の滲んだ包帯を巻いた相手の腕を強く蹴りつけた。

「っぐ！……チィ！」

包帯の傷口が開き、血が一気にこぼれだす。

俺は相手が痛みで取り落とした斧を素早く拾うとそのまま斧を相手の顔面に突き付けた。

「はぁ、はぁ。……俺の勝ちだ」

「ぐ……安心しろ。卑怯とは言わねぇさ。相手の弱点を狙うのは基本。……降参だ」

相手は痛みで顔を歪ませながら降参した。

安堵でその場に崩れ落ちた俺の後ろで。

「……勝者！久喜輝！」

審判が試合終了を告げた。

――……。

試合が終わり、俺は控え室に向かっていた。

勝利はしたけど気分は冴えない。

「……卑怯、だよな」

先ほどの試合。
俺は勝つために、相手の傷口を攻撃するという行為をしてしまった。
罪の意識に囚われながら控え室に戻ると、既にそこにはエレックがいた。
エレックは俺に気付くと笑顔で声をかけてくる。

「お、少年。試合勝ったんだろ？俺も最後見てたぜ」

「見てたんですか？」

「ああ、暇だったしな。……何だ浮かない顔だな。さっきの試合か？」

見透かされてギクリとする。この人に嘘はつけない。
俺はゆっくり重い口を開いた。

「……さっきの戦い。俺卑怯だった」

「卑怯じゃないさ。あのオッサンもそう言ってただろ？敵の弱点を付くのは戦いの常識だ」

「でも……」

「でもじゃねえ。勝ったんだろ！そんなに気にするなら辞退でもし

たらどうだ？」

突然エレックが語気をあらげた。

俺は少しビビって黙りこくる。「でも」と口をついて出そうな言葉を抑えて。

「……不思議なんだよ、少年は」

今度は静かにエレックが言葉を紡ぐ。俺はその彼の目を見た。

「試合を見た限り、少年は強い。でも、その力は、何か違和感を感じるんだよ。……力を得るために努力したヤツが持っている『誇り』を感じない。……いや、違うか。悪い。解んなくなってきた」

俺から目を反らして頭を抱えるエレック。俺は、エレックの洞察力に冷や汗を感じていた。自分の胸元に目を落とすと銀色のペンダントが揺れているのが見える。

『誇り』。

偶然『力』を手に入れた俺には無いモノなのかもしれない。

だけど。

「俺は辞退しない」

俺は手を強く握りしめた。エレックが顔を上げて俺を見る。

辞退したくない。……この世界に来て久し振りに負けたくないって思えたんだ。

エレックに色々言われて、自分の本心が垣間見えた気がする。

「ありがとう。俺、まだやれる気がするよ」

エレックの表情が和らいだ。

「……そっか。それなら、良かった」

それから俺とエレックは打ち解けて、控え室の固い木製の椅子に座って話していた。

俺は二人きりになった控え室を見回しながら言う。

「そう言えばもう一人いましたよね？」

確かさっきは俺、エレック、包帯の戦士ともう一人、寡黙な戦士がいた筈だが。

訊くと、エレックの表情が曇った。

「あぁ、もう一人はな。……死んだよ」

死、んだ？

どういうことだ？

「審判が助けてくれるんじゃ？」

「助けられない時もある。審判より強い奴はザラにいるからな。それに……」

「それに……？」

エレックは辛そうに顔を歪ませる。

「いや、何でもない」

だが不意に微笑むと、自らの剣の手入れを始めた。

――……。

「よっしゃ！」

俺は二回戦の相手の包帯の戦士程の強者と戦うこともなく、６回戦までを勝利で収め、順調に駒を進めていった。

今日は夜１０時までに全８ブロックのそれぞれの優勝者を決める。

シードなしの俺は８回勝てば第７ブロックで優勝出来る。後、２回。

六回戦での勝利を手に控え室に戻るとエレックはまた剣の手入れをしていた。

「お、少年。勝ったんだね？」

エレックが俺に気づいて話しかけてくる。

俺はうなずいて答えた。

「ああ、次は準決勝だ」

「その歳で、か。確か16だよな？俺も、頑張んねぇとな」

ドアの開く音がした。
大会のスタッフだ。
エレックを呼びに来たようだ。

「負けんなよ」

「まだ、負けられないさ」

微笑んでエレックは六回戦へと赴いていった。

――……。

「いくぞっ！」

俺は小刀を握って試合場を走る。
第7ブロック準決勝の相手は着物の様な独特な服を着た女性。手には重そうな長い太刀。剣士だ。

女性相手はやりづらいがここまで来た以上負けるわけにはいかない。

何より……エレックと闘ってみたい。

さっきのエレックの試合をこっそり見に行ったが、彼は対戦相手を圧倒的な力の差の下に、一刀に斬り伏せていた。
勝てるとは思えなかったが、負けたとしても得るものがありそうだ。

それもこの試合で勝てたらの話。

まずはこの着物女を倒さないと。相手も準決勝まできた強者だ。手を抜いたら簡単には勝たせてくれない。

俺はそのまま走って間合いを詰め、身を屈めて懐に潜ろうとする。それを相手は女性の細い腕には似合わない太刀で切りつけてくる。

「っぶね！」

後ろに飛んで回避。目の前寸前を太刀の切っ先が通りすぎる。俺はもう三歩素早く後ろに下がった。

着物女は黒い髪をなびかせ太刀をもう一度構える。

俺は落ち着いて小刀を握り直し、相手の太刀の間合いへ入っていった。

「たぁっ！」

掛け声と同時に太刀の鋭い突きがきた。俺は太刀の先端を小刀でずらす。銀色の刃が左肩のすぐ横をすぎてゆく。

「っ……まだ！」

突いた太刀を間髪入れずに引きながら右薙ぎ。

太刀の重さは小刀じゃ、受けきれない！

「……う、お」

俺は低く低くしゃがみ、太刀を避ける。太刀を振り切った着物女は隙だらけになった。

今だ！

一気に首へ小刀を突きつける。

「降参し――痛っ！？」

突きつけた小刀を着物女が太刀を持ってない方の手刀ではたいてきた。俺は小刀を取り落としはしないがバランスを崩す。

不味い……！

思った瞬間に、着物女は太刀から手をはなし、俺の襟を掴んで――俺は勢い良く投げられた。

同時に、相手が鈍い悲鳴を上げた。

「っうぐ！」

俺は受身を取ってすぐ立ち上がる。目の前で着物女がうずくまっている。

俺が投げられる直前に着物女の両手首を斬りつけたのだ。

「うぐぅ……」

痛みで涙を流し、うずくまる女性に俺は血で濡れた小刀を突きつけた。

「……降参しろよ」

息は上がっている。でも、つとめて冷静に。威圧感を与えるように。

「……っ、降、参よ」

首元に突き付けられた小刀を見て勝機は無い事を認めて相手は降参した。

「勝者！久喜輝！」

審判が試合終了を告げる。

勝った。その安堵感と共に着物女への罪悪感が沸き上がる。

「……強い、です、ね」

「ああ、いや、ありがとう」

痛みを堪えて必死に喋る着物女を見ていられず、お礼もそれなりに俺は試合場を逃げるように後にした。

勝つためには非情さも必要だ。負けられないんだろう？

自分に言い聞かせたが、罪悪感はそれでも溢れてくる。

――……。

勝って控え室に戻るとすぐに、大会のスタッフが控え室で休んでいたエレックを準決勝に呼んだ。

エレックは剣の手入れをやめて椅子から立ち上がる。

「どうやら俺の番みたいだね。相手は……」

トーナメント表を見た彼は渋い顔をする。

「そうだったな。『彼』か」

「『彼』？知り合いなのか？」

エレックの呟きを聞いて気になった俺は聞いてみる。

こんな大規模な大会で知り合いと戦うなんてことは珍しいだろう。

それなのに、随分と浮かない表情をしてる。

少なくとも『良い奴』じゃないのかな？

「知り合い、ね。まぁ、近いかな」

エレックは苦笑いでこたえた。

「『彼』の名前はデミアン、今の所『彼』と戦った人物は全員死んでる。この控え室にいた『もう一人』を殺したのもそうだよ」

『もう一人』。

2回戦が終わった後に姿を消した寡黙な戦士の事だ。

そういえば、死んだって言っていたな。

「デミアン……か」

復唱する。
名前と噂を聞く限り、凶悪な犯罪者の像しか出てこない。

「大丈夫。俺は死なないし、勝つのも俺だ。不安ならまた俺の試合を見に来るといい」

暗い雰囲気を吹き飛ばすようにエレックは明るい声でそう言うと、長剣を手に先に試合場へ行ってしまった。

――……。

「あ、あそこか」

俺はエレックが去って少ししてから試合場へ向かった。試合場には小さな人だかりが出来ていて分かりやすかった。
観客を掻き分けて前に出て試合場を見上げるとエレックは試合場の真ん中で対戦相手のデミアンを待っていた。

まだ始まってないのか。

「……来たぞ、デミアンだ……」

「……！」

突然観客の一人が興奮を覚えた声で、しかし静かに呟いた。
一気にざわめきが広まってゆく。

そして、エレックとは反対の方向から一人の人が試合場に入ってきた。

「あれが、デミアン」

デミアンの容貌は、俺が『人殺し』というイメージから抱いていたものとは逆の、線の細い感じの少女のような少年だった。
その黒い髪は男にしては長く、顔も女性的なので、一瞬見ただけでは女と間違われてしまうかもしれない。
腰に差しているのは何の偶然か俺と同じく小刀。

ただ一つ異常なのは、その何故かボロボロの服に、返り血だろう紅いシミが大量についていることだ。

見た目は、服装を覗けば、そんなに怖そうじゃないな。
……エレックなら勝てるんじゃないのか？

ふと気づくと両者が揃ったのを確認した審判が腕を高く上げ、そして振り下ろす。

「……試合開始！」

エレックは真剣な顔つきで抜刀した。

対するデミアンは無表情で抜刀すらしない。

「……」

……あれ？なんで動かないんだ？作戦か？

一方エレックはエレックでデミアンの様子に警戒して動かない。

二人とも動かない。

試合場の外の俺までもが緊張のはりつめた沈黙に包まれる。

「……ちっ！」

そんな中、先に動いたのはエレックだった。
痺れを切らしたエレックは剣を握ってデミアンとの距離を一気に縮めて斬りかかる――。

「……！？」

――一瞬だった。

デミアンは何でもないように剣を避けながら小刀を抜刀した。
そしてそれと同時に、まるですれ違うように小刀でエレックの脇下を斬りつけた。
横で冷静に観ていた俺でも辛うじてわかる動きだ。対峙していたエレックには何が何だか解らなかった筈だ。

しかし見事としか言いようがない。

観客もデミアンの無駄のない流れるような一瞬の動きに息を飲んでいる。

「ぐっ！」

脇下の傷の痛みからかエレックの剣を握る手に力が入っていない。
あれじゃ戦えないだろう。
エレックも敗け悟ったのか剣を地面に落とした。
「参った、こうさ。……！」
エレックが降参を審判に申し入れようとしていた瞬間。
デミアンは無機質な表情に氷のような冷たい笑みを浮かべた。
その不気味な笑みに背筋が冷たくなる。
対戦相手は皆死んでる？…まさか！
「死ね」
降参を申し入れようとして無防備になっているエレックの首めがけてデミアンが小刀を突き出した。
「危ねぇっ！」
叫んだ俺は試合場に横から入り込んでデミアンの小刀を鞘で受け止めた。
こいつは、デミアンは、降参しようとした相手でも……殺す気なんだ！

俺が乱入したからかデミアンも審判もエレックも観客も沈黙する。
俺は気にせずに小刀を構え直すと、デミアンに呼びかけた。

「今、降参しようとしてただろ！何で殺そうとした？」

「……」

デミアンは俺が乱入した時から全く表情を変えない。驚きも、反感も、何も無いのか。

「……邪魔。興醒め。もういい」

小刀を引いてデミアンは小さい声でぼやく。

「審判。結果」

小刀を鞘に納めたデミアンが必要最小限の言葉で審判を急かす。

唖然としていた審判はエレックの降参を受け入れて試合終了を告げた。

同時にデミアンが試合場を立ち去ると、観客もどんどん去っていき、試合場には俺とエレックが残った。

「少年、助かったよ」

エレックは脇下の傷の痛みが辛いのか、脂汗を流しながらお礼を述べてくる。

「いや、大丈夫ですよ。それより、あいつは一体……？」

「……少年、このまま行ったら君は第7ブロックの決勝で彼と戦うことになる。棄権という選択肢があることを忘れないで欲しい」

そしてエレックは俺の目を強く見据えた。

「君には未来がある。絶対に命を棄てるような選択はしないでくれ」

小さな成長

レンガ作りの紅い壁に囲われた控え室はとても静かで、少し寒い。

とうとう、俺一人になってしまった。

威圧感を与えてきた手斧の戦士も、デミアンに殺されたという寡黙な戦士も、俺の目の前で敗北を喫したエレックも、もう、ここにはいない。

俺は独り、『アクセサリー』の力を使って今までの闘いで傷ついた体を癒している。体力は使うが、次の試合、決勝戦までまだ時間がある。

……第7ブロック決勝、相手はデミアン。

脳裏にデミアンの華奢な姿と狂気の宿った眼が浮かぶ。

怖いけど、ここまで来たんだ負けたくない。勿論棄権なんて絶対あり得ない。

「ふー。……」

傷は全部癒えた。思ったよりも体力は使わなかったな。

後はただ試合開始を待つだけ。ブロック優勝者を決める決勝戦。これが終われば今日の大会の全行程は終わり。

俺は控え室のレンガ造りの壁に掛けられている時計を見る。

９時２５分。

どうやら試合が長引いたようで、大会の終了時刻は１０時から延びるということを先程大会のスタッフに聞いた。

ブロックごととはいえ、決勝戦。中央の大きな試合場で一試合ずつ行うらしい。

９時３０分から第一ブロック決勝戦がはじまる。第７ブロック決勝戦は１０時３０分の予定だ。

「大分あるな……」

後一時間。落ち着かない。ソワソワする。完全に緊張してる。

どこか行こうかな。

そう思って立ち上がろうとしたときだった。

コンコン、と乾いた音が静かな控え室に響く。ノックの音。

……誰だ？

マーカスはこれから第１ブロックの決勝。ユリウスもエリスもその応援だろ。

大会スタッフの事務連絡か？

「……？」

俺は疑問に思いながらドアを開く。

「よぉ。元気か？」

訪問者は、ケガをしてる筈のエレックだった。

――……。

「で、どうだ、少年。決勝を前にした心境は？」

エレックは変わらず笑いかけてくる。俺もつられて笑いながら、椅子を勧めた。

「お、ありがとな」

礼を言って座りながらエレックは続ける。

「やっぱり少年、棄権なんてしないだろうと思ったよ」

話しぶりを聞くに、少し俺の事を心配してくれたみたいだ。じゃなきゃ、脇下に包帯巻きながらここまで来ないだろう。

「ん、まあ。うん」

煮え切らない感じだが、俺は肯定の意思を表す。

負けたく、無い。

こんなこと、久しぶりに考えた。

「この大会、出て良かったな」

俺も座りながら小さく呟く。そして向かいに座るエレックの包帯を見て、デミアンの狂気じみた行動を思い出した。

「……デミアン、手強いだろうな」

エレックは大きく頷く。

「確かに『彼』は強いと思うよ。でもな、勝つ方法が無いわけじゃない」

「勝つ、方法……？」

俺はその言葉に疑問を抱きながらエレックの顔の方を向いた。

「ああ。かなりキツい戦いになるけど『覚悟』はあるか？」

真摯な目で、俺に問う。

あの時ラルガさんに説かれた『覚悟』。
今の俺にはあるだろうか？
この大会に出て、俺は少しでも変われただろうか？

きっと、ここが正念場だ。

「『覚悟』ならある。大丈夫だよ」

「そうか、安心した」

真剣な表情をニヤリと笑って崩しながらも、その目は変わらずだった。

――……。

夜のとばりの中、湖の町のある一角だけが活気づいている。比較的大きな町だが恐らく人口はそこに集中している。

競技場を囲むのは、ローマのコロッセウムを思わせる円形の観客席。

競技場を強く照らすのは、とにかく巨大な篝火と松明。

その競技場の中心の試合場に審判が立った瞬間、ついさっきまで活気づいていた会場は静かになった。

審判が大声で観客に呼び掛ける。

「それではお待たせしました！第７ブロック決勝戦を始めます！……選手は前へ！」

合図を受けた二人の戦士が競技場中央の試合場へ歩き出した。

――……。

競技場の中央にある一際大きな試合場は２０メートル四方の台になっている。

俺はその台に登る為の階段の前で深呼吸をした。

肺に満たされる夜の独特の匂い。空には元の世界と同じように星や月が輝いて、地上では巨大な松明とかがり火による光が照らす。

緊張した体がわずかにほぐれてきた。

しっかりと小刀を握る。

「選手は前へ！」

審判の合図だ。

階段を登って、反対側にいる相手を見る。デミアンはゆっくりと試合場についた。

ぼろぼろで汚れた服を着ていて、腰には小刀を帯びている。男にしては長い髪のせいで表情は見えない。

そのまま睨んでいると審判はデミアンに手を向けた。

「デミアン・ダグラス！」

周囲３６０。から歓声が巻き起こる。

デミアン・ダグラスか。フルネームは初めて聞いた。

今度は俺の方に手を向ける審判。

「久喜輝！」

さらに歓声。さっきやっと取れた緊張が舞い戻ってきた。

割れんばかりの拍手と歓声が続く。そして３０秒ほどたった所で審判はおもむろにその右手を高く挙げた。

「……」

観客はまた静かになる。

俺もまた、耳を済ませて前方のデミアンに集中する。

もちろん、審判のその一言を聴くために。

「……」

震える手で、小刀の柄に手をかけた。

ついに競技場に物音が一つもしなくなり、張り詰める緊張に包まれた時。

審判の、その手が、勢いよく振り下ろされた。

「……試合開始っ！」

大きな打楽器の演奏が始まると共に観客席にはまた活気が満ちる。

戦いの始まりだ。

「さぁ……行くぞ！」

気合いを入れて、小刀を抜く。

「……」

俺と相対するデミアンは無口で剣を抜いた。

「……！」

エレックの時とは全く違って、最初から小刀を抜いてきた。

そのままお互いに硬直して、でも俺は小刀を構えるデミアンを見据える。

やっぱり、全然隙が見つからない。

デミアンは小刀を順手で自分の少し前に突き出すように構えていた。

剣の類いは相手に長さを正確に悟られないようにする為に、構えは突き出す、引くの二種類になるという話を何処かで聞いたことがある。

当たり前だが体は半身。

これは確か相手から見て自分の体をを少しでも小さく見せる為。

何気なく構えているデミアンの構えには、一目でわかる程沢山の戦いの知恵が詰まっている。

俺は不意に控え室でのエレックとの会話を思い出した。

――……。

「俺はデミアンの強さを隙の無さ。つまり無駄の省かれた動きだと考える」

「隙の無さ？」

俺は聞き返した。

「そうだ。例えばヤツは構え一つとるだけでも違う。絶対的に隙が無い。お手本のような構えだよ」

そう言ってエレックは苦笑していた。

――……。

「……なるほど、ね」

話を聞いていた時は半信半疑だったが、実際に対峙すればわかる。
こちらから動くのがためらわれる程、全く隙が見つからないわけだ。

同様にデミアンも動かない。固まったまま。

挑発か？
罠か？

でもこのまま相手が動かない気なら……こっちから行くしかない。
隙が無いのなら作り出してみせる。

俺は小刀を相手に突き出しながら相手にジリジリと近づいていく。
慎重に、慎重に。

あと少しで刃が届く。唾を飲んだら喉が鳴った。

そして、間合いが重なった。

「……！」

先に動き出したのはデミアン。
デミアンは突き出して構えていた小刀を軽く踏み出しながら縦に小さく振ってくる。
俺は小刀を横に構えてそれを受け止めて、そのまますぐに反撃しようと相手の小刀を弾く。同時に左足で相手の脛を狙って下段にキックを放ったが、デミアンはすでに小刀を引き、また守りに入ってい

た。

「……くそ」

手強い。

今までの相手にはここまで隙の無い構えを、動きをするヤツはいなかった。

攻撃にもこれといった隙が見えない。いくら上手く受け流せてもこっちの反撃に繋げられない。

でも、勝機が無い訳じゃない。

今だって相手の動きをしっかり目で追って、その攻撃のある程度は予測出来た。

『見切り』が出来たんだ。

俺はエレックを仕留めたデミアンのあの流れる動きを思い出す。

俺の『見切り』は何処まで通じる？

もしかしたら、勝てるかも知れない！

今度はこっちから仕掛ける！

「行くぞッ！」

俺は真っ直ぐ小刀をデミアンに向かって突き立てた。相手は造作なく半歩下がり俺の突きを避ける。と、同時に、小刀を左上段から右下段へと斜めに滑らせてきた。

俺は小刀を両手で縦に構えて受け流す。そのまま距離を詰める――
が、相手は俺が受け流した流れのままに下から上へと小刀を滑らせ
てくる。

「ちっ」

距離が詰まってるから今から後ろに下がっても間に合わない！

俺はとっさに半身になってかわした。体から数センチ離れた空間を
相手の小刀が切り裂いていく。
そして、切り上げた相手は懐ががら空きになった。

……よし！

俺はそこを狙って小刀を一気にデミアンに突き立てる。

……もらった！

勝利を、少なくとも相手に傷を負わせられる事を確信した、次の瞬
間。
突然、左脇腹と左肩に痛みを感じた。

そして右手の小刀に手応えが伝わってこない。
何より、目の前にいる筈のデミアンが、居ない。

「え……！？」

脇から血が流れ出す。
左手で脇を押さえながら振り返るとデミアンがその女顔を歪ませて

嘲笑っていた。

「このボクが、あんな大きな隙を見せると思う？」

コイツ……わざと！

俺が『隙』だと思ったのはフェイントで。

俺はその『エサ』にバカみたいに釣られたのか！

「いっ、てぇ……！」

思い出すように脇腹が痛み出した。俺は痛みで倒れそうになるのをギリギリで踏ん張って耐える。

目の前には、狂喜と恍惚の表情をしたデミアンがいた。

「降参したい？させないよ？お前は邪魔したからな。ボクを認めて貰うチャンスだったのに」

『認める』？

どういうことだ？

くそ。痛みで頭が働かない。

「まあ、いいや」

急に笑みを止めて無表情のデミアンが小刀を振り上げた。

「楽しいのはここからだよ？」

冷たい輝きを放つ小刀が迫る。

俺はそれをしゃがんで避けた。

「……う」

動く度に、痛みが体を駆け巡る。
そのまま体勢を立て直す間もなくデミアンの一突き。俺は小刀でそれを弾いて立ち上がり様に切り上げる。が、それも易々と避けられる。

「……もう良いよ。殺してあげる」

冷ややかな声がして、相手は小刀を構えた。

「死ね」

首筋に、瞬迅の刃が。

死にたくない！

「ッ！」

息を飲む暇もない。

俺の反射が、考えるより速く体が動かす。

刃を目で捉える。
顎を引く。
上体をねじる。
左手を引く。
腰を落とす。

膝を曲げる。

右手の小刀で、相手の刃を、止める。

首の寸前でデミアンの刃が止まった。

俺が、止めた！

「……！？」

動揺の色をたたえるデミアンの顔。

油断している！

俺は右手に力を入れた。

「うらぁっ！」

迫っていた刃を強く弾く。

同時に、デミアンの舌打ちが聞こえる。

俺は小刀を持っていない左手に拳を作った。

「食らえ！！」

慣れない左でのパンチは鈍い音と共にデミアンの腹部に入った。

「くッ……」

苦悶の表情を浮かべて、でも小刀を振り上げて俺を狙ってきた。

慌ててデミアンと距離をとる。

「……はぁ、はぁ。ボクは負けられないんだ」

デミアンは観客の歓声に掻き消されそうなほど小さく呟く。さっきまでそこに見せていた余裕は無くて、代わりに衰弱したような表情と汗とが占めていた。

たったの一撃で、こんなにダメージを負っている。

「……やっぱり、か」

俺は確信を持って呟いた。

約一時間前のことだ。

俺はエレックからある重要なヒントをもらっていた。

そう……デミアンを倒す方法の手がかりだ。

――……。

「デミアンは強いが勝つ方法がない訳じゃない」

「勝つ……方法？」

俺が聞き返すとエレックは笑顔で、いや、苦笑に近い表情で頷いた。

「デミアンは実は弱いんだ。どう見ても『彼』は武術に適した体をしていない」

そう言われて俺はデミアンの華奢な体を思い出して頭に描く。

確かに、一見強そうではない。

成る程、と納得して相槌を打つとエレックはまた話し始めた。

「『彼』は武器の達人の動きを極限まで体に叩き込んでる。『彼』の強みはそこにあるんだ」

エレックは力説するように溜めを入れる。

「つまり」

――……。

彼の身体能力に直に働きかける。

……体力を削り取って、重い一撃を入れる！

「うおおお！行くぞ！」

俺はデミアンに斬りかかった。

休む暇はあたえない！

「うらぁ！」

思い切り小刀を振り下ろす。

「！」

デミアンが素早く反応、俺の斬撃を受け流す。
今度は燕返しで斬り上げる。避けられる。
右手を少し引いて、突き出す。それも、避けられる！

くそ！

俺は右足を半歩下げた。

一旦体勢を立て直……！

「逃がさないよ」

一閃。俺が退こうと意識を反らした瞬間にデミアンの小刀が俺の太股を切りつける。

「ぐあっ……！っく！」

足がやられた！
もう距離を取れない！

……いや、必要ない。

ここで一気にカタをつける！

「何、で。倒れ、ない。はぁ、はぁ」

俺を睨むデミアンが肩で息をしている。

俺が出血多量で倒れるか、デミアンが体力不足で倒れるか。
我慢比べだ！
「うおお！」
再びデミアンに斬りかかる。
避けられて、受け流されて、俺が手を休めると、反撃。
「倒れ、ろよッ！」
甲高い声で叫びながら斬りつけてくる。
だけど、その太刀筋にはさっきまでのような鋭さが無い。
それに、速さに慣れてきた。
「……ッ！」
俺は初めて、牽制ではないデミアンの『俺を狙った』一撃を受け止めた。
「クソッ！」
悪態をついて相手が俺と距離を置く。俺はさっき切られた太股の痛みで動けない。
「……ボクは負けない。お前を殺す！」
彼の息はかなり乱れてきている。

今だって確実に見切れた。
絶対に、勝てる。
「ハァッ！」
袈裟に斬りつけてくる。
俺は体を反らして避ける。
体を反らしてそのままの相手。見せられた小さな隙。
『ここ』だ！
「うおお！」
肩を狙って鋭く突き立てる。
だけど、対する相手は不敵に笑った。
「かかった、ね」
……！
フェイントか！
「痛っ！」
気づいた時は遅くて、俺の右手の小刀は吹っ飛ばされていた。
「やっと、終わりだ」
最後の一瞬を楽しもうと、デミアンはゆっくり小刀を構える。

「……ぐ」

避けられるか？
この足で？
相手にはフェイントもあるのに？

「さよなら」

違う。

小刀の切っ先が真っ直ぐ向かってくる。

俺を狙っているならフェイントなんて関係無い。

「うおああ！」

俺は左手で相手の小刀の刃を掴んだ。痛みと共に赤い液体がほとばしる。

辛いが、決して離さない。

「……！抜け、ない！」

「負けられないのは、俺も――」

相手の小刀を握り、引きながら右足を少し引いた。
デミアンの表情が恐怖におおわれていく。

「――同じだッ！！」

叫ぶと同時に引いた右足で渾身の蹴りを放った。

「ぐ、あ」

デミアンの腹に俺の靴がめり込んでゆく。俺は相手の手から小刀を奪いながら、その華奢で軽い体を蹴り飛ばした。

デミアンは二メートル程ふっ飛んで、そのまま、立ち上がらない。

……俺の、勝ちだ。

刃を握ったせいで痛む左手の力を抜くと、カラン、という金属音を立てて地面にデミアンの小刀が落ちる。

それを右手で拾い、デミアンに近づく。近くまで行くと、体を震わせながらゆっくりと上体を起こして俺を一度睨んでから「う……」と呻いて血を吐いた。

自分がやったことだけど、目をそらしたくなる。

そして俺は何も言わずこっちを睨むデミアンの喉に小刀を突き付けた。

「降参しろ。俺はお前と違って殺しはしない」

俺が言うと同時に観客席から大音量の声援や拍手、罵倒の声が聞こえてくる。観客も俺の勝利を確信したようだ。

「いや、だ……」

「……！」

デミアンの敵意に満ちていた大きな目が、突然恐怖を訴えるモノに変わった。

様子がおかしい。

デミアンは怯えながら頭を横に振る。

「嫌だ！……もう、殺してくれ。そうだよ、もう生きていたって仕方ないんだ。……ボクを殺してくれよ」

徐々に、表情が虚ろに支配されていく。諦めの様な、……何処かで見たような顔だ。

駄目だ。感情移入しちゃいけない。

俺は自分に言い聞かせて、もう一度小刀を強く突きつけた。

「良いから……降参しろ！……！」

するとデミアンの方からその首を小刀に当ててきた。

「ころせって！コロせよ！こんなボクに価値は無いんだ！！」

怯えた目で嘆願するように。

「……ッ！」

そう、その目は……。

シュヘルで空たちから逃げる事を決意した時、鏡に移った俺の目と、同じだった。

「降参しろ！！」

思わず声が荒くなる。
目の前の敵がダブる。

「ころ――」

「――うるせぇ！黙れ！！その目をするなよ！！！」

気付くと俺は、デミアンの頬を殴り飛ばしていた。

「はぁ、はぁ」

勝手に息が上がる。
デミアンは殴られて倒れたまま動かない。

既に、気絶していた。

「第7ブロック優勝者！久喜、輝！」

不意に審判が俺の勝利を告げる。
安堵と共に力が抜けてきた。

脇、左手に太股。
傷つけられた痛みが戻ってきて俺は地面に倒れて、そのまま意識を手放した。

――……。

大会の今日の全行程が終わり、活気だっていた競技場から人々が出て行く。観客や観光客らは各々の家や宿に戻っていった。

競技場一ヶ所に集まっていた光が散らばって、町はまた明かりを取り戻していった。

しかし中には競技場に残る人もいる。残っている何十人かの人々は試合場で貸し出されている木刀を持って模擬戦をしていた。

訓練であったり、雪辱戦であったり、腕試しであったり様々だ。

ユリウスとマーカスはそんな競技場をウロウロしていた。

大会の後から姿を見せない輝を探しているのだ。

「どこいったんだろ？控え室には居なかったしな……」

マーカスは心配そうに呟く。

時計はもう0時を回っていて、帰るべき時間だ。

「マーカス！」

澄んだ声で呼び掛けるのはエリスだ。マーカスは振り返って「おお」と返事を返す。

「輝は居たか？」

「ううん。医務室には居なかったよ」

エリスはかぶりを振って否定した。どうやら医務室を探してきたようだが、輝は居なかったみたいだ。

「結構傷付いてたし、医務室だと思ったんだけどな。……あ！」

マーカスが何かに気付いたように顔をあげると、その目線の先にはユリウスがいた。隣には、フラフラと歩く輝もいる。

「ごめん皆。つい控え室で寝ちゃってさ」

輝は申し訳なさそうに謝る。が、相当疲れてる様で言葉と目線がハッキリしない。

「大丈夫か輝？……早目に帰って休んだ方が良いんじゃないのか？」

マーカスが心配そうに聞くと、輝は「そうするよ」と頭を縦に揺すった。

「じゃあ、俺、宿屋に戻るわ」

「あ、待てよ。心配だから皆で送ってく」

帰り道を歩き始めた輝の肩を掴んでユリウスが言うと、マーカスとエリスもうなずいた。

――……。

エリスはマーカスとユリウスに手を振る。

「送ってくれてありがとう！明日も頑張ってね！」

そしてマーカスの家の様に大きな日本屋敷へ帰っていった。

あれからマーカスとユリウスとエリスの三人は輝を無事に宿屋に届け、今エリスも家に帰ったところだ。

「……」

「……」

エリスがいなくなり、会話が自然と少なくなる。

住宅地に二人の足跡が響くなか、不意にユリウスがマーカスに話しかけた。

「決勝での輝の戦い方、お前が教えた戦い方とかなり違ったよな？」

輝に小刀を教えたのはマーカス。したがって戦い方も同じかもしくは似たものでなければおかしい。

マーカスもうなずく。

「そうだな。……特にあの『肉を切らせて骨を断つ』見たいな自身を犠牲にする戦い方は教えていない。というか、普通は怖くて出来ない」

相手に切られる事もいとわずに攻撃を続けた輝の戦い方を思い出しながらマーカスは言う。

「傷だらけになって損な戦い方だ」

ユリウスが苦笑いをする。
しかし、マーカスは笑わなかった。

「確かに損だ。少なくとも得じゃない。……でもあんな戦い方は『あるモノ』を持ってないと出来ねぇんだぜ？」

「『あるモノ』？」

「『覚悟』っていうヤツだ」

聞き返すユリウスにそう言ってマーカスは微笑んだ。
つられてユリウスの苦笑が楽しそうな顔になる。

「……確かにそうだな。『覚悟』を持った彼が明日の相手だ。何か、楽しみになってきた」

「ああ」

そうして『覚悟』を認められた輝との戦いを楽しみに、二人はそれぞれ家へと夜道を急いだ。

囚われの心

気が付くと、俺は草原を歩いていた。
吹き渡る風は涼しくて、爽やかな気持ちになる。

「……！」

周りには、一樹が空が速人が綾香が舞がいて、一緒に歩いていた。

「ああ……そっか」

これは夢だ。

俺の周りで五人は他愛もない話で盛り上がっている。

なんて下らない。
でも、なんて懐かしい。

独りで森を抜けた。変な商業施設にも行った。軍人に指南を受けた。
ドラゴンと戦った、負けた。闘技大会に出た。信頼できそうな人たちに出会えた。デミアンに勝った。

話したいことがある。
伝えたいことがある。

俺が、自分から逃げたくせに。

俺は足を止めた。
空たちは足を止めずに談笑しながら草原を先へ先へと歩いていく。
徐々に距離が開いていく。

走って追いかけたい衝動を抑えて、拳を握った。

「待ってくれ！」と訴えることも出来ない。素直に謝ることも出来ない。

俺はヘンにひねくれてしまったのか。

空たちの後ろ姿が草原と晴れた空の碧に滲んでいった。

――……。

視界には宿屋の天井。
昨日、マーカスたちに送って貰ったんだっけか。

「……変な夢だったな」

目が覚めても視界が微かに滲んだまんまだった。
おまけに頬に涙の乾いたあとまである。

くそ、情けない。顔でも洗おう。

上体を起こし、ベッドから下りる。昨日の激戦の痛みは全て消えていた。魔法の便利さを改めて思う。

「……顔、洗おう」

固いベッドから這い出して洗面所へ向かった。そのまま小さな洗面所で顔を洗う。顔を上げると、鏡の中の自分がボロボロの服を着ていた。
長旅と昨日の大会が原因だろう。

「はぁ、直すか」

俺は布切れで顔の水気を拭き取り、ベッドのある部屋まで戻るとバッグの中から裁縫道具を取り出した。

以前寄ったフォルの商店で買っておいた物だ。とはいえ糸と針とあて布位しか使用用途が解らない。
もっと真面目に家庭科の授業を受けとけば良かった。

「とりあえず、頑張ってみるか」

――……。

「うーん。まあ、着れるだろ」

一時間近くかけたのだが俺の残念な裁縫スキルのせいで少し惨めになってしまった。でも他に服も持ってない。

まぁいいや。誰も俺の事なんてそんな見ないだろ。

直したての服に袖を通すと俺は小刀を掴む。とりあえず槍の修理の具合でも行こうかな。

準備をして扉のノブを握る、と、扉の隙間に何かが挟まっているの

に気付いた。

「……ん？」

Ａ４位の大きさの紙だ。何か書いてある。俺はそれを手にとって目を通した。

『昨日はお疲れ様。言い忘れてたけど闘技大会の第二部、決勝トーナメントは午後二時からだからな。遅れるなよ。マーカス、ユリウス、エリス』。

なるほど、あいつらが。

手紙を部屋に置いた俺は少し嬉しくなって微笑みながら外へ出た。

――……。

「お、来たか。随分と早いな」

武器屋を訪ねると、店主は既に店を開いていた。

「おはようございます。……槍を見ておきたくて。何処まで直りましたか？」

聞くと「ああ」と言って店主は笑みを浮かべて店の奥に入っていく。

しばらくすると、店主は見事に直った槍を持ってきた。

「君も昨日は頑張ってたからな。俺も頑張らせて貰った。……ほら、受け取れ」

店主はヒョイと槍を投げてくる。

「うわっ、と」

慌てて両手で受け取る。

渡された槍は、小刀に慣れてきた俺にとって少し重く感じられた。

折れていた部分を見てみると、そこには傷一つも無い。完璧に直っている。

「ありがとうございます！助かりました！」

手にずっしりと感じる重みも、剥き出しの鉄の感触も折れる前の槍のそれだ。

ドラゴンに折られてからずっと壊れた槍を持っていた俺だ。久しぶりに自分の得物を握ると、安心感と共に懐かしさを感じた。

「どうだ？問題はあるか？」

目の前の店主が聞いてくる。その表情は不安というよりは自信が表れていた。その自信の通り、槍は元通りだ。

「はい、大丈夫です。……あ、そうだ」

思い出して俺は腰の小刀を外して店主に差し出す。

「槍戻ってきたし、これありがとうございました」

しかし店主は首を横に振ってきた。

「これはもう君のモノだ。良い戦いも見せて貰ったしな」

「ホントですか！……ありがとうございますっ！」

「さぁ、試合は二時からなんだろ？しっかり休んどけよ」

そう言って店内へ戻っていく店主の背中に俺はもう一度頭を下げて武器屋を去った。

――……。

武器屋を出て、俺はフラフラと町中を歩いていた。

闘技大会は今日まであるのでまだ屋台はたくさん出ていた。観光客やら地元の子供たちやらが楽しそうに談笑しながらはしゃいでいる。それを見ているとこっちまで楽しくなってくる。後は気の置けない仲間でもいたら最高に楽しかったのかもしれない。

「……しかし時間が余っちまったな」

このまま町を漂うのもアリかもしれないが、ずっと歩いていたら疲れそうだ。と、歩きながら考えていた俺の視界に不意に水色が映る。

「そうだ。どうせだし湖見てこうかな」

ここハリアの中心には大きな湖がある。ハリアの町並みは湖を中心

にすり鉢型になっているから、坂を適当に下っていけばいずれは湖にたどり着くハズだ。
闘技大会の始まる二時まで充分すぎる程の時間もある。

「屋台も湖の近くの方が多そうだし。行ってみるか」

とりあえず湖に行くことを決めた俺は、何も考えずに坂を下り始めた。

――……。

数分後、俺は自分でも良く解らないが、薄暗い路地裏をさ迷っていた。

「……あー。どうすっかな」

呟いて俺は一度立ち止まる。

何も考えなかったのが不味かったのか、町中を湖に向かってふらついている内に変なところに出てしまった。

直感を信じて色々歩き回ってみたものの、更に怪しげに入り組んだ路地裏へ迷い込んでいってしまうばかりだ。

道は一向に解らないが、俺が方向音痴だということはハッキリとわかった。

それとなくこの薄暗な通りを見ると、良くわからない生ゴミや布切れが散らばっていたり、あまり衛生が良くなさそうだ。人ももちろんいる。だが酒に溺れて昼間からフラフラしてる人や、何か傷だら

けの厳ついオッサンが地べたに商品を広げて露店を営んでいたりと、なんだか堅気とは程遠い。

これがスラムというものなのかは、日本でぬくぬく育った俺にはわからない。でも、俺がここにいるのは場違いだ。

早く大通りに出ないと。

「……はぁ。……ん？」

溜め息を吐きながらまた歩き始めようとすると、近くから鈍い音が聞こえてきた。

「……あぁ」

聞き覚えがある。

この音はヒトが人を殴ってる音だ。

慌てて鈍い音が聞こえてきた方へ行くと、そこでは5、6人の屈強そうな男が誰をいたぶりなぶっている。

時折、そのうずくまる誰かの悲鳴とも唸り声とも取れる音が聞こえる。

その光景が昔と被る。

助けるか？……いや、バカな事考えるな。六対一で勝てるわけが無い。第一俺には関係無い。

関係無いんだ。

関係無いと、思うのに。

「何やってんだ！てめぇら！」

気づいたら一声叫んで右手をかざして『風の刃』を放っていた。

『風の刃』は真っ直ぐ飛んで、暴行に加わっている男の内の一人の腕に当たった。

「いって！何すんだお前！」

腕を押さえて俺を睨む。

俺は右手をもう一度相手にかざした。

「うるさい、私刑を止めないんならもう一度」

右掌に銀色の風が集まる。

「『これ』を撃つぞ！」

「くそ、魔法使いかよ！……おい、逃げるぞ！」

男は俺の『風の刃』を見るなり仲間を率いてさっさと退いてしまった。

俺はホッと胸を撫で下ろす。流石に、あんなに多くは相手には出来ない。

「……良かった」

この世界では魔法使いは相当強い存在なんだな。

「う……」

か細い唸り声がした。

声の方を向き直ると、ボロボロになった人がうずくまっている。
呼吸が荒い。大丈夫かな？

「えーと。立てますか？」

恐る恐る手を差し伸べると、ゆっくりと華奢な手が俺の手をつかんだ。

「ありがと……」

少し高い声。
……どっかで聞いた覚えが、ある。

そいつが顔を上げる。と同時に目が合った。

「……！」
「あ！お前は！」

男にしては長めの髪に、線の細さ、大きい目。
そして圧倒的な狂気……は感じないが、この人物は、俺が昨夜凌ぎを削った少年……デミアンだった。

――……。

俺は路地裏を、何故かデミアンをおぶって歩いていた。
何故かというか『傷だらけで可哀想だから』というただの中途半端な偽善からだ。

こんなことしても絶対に得にならない。なのに何をやってるんだろう。俺は。

しばらく路地裏を歩くとデミアンが俺の肩を叩いてきた。

「ここまで来れば、大丈夫……」

「そうか？」

俺はそれを聞いて、デミアンを地面に下ろす。デミアンは壁を背もたれにして腰を下ろした。
改めてデミアンを見ると、見るも無惨な有り様だ。頬には昨日俺が殴った後も残っている。

俺は胸元からペンダントを取り出した。

「傷、治そうか？」

「……」

反応が無い。
無視かよ。

「治すからな」

イメージを浮かべるとペンダントから銀色の光が溢れる。俺が疲労感を覚えていくのと引き換えにデミアンの傷は少しずつ癒えていった。

「ありがとう……」

デミアンは不思議そうな表情でペンダントの光を見ている。

「……いや」

俺はデミアンの顔を除き込んだ。

やっぱりそこには昨日のような狂気は感じられない。性格も違うような気がする。

覗き込む俺と目が合うと、デミアンは慌てて下を向いた。

人と目を合わせるのが苦手なんだろうか？

「……」

ずっとうつむくデミアン。

「……」

居心地の悪さを感じ始めた俺。

沈黙も苦しくなって来たので、俺はデミアンにいくつか質問をぶつけてみる事にする。

「……どうして反撃しなかったんだ？お前ならナイフ一本あれば百人殺せるだろ？」

昨夜は命をとりあった相手だ。今更素直になるのは気に食わないのでさっきの事を皮肉まじりで問いかけてみた。

「……武器がないと」

デミアンが小さい声で言うのが聞こえる。意外にすんなりと会話が成立した。

しかしそういえばそうだったな。エレックが言っていたようにコイツは体自体は弱いんだった。

それにしても雰囲気が変わっている。戦いの時だけ豹変する……とかなのか？

「ずいぶん幼く見えるけど、年幾つなんだ？」

喉仏も出来てないし、もちろん声変わりもしてないだろうから小学生ぐらいか。と、予想したんだけど。

「十、五……たぶん」

意外にも俺とひとつ違いみたいだ。だけどたぶんって何だよ。自分の歳も正確に覚えてないのか？

……駄目だ。こいつにいくら疑問をぶつけてもまた新しい疑問が出てくる。もう聞くのはやめよう。

そう決心して数分の後、昨夜の俺が殴ったせいで出来た頬の打撲痕を最後に治し、全身の治療が終わった。

体を疲労感が襲ってきたが、やっぱり魔法を使い始めた頃と比べるとさほど疲れない。

「……他に痛い所は？」

デミアンが頭を左右にふるふると動かしたので俺は立ち上がった。

続いてデミアンもゆっくりと立ち上がる。それを横目に見て、俺は一番聞きたかったことを質問した。

「なぁ……。何で敵を殺そうとするんだ？俺にはそれが全然解らない」

デミアンが下を向いて、固まる。

すると路地裏の陰から聞いたことがある声が聞こえてきた。

「……デミアン・ダグラス。１５才。武術の名門ダグラス家に嫡子として生まれながらして、悲しい事に体格にも恵まれなかった。しかし短剣術においては天賦の才があり、未来はダグラス家を率いていく存在。……と、まぁこれが表向きの設定だ」

「誰、だ？」

声が聞こえてきた方へ問うと、意外とあっさり返事が返ってきた。

「具合はどうだ少年？」

陰から出てきたのは控え室で一緒だったあの若者剣士――エレックだった。

「エレック！」

「よう、わりと元気そうだな」

わずかに弛く癖のある金髪をなびかせながらエレックは微笑んで、続ける。

「デミアン、だね。俺はエレック。よろしく」

「……」

デミアンはエレックを見上げて、頭を下げた。

それにしても。

「エレックさんは何でここに？」

こんな路地裏で『偶然バッタリ』なんて考えられない。

俺が疑問に思ってエレックに聞くと、軽くため息をつかれた。

「ああ。それはむしろこっちが質問したいんだけどね」

質問を返されて俺は苦笑いで答える。

「……恥ずかしいけど、道に迷った。で、エレックさんは何故？」

「迷子か」と苦笑しながらエレックはうなずいて、話し始めた。

「一緒にいるなら知ってるかもしれないけど。今『彼女』狙われてんのさ。他でもないダグラス家にね。俺はそれを助けようと……」

「……ん？ちょっと待って」

俺はエレックの言い方に間違いを感じて、一旦話を止める。

「エレック、デミアンは男だろ。幾ら女っぽいからって流石に『彼女』は違うでしょ」

少し笑いながら間違いを修正した。

のだが、エレックはわずかにも笑わない。そして。

「いや、デミアンは女っぽいんじゃなく正真正銘の女だ」

とんでも無いことを良い放ちやがった。

「え？いや、え？だって……」

俺は即座に横にいるデミアンの胸元を見る、んだけど。

いやこれは、ぺったん……。

同時にデミアンと目が合った。すっごく顔を赤らめている。

というよりは、しかめっ面？

というよりは、デミアン何故か右手に拳をつくってる？

「余計な、お世話」

冷たい声と一緒に、お前丸腰でも充分戦えるだろ、と叫びたくなる

ような一撃を顔面に受けて、俺の意識は一瞬トンでいった。

――……。

「まぁ彼女はダグラス家が徹底的に洗脳・訓練を施してきて、この戦闘能力を得たってわけだ。……少年、大丈夫か？」

エレックが、デミアンに殴られて鼻血を出している俺を気遣ってくれる。もうほっといてくれ。

第一鼻血出して大丈夫な訳が……。ちらりと横を見ると、まだにらまれていた。

しかし、にらんだ顔でも、女と突然言われて納得出来るだけの容貌はしている。

男にしては長めの髪は女にするとショートカットって感じになるし、大きな目も『愛嬌があれば』かわいいかも知れない。うん、『愛嬌があれば』。

俺は横にいるデミアンの冷たい視線を感じながら乾いた笑い声を上げる。

「いやっ。この位大丈夫ですよ」

「そ、そうか。じゃあ、続ける。洗脳状態にあった彼女なんだけど、少年との戦いに負けて意識を失うと同時に催眠が解けたんだよ。……デミアンちゃん、心当たりはあるね？」

デミアンは小さく頷いた。

エレックはまた話し始めようとする。

「デミアンちゃん、って言いにくいな。第一デミアンは男の名前だし」

「じゃあ一時的にでも何か名前考えようぜ？もちろんデミアンが良いって言うんならだけど……」

俺は魔法の力で鼻血を止めて会話に参戦しながらデミアンの方をちらっと見る。

デミアンは照れていながらも確かに小さく頷いていた。

「デミアン、ていうのはボクの家で家長になるものが貰う名前なんだ。だから、ボクはボクの名前が欲しい」

エレックもその言葉を聞いて頷く。

「決まりだな。……しかしどんなのがいいか、といわれると意外と難しいな」

確かに。

名前はその本人にずっと付きまとうモノだ。いっそ自分で付けてくれると楽なんだが。

うーん。『デミアン』。略して『でん』。焼肉屋みたいだ。却下。

「あ」

不意に、閃いた。

「じゃあさ、デミアンの『デ』と『ン』をとって『ミア』ってのは

どうだ？」

「何故『で』と『ん』をとったのかは解らないけど、何か猫っぽくないか？」

言いながらエレックがデミアンに苦笑いを向ける。
しかし苦笑を向けられた先のデミアンは少し嬉しそうな表情をしていた。

「ボクは猫、好きだよ。……うん。『ミア』がいい」

照れているのか顔をうつ向けてるけど『ミア』という名前が気に入っているようにも見える。

「じゃあ、デミアンちゃんはこれからミアちゃんだな。改めてよろしくミアちゃん」

「うん、よろしくミア」

「……よろしく」

照れ笑いをしているミア。見守るような表情のエレック。俺もつられて笑顔になってしまう。

……でも俺は、笑顔の裏でどこか引っ掛かっていた。

この子は人を何人も殺してる。洗脳だからって赦されることじゃない。そのことに気付いた時にこの子の心は無事でいられるだろうか。

――……。

俺たちはエレックの案内で町の表通りに入る寸前まで戻ってきた。
大会もありミアの顔が町の人に割れてるから表通りには入れない。
寸前なのはその為だ。

「で、これからどうすんだ？俺はこれから試合だけど……」

俺は槍をいじりながら言った。

でも今日の決勝には小刀で出るつもりでいる。槍使いではあるけど久し振りすぎて自信がない。それに、一対一なら素早い小刀の方が良い気がする。

あれこれ考えていたら袖を引っ張られた。ミアがこっちを見上げている。

「……え、と。名前」

細い声だ。話し慣れてないんだろうな。

「ああ、名前？久喜、輝。輝で良いよ」

そう答えると、ミアは首をふるふると振った。黒いショートが靡く。

「……名前、……。……ありがとう……」

それだけ言って袖を放しそっぽを向いてしまった。

「それで、少年」

いきなりエレックが視界に割って入って来た。

「ミアちゃんはかなりマズい状況に追いこまれてるんだ、解るよね？」

ダグラス家は軍事の名門。その手勢がミアを血眼で探してる。

「解ってるけど。……？」

大変な状況みたいだけど俺には大会もあるし、正直関係ない。

「今『関係ない』って思ったろ？」

話しながらエレックがそっぽを向いているミアの肩に手を乗せる。

「こんなか弱い少女が窮地に追い込まれてるってのに放っておいて試合に行くのか？それに」

エレックはミアにこっちを向かせた。目が合う。

「名付け親、だろ？」

俺はエレックの言わんとするところを理解した。

要するに、ミアを助けるのに力を貸せ、と。しかしその為には闘技大会の辞退もしなきゃいけない。

はっきり言ってゴメンだ。だけど……。

「……わかったよ」

ミアの目を見てたら、名付け親だと思ったら、何と言うか、仕方無い。

「俺で良かったら力になるよ」

俺がこんな風に考えるようになるとは思わなかったな。

――……。

あれから俺一人で近くの出店まで行って、適当に三人分買って昼食。『アクセサリー』の魔法を使ったことで失った体力を取り戻し、再び路地裏を歩き始めたのは一時を回った頃だった。

「で、どこ行くんだ？」

お腹もこなれて元気になってきた俺はエレックに問う。エレックは「うん」と一度頷いてから答えた。

「やっぱりさ、これから一生ダグラス家から逃げ続ける。っていうのはミアちゃんにとって辛すぎると思うんだ。だから……」

「……だから？」

「ダグラス家に直談判してミアちゃんを除籍してもらう。その為の武力として少年に声をかけたんだ」

そう言ったエレックはミアを振り返って「ミアちゃんさえ良ければだけどね」と付け加えた。

当のミアは無言で頷く。

「よし、決まりだな。じゃあ早速ダグラス家の屋敷まで乗り込もう」

エレックが意気込んで言った。

――……。

ダグラス家の屋敷へ向け、何度も路地裏の角を曲がり、大通りと追っ手を避けて細い道を進む。

もちろんダグラス家の者に気付かれないように細心の注意を払いながらだ。

大通りに差し掛かって何度目かの時には町が閑散としていた。多分、闘技大会が始まったんだ。

さらに道を進む。

すると先頭を歩いていたエレックとミアが急に立ち止まった。

物陰に隠れながら曲がり角の先を覗き込むと、西洋に近い建築様式の大きな屋敷の前にたどり着いた。広そうな庭までついている。

俺はエレックとミアのこわばった表情を見て悟った。

「……ここが、ダグラス家の屋敷なんだな？」

ミアは無言で小さく頷く。

もう一度屋敷をよく見ると、大きな門の前には軍服を着た強そうな兵隊が門番をしていた。数は二人だけ。他のは闘技大会にでも行ったんだろうか。

と、庭の様子を観察していたら、俺のすぐ横でエレックは剣を抜き始めた。

……まさか。

「見つからないで潜入は無理そうだな。一気に畳み掛けるぞ……！」

ミアは丸腰。俺がやるしかない。槍を握り直す。

「……わかった！」

「よし、行くぞ！」

エレックが右側の門番に向かって走ると同時に、俺は左側の門番を倒す為に走った。

「……！誰だっ！？」

突っ込んでいく俺達に気付いた門番二人が慌てて剣を引き抜く。俺は槍を強く握って思い切り振りかぶった。

「おっらぁ！」

突進力と慣性、遠心力に腕力を込めて槍を思い切り叩きつける。剣で受けられたが、力任せに弾き落とした。

「ぐうっ！」

武器を持たない門番に対し俺は槍。もう相手にはならない。

俺はすぐに門番の頭を槍の柄で叩いて気絶させた。

「よし！」

エレックは大丈夫か？

右を振り向くと、既にもう一人の門番は地面に伏せている。エレックはというと、余裕たっぷりに長剣を鞘に納めている所だった。そして振り返りながら言う。

「ミアちゃん。もう大丈夫だ！」

ミアは物陰から出てきて駆け寄って来て、頭を下げた。

「……ありがとう」

俺とエレックはうなずいて、それから三人で屋敷の玄関にあたる木製の大きな扉を開けた。

「……誰も、いないな」

つい口をついて出てくる。それほどに屋敷の中に人の気配を感じない。

実際屋敷の中には人がほとんど居ないんじゃないのだろうか。

多分、ミアを探しに外へ出払っているか、闘技大会を観に行ってるかだろうと思う。お陰でまだ門番以外には見つかっていない。

後ろで扉がギィ、と重い音を立てて閉まった。

改めて内装を見渡す。外観に相応しく豪華で広い造りになっている。ここはエントランス、だと思う。まっすぐ行けば、上に行く階段がある。

「やっぱ広いな……。ミアちゃん、ダグラス家の家長は何処にいるんだ？」

「その階段を、登ってすぐに、家長室がある」

ミアが指をさす先の階段を登った所に、確かに一際豪華な造りのドアがあった。

……あれが家長室か。

お互いに頷きあって、ゆっくりと階段を登り始める。

しかし……。

俺は一通り辺りを見回した。この広い屋敷に誰もいない。闘技大会があるとはいえ、流石に警備が薄すぎる。不用心な家だな。

階段を登りきり、エレックがドアの前で立ち止まった。

「……行くぞ？」

この先に、ミアの父親がいるはず。俺とミアは身構えて小さく頷く。

それを確認したエレックが一気にドアを開けた。

ドアを開けた先、広い家長室の窓辺に一人の男が立っている。俺たちに背を向け手を後ろで組み、窓の外の景色を眺めている。

「やぁ。こんにちは」

こちらを一瞥もせず、背中越しに声をかけてきた。そして振り返る。

「私がデミアンの父親、サターンだ」

優しい言葉遣い。穏やかな表情。笑顔を称えている。一見は優しそうなおじさん。なのに。

「私の城へようこそ」

「……ッ」

中年だとは思えない、圧倒的な、覇気。
口が乾いていくようなプレッシャー。

まっとうな人間のなせる業じゃない！

固まる俺たちの方へサターンが微笑みながら歩いてきた。そして何かに気付いたのかサターンはエレックの方を向いて足を止める。

「……君は確かニーグの子だね？エレックといったかな？」

「……よく判ったな」

嫌悪のこもったエレックの声。エレックがここまで負の感情をあらわにするのを初めて見た。

だが、サターンはそれをまるで厭わずに表情を変えない。

「若い頃の君の父親そっくりだからな。……おっと。話がそれてしまったね。君達、デミアンを連れてきてくれてありがとう。逃げ出していて困ってたんだよ」

言ってサターンは俺の隣で怯えているミアをゾッとするような冷たい視線で見据える。穏やかな表情なんてわずかにも残ってない。

親が子に、向ける顔じゃない。

「さぁデミアン、こっちに来なさい」

「あ……う……ボクは――」

「――黙れ！」

突然エレックがサターンの冷たい視線を遮るようにミアの前に出る。

「サターン。彼女はもう『デミアン』じゃない、今は『ミア』だ！」

「下らないな。……さぁデミアン、戻ってこい。あの様な無様な負け方をしたのだから。地下室で特訓だ」

何か言い返したい。でも、それすら憚られるような威圧感。

俺は、完全に気圧されている。

不意にサターンの視線が俺の方に向いた。

「ん？君はデミアンを倒した子だね？決勝トーナメント、始まってるのでは無いか？」

クソッ！落ち着き払い腐りやがって！こんなプレッシャーに負けるか！

俺は槍を握る手に力を込めた。

「名付け親だからな！親は子供をもっと大切にするもんだぜ！」

俺の言葉にサターンは軽蔑を込めた目を向ける。

「君の人生観を訊いたつもりではないのだがな。……それで、デミアンを返す気が無いのなら一体何をしに来たのだ？」

「ミアをダグラス家から除籍して欲しい」

エレックが訴える。

サターンが嘲笑う。

「君は私が『はいどうぞ』と答えると思うのかね？」

サターンはその不愉快な笑顔を崩さないでいる。広い家長室には重い空気と緊張が充ちていく。

「そうかよ……」

サターンの返事を聞いたエレックは剣を引き抜いた。

「これが最後だ。……ミアを、除籍しろ。手段は選ばないぞ！」

「……穏やかではないね。冷静になって考えてみなさい。君に人の子を奪う権利があるのか？」

サターンも腰の剣を引き抜く。サターンの剣は、刺突用の剣・レイピアだ。鍔には豪華な装飾が施されている。

「自分の娘に殺しをさせるような奴にミアは預けられないな！」

「ならばデミアン。お前はどうなんだ？あれだけ人を殺しておいてお前は逃げるのか？」

サターンがレイピアをギラつかせながらミアにきく。

「……ッ！ボクはッ！」

ミアは怯えた表情をして、そのまま地面にしゃがみこんでしまった。微かだけど、泣いている。

いずれこうなるとは、思っていた。

「ミア。……」

俺には横で名前を呼ぶことしかできない。

「ミア……！……てめえ！」

ミアが崩れる様子を見たエレックが激高して、サターンに剣で斬りかかる。

だが、サターンは事も無げにそれをレイピアで受け止める。
両者動かない鍔迫り合いになった。

「くそっ！」

エレックが力を入れている様子を見せているけどサターンは表情一つ変えない。

ここは、俺が手助けするしかない。

俺は胸元のペンダントに触れ、力を引き出す。『風の刃』をお見舞いしてやる。

「エレック！サターンから離れろ！」

「わかった！」

俺はエレックがサターンから離れると同時に手のひらから『風の刃』を放った。

「！」

それに気付いたサターンが『風の刃』をレイピアで弾く。

「……成る程、『所有者』。……手こずりそうだな」

呟いてサターンは、地面に座って放心状態になっているミアを見た。
そして一瞬考えるような仕草を見せて、ため息をついた。

「『所有者』を倒すのには労力がいる。それにアレを立ち直らせるのも面倒だ」

ミアを蔑みの視線で見やったサターンはレイピアを鞘に納めた。

「その子は我がダグラス家に要らん。連れていくならさっさと連れていけ」

「ふざけるなっ！」

エレックはまだ食いかかろうとしたが、俺はそれを止めた。

「目的は果たしたんだ、もう戻ろうエレック」

悔しいけど、あの自信を見る限り、サターンに勝てるとは思えない。

「くそ……！……わかった。……ミアちゃん、立てるか？」

ミアはエレックの呼びかけで俯いたまま立ち上がる。泣き声はしないが反応もない。

エレックはそんなミアを抱えて家長室を飛び出す。

それを追って最後に部屋を出た俺は一瞬サターンを振り返った。

その一瞬。ほんの一瞬だけど、俺は俺たちを逃がしたサターンから威圧感以外の何かを感じた。

――……。

「ここまで来れば大丈夫じゃないのか？」

俺はダグラス家の屋敷を出て少し行った辺りで立ち止まり周りを見渡す。人の気配が全然しない。時間的にはそろそろ闘技大会も終わる頃だろう。

俺たちは町の表通りに出ていた。

「ミアちゃん、大丈夫か？」

俯いたままのミアを見たエレックはミアに声をかける。

ミアは顔を上げて「大丈夫」と言った。様子を見る限りでは、大丈夫じゃないけど。

「で、どうするんだ？」

俺はミアを見た。

「うまいこと除籍は出来たけど、帰る家もなくなっちゃったんだろ」

そう、ダグラス家から除籍されたミアには帰る家がない。今こんなことを訊くのは厳しいかもしれないけど、ちゃんとしなきゃいけない事だ。

「うん……」

さらに落ち込むミア。そこに、エレックが声をかけた。

「ミア、俺についてこないか？」

「良いの……？ボクは人殺しだよ？」

ミアは申し訳なさそうな表情をする。

「洗脳だしな。関係無いさ。それより俺は旅人だ。だからこの町をしばらく離れることになる。そっちは大丈夫か？」

ミアは少し考えるがすぐにエレックに了解を出した。

「……うん、大丈夫。ついていくよ」

ミアの返事を聞いたエレックが俺の方も見てきた。

「少年も、どうかな？」

「俺？俺は……」

確かにこの二人はいい人だけど。……でも。駄目だ。

俺の旅は帰る方法を探す旅。関係ない人を巻き込んですることじゃない。

それに、仲たがいをするなんていう思いはもうしたくない。

だから。

「いや、止めとく。俺は、独りが楽だから」

――……。

翌日の早朝、俺は町を出て、再び王都バルクを目指すために朝市で干し肉とかの食糧を買い、旅立ちの準備をして宿を出た。

中々に早い時間で、あまり人通りは無い。さらに朝靄もかかって、不思議な町にいるようだ。

すり鉢状の町を出るために坂を上っていく。ふと振り返ると、霧立つ湖と、闘技場が見えた。

「何だかんだ、良い町だったなぁ」

呟くと自然と浮かんでくる微笑みを戻して、また坂を上る。

「……ん？」

町の入り口の小さな門へ続く道の途中に二つの人影がある。靄がかかってよく見えない。

俺は不思議に思って近付いた。

「お」

「来たみたいだな」

二人の人影が俺に気づいて手を振る。声に覚えがある。この声は……！

「マーカス！ユリウス！」

俺は二人に駆け寄った。

「行くんだな？」

ユリウスが簡潔に訊いてくる。俺はうなずいて、そのまま二人に頭を下げた。

「……昨日は試合サボって済まなかった」

「何か事情が有ったんだろ？気にすんなよ。それよりこれ」

マーカスが一枚の紙を差し出してくる。俺はそれを受け取って読んだ。

『久喜　輝。ハリア闘技大会ベスト８』。

賞状だ。

「お前が闘って、その結果だ。大事にしろよ」

「そ。サボりの代償は……そうだな。また今度、試合でもしてくれたら良いよ」

ユリウス、マーカスは順にそう言って微笑んだ。

「ああ、ありがとう！約束だ！」

もう一度俺は頭を下げる。この二人には感謝で頭が上がらない。その俺の頭を、マーカス、ユリウスがくしゃくしゃと叩いて、坂を下り始める。

「ああ、約束だな」

「楽しみにしてるよ」

背中越しにそう言って、二人は湖の町へ帰っていった。

……よし。行くか。

俺は賞状を鞄に丁寧にしまってまた歩き出す。

そして今度は、町を出る門のところにまた人影を二つ見つけた。背の高いのと小さいの。

……エレックとミアだ！

「お！少年！」

早速こっちに気付いたエレックが声をかけてくる。

「エレック！……と」

その横に視線を移すと、帽子を被って、きれいなチェックのシャツを着たミアがいた。下もスカートとかでは無いものの、ちゃんと女物の服だ。

「ミアも、来てくれたんだ！」

「……」

ミアは無言で帽子を深く被り直す。

そんなミアを見たエレックがミアの頭を優しく撫でた。

「ミアは照れてるんだよな」

「照れてなんかない！」

ムキになったようにミアはエレックの手をはねのけて、帽子を取って、こっちを向いた。

「……輝、のお陰で、ボクは、ボクになれた。ボクは『デミアン』じゃなくて『ミア』になれた。……だから、ありがとう」

そして、初めて見た笑顔。その笑顔の一瞬につい見とれてしまった。

「あ、ああ。いや、うん。どういたしまして」

ああ、何かテンパってしまう。俺は鞄を改めて担いだ。

「うん……じゃあ、俺はそろそろ行くよ」

「少年、俺たちも少ししたら王都に向かう予定なんだ。もしかしたら近い内に会えるかも知れないね」

そう言ってエレックが手を差し出してくる。俺はその差し出された手を掴み、握手に応じた。

と同時にエレックは耳打ちしてくる。

「そのペンダント。君はイセカイの人だろう？王都の図書館には帰るヒントがあるかもしれないよ」

気付いてたのか！

「図書館……か。行ってみる」

「何を、話していたの？」

ミアが不思議そうな表情をしている。

「何でもないよ」

エレックがごまかすが、ミアは訝しげな視線を送っていた。

「本当に何でも無いよ、ミア。……じゃ！もう行くよ！」

「そっか、少年も達者でな！」

「うん……また、ね……」

「おう……二人とも元気で！」

こうして俺は、街道を歩み始めた。

王都まであと数日。

長かった旅のゴールが見えてきた。

王都

見上げる程に高い壁。城壁がぐるりと街をおおっている。さらにその高い城壁を越えて巨大なお城が見えた。

「……ここが王都バルクか」

俺はちょっとした感動を覚えながら呟く。

ハリアからは街道もかなりよく整備されている上、行き交う人もそれなりに多いから、野盗に襲われる事もなくすんなりと王都にたどり着いた。

「待て！」

これまた巨大な城門に近づいていくと、一人の番兵に引き留められた。

「……何ですか？」

「身分証、又はそれに準ずるものの掲示を求める」

身分証……なんて持ってない。それに準ずるものも良くわからない。

「持っていないのか？持っていないのであれば荷物の検閲をさせて貰うが」

「検閲……って、何で？」

「危険物を入れるわけにはいかない。腐ってもここは王都だからな」

番兵は少し呆れ顔をする。

あまり王都、国に対して期待はしてないのだろうか。

反抗しても仕方ないので俺は素直に荷物を渡した。どうせ入ってるのは食糧と野宿セットだけだ。

手荷物を受け取った番兵は荷物の中身を出しては調べてを無言で繰り返しているが、急にその手をふと止めた。

「……ん？」

番兵は何かに気付いたようにバックの中から何かを取り出す。

「これは……」

驚いたような表情の番兵は筒の中に入っていた紙を取り出した。

武闘大会の表彰状。

ベスト８になった記念品だ。

「あるじゃないか、身分証明出来るもの。何で言わなかったんだ？」

「それで身分証明出来るのか？」

知らなかった。紙切れ一枚で身分証明出来るんだ。……まあ、俺に

とっては結構大切な紙切れ一枚なんだけど。

番兵はバッグに賞状を戻しながらうなずく。

「王の命だ。ハリア武闘大会の功績者には多大な歓迎と共に門を通す様に言われてる」

そう言って彼は俺にバッグを返した。

「……ありがとうございます」

俺は小さく頭を下げて、バッグを背負いなおす。そしてやけに大きい王都の城門をくぐって街に足を踏み入れた。

「……！」

城壁の中は、かなりの賑わいを見せていた。

「うはぁ……」

まず人の数が半端じゃない。

門を通るとすぐにとてつもなく巨大な噴水があり、それを中心とした広場には行商、兵隊、一般人……と、様々な人々が大勢蠢いている。

建物はこれまで同様石造りから木造からレンガやコンクリらしき物まで時代がバラバラだけど、比較的レンガコンクリが多い。見た目にも西洋と中近東、近代的な建物もわずかにある。

様々なモノが雑多に溢れていて、都会独特の無秩序さが見える。

えーと。エレックが言うには図書館行けば良いんだっけ？
でも場所がわからないな。
なんて立ち往生して考えていたら、右側から大きな声が聞こえてきた。

「……ハイハイハイ！本物だよー！本物の魔導石だよーう！！」

声の方を見ると、その騒がしさの中でも一際目立つ集団があった。
どうやら行商のようだ。

……少し面白そうだな。行ってみよう。

近づくとその人だかりはやっぱり行商人が中心となって出来ている。
行商人はその手に握り拳大の黒光りする石を持っていた。

「本物の魔導石だよーう！！ヒュルーの鉱山で取れた本物だよーう！！」

「魔導石……？」

って何だろう？

「君……これはニセモノだろうから止めとけよ」

食い入るようにその黒い石を見ていたら隣にいたオッサンにとめられた。オッサンはあきれながら続ける。

「第一魔導石があんな安い値段で庶民まで回って来るわけがないだ

ろう」

何だか話好きそうなオッサンだ。どうせだし図書館の場所聞いてみよう。

「……あの、すみません」

「ん、何だね？」

「図書館の場所知りませんか？」

そう訊くと、そのオッサンは訝しげな目をして俺を見た。

「『王立図書館』は街の名所だろ？知らないのか？」

そこまで言って俺のボロボロの服を見てから「ああ……田舎から来たのか」と呟いて納得した表情を見せると、城の方を指差した。

「この道を城の方へ真っ直ぐ歩けば見えてくる。王立図書館は凄いぞ。ビックリするなよ。はっはっは」

と、大口を開けて笑いながら何処かへ行ってしまった。

「……すげえな王都……」

呆れるような、感心するような、ビックリするような。何だか言葉に出来ない気持ちを抱いて、俺はお城に向かって歩き始めた。

――……。

巨大な図書館だった。確かに名所と呼ばれても全くおかしくはない。歴史を感じる木造建築で、所々に石や金属で補強がなされている。

「何冊あんだよ……」

蔵書されているだろう膨大な本の中から帰るための方法を調べなくてばならないと思うと気が遠くなる。

重い木製の扉を開けると、館内の中が本と本棚で埋め尽くされていた。

沢山の学者のような風体の人が本を探している。

コレ全部調べんのか。エレックさんも中々無茶言うな。

少し中に入っていくとカウンターがあり、受付があった。司書もいるみたいだ。

司書に頼めば一緒に検索してくれるかもしれない。

「あの……。魔術関係の本を探してるんですけど」

受付の女性司書は俺に気づくと、お手本のようなサービススマイルで対応してくる。ちょっと可愛い。

「魔術関係ですね。解りました。では閲覧証を提示してください」

「閲覧証？」

俺はおうむ返しで聞き返した。女性司書は小さくうなずく。

「はい。本館をご利用するためには閲覧証が必要となります」

「そうなんですか」

要するに……レンタルビデオ店の会員証みたいなもんか。多分。

「閲覧証、持ってないので作れませんか？」

閲覧証は会員証の様なものだと踏んだ俺はレンタルビデオ店の定石通り、新規作成を頼んだ。

「解りました。では身分証を提示してください」

どうやら身分証さえあれば作ってくれるみたいだ。

それで確か……。

城門での番兵とのやり取りを思い出す。

闘技大会の表彰状が身分証の代わりになるんだよな。

バッグの中を漁って一枚の上質紙を取り出し、俺は女性司書にそれを提示した。

「これで大丈夫ですよね？」

しかし予想に反して女性司書は苦笑いの反応をしている。何でだ？

「あの……。それを見せられましても……」

「え！駄目ですか？……さっき門は通れたんですけど」

おかしいな？

そしてただ自慢したみたいで恥ずかしい！

「ええと……そうですね」

慌てる俺に女性司書が落ち着いた声をかけてくる。

「表彰状があるのでしたら一度役所の方に行って、正式な身分証を発行してもらってください。身分証があればこちらで閲覧証を作れますので」

表彰状を役所へ持っていけば身分証を発行して貰えるんだな。その身分証をここに持ってくれれば閲覧証も作ってくれる、と……。

なるほど。ややこしいな。

「そうですか、わかりました。色々ありがとうございます」

「いえ、どういたしまして。あ、ちなみに役所は本館の向かい側ですよ」

微笑みかけてくる女性司書の案内に俺はもう一度お礼を言って、また重い木製の扉を開けて図書館の外に出た。

「向かいの建物は……あれか」

向かいの役所の建物は、歴史を感じる図書館とは対照的に割合近代的だった。明治時代の役所みたいなイメージだ。明治時代の建築な

んて詳しくはわからないけど。

ガラス作りのドアを開けると『身分証発行』と書かれたカウンターが向かって左側の窓口にある。
役所の中は少しレトロな銀行の様な造りになっていた。

「すいません。身分証を発行して欲しいんですけど……」

俺はカウンターに肘をついて座っている業務意欲ゼロのおっさんに話しかけた。
おっさんは豪快な伸びと共に「ぉあ」と変なうめき声を上げて気だるそうに業務を始める。

「身元を証明出来るものもしくはお金、価値のあるものを出して」

既にバッグの中を漁っていた俺はおっさんの言葉に耳を疑った。

「え？お金？」

「あぁ。上納金が俺を頷かせる程あれば造ってやるよ」

おっさんはさも当たり前のように言う。俺はつい、表彰状を漁っている手の動きを止めてしまった。

「……それってワイロじゃないのか？」

おっさんは「フン」と鼻をならして俺を小馬鹿にした態度を見せる。

「国で認められてるんだから良いんだよ。ったく。田舎モンは何も知らねェんだな。……で、金出すのか？出さないのか？」

おっさんは少しも悪びれない。常識が違うから仕方無いのかも知れないが、すごく不愉快だ。

「残念。金はもってない」

イライラしたが、俺はなるべく平静を保って表彰状を提示した。

「……チッ。書類持ちかよ」

おっさんは表彰状を見てあからさまに悪態をつくと身分証と書かれた白紙のカードを差し出してくる。

「後は自分で書き込め」

「どうも！」

その横柄な態度に頭に来た俺は差し出された白紙の身分証を奪い取るように受け取って、すぐに役所を後にした。

それにしても何だあの態度？
この国の公務員腐ってんじゃねぇのか？

――……。

「身分証です」

俺は再び王立図書館に戻り、女性司書に身分証を見せた。

「シルバークラスですか！……では、こちらが閲覧証になります」

女性司書は一瞬驚いた顔をして、閲覧証を差し出す。
閲覧証を受け取った俺は少し疑問に思ってそのまま質問した。

「シルバークラス……？」

「主に貴族階級の身分証レベルですよ。……王様は武芸を見るのが好きですので、多分闘技大会の功績者には手厚い保証をしているのですね」

どうやら一般人が貰える身分証のレベルではない事がわかる。闘技大会出といて良かった。

「ああ、そうだった」
俺は我に帰って本題に戻る。

「魔術関係の本は……」

「はい、禁書も含めて三階部分全部になります。シルバークラスなら禁書も閲覧できますよ」

「……わかりました。えーと、結構多いですよね？」

三階全部と聞いてつい苦笑いが俺の顔に現れる。

「はい、かなり多いですよ。本気で全部読もうと思うなら、何十年もかかりますね」

「何十、年……」

「ハイ。何十年もです」

あくまでもにこやかに答える女性司書に、俺は自分でもわかるひきつった笑顔で頭を下げて、階段を登っていった。

――……。

王都バルク。

この街の港は王都と言うだけあって凄い活気に包まれている。

そこに一隻の客船が到着した。

「おーい！碇をおろせー！」

張り上げられた力強い声。日に焼け、潮に赤くなった船乗りが指示を出している。

客船の甲板、船乗りが必死に指示を出している横で大勢の乗客が王都の港を眺めながら潮風を浴びていた。船旅の終わりに最後の風を感じている。

「……やっと着いた」

甲板に出ている人ごみの中で空が感慨深く呟いた。

彼の周りにいる仲間たち４人は空の言葉に無言で頷く。

それぞれが長い船旅で経験したことを思い出していた。

「きっと、ここに何か手がかりがある……」

綾香は下ろしていた髪を結い上げてポニーテールにする。そして元気な笑顔を見せた。

「頑張らなきゃね！」

「はい。酒場に手がかりが。後少しです」

速人は眼鏡をクイと上げながら言う。

その後ろで舞と一樹が目配せをして気取られないように小さく頷いた。

「頑張ろうね……！」

舞は拳を軽く握る。

（輝はきっと生きてる！）

「ああ！」

一樹も舞と同じ思いだ。

（輝は生きてる！王都と呼ばれてる位だ、情報はあるはず！）

5人はそれぞれの想いと共に、王都の中心にそびえ立つ巨大な王宮を見据えていた。

――……。

「結構朝早いのに人が沢山いるな」

「流石王都、と言ったところでしょう」

空たちは地図を頼りに、チルの情報屋に貰った手紙を持って酒場に向かっていた。
地図は港からそう遠くない所を指している。もう少しで着きそうだ。
白い朝靄で覆われた通りの中では行商や露店が市を開いていた。活気があるのはその為だろう。
五人は朝市を見ながら目的地に向け歩いていく。朝市では肉や野菜のようなものが売られていた。

「……美味そうだな」

「駄目ですよ空。早く酒場に向かいましょう」

空が店のモノを涎を垂らして見つめているのを見た速人が顔をしかめる。

その横で一樹が何かに気付いて声を出す。

「あ。アレだよな？」

一樹が指差す先には酒屋の看板を掲げた大きな木造の建築物が建っていた。

まだ早朝という時間帯ということもあってなのか、酒場には活気が無いようだ。

空が大きな木造の扉のノブに手をかける。が、開かない。

「閉まってるな……。……すみませーん！」

声を上げて空が大きな木造の扉を叩き始めた。すると、建物の中でドタバタと慌ただしい物音がして、扉が中から開いた。

「……何？何の用？」

そう言いながら出てきたのは疲労を感じ取れるようなやつれた感じのする若い女性だった。

「これを」

空の横から出てきた速人が、チルの情報屋から受け取った手紙を渡す。

手紙を受け取った女性は、その場で暫く手紙を読むと事情を把握したようで小さく頷いた。

「よし、わかった。上がってって」

「じゃあお邪魔しまぁーす」

空を先頭に入っていく。

中には、カウンター席、テーブル席、舞台、と酒場に必要な物はおおよそ揃っていて、中々しっかりした作りであることがうかがえた。

昨夜から残存しているのだろう酒臭さを除けば快適そうな空間である。

「適当に座って待ってて」

そう言うとその女性は階段を上って二階へと消えていってしまった。

空はカウンターに寄り掛かりながらそれを見送る。

「……まずはこれでラルガについてわかるな」

「そうですね、チルの情報屋が推薦するほどの情報がここにはある、ということでしょう」

速人が考察する。

「じゃあさ！帰る方法も聞いちゃおうよ！」

綾香は少しハシャいで言った。一気に手がかりまでこぎ着けたことが嬉しいのだろう。

舞も笑顔で頷く。

「うん！きっとそれもわかるよ！」

しかし一樹はそんな四人のやり取りを腕を組み、少し冷めた目で見ていた。

（舞を除いて空たちに輝の事を聞いても全く口を割らない。やっぱここで情報を集めるべきか……。にしても輝は空たちにずいぶんと嫌われてるんだな。何したんだアイツ）

考える一樹の目線がふと舞の目と合う。気づいた舞は一樹に小さくウインクをした。一樹も小さく首を縦に振る。

変な意味ではない。舞も一樹と同じ様に輝の情報を集めるべきだと考えている合図だ。

（他の三人と違って舞は輝がそこまで嫌いじゃないみたいだな。何でだろう？）

一樹が不思議に思って考えていると階段を降りてくる音が聞こえてきた。

「待たせたね。ラルガの情報だ」

そう言って空の目の前のテーブルの上に、ドサッ、と分厚い資料のようなものを置く。

色々な紙が挟まれたファイルの様で、表紙には『ラルガ』とだけ書いてあった。

「あー疲れた。アタシあんま寝てないからさぁ、ソレ持ってさっさと帰ってくんないかなぁ？」

女性は一つ大きなあくびをする。つられて目尻から涙があふれだした。

「ラルガの情報、有難うございます」

速人が丁寧に礼をする。

「出来れば他の情報も頂きたいのですが」

「あーダメダメ、今はムリ。寝る。昼過ぎに来なさい」

眠そうな声。頭をぽりぽり掻いている。

それを見た速人が小さくため息をついてうなずいた。

「……わかりました。ではまた後で伺います」

「そうして。あ、そのファイルは3日後までに返してね」

――……。

「凄まじいひとだったな……」

重たいファイルを持って酒場の外に出た空は溜め息混じりに言う。

「本当。何かムリかも」

綾香も酒場からふらふらと出てくる。どうやら綾香は酒の匂いに当てられたようで、若干頬が紅潮していた。

そしてそんな綾香を支えながら舞が皆に意見を求める。

「これからお昼までどうする?」

「そうですね。……図書館に向かいませんか?バルクには『王立図書館』という規模の大きい図書館が有るようです」

速人が客船の乗客から仕入れた情報を教え、仲間に同意を求めた。

「ん、賛成。それでいいと思う」

言いながら一樹がうなずき、賛成の意を示す。他の仲間たちもそれぞれ肯定の仕草を見せた。

「では、決定ですね。王立図書館は王宮前にあります。早速向かいましょう」

そう言って王宮の方に歩き始めた速人。その腕を重たいファイルと格闘している空が掴んで引き止める。

「おい、速人！待て！このファイル重いんだから手伝えよ！」

「何を言ってるんですか。理系の大学生に重いモノを持たせようとするなんて……」

速人は笑顔でしれっと言い訳をして再び王宮に足を進めた。そんな速人を見た空は「何だよー」と呟き諦めて一樹の方に向き直った。

「……一樹、手伝ってくれるよな？」

一樹は空から必死に目をそらしながら空の手をすり抜ける。

「あ、アレだ。……俺、帰宅部だから」

「え、おい！……あー。ではあの綾香さん？」

一樹にも逃げられ空は綾香に敬語で笑いかけた。

「ファイル持つの手伝っ」

「ごめんね空ー。ちょっと今酔っちゃって力出ない」

綾香にも断られ、空は舞の顔をすがるように見る。が、舞が何か言う前に綾香が舞の手をとった。

「舞は私の看病あるから」

「あの……ごめんね空くん」

切ない顔で見つめてくる空と手を引っ張る綾香の間でおろおろしていた舞も、空に頭を下げて先に行ってしまった。

「……マジかよ。何か俺最近からかわれすぎじゃね？」

空は文句をぶちぶち垂れながらも、重いファイルを持って皆の後に遅れてついていった。

――……。

「あー疲れたー」

疲労感たっぷりに項垂れ、ため息をつきながらも空はなんとか図書館についた。

（へぇ……。確かに大きな図書館だなー）

歴史を感じるその建物を見上げ、両手が塞がってるので足で蹴って扉を開けようとした瞬間。

「空ぁー！」

と後ろから彼を呼ぶ声がした。振り返ると、先に図書館に行った筈の仲間たちが図書館の向かいにある建物から出てくるところだった。

「あ、皆！どうしたんだ？図書館に行くんじゃないのか？」

空が疑問を投げかける。ファイルを手一杯に持っている空の元に最初についた一樹が残念そうな顔で説明を始めた。

「図書館を使うための閲覧証を作るために身分証が必要だったんだけど……ダメだった」

両手を軽くあげてお手上げのポーズ。ため息混じり。

「身元を証明できるモノが無いんですよ」

速人も一樹の横から補足を付け加える。

空は首をかしげた。

「何でだ？アクセサリーを見せれば良いんじゃないのか？」

確かに、シュヘルの町長ニーグはアクセサリーが身分証明になると言っていた。

しかし、速人は首を振る。

「ラルガ将軍のホームグラウンドでそんな行動を取るのは利口ではないですよ」

「そう……か。そう言われてみれば、それもそうだな」

納得する空。

正攻法でラルガに勝てるとは思えない。今はラルガには気付かれないように行動するのが最善だろう。

その後時計を見て時刻が正午をまわっている事に気付いた空たちは先程の酒場に戻ることにした。

今度は、皆で荷物を分けて持っていった。

――……。

コンコン、と酒場の大きな木製の扉を叩く乾いた音が響く。

「すいませーん！」

「はーい！」

勢い良く扉が開いて中から先程の女性が顔を出した。

空たちの顔を見て「やっぱ来たね。入りな」と一言言って彼らを店内に招き入れる。

換気をしたのだろう。店内の酒臭さは既に無く、木の香りがしていた。そして他の客もいない。人払いもしてくれたようだ。

空たちはさっき座っていたテーブル席にそれぞれ腰を下ろす。

酒屋の女性は灰色の髪の後ろ髪をピンで素早くまとめ上げて眼鏡をかけた。恐らくそれが彼女の仕事のスタイルなのだろう。

「申し遅れたね。アタシはリザ。わかってると思うけど情報屋だよ」

簡単に自己紹介を終えたリザを見た一樹が突然声を上げて立ち上がった。

「ジャン町長!?何でここに!?」

そう。髪を結い上げ、眼鏡をかけたリザはウートの町長、ジャンにそっくりだったのだ。

そんな一樹の驚きとは対照的にリザは冷めている。表情もどことなく冷たい。似てる、と言われ慣れてるのだろう。

「ジャンは姉貴だ。そうか、じゃあ君が一樹君だな……。……おっと、話がズレたね」

リザの説明で、どうやらリザがジャンの妹だとわかり少し冷静になった一樹は席につく。一樹本人としてはもう少し質問はあったが、ジャンの話になった時のリザの冷たい表情を見て萎縮してしまった。

「で、何について知りたいんだ?」

リザが話を戻して五人に問いかける。仲間と顔を見合わせた空が代表して口を開いた。

「『イセカイ』についてと『アクセサリー』についてを知りたい」

空が言い終わった瞬間、突然一樹が横から口を挟んだ。

「もう一つ。『久喜輝』の安否について」

「一樹、まだ輝が生きてると思ってるのですか?ニーグさんに聞いたでしょう?」

横槍を入れた一樹の意見を速人が険しい顔で鋭くはねのける。しかし一樹はくじけない。

「あぁ。『生きてる可能性が低い』ってな。可能性が低いだけだ、絶対生きてる！」

「一樹、いい加減に……」

口論になりかけているのを見て、面倒になったリザは一言言った。

「お前等、情報買うだけの金はあんのか？」

その一言は一瞬で場を沈黙させてしまった。
財布係の綾香が財布の中身をリザに見せる。

「……足りますか……？」

「うわ……。これでよく旅してきたね」

リザが表すのは哀れみの表情。その表情を恐る恐る綾香がのぞきこむ。

「ってことは……？」

「悪いけど、全然足りないね」

リザが言った瞬間五人全員が明らかに落胆してしまった。そんな五人を見たリザは、しょうがないなぁ、という仕草をする。

「姉貴には『イセカイの子供達をよろしく頼む』って言われてるからなぁ。……よし」

何かを決めたリザは人差し指をピンと立てた。

「一つだ。一つだけならタダで情報を教えてやる」

リザのサービスに空はパッと顔を上げる。

「ありがとうございますっ！」

「ただし一つだけだ。よく考えろよ」

――……。

空たちは図書館の近くの新しくきれいなホテルに泊まることに決めた。

受付を済ませて部屋まで上がる。

全員がさっきの事を思い出していた。

――……。

「俺は輝捜索に使いたい！」

一樹は皆に訴える。

だが空がすぐに反論を始める。

リザのサービスを聞いてから一樹と空はずっと口論を繰り返していた。始めは一樹を諭そうとしていた速人も徐々に白熱する感情論に説得を投げてしまった。

意見のまとまらない様子を見てリザは子供のような喧嘩にうんざりする。

うんざりした挙げ句、一つの提案をした。

「あーもう明日まで待ってやる。納得行くまで話し合ってこい」

と言って近くにいた舞に五人分の宿賃を渡す。

「図書館の近くに新しい宿屋が出来たんだ。アタシの名前出せば安くなるから。とりあえずコイツらを外に出してくれ」

――……。

各自自分の部屋に荷物を置くと、空の部屋に集合した。

情報を一つだけ教えて貰える。

その一度きりのチャンスをめぐってまた議論が白熱していた。

もちろん、何についてをリザに聞くかについての議論だ。

空はテーブルを叩いて力説する。

「考えろよ！輝が生きてる可能性は低いんだ！そんな事にこのチャンスを消費する訳にはいかないんだって！」

対するのは一樹。

空の意見を「うるさい」と一言で一蹴する。

「『そんな事』？ふざけんなよ！こっちだって親友を見捨てる訳にはいかねぇんだ！」

「親友！？あんな臆病なクズ、もう見捨てちまえよ！」

空が言い切ると同時に鈍い音がホテルの一室に響いた。

一樹が、空を、殴った。

空は目を見開いて殴られた頬を軽く触れている。言葉も無く口を中途半端に開いている。

「一樹、やめなさい！」

「……！」

一樹は速人のその言葉を聞いて初めて、自分の右腕が空に第二撃を繰り出そうとして上がっている事に気付いた。
無意識的に空を殴ろうとしていた自分に驚いて震える右腕を無理やり下げる。

『親友』の為とはいえ、『仲間』に手を上げてしまった。

「ゴメン、空」

震える声で一樹は空に謝罪する。動揺している。
そしてそのまま部屋の出口に向かって行き、ドアノブに手をかけた。

「少し、頭冷やしてくる。すぐ戻るよ」

――……。

一樹が去った後もしばらく沈黙が続いていた。部屋の壁掛け時計を見ると既に7時半を回っている。
一樹に殴られてから5分と経ってないが、空にはこの沈黙が一時間以上続いているように感じられた。そして、今しがたの発言を反省するには十分な時間でもあった。

「……空くん、輝にだって逃げたいと思うだけの事情があった筈だよ」

舞が独り言のようにか細い声で呟いて沈黙を破る。うつむいていて、その表情は見えない。
空はそれに答えて力なく「あぁ」と言った。

「……でも俺には、自分のためにすぐに逃げられる輝の気持ちはわからない。……だから、ダメなんだよ。俺は」

少し笑ってうつむけていた顔を上げる。笑っているが、目は、渋い。

「俺の視点からしか、俺はモノを見れない。だから一樹の視点にも立てない」

「……思えば一樹は輝の情報をずっと欲しがってました。船の中で何度か訊かれた事もあります」

言いながら顔を上げた速人はうつ向いていたせいで少しずれてしまった眼鏡の位置を直した。

「正直、輝の事は嫌いです。統率を崩し、自分のために動く。団体行動で一番邪魔な人間です。思い出したくもない。……思い出したくもないから一樹の質問もずっとはぐらかしてました」

一つ、ため息をつく。あきれている。恐らく自分自身に。

「結果、一樹を追い詰めてしまった」

速人がそう言って、また訪れる沈黙。この部屋にいる誰もが言葉を発せないでいる。

そんな中で、空がゆっくり口を開いた。

「俺、変わるよ」

唐突に発せられた空の言葉。その真意がわからずに綾香が「空？」と心配そうに名前を呼ぶ。

空はたどたどしくつむぎ始める。

「俺、変わる。『俺』は『俺』が『良い』と思う事を考えて行動してた。でもそれじゃいつまで経っても『俺』の独りよがりだ」

空は苦々しく笑う。

「だから俺は皆が納得出来るような『良い』行動をする」

「甘いよ。空は」

そう呟いて空に反論したのは、驚いたことに、綾香だった。

「『皆が納得』って……空は強欲だよ。そうはいかない事の方が多いのに」

空は首を振り綾香の言葉を否定する。

「だからって何もしないんじゃウソになる。……俺は、一樹が戻ってきたら謝る。それで、輝の生存の可能性を真剣に考えて、可能性がありそうだったら、リザに頼もう」

「ほら、やっぱり甘いよ」

綾香はため息をついて、それでも言葉とは逆にふと笑みを見せた。

「でも、空らしいね」

「ありがとう、綾香。……皆も、それで良いかな？」

空が舞と速人に問いかける。舞はただうなずいて了解を示した。速人も半ば諦めた様に口を開く。

「良いですよ。可能性は無いと思いますが。万が一リザさんに頼む事になったとしても、他の情報をお金を稼いで買えば良いだけのことです」

そう言って速人が締め括った。

――……。

本を読み始めてからもう何時間経っただろうか。窓の外を見ると既に日が落ちていた。

『アクセサリー』『イセカイ』『転移魔法』等、手掛かりがありそうな所を絞ってみたが、それでも大量に本があった。殆どが禁書。そして何故か、日本語。

日本語なことは度々不思議に思っていたけど、考えてもわからないし、読めるに越したことはない。

それにしても。

俺は木製の備え付けテーブルに積んである本の山を見て、ため息をついた。

「ハァ。一旦諦めよう……」

やっぱり一日二日では無理だ。この街に腰を据える位の気持ちで行かないと。

幸い……というか俺の悪知恵のお陰でお金には困らない。長期滞在も出来そうだ。

作業を中断し、本を元の場所に戻して、槍と荷物を持って立ち上がった。

宿屋、探しに行こう。

――……。

図書館を出て、街並みを歩く。ゲームで見るようなヨーロッパ風の建物。かと思えばインドにありそうな建物。ゴチャゴチャしてるのは街の入り口とそこまで変わらない。

でも図書館の近くはキレイな家が多い。出来れば、図書館に近くて

キレイなとこに泊まりたい。

「……お」

思わず声を出す。目の前には中々新しそうな宿があった。

「よし、ここにしよう！」

――……。

「……うは」

俺は先ほど見つけた宿の豪華な内装に驚いていた。

最早『宿』と呼ぶのさえ失礼に当たりそうな……。正しくは『ホテル』なんじゃないのだろうか。

現代にあっても、もしかしたら遜色ないかも知れない。電子機器があるわけではないけど、明るい。

頭上を見るとシャンデリアがキラキラと輝いている。

なにやら豪華な空気に飲まれないように、俺はシルバークラスだ！と自分に言い聞かせながら恐る恐るカウンターに向かった。

「すみません。部屋を借りたいんですけど……」

つい縮まって、弱々しい声が出てしまう。ラルガさんのプレッシャーとはまた別のプレッシャーを感じる。

「部屋を？あなたが？」

温度を感じない言葉と共に、黒いスーツをビシッと着込んだカウンターのボーイの冷たい視線が刺さってきた。

その視線の先を見ると、俺のボロボロの服。当て布でついだ所。長旅の結果だ。

……そういえば、服を見られて何回か田舎者扱いされた気もする。

俺は冷たい視線に思わずぎこちない苦笑いを浮かべてしまいながら頭をかいた。

余計に怪しまれたからだろうかボーイの顔が渋くなっていく。

「あの……」

「部屋が満室なので」

温もりゼロの声。

遠回しに断られた、ってこと、か。

俺はパーカーのポケットの中でいつでも出せるようにスタンバイしていたシルバークラスの身分証を出す気力もなく、その『ホテル』を去った。

――……。

「あーあ。……くそっ」

ホテルに泊まるのを拒否された俺はすっかり暗くなった街の月明かりの中をトボトボと歩いている。

あれだけ豪華なホテルだ。今思えば、ドレスコードに引っ掛かった

のかもしれない。でも、何か悔しい。

「あー野宿でもするか……」

半ば自棄気味に呟いた時だった。

「輝！？」

背後から、声。俺を呼んでいる。……懐かしい、声。いや、まさか。

声に反応して振り返ると、そこにはやっぱり懐かしい姿があった。

突然だった。

始まりの日の電車の再会のように。

電車から異世界。

現実から非現実。

舞台は大きく変わってしまったが。

短茶髪で、服装もあの日最後に見た袖まくりスタイル。

喜びで、自然と頬が緩む。

「……一樹！！」

俺は、懐かしい友の名を呼んだ。

名前を呼ばれて、俺が輝だという確信を得た一樹が笑顔で手をブンブン降って、駆けてくる。

「輝！！」

俺も駆け寄って嬉しさの余りお互いに手を叩きあった。

「生きてたのか！」

一樹は興奮した様子で肩を強く叩いてくる。

「うるせぇよ！お前こそ無事で何よりだ！」

俺も肩にお返しして、お互いに笑いあった。

――……。

俺と一樹は月に照らされた噴水広場のベンチに座って話し込んでいた。いや、正しくは俺がほとんど一方的に話していた。異世界に来て、舞や空たちとあって、逃げて、槍を握って、ここまで来た。話が長くなりそうだったから、ハリアでの闘技大会とかは大分かいつまんでの話だったけど。

マーカスたちやミアの話をしてもしょうがないしな。

「そうか……輝、大変だったな」

一樹はそう、言いこぼす。率直な感想だった。一樹は少し、小難しい表情をしているが。

「あぁ。大変だった……。そっちはどうだったんだ？」

一樹へ質問を向ける。今度は俺が聞く番だ。

一樹は少し笑いながらも苦い顔をして、ゆっくりと口を開いた。

「ああ。実は……な。俺、今さ。お前の話にさっき出てきた、空たちと旅をしてるんだ」

息を飲んだ。

ちょっと固まってから息を吐いて、辛うじて言葉を出す。

「……そうか」

俺の面に浮かんでいただろう心からの笑顔が、どんどんツクリモノの笑顔へと変わっていくのが、わかる。

ついであわてて周囲を見回した。一樹と一緒に旅をしてるなら近くにいるかもしれない。それは困る。あわせる顔も無いんだ。

「いないよ。空たちは。今は別行動中だ」

一樹が俺の考えを察して教えてくれた。俺は曖昧にうなずく。

「あ、ああ……。そうみたいだな」

……俺がシュヘルを逃げた後。空たちはどうしたろう？

憤ったか、呆れたか、心配は……されて無いだろうな。旅費をくすねたんだし当然だけど。

「……どうだ？元気そうだった？」

「あぁ。元気だ」

デリケートな話で声のトーンが下がるのを感じる。でもそのまま構わず一樹は続けた。

「なぁ、輝。こっちに合流しないか？」

ビクッ、と。

勝手に体が震える。意識した訳じゃないのに。

一樹が『空たちと旅している』と話した時点でこう言われる事は予想していた。

この言葉が一樹の優しさから出てるとはわかっている。でも、俺が返せる答えは一つ。

「ダメだ、行けない」

俺は首を振った。

一樹もこの返答が返ってくることは予想していたんだろう、こっちを向き直る。

「皆、お前の事を心配している。一緒に帰る方法を探そう！」

力強い、一樹の説得。俺は一つため息をついた。

「……今の嘘だろ」

俺の一言に動揺する一樹。目を見開いている。

「何でわかった……？」

訊いてくる一樹を尻目に俺はベンチから立ち上がると、地面に置いていた槍を拾った。一樹は唖然とした表情のまま俺を見上げる。

「わかるよ、そんくらい。友達だろーが」

俺は一樹と目を合わせないようにしてそう呟き、続けた。

「……じゃ、俺そろそろ行くわ」

ここにいるのは、あんまり良くない。やっと独りになれたのに。

俺は背を向けて歩き始める。

その後ろから一樹が呼び掛けてきた。

「輝。今は大切な用があってついて行けない。……でも、また会ったら。俺は輝、お前についていくつもりだ。だから『また今度な』」

「……おぅ」

背中越しに片手を挙げて、それにこたえた時。変な液体が目から溢れてきた。

――……。

一樹との再会の後、結局噴水広場近くの安宿に泊まった俺は、洗面所で顔を洗っていた。

涙の跡を水で洗い流しながら俺は考えている。空たちのことだ。

一樹は俺の生存を喜んでくれたけど、他の四人がそうだとは思えない。

……この街にいるんだよな。街中でバッタリとかは嫌だ。明日からは隠れて、目立たないように行動しよう。

顔を洗い終え、タオルで顔を拭いた俺は、そのままベッドにうつ伏せに倒れ込んだ。

「痛っ」

固いマットレスが直撃して鼻が痛くなった。

力なく仰向けになる。

「結局また、逃げて隠れて、だな」

どう考えても空たちに会わす顔がない。

……死の恐怖から逃げた筈の俺は、結局死と隣り合わせの生活をしてきた。因果応報かもしれないな。

「……あー」

うめき声を出す。やりきれない感情をどうにかするためには意味は

なくとも声を出すのが有効だと思う。

……どちらにせよ会わす顔が無いのはホントだから、なるべく目立たないようにしよう。

さぁ、明日も早い。

「……おやすみ」

白い天井を見ながら何度目かわからない自分へのおやすみを言った。

安らぎと復讐

カチャ、と。

乾いた音が響き、扉が開く。

空たちがいる部屋に一樹が帰ってきた。同時に、部屋で待ち構えていた空は一樹に向かって頭を下げる。

「……！」

いきなりで、驚く一樹。頭を下げた空はそのまま口を開く。

「――……ゴメンっ！俺、一樹の気持ちとか全然考えてなくて……」

必死な空を見て、状況を飲み込んだ一樹は一つ息をはいた。

「許すよ。誰にだって間違いはある。……俺もだ。さっきは殴って悪かったな」

一樹は柔らかく笑い、謝っている空の肩をポンポンと叩くと部屋の中に入っていった。

――……。

五人はテーブルに座り、先程の話し合いの続きをしている。

「よし、明日はリザさんの所に情報を貰いに行こう！あ、朝だと寝てるだろうから勿論昼にね」

変にテンションの高い一樹。輝に会えたからなのだが、空たち他の四人には知る由もない。

「お、おう。そうだな！」

相づちをうつ空ですら何かに吹っ切れたような一樹に戸惑いを隠しきれない。しかし、気まずい雰囲気はもう無かった。

そんな一樹を見て不思議に感じた綾香は空にこそこそと話しかける。

「……なんか……帰ってきてから一樹の機嫌良すぎだよね……」

「……確かにそうだな……。何かあったのか……？」

空もこそこそと綾香に耳打ちを返した。

「どした？」

その様子に一樹は気付いて訝しげに声をかける。何でもない、と言う空と綾香の苦笑いを見て微笑んだ一樹は席をたった。

「……じゃあ俺そろそろ寝るわ。あ、そうだ、舞。後で俺の部屋に来てくれ、話がある」

「う、うん。わかった」

舞は突然自分の名前が出てきた事に驚く。と同時に疑問がわく。

（……何だろう？）

疑問に思うのは舞だけではない。空たちもだ。しかし当の一樹はそれを気にかける様子もない。

「じゃあ、先に部屋戻ってる。何かあったら知らせてくれ」

飄々とした態度で言い放つ一樹。

「お、おう。おやすみ」

空はとっさに動揺を隠しきれない返事を返す。

そして固まる空たちを背にドアノブに手をかけた一樹は思い出したように振り返った。

「あ、それと、明日リザさんにどの情報を貰うのか決めるのは空たちに任せるよ」

そう言って、一樹は自分の部屋へ戻っていってしまった。

「……」

一樹が空の部屋を去る時の一言が部屋に残った四人にしばしの沈黙をもたらす。

あれだけ輝の情報についてこだわっていたのが急に無関心になったのだ。例え誰だろうと口を閉ざしてしまうだろう。

そんな沈黙の中で空が恐る恐る声を発した。

「なぁ……。一樹に何かあったのかな？」

「そうですね。つい先程まで輝の事を気にかけて怒っていた筈ですが……」

速人も完全にお手上げのようだ。そこで視線が舞に集まる。
舞はその視線の言わんとしていることを理解すると、頷いた。
一樹は去り際に、舞に『部屋に来い』と言っていた。一瞬空たち４人は変な意味に誤解しかけたが、理性がそれを振り払う。
兎にも角にも一樹に何があったかを聞けるのは現状舞だけだ。

「わかった、一樹くんの部屋行ってくるね」

舞は４人に微笑んで立ち上がった。

――……。

一樹は自分の部屋に戻ると鼻唄まじりでベッドに飛び込む。今、彼はすこぶる機嫌が良い。
親友が生きているとわかった、言葉を交わした。

一樹にとって、一番重かった肩の荷物がおりたのだ。嬉しくないわけがない。

しかし笑顔だった一樹はベッドの上で仰向けになり、ふと鼻唄を止めて真顔に戻って天井を見つめた。そしてゆっくり目を閉じる。

（空たちに『輝が生きている』とは言えなかったな……）

コンコンと、軽いノックが二回。恐らく舞が来たのだろう。

一樹はベッドから飛び起きて、扉の外に立っていた舞を部屋に入れた。

――……。

「話って……？」

舞は部屋のテーブルに座るとすぐに一樹に聞いた。

一樹は笑顔でその向かいに座る。そして興奮気味で話し始めた。

「さっきな、外で、輝と会った」

その一言に、舞の表情が刹那固まり、一気に喜びを表す笑顔へと。

「……！本当！？」

目を見開いて、口もポカンと開けて、驚愕と確かな安堵が入り交じった表情になる。

つられた一樹も満面の笑みを見せた。

「ウソじゃない、輝は生きてた！」

「よかった……」

安心で胸を撫で下ろす舞。その目からは微かに涙が落ちている。

「……なぁ」

その様子を見た一樹はかねてからの疑問を舞にぶつけることにした。

「あのさ、空たちの様子を見る限り輝は嫌われてるようだったけど……。舞は何で輝を心配してくれてるんだ？」

一樹に疑問をぶつけられた舞は戸惑いの表情を見せる。

一樹に話してもいい内容か迷っているようだ。

しかししばらく逡巡の表情を見せると、決心したような表情になって話し始める。

「じゃあ話す前に一つ質問するね？」

一樹は無言で頷く。

「一樹と輝の出身って峰尾町だよね？」

舞の問いかけに一樹は再び頷く。

「そうだよ。東京の郊外の、峰尾山がすぐ近くだ」

一樹の答えを聞いて舞は、「やっぱり」と納得の声を漏らした。

「私も昔、峰尾町に住んでたんだ……」

「え？でも俺――」

質問を投げ掛けようとする一樹を止めるように舞は続けた。

「――そう。昔。幼稚園の時に引っ越したんだ」

舞は「それでね」と言って続ける。

「私、峰尾町に住んでた時に輝と友達だったんだ。輝は覚えてないみたいだったけど……」

「……それで、か」

話し終わった舞に一樹は相槌をうった。

（幼稚園……。俺が輝と友達になったのは小一の時だから俺は知らなくて当然か）

色々考える一樹をよそに舞は目を潤ませて微笑む。

「だから、輝が生きていてくれてうれしいよ……」

言い終わって舞はついに涙を堪えられなくなって静かに泣いた。

「舞……」

一樹は席を立ち、泣いている舞の隣に行って、その肩を抱く。一樹はそうせずにはいられなかった。

「輝は生きてる。明日にでも会いに行こうな」

「うん、絶対」

舞は一樹に体を預けて出来るだけ声を殺して泣いた。

「ありがとう、一樹」

――……。

「久しぶりに泣いて、スッキリしたよ」

そう言って笑う舞。赤くなっていた目は魔法で治癒した。一樹は一樹で、先ほど舞の肩を抱いてしまったことに一人で照れていた。

「そ、そっか。……あー。そろそろ部屋戻るだろ？」

「うん」

一樹は部屋のドアへ向かう舞に柔らかく笑っていた顔を突然厳しいものに変える。

「舞。ひとつ、約束だ。……今は空たちに輝が生きていたことは言わないで欲しい。わかってくれるよな？」

「うん、わかった」

舞は少し切ない表情をするが納得したようだ。

やはり、輝と空とはまだ仲直りできる段階ではないと舞も思ったのだろう。

課題は沢山ある。

それでも『輝が生きている』というたった一つの事実は彼らの重荷を取り除いた。

「……じゃあ、おやすみ」

「あぁ、お休み」

部屋に戻る舞に手を振って、自らの部屋に戻った一樹。

豪華な造りの部屋に置いてあるふかふかのベッドに飛び込む。

軽い反発を感じながら目を閉じた。

（舞にはしっかり輝の無事を伝えた。これでやるべきことは終わった。明日には輝と合流しよう）

そのまま寝返りをうつ。

（……本当は、皆で仲良く行動出来たら良いんだけど。輝も、中学の頃は気弱で優しい奴だったのに、頑固になったなぁ……）

「まぁいーや」

（俺たちも輝もしばらくは王都にいるんだ。上手く引き合わせて話し合いさせよう。きっと仲直り出来る。……生きてるんだから）

――……。

翌朝。

一流ホテルにあるような落ち着いた雰囲気のレストラン。空たち五人は白いクロスがかけてあるその大きめのテーブルを囲んで朝御飯を食べている。

「で、何について訊くコトにしたんだ？」

一樹は朝御飯のスープをすすりながら空に訊く。

舞に輝の無事を伝えた後、そのまま眠ってしまった一樹は、リザへの一つ限りの質問がどうなったかを知らない。

「『アクセサリー』について聞くことにした。まだまだアクセサリーには俺たちの知らない能力があるはずだ」

空がパンをかじりながら一樹の質問に答える。

「……だからリザさんが起きる正午まではラルガについての情報を読むぞ！」

「おっけ！今日も頑張るか！」

スープを飲み終わった一樹は大きく伸びをした。

――……。

朝食を食べ終えた空達五人は空の部屋に集ってラルガについての情報が記されている分厚いファイルのページをめくっていた。

「手分けして調べましょう」

という速人の発案により、膨大な量の情報から五人で手分けして重要そうな情報を探す作業をする。

しばらくは紙をめくる音だけが部屋に響いていたが、突然ラルガの

経歴についてを読んでいた綾香が動揺を含めた声を出した。

「……え？」

「どうした？」

空が口元に手を当てている綾香に聞く。綾香は「ちょっと待って」と言ってファイルのページを戻って読む。

そして今度は完全に動揺した声で空に話し始めた。

「これ見てよ……」

綾香が空にファイルの一部を見せる。

何てコトない経歴表だった。

しかしすぐに空は綾香の動揺の原因に気づいた。

「皆、ラルガの外見何歳ぐらいに見えた……？」

空の声は震えている。

「どうしたのですか？」と問う速人に空はファイルから読み取った事実を告げる。

「ラルガが軍に入ったのは約７０年前。これはどういうコトだ？」

（シュヘルに来たラルガはどう見積もっても３０は越えてなかった。

……つまり、ラルガは歳をとっていない？）

「待ってよ。人違いじゃないの？」

舞は作り笑いで資料を持っている空に訊く。不老を信じられるわけがない。

しかし空や速人がいくら経歴資料を読み取っても矛盾がない。

やがて数十分が過ぎて空が首をふるふるとふる。

資料に間違いが見当たらないことをこの場にいる全員に伝える。

ただでさえ耳を疑いたくなるような武勇伝に加え、不老まで。

ひどく人間離れしているラルガ。そんな奴を倒さなくてばならない。

本当に、倒せるのか？

疑問と共に、陰鬱な雰囲気が立ち込める。

――パン！と、弾けた音が部屋に響いた。

嫌な空気を振り払うように一樹が手を叩いたのだ。

「一樹……？」

「ここで不確定なことをぐだぐだ論じていても怖じ気づくだけだ」

一樹は全員の注意を引くために叩いた手をおろす。

下ろした手でそのまま部屋の壁にかかっている時計を指差した。

「そろそろリザさんのトコに行ってアクセサリーについての話を聞きに行こう。机上の愚論はそれからでもいい」

――……。

「で、決まったのか？」

眼鏡をかけた情報屋としてのスタイルでリザは空達に訊いた。

場所は例の酒場。例に漏れずリザが人払いをしたようで、飲んだくれている客は一人もいない。空たちは大きなテーブルに腰をかけている。

リザの問いかけに仲間の視線を受けて、空が一歩前に出た。

「俺達は『アクセサリーについての情報』が欲しい。教えてくれ」

空はハッキリとそれでいて決意に満ちた目をリザに向けて言いきる。

輝の情報はいらない、と言った一樹に甘えるような形になってしまったが彼は後悔はしていない。

今必要なのは自分達の力の源をよく知ること。

敵を知り、己を知れば百戦危うからず。

敵、ラルガの情報は既に手の内。後は己を、アクセサリーの事をしることが出来れば大きな力になる筈だ。

「そうか。わかった。……今ファイルを取ってくるから少し待ってろ」

リザはふと悲しげな笑みをこぼす。

「……切り捨てられた存在、か……」

誰にも聞こえない小さな声で呟くと、空達を置いてアクセサリーについての情報を記したファイルを取りに階段を上っていった。

十分後にリザが申し訳無さそうに持ってきたのは、何も挟まっていないかのような薄いファイルだった。

リザが薄く透けてしまいそうなファイルから出したのは一枚の紙。

「済まない。情報が極端に少ない」

そう言うとリザは空に紙を手渡した。

「アタシの情報網でダメならもう王立図書館の禁書か王宮内の禁書にしか手がかりはないと思ってくれ」

その二ヶ所にだけは手を出せない、とリザは付け加える。

逆に言えばその二ヶ所以外では情報が乏しいということ。

空は複雑な表情でその紙を受けとる。

一分程でその紙を読み終えた空はあからさまにしょげた顔をした。

「ニーグさんと一樹に聞いたことと変わらない。目新しい情報はない……」

「空、仕方ないよ」

綾香は慰めるような声を出す。

「それよりホラ、お腹空かない？」

手をお腹に当てる綾香。

暗くなった空気を精一杯明るくしようとしている。

空はそんな綾香の意思を汲み取って無理矢理にでも微笑んだ。

「そだな。昼食ってないし食べに行くか！」

綾香の提案に乗った空に続いてリザを除いた全員がテーブルを立った。

リザは「済まない」と繰り返して空達に伝える。

「君たちはラルガについて知りたいんだろう？……お詫びといってはなんだが、ラルガの居場所を見つけ次第教えよう」

「……本当ですか？」

聞き返す空にリザはうなずきかけた。

「ええ、だから今は、とりあえず昼食でもとってきな」

――……。

「何食べるー？」

「甘いのが良いなーっ」

綾香と舞が空達一行の先頭を歩きながらしゃべっている。
二人とも不安を打ち消すように明るい声を出していた。
その後ろから一樹が口を出す。

「昼飯に甘いのってどうなんだ?」

「俺も甘いのはヤダ!」

横から出てきた空も一樹に便乗した。

「では噴水広場にあった屋台に行きませんか?屋台なら各々好きな物を食べれるでしょうし」

速人が全員の意見を手早くまとめる。
王都の城門の前の噴水広場に屋台があるのを速人は船の乗客から教えてもらっていたのだ。

「噴水広場……って城門前の?」

一樹が速人に聞く。速人は頷き、それを見た一樹がさらに続けた。

「じゃあ、あっちの方角だろ?そこの路地裏行った方が早いだろ」

と言って一樹は近くの細い道を指差す。全員がそれにしたがって路地裏を進んでいるときに、一樹の地理感に不審に抱いた綾香が口を開いた。

「一樹何でこんな道知ってるの?」

「え？あ！あー」

（輝と噴水広場行ったから……なんて言えないな）

少し難しい顔をして、一樹はうつむいた。

「昨日の夜、俺出てったじゃん？そん時に街をフラフラとね」

「昨日の夜、か。……そういえば部屋に舞呼んで何してたんだ？」

今度は空が尋ねる。

一樹は一瞬舞の方を見て、アイコンタクトをとった。

「舞が昔俺の地元に居たらしくてちょっと地元トークしてたんだよ。な？」

「う、うん。本当だよ」

嘘をつきなれていないのか若干挙動不審気味に話を合わせる舞。

「これはこれは怪しいですねー」

速人がニヤリと笑みを浮かべる。

そうして一行は細い道を談笑しながら歩いている。

何の異変もない道で、一行のその先頭を歩いている空はその視界にちらつく光を見つけた。

（何だ？）

空は光の正体を見極めようと目を凝らす。
人通りもない道で、それが何なのかを見定めるのは容易だった。
時折放置してあるガラクタの影に隠れて、広場の中をうかがっている不穏な空気をまとった怪しい人影。
そしてその手には。

（刃物！）

ボロボロの衣服をまとった少年が錆びたナイフを持ってその暗がりから広場を睨む後ろ姿があった。

確かな殺人の狂気を彼に感じた空はナイフを持った少年のもとに駆け出す。

「おい！あぶねぇぞ！」

駆け出した空は少年が持っているナイフを無理矢理取り上げた。
取り上げる際に刃の部分を握ったその手から赤色が流れる。

「誰だ！？ナイフ返せよ！」

ナイフを突然奪われたコトに少年は一瞬驚いたが、すぐに空の手から取り戻そうと拳を掲げる。
が、しかし「やめなさい」という声と共に小さな拳は速人によって止められた。

「空っ！大丈夫！？」

綾香は空に駆け寄って血が流れている空の手を心配そうに見る。

「大丈夫だ、心配すんなよ」

顔は笑ってはいるがその額には冷や汗が流れていた。傷が痛いのだろう。

「今、治すね」

遅れて駆けつけた舞がアクセサリーの癒しの魔法で空の手を治していく。

「これで何をしようとしたんだ？」

一樹が空の血でベットリのナイフを少年の前でヒラヒラとふり、咎める厳しい声色で問い詰めた。

責める一樹に怯えてうつ向いてしまったその少年はボロボロの服を着ていて腕は細く、赤茶色の髪もパサパサだ。歳だってかなり若いだろう。というよりは幼い。中学生にもなっていないのではないだろうか。

何も言わずにただただ下を向く少年に厳しい口調で同じ質問を続ける一樹。

「これで何をしようとし……」

それを空が遮った。

「待て、一樹。そうやって脅しても答えちゃくれないよ。……なぁ、何でナイフを持ち出したんだ？」

空が優しく問いかける。

同時に、グゥー、と突然不思議な音がして、空の目の前の思い詰めたような少年の顔の頬に赤みが差した。

「腹、へってるみたいだな？」

「……うるせぇ」

少年はすごんでみるが、お腹が鳴った後では滑稽に見えるだけ。

「っぶははははっ！」

空の後ろで恐い表情をしていた一樹もこらえきれずに吹き出してしまった。

続いて他の仲間も笑い出す。

少年は恥ずかしさでさらに小さくなる。もう逃げてしまおう、と少年が決心したとき、空が提案した。

「そうだ、この子もメシに連れていこうぜ！」

「ふふ、うん。賛成」

綾香が笑いながら同意する。他の皆もそれぞれ笑いながら空の提案に乗った。

「じゃあ行こうか！そういや名前聞いてなかったね？」

しばらくは反抗的な目をむいていた少年も、空たちの笑い声と自ら

の空腹に負けたのか、ため息をついて拗ねながら呟くように言う。

「……アーク」

「そうか、じゃあアーク。早速広場に行こうか」

空はそんなアークの手を取って大通りへと歩み出した。

――……。

「なぁ。アークは一人なのか？」

空たち一行は噴水広場に向かって歩いている。その道中で空がアークに訊いた。

アークはうつむく。

「一人だよ。母さんは知らない。オレを育ててくれた父さんは少し前に、闘技場で殺された」

幼いアークの表情が徐々に色濃い憎しみに変わった。ギリ、と歯をくいしばる。

「父さんは降参してた。なのにアイツは止めをさした。なのにアイツは謝りもしない。なのにアイツは嘲笑っていた。なのにアイツは今生きている」

アークの小さな拳が固く結ばれた。

「じゃあナイフで狙ってたのは……？」

空が話を促すように訊くとアークの身体が怒りで一瞬震えた。

「デミアン・ダグラス。アイツが……！」

悔しさから、うっすらと涙まで浮かべ始めるアーク。きっと、何度となく流してきたのだろう。

歩きながら話すアークの横で、空が足を止めた。アークもつられて歩みを止める。

「……ソイツ、許せないな」

静かな怒りを帯びた声で呟いて、震える少年の肩を空はしっかりと慰めるように持つ。空の目は義憤と、更に個人的な怒りによって満ちていた。

「俺なァ、孤児院育ちなんだ。だからそういうのチョット許せねぇ」

空の過去を知っている綾香は空の怒りが『チョット』ではないことを知っている。

「空……」

「ん、大丈夫」

心配する綾香の頭を空は優しく撫でて「ありがとう」と伝えた。

「……はいはい、ゴチソウサマです」

突然速人がとぼけたような声を出して空と綾香の会話を中断させる。

「ラヴい現場はアーク君に悪い影響を与えますよ。続きは宿屋でお願いします」

「いやっ違っ」

空が焦る。

不意にアークの方を見ると真っ赤な顔で空と綾香を見ていた。

「いやー。何かこういうの久々に見たわ」

「速人さんも良い性格してますよね……」

一樹は半笑い。舞は苦笑いで空たちのやり取りを見ていた。何にせよ見てる方は楽しそうだ。

「……空」

不意に真面目な声色で速人が空を呼び止めた。

「何だよー！」

いじられて半ばヤケクソ気味に空が返す。速人は真剣な面持ちを崩さずに空の方を向いた。

「……同情するのは良いですが。復讐の手伝いのような馬鹿げた事をしてはいけませんよ」

「でも……」

「異論は無しです」

反論すら認めない速人に対し、空はムスッと押し黙る。

「ま、まぁ飯食おうぜとりあえず！」

一樹がこの場を『とりあえず』と、とりなして、一行は広場へと進んだ。

――……。

屋台で昼飯も済ませて機嫌を直した空はアークにデミアンの外見背格好について噴水の側のベンチに座って聞いている。他の皆は街の散策に行ってしまったので今はいない。

速人は、変な気を起こすな、と言っていたが結局空には届いていなかった。

速人も「知りませんよ？注意はしました」と言って呆れ返ると、他の皆と同じように街の何処かへ散策に行ってしまった。

（ゴメン、速人。でもこんな小さな子の手を汚させるわけにはいかない。だから、俺が、代わりに……）

空が心の中で統率を乱したことに対する罪悪感を覚えながら特徴についてを聞いている時に不意にアークの目は見開かれる。瞳孔の開きを横にいる空が確認できるほどだ。

アークは空に目を合わせると、再確認の意味で訊いた。

「復讐、手伝ってくれんのか？」

アークの声は興奮で震えている。
空はアークの様子の明らかな変化に疑問を浮かべる。

「……？ああ、手伝うぜ。……突然どうした？」

アークがベンチから立ち上がって、ある屋台の周りの人混みの中を指差した。

「アイツが……！」

空も立ち上がりながらアークの指差した方向を向く。腰の剣の柄に手を軽く触れた。

アークの指差す先にいたのは二人連れの旅人だ。一人は長身の男、腰に剣を差している。剣士だ。もう一人は小柄の恐らくは女。短刀を背中に帯びている。

「あの顔……小柄の方だ！アイツ女だったのかよ！……騙しやがって！」

アークが悪態をつく。ナイフを握り、路地裏の物陰から小柄の『男』を探して大通りを睨む毎日が無駄だったと理解して、なおさら怒りがむき出しになる。

その時、視線の二人連れは笑みをこぼした。談笑、している。

（親を殺されたアークがこんなに苦しんでるのに、あの殺人鬼が笑ってる……？）

「ふざけ……」

空の中の怒りが溢れそうになった瞬間。その腰の剣の重みを感じなくなった。

「……！」

「うわぁーーっ！！」

アークが空の剣を引き抜いて雄叫び走り出していた。

「待て、アーク！」

アークは空の制止を振り切って人混みへ突進する。

「キャー！」

「おい！あのガキ剣持ってるぞ！」

「逃げろー！」

悲鳴。
怒号。
パニック。
人混みが割れる。

鋼鉄の剣の重みに剣の先をガリガリと石畳の地面に引きずらせる。

「うわぁぁーー！」

割れた人混みに例の二人連れが残っている。

「デミアン・ダグラス！覚悟！」

叫ぶアークを見つけた長身の男は素早く剣を抜いて構えた。

「ミア！下がって！」

もう片方の小柄な方――デミアンではなく何故かミアと呼ばれていた――を庇ってその前に立つ。

「死ねぇ！」

アークが一喝し振りかざした鋼鉄の剣は長身の男に軽々と防がれた。

「まだ、子供じゃないか……。復讐に身を堕とすなんて」

「うるさい！」

アークはさらに力を込めるが一ミリも動かない。

即座に長身の男がアークの腹に蹴りを入れる。蹴りを入れられたアークの軽い体が飛んでいき、手にしていた剣は宙へと飛んだ。

「エレック！止めて！」

ミアと呼ばれていた小柄の方が剣先をアークに向けた長身の男、エレックを止める。

「でもミアが！」

エレックがミアにアークの危険性を訴えようとしたとき、エレックの眼前に鋼鉄の冷たい刃が突きつけられた。

……空だ。

エレックに弾かれて宙へと飛んだ剣を受け取って突きつけたのだ。

「アークから離れろ！」

脅す空。

「エレック！」

懇願するミア。

「……わかったよ。離れる」

諦めたエレックは剣をアークから引いて倒れたアークから離れる。

「行こう、ミア。あまり長居は良くなさそうだ。きっと少年なら王立図書館にいる」

剣を腰の鞘にかけながら、エレックはミアを促した。その刹那。

「待てよ、剣はまだおさめるなよ」

「……っ！」

金属と金属がぶつかり合う特有の高音が鳴り響く。空がエレックに

突然斬りかかり、それをエレックが剣で受け止めた。

「危ねえ、なッ！」

エレックは受け止めた空の剣をいなしながら空との距離をとり、ミアを庇うように構えた。
空も剣を剣道のように正眼に構え、エレックを見据えた。

「アークに復讐をさせる気はないけれど、それでもその殺人鬼を野放しにするわけにもいかない……！」

重い鋼鉄の片刃剣を右手で軽々と持ち、空はもう片方の手で懐のペンダントに軽く触れる。

（……ドーピング！）

身体にペンダントから引き出した魔力を通し、エレックとの開かれた距離を一気に詰めた。
格段に向上した身体能力が空の動きを速くしている。

「くらえ！」

斬る。
突く。
薙ぐ。
打つ。
払う。
考えうる方法での空による一方的な攻撃。
必死で受け止め、受け流し、防ぐも、常人離れした空の動きに翻弄されてエレックの体のあちこちに血が滲んでくる。

「ぐっ」

圧倒的な力と速さの差。敗北は必至であるように思われる状況でも、エレックの目は死んでいない。

「……うおおお！」

一つ吼えて、気合いを入れ直すエレック。
ミアを守る、それだけで空の速さについていく。

「くそっ！」

（ドーピング使ってるのに！なんて粘りだ！……仕方無い）

空はエレックを無傷で倒そうという考えを諦めて、その剣に更に力を込めた。
渾身の一撃にエレックの剣が打ち付けられ、衝撃で手が軽く痺れる。

「……ちッ」

空はその一瞬の隙にエレックの脇腹を蹴り飛ばした。

「が、はっ！」

ドーピングで強化された空の筋肉によって繰り出された蹴りによってエレックは二転三転し、何メートルも吹っ飛ぶ。

「エレック！」

ミアが空に背を向けて吹っ飛ばされたエレックに向かって駆ける。
駆けつけ、うつ伏せに倒れたエレックを引っくり返し仰向けにして
苦しそうに上下するその胸に耳を当てた。

（呼吸音がおかしい。これ以上戦ったら……）

ミアはゆっくりと立ち上がって空に向き直った。

「もうこの人には手を出さないで。目的は僕だろう？」

ミアの足元で何かが動く。

「……待、てよ」

エレックが剣を杖にして立ち上がる。顔には血と無理な作り笑いを
張り付けている。

空は剣の構えを崩した。どうみてもエレックに戦う力があるように
は見えない。

その様子を見たエレックは作り笑いを続ける。

「油断大敵、だぜ？」

エレックは杖にしていた剣を両手で握り、横に構える。
エレックが目を瞑ると剣の周りに淡い緑色の光が現れた。

「見せてやるよ。ケイオス流奥義、『魔法剣』を」

（……魔法か！）

空はエレックの剣を取り巻く光に戦慄を覚えてバックステップを使って距離をとった。しかし、エレックはその笑みを崩さない。

「距離をとったって無駄だ……食らえ！」

エレックは剣を大きく振りかざす。

「『魔法剣』！！」

禍々しい程に巨大になった剣の光。

剣から放たれた巨大な光の奔流が空に襲いかかった。

噛み合う歯車

「んー、よく寝たっ」

俺は大きく大きく伸びをした。今までの道中、独りで野宿をしていた時は見張りをたてることが出来なくて、浅い睡眠しかとれずにいつも寝不足気味だった。

こんなに深く熟睡出来たのは久し振りだ。

頭はスッキリとしているが目に違和感を覚えた。

「……ん」

目が少し腫れていた。

泣いたからかな、昨日。一樹に会えて、嬉し涙かそれとも悲しみからの涙なのかはわからないけど。

俺は安宿にしては質の良いベッドからさっさと這い出して洗面所に向かった。

蛇口を捻ると水が出る。

王都というだけあって水道設備が良く整備されてるみたいだ。

異世界に来て、インフラ整備がなされていることの大切さを良く知

った。
自由に水や明かりを出したり出来る魔法使いには必要の無いことだからなのかも知れない。元の世界と比べてそういう『技術』が劣っていると感じる。

「ぷはぁ……！」

冷たい流水で顔を洗っていると目の腫れが引いてきたのか、目の違和感が気にならなくなった。

布で顔を拭いてベッドの上に座り、俺は頭の中で今日の予定を考える。

まずは図書館行って……。

考える途中で図書館にあった膨大な資料の数を思い出す。とてもまだまだ調べる作業は終わりそうにない。

……図書館行って一日終わりだな。
後で宿の主人さんに言ってこの部屋キープさせてもらおう。意外と過ごしやすかったしな。

「槍は……目立つか」

槍を壁に立て掛け、食料や野宿セットなどの重たい荷物を部屋に置いて、ハリアでもらった小刀を背中に横向きで装着する。

パチン、と革のベルトに小刀の鞘をつけて、図書館に向かうために部屋を出た。

――……。

長机に本の山を積み、椅子に腰かけている。本の山の中に『禁書』とやらが含まれているからか、他で本を探している学者らしき人たちの視線が少し痛い。

視線を気にしないようにしながら今読んでいる古めかしい装丁の魔術関連の本を、パタン、と閉じる。

これも違うな……。

ため息をついて調べ終わった本を床の上の読み終わった本の山に放った。

図書館にこもってからもう三、四時間位になる。

『イセカイ』『転移魔法』『アクセサリー』と、三つのキーワードに絞って本を読み漁るものの、肝心の帰る方法の手がかりは中々見えてこない。

だけど、今まで読んできた本の内容が無駄にならないように、本の要約のまとめを簡単にメモしてある。

俺は一休みがてら、書いてきたメモを読んで少しだけ考えを進めた。

――……。

まず、前提として。

この世界には度々『イセカイ』の人が何らかの『転移魔法』によって飛ばされてくるみたいだ。

そして、飛ばされてくる人は決まって『アクセサリー』という魔法

の装飾品を持っている。
ただ、それは『魔法装飾品』やら『神の贈り物』やら『世を統べる力』やらと色々な名前で記されていた。
仰々しく『世を統べる力』とも呼ばれていたのは、大昔にこの国の現・王様の祖先が『アクセサリー』の力を使って国を建てたから。らしい。この国の建国神話によると。

建国神話は置いといて、歴史的にも多くの人がこの世界にやって来たことが本に書いてある。そこまで珍しい事でも無いのか……？

とりあえず、この世界へと来てしまった者たちはみんな一様に『アクセサリー』を持っていた。
だから『アクセサリー』が元の世界と異世界をつなぐ鍵になっていたのは間違いない。

気になるのは『度々』人が来ているということだ。

『度々』来ている……その割りには『アクセサリー』をしている人を見たことも、また噂に聞いたこともない。本当に『度々』来ているのなら『アクセサリー』がこの世界に大量にあったっておかしくはない。

それが無いってことは消えてしまったってことだ。

すると考えられるのは二通り。

一つは、完全に消滅してしまった可能性。
でも俺のこの『銀のペンダント』はこの世界の歴史に何度か現れていると歴史禁書に記されている。
だから消滅したとは考えにくい。

もう一つは、『アクセサリー』にはそれ単体で元の世界に帰る為の魔法が、『転移魔法』が込められているという可能性。
もし仮にそうだとすれば、ここにこそ帰るためのヒントがあるはず。
一番信じたい可能性だ。

――……。

「……俺の頭じゃこんなモンか」

つくづく自分の頭の悪さを呪う。例えば速人ならもっと上手く情報を組み立てることが出来ただろう。

下手くそな文字を連ねたメモをぐしゃぐしゃに握り潰し、考察を終えてまた一つ大きな伸びをした。

結局『アクセサリー』に全ての鍵が備わってるということしかわからない。第一そんなこと、はじめからわかってる。

「そう都合良く答えが置いてあるわけないか……」髪をクシャッと掴み、苛立ちを静めて壁にかけてある時計を見た。

そろそろご飯が美味しく感じられる時間帯だ。

……飯、行くか。

立ち上がり、長机や床に積んだ本の山をそのままに階段を降りた。

階段を降りて正面にある受付席に座る受付嬢と目が会うと「ご利用ありがとうございます」と模範になりそうな礼をしてきた。

俺は「積んだ本そのままでお願いします」と軽く会釈を返してから外に出る。

その数分後、俺は昨日『怪しいから』という理由でチェックインを拒否られたホテルの前に立っていた。

元の世界と同じように、ホテルの中にはレストランがあるらしい。

今日はここで飯を食う。少しでも王都の生活に慣れたいのと、ついでに昨日のリベンジだ。

いや……昨日のリベンジが一番の目的かな。

軽く咳払いをして服装を整える。ポケットにはちゃんとシルバークラスを示す身分証が入っている。

仮にドレスコードなんてあっても関係ない。堂々とした態度でいよう。

「よし！」

今度は大丈夫！

白い彫刻入りのドアを開くと相変わらずの豪華なロビー。頭上の光を失ったシャンデリアが滑稽に見える。

ロビーを突っ切ってレストランへ向かう。仄かに良い匂いがする。

静かに腹が鳴った。

難なくロビーを通過。そのままレストランの中へも入れた。着席し、音楽の授業で一度見たハンドベルみたいなものを振る。すると、ネクタイ無しで黒いスーツの様な服を着たウェイターがメニューを持ってやって来た。

「どうも」

適当に開くとステーキらしき料理が目に入る。値段も……貨幣単位や相場がわからないから何とも言えないけど、一番大きい金貨三枚出せばお釣りがくるだろう。

「じゃあコレと、あ、コレもお願いします」

「かしこまりました」

ステーキとついでに目にとまったサラダを頼むとウェイターは軽く会釈をしてキッチンの方へ捌けていった。

あっけなく俺のリベンジは終了してしまった。

でもそんなことはどうでも良い。

「情報が足りない……」

頬杖をつき料理を待ちながら呟いてみた。

魔法。

イセカイ。

アクセサリー。

まだ詳しいことは解らない。このまま図書館通いを何年も続けるのか。
だとするとぼちぼち仕事でも始めなきゃな。
色々考えながらぼうっとして宙を見つめているとウェイターが料理を持って来た。

「おっ」

湯気の立つ肉を前に腹が唸る。その隣にサラダの器も置かれ、ウェイターが何か言って会釈して去る。

本当に旨そうな料理だ。

フォークを突き刺し、熱いままで口に放り込む。柔らかい。くさみの無いビーフの様な味わい。
新鮮な葉類と一緒に食べてもまた旨い。

とても旨い。

とても旨いけど。

家族と、友達と、シュヘル町長のニーグさんたちと、マーカスとユリウスと、エレックとミアと、みんなで囲ったご飯には及ばない。
独りのご飯は旨いけれど、味気ない。

「……うん。文句なく美味しい」

一口、一口、どんどんゆっくりに箸を……フォークを進めていき、

あらかた平らげて、きれいに磨かれた大きな窓から外を眺めていた。

その時、突然轟音と共に振動が伝わった。

「うわっ……何だ?」

爆音らしき音の残響がたわんで店内に響く。

店の中ではない。外だ。

俺は皿の残りを掻き込んで水で勢い良く飲み下す。

急いで席を立ち、店員に適当に金貨三枚握らせて勘定を支払うと走ってホテルを出た。

背中に横一文字に帯びている小刀に手をかけて辺りを見回す。そしてふと空を見上げる。

「……何があった……?」

ホテルを出た俺の目がとらえたのは空に浮かぶ砂煙。さっきの爆音の原因があるんだろう。

城門前の噴水広場の方向。

危なさそうだし関わらないに越したことはないだろうけど……嫌な予感がする。俺が今、行かないと駄目な気がする。

「……行って、みようか」

予感を気のせいだと振り払えなくて、俺は噴水広場へと走り出した。

――……。

「退いて！」

人を押し退け急ぎ走る。

野次馬が多くて思うように進めない。噴水広場に近づくにつれて野次馬の数が多くなっていく。

それでも俺はやっとの思いで広場入り口までたどり着いた。

「くそっ！」

後少しなのに野次馬が多すぎて何も見えない。

「……何だよ……？」

一体中で何が起こってる？

何でこんなに嫌な感じがするんだ？

背伸びしたり飛んだりと必死に奥を見ようともしたが無駄な努力だった。

おまけに砂煙のせいで砂臭い。最悪だ。

「……！何で……？」

最悪ついでに、遠くの方の野次馬の中にとんでもない顔を見つけてしまった。

そういえば、一樹はあいつらが王都に来てると言っていた。

嫌な予感が確信に変わった。
さっきの爆音にこの砂煙。こんなことが出来るのは魔法ぐらいだ。

「退いて！退け！」

本当はあわせる顔もないからすぐにでもここから逃げたい。けど、
一目、見れるものなら。

いっそう必死に野次馬をかき分ける。

「退け！」

体を観衆にねじ込み、押し込んで、かき分ける。

「退けーっ！！」

立ちはだかる最後の野次馬をのけると、急に開けた。

「は……？」

視界に捉えた光景を理解するのにしばらくかかった。

砂煙が風に連れ去られ、野次馬に遠巻きに取り囲まれている三人がはっきりと見えてくる。

一人はボロ雑巾のように横たわる長身の男。

一人は横たわる長身の人の側で重そうな鋼鉄の剣を振りかざした少

年。

一人は剣の少年の前で長身の男を庇うように座っている少女。

ああ、三人とも知ってる。嫌な予感が当たったのかも知れない。

「エレック！ミア！！」

俺は背中の小刀を引き抜きながら走り出した。

長身の男、エレックを庇うミアに狙いを定めているその少年の鋼鉄の剣を小刀で受け止めつつ深くしゃがむ。

「！……お前っ！」

そしてしゃがんだ反動を使って、立ち上がりながら鋼鉄の剣を足で弾いた。

そして驚いた表情の剣の少年を睨む。

懐かしくもなる。

あのときからどのくらい経ったろう。

「どういうつもりだ！狛江、空！」

狛江空は余程俺に驚いたのか大きく退く。ついで弾かれた鋼鉄の剣を拾う。

剣を拾った空を睨み続けていると、服の裾を引っ張られた。後ろを向くと、ミアのきれいな目の瞳孔が大きく開いているのが見てとれる。

「輝……。エレックが……。ボクのせいで……」

怯えるミアの横で倒れているエレックを見る。仰向けで、腹に焼けたような傷がついてる。普通の攻撃じゃない。確実に魔法だ。俺は致命傷になりそうな火傷をペンダントの魔法で手早く治す。空から敵意を感じる。戦うことになった時のことを考えるとあまり治療に魔力を使うわけにはいかない。

「……ミアのせいじゃない。後は任せて。エレックを頼む」

「……うん」

ミアは力無く立ち上がるとエレックをゆっくり引きずってこの場を離れ始める。

「逃がすか――」

空が俺を無視してミアを狙おうとする。俺はそれを小刀をつきだして止めた。

「――久しぶりだな」

野次馬のざわめきが厭に大きく聞こえる。

俺の小刀が真っ直ぐ空の方向を向いてキラリと冷たく光る。

「魔法まで使って……ミアとエレックに何か用か？」

「魔法には、魔法だろ。それと、ミアってのはデミアンのことだな？」

空もまた鋼鉄の剣を構えてきた。罪を裁くかのような重く綺麗な光。癪に触る。

「デミアンじゃない。ミア、だ。間違えんなよ？」

「そんなことはどうでもいい。そこを退いてくれないか？」

まっすぐにらんでくる。動かずにいると空の方から口を開いてきた。

「……俺はアークの復讐の代理人だ」

「アーク？」

「アークの父親は闘技場でデミアンに殺された」

咎めるような空の言葉。……後ろにいるミアが心配だ。

「闘技場では殺人も認められてる。アークの父親も同意の上で戦ったんだ。ただの逆恨みじゃないのか？」

「……違う！父さんは降参してたのに！」

空の後ろから少年の叫ぶ声が聞こえてきた。拳を握って、涙を流しながら近づいてくる。

俺は小刀を構え直したが、空がその走る少年を片手で止めた。

「やめろ、アーク。ここは俺に任せてくれ」

憎しみ混じりの悔しそうな少年の瞳。……直視できない。

俺はアークから目をそらした。

空はアークを後ろに下がらせると鋼鉄の剣を片手で持って向けてくる。

「復讐が正義じゃないってわかってる。でも。でもなぁ。それじゃアークはどうなるんだ？このまま詫びもナシに人生壊されて生きるのか？俺はそんなの納得できねぇよ！」

「……ミアは、ダグラス家に洗脳されてたんだ。謝る必要も無いし、人生壊されたのはミアだって同じだ！」

言い返した瞬間に、空がその手の剣を地面に思い切り打ち付け、ガン！と鈍い音を響かせる。

「闘技場のルールとか！洗脳とか！こんな子供に親無しの辛さを与える行為を正当化出来ると思ってんのか！！！」

「……う」

鋭い言葉とサターンやラルガさんを彷彿とさせるような覇気。思わず俺は、言葉に詰まる。

空が地面に打ち付けていた鋼鉄の剣を両手で握り構えた。

「退け！久喜、輝！退く気が無いんなら……」

空が俺に向かって走り出した。

「退かないのなら、お前も叩っ斬る！」

空の放つ覇気と死の恐怖が足をすくませる。俺は空いている左手で足を叩いて恐怖を振り払う。

「くそ！退くかよ！退いてたまるか！」

空の剣が斜めから斬りおろされる。鋼鉄の冷たい剣。恐らくはかなりの重量だ。

だけど、浅い。空は、コイツは俺を殺さずに済ます気だ。

そういう心遣いが、優しさとやらが気に食わねぇ。

思えば前から気に食わないヤツだった。

甲冑龍と戦ったときも、俺が必死こいて『風の刃』を撃ったのを嘲笑うように閃光一発で追い払った。

シュヘルでも綺麗事ばかりでどこだかの将軍を倒すと息巻いていた。

気に食わねぇ。だから……倒す！

斜めから迫り来る剣。

重そうな剣だな。小刀じゃ受け止められない、か。

俺は空の太刀筋を見切って、身体をひねり剣を避ける。

「お……らッ！」

身体をひねった勢いに遠心力を加えて強く空を蹴った。回し蹴りだ。

「ぐっ」

剣を振るって隙だらけだった空は俺の蹴りをモロに食らった。空の右肩にかかとが食い込む。

「まだ、だ！」

俺の蹴りをものともせずに空は剣を振るう。俺は再び素早く剣を受け流す。

今まで何度も戦ってきた。空たちがどうやってここまで来たのかは知らないけど、転んだり殴られたり地面に這いつくばってきた旅路の賜物である俺の『見切り』は次々と迫る空の剣をとらえてくれる。

「負けねぇぞ！」

俺は先程蹴りを入れたところに小刀を突き立てる。

「食らえ！」

だけど、その切っ先は空の剣によって防がれた。
小刀が押し返される。馬鹿力だ。

「ぐ……」

一瞬鍔迫り合いになったが、小刀で重量のある武器を受け止め続ける負担を考えて素早くバックステップで空との距離をとる。

「くそっ」

飛び退いて構え直す。空が胸元の金色のペンダントに触れている。

「俺だって！ひくわけにはいかないんだ！」

……魔法！

空のペンダントは光属性。一体どんな術を使ってくる気なんだ？

「……！？」

急に視界から空が消えた。いや、違う！

目の端に空の姿を捉えた。

……高速移動！？

魔法でこんなことまで！

いつの間に後ろを取られ、俺はあわてて前方へ転がり込んだ。振り返ると、空が剣を空振りしたところだった。

その剣は、よくみると刃と峰が裏向きに振るわれていた。

峰打ち。つくづくまで俺を見下している。

「ふざけんな！」

俺は『風の刃』を手当たり次第にばらまいた。
無数の風が前方の空間を切り刻む。

「遅いんだよ」

「なっ……！」

また背後に！

「エレックって奴の方が速かった」

「……ッ」

振り向きながら小刀を水平に滑らせる。――居ない。

「殺す気はない。寝ててくれ」

「！」

下から声が聞こえる。

しゃがんでいる空が剣の峰を立ち上がりながら顎へかち上げてきた。

「く、あ」

体が軽く浮く。
目の前が暗くなる。

鼻の奥にツンと来る。

少し後方に飛ばされて背中に衝撃が走る。

体が、いたい。

――……。

輝の魔法を交えた抗戦もむなしく、意図も簡単に倒されてしまった。

眼は虚ろ。口を半分開いて意識を暗い闇に落としている。だらしなく垂れた右腕からは小刀が滑り落ちた。

「輝っ！」

すぐ後ろでエレックの看病をしていたミアが駆けつけてきた。

その眼にはうっすらと涙を浮かべている。

「ボクのせいで……」

「そうだ、お前のせいだ！」

空はミアに強く指をさす。

「だから、罪を、償え！死ねとは言わない。せめて、謝れ！せめて、責任を……」

空は剣を大きく構える。顔を憎悪に歪める空の心に浮かぶのは酷く個人的な憎しみ。

親を無くしたアークを自分に重ねて、目の前の怯える少女を彼の父親に重ねる。

――……。

狛江空は、望まれた子では無かった。

簡単な話、不倫によって産まれてしまった。

家庭を持つある男と、綺麗な外見の女の間に生まれた空は、誕生の二年後に育児放棄に走った女によって宅配便で男の家へと送りつけられた。

それにより男の家庭は脆くも破綻。

男の妻と子は家から出ていき、男と空の生活がはじまる。

男の人生を壊してしまった幼少期の空を待っていたのは安アパートでの虐待の日々。

そんな生活の中での唯一の心の拠り所は夕方のヒーローアニメであった。

それから三年が過ぎ、歪んだ性格を持った五歳の空を置いて、男は唐突に消えてしまった。

家にあった僅かな食料をかき集め、数日を耐えたがそれでも男は帰ってこない。

棄てられた。

飢餓でもうろうとする意識の中で幼いながらも理解した空はずっとアニメのヒーローを待ち望んでいた。

しかし彼を助けるようなヒーローは現れなかった。ついに彼は自らの足で外へと踏み出す。

その日は雨であった。

雨が降りしきる中街を歩き詰め、力尽きる寸前に見たのは別れた筈の妻と子と楽しげに歩く男の姿。

その後綾香とその家族に拾われ、世話になり、狛江神社の施設で育つ。

『狛江』という名字は神社からとったものであり、彼の本当の名字ではない。

英雄に憧れる彼は、ひどく、不安定な心を持っていた。

――……。

（俺は！親を奪うような！こんなクズを！例え女子供であろうと！このままのうのうと生かす訳にはいかない！）

剣を持つ空の手に力がこもる。

対するミアは己が招いた状況に絶望して涙を流してただしゃがんでいた。

（エレックも、輝も。ボクのせいで）

ミアは剣を掲げる空を見上げる。

（でも、謝ったら、一度認めたら、ボクは今までの罪を洗脳のせいだと逃れることは出来ない）

そこまで考えて、ミアはふと笑った。自分を嘲るように。

「あ、はは」

（……こんな時にまでボクは自分のことしか考えてないのか）

「……もう、殺してよ」

その時、頭を抱えるミアのその後ろで声をあげるものがいた。

「……ミ、ア」

エレックが地面に倒れたまま必死に最後の力を振り絞ってミアに声をかける。

「エレック？……もう、大丈夫だよ。ボクは死」

「うる、さい！……ミ、ア。今、今は逃げるんだ。絶対に、死ぬな。ここは……」

エレックは立ち上がる。

足はふるふると震え、足元には早くも血だまりが出来そうだ。

「ここは、俺を、信じてくれ」

そう言うとエレックはミアにピースしてみせる。

「輝も、俺に任せ」

糸が切れたように、エレックが崩れ落ちる。

「エレック！」

エレックの必死の体力も尽きてついに倒れてしまった。

「もう、終わりだ」

空の声がミアを貫く。

「もう、諦めろ」

一度、ミアは弱々しく振り返る。血まみれのエレック。意識の無い輝。

二人は、どんな理由があろうと、ミアの為に戦って、倒れた。

「諦め」

「……イヤだ！！」

突然のミアの一喝。

空も、野次馬でさえも静寂する。

ミアの肩は震えている。

でも、もう恐れからの震えではない。

それは小さな『武者震い』。

（確かにこの事態を招いたのはボクだ。けど……）

「まだボクは死ねないんだ！」

ミアは背中の短刀を引き抜いた。そして空の方へ走り出す。

「エレックが励ましてくれたから！輝が守ってくれたから！……ボクは負けない！」

「ふざけるなよ……！」

空もミアを倒しに走り出した。

「それじゃアークはどうすりゃ良いんだよ！人を殺したクズみてーなお前が普通に生きてる！この状況だけは間違ってるんだ！」

怒りに任せて空は剣を振るう。限度を越えた怒りは空のドーピングのコントロールを狂わせていく。

ドーピングの恩恵を受けられなくなり、怒りに任せた攻撃しかしない空は訓練を重ねたミアの敵ではなかった。

ミアは素早い動きで空を翻弄し、かすり傷だが少しずつ空に傷をつけていく。

空の重い斬撃も当たらなければ意味がない。

「うらぁ！」

空がまた大振りな斬撃を外した。

ミアは空の利き腕に狙いを絞る。

（ここだ。右腕を使えなくすればこの重い剣は使えなくなる）

ミアの短刀は鋭く空の腕を穿とうとする。
だが。
「……！」
（武器がっ！）
それは突如飛んできた矢に短刀が吹き飛ばされることで阻まれた。
ミアの短刀がカン高い音を立てて地面に落ちる。
「……っ」
武器を取り落とし、無防備のミアは空による反撃を逃れるために空との距離をおく。
同時に先程の矢を射た者を探そうと野次馬の方に目を向けた。
射手はすぐに見つかった。
空の後ろの方向、野次馬が割れている中、一人の女性が弓を構えている。ポニーテールが風でふわりと揺れている。
その女性は空に向かって走り出した。
「……空！大丈夫？」
「綾香！」
綾香は空の元につくと、すぐに空の切り傷の応急手当をしようとする。

「……やっぱり、こうなっちゃったね」

悲しげな目を伏せる綾香。空は罪悪感から少しずつ我を取り戻す。

「でも、許せないんだよ。アイツは、人の親を奪う奴だ」

「空、昨日『変わる』って言ったじゃん……」

「ごめん。この怒りは原点なんだ。これがあるから俺は正義に憧れた」

言い切る空に、綾香が諦めたように笑みを見せた。

「うん。わかってるよ。私には何も出来ない……。だから、頑張って」

「ああ」

空は顔を少し綻ばせた。
そして綾香の頭をぽんぽんと優しく叩く。

「手当は後に頼む。今は相手が待ってるからな」

「うん」

心配そうな綾香。
何かを言おうとしたがその言葉を飲み込んで空の手をギュッとつかむ。

「……どうせ『手を出すな』って言うんでしょ？」

綾香の言葉に空は済まなそうに頷く。

綾香は空に向けて微笑む。

「死なないでね、負けないでね。待ってるよ」

「ありがとう」

そう言って空は綾香の頭から手を離して再び剣を握る。

（落ち着け俺。魔力を、体の中へ通すイメージ……）

落ち着きを取り戻した空は再びドーピングを使う。怒りによって乱れたコントロールを取り戻す。体が軽くなるのを感じる空。

落ち着きはしたが、その内に持つ想いは強い。

「待たせたな」

「……」

ミアは短刀を構えた。

空の心持ちが変わっているのはミアにも感じ取れている。

（さっきと明らかに雰囲気が違う。怒っているのに、冷静？）

「……！」

刹那空から発せられたプレッシャーにミアは戦慄を覚える。

剣をミアに向けて空は叫んだ。

「行くぞ！」

――……。

耳が痛いほどに音がない。

まぶたの開閉がわからないほど暗い。

でも重力を感じる。

「……何処だ？」

暗闇に、俺は飲み込まれて、佇んでいる。

自分の手のひらすら視認できない。

「誰か、居ないのか？」

呼びかける。けれど返事がない。急に怖くなった。もしかして。

――俺、死んだのか？

必死に首を振ってその考えを打ち消した。

「いや死んでない俺は死んでない！」

冷静になれ――俺はさっきまで空と戦ってたんだ。それで……。顎を剣でかち上げられて。

それで……。

……。

やっぱり死んだのか？俺。

空にかち上げられた顎を擦る。しかし顎に痛みを感じない。これはマジかもしれない。

……峰打ちでも、死ぬんだな。

「は、はは！」

少し大きめに笑って見せる。

乾いた笑い声が闇へとただ飲み込まれていく。

「本当に暗いな。……そうだ」

俺は思いついてペンダントに触れてみた。ペンダントの光ならこの闇をどうにか出来るかもしれない。

触れたペンダントから少しずつ銀色の光が溢れてくる。徐々に照らされていく暗闇。下を見ると自分の体が見えてきた。

さらに足元を確認する。

ボロボロのスニーカー。それがコンクリートの地面を踏みしていめる。

……コンクリート？

銀色の光が強くなっていくにつれ、どんどん周りが見えるようになる。

コンクリートの地面。
そこから生えた雑草。
平らな地面の先には手すりが見える。
手すりの先には街が広がっていた。

「ここは」

屋上だ。学校の屋上だ。

思わず苦痛に顔が歪む。

青空と太陽が見えるようになると、ペンダントの銀色の光が消え、太陽が代わりに辺りを一気に照らした。

「オラァ！」

声と共に、鈍い音。

背後をうかがい見ると、屋上の真ん中で数人の男――うちの高校の制服だ――が誰かを囲んで蹴っている。

ああ……これは。

腹からこみ上げる。吐きそうだ。その場に座り込んで、落ち着いてからもう一度見た。
その一瞬。囲まれて蹴られている人の顔が見えた。今よりも短い髪。苦痛に顔が歪んでいる。

あれは俺だ。……過去の俺だ！

「やめろぉー！」

俺はリンチを続ける男子の集団に向かって走りだした。

猛烈に吐きそうだ。多対一で勝てる気がしない。でも足は止められない。

「やめろよ！」

俺の声が届いてないのかその男子生徒達は暴行を続けている。

「っこの！」

渾身の拳は男子生徒の肩をすり抜けた。

「……！？」

何度も殴りつけるが手応えがない。ＳＦで出てくるホログラムみたいだ。

渋々拳を崩して、リンチの現場の横で呆然と突っ立った。

悔しい。

歯がギリギリと軋む。俺の目の前では過去の俺が泣き声混じりの小さい嗚咽を発している。

「これが――」

突然声がした。頭の中に直接響くような声だ。すぐに辺りを見回す。
声の主は誰だ？
「――輝。これがお前の忌まわしい過去で、『嫉妬』の原点だな？」
「誰だ？」
突然ペンダントが光り出した。目が眩み同時に目の前の忌まわしい景色が消えて、また何もない闇へと戻っていく。
「始めまして。輝」
相変わらず声のみしかしない。
「誰だ！姿を見せろ！」
何もない空間に向け叫ぶ。
「姿ねぇ……」
足音がした。
闇の中から誰かが歩いてきている。
ペンダントから薄く光が溢れた。
「……！！」
「……ビックリした？」

暗闇から出てきたのは先程までリンチにあっていた過去の俺。高校の制服を着ていて、今よりわずかに髪が短く、しかし傷や汚れはない。

高一の夏からつい一、二ヶ月前までの半年強。同級生『藤谷カズト』により終わりにされるまでずっと続いたリンチ。上級生数人の手で、傷が残らないように、服が汚れないように、他にバレないように。

……痛みを耐えていたあの頃の俺が、目の前にいる。

「……お前は、昔の俺なのか？」

昔の俺がにやりと笑みを見せた。

「違う。輝、君が姿を見せろって言うんでね。君の『最高の景色』から適当に見繕ってきたんだよ」

俺と対面している制服姿の『俺』が不敵に笑う。

『適当に見繕ってきた』にしては悪意のうかがえる人選だ。

「じゃあお前は誰なんだ？」

目の前の『俺』が、よくぞ訊いてくれました、とばかりに笑みを浮かべ手を大袈裟に広げる。

「とりあえず名前は『フル』。月の精霊？銀の王？その他色々な風にも呼ばれてる。君のその――」

フルと名乗った昔の俺は、俺の胸元を指さした。

「――ペンダントに力を宿らせてみたりもしている」

「ペンダントに……。……ならお前がこのペンダントをつくったのか？」

「それは違うな」

そう言ってフルはつまらなそうに首を振る。

「むしろ、その中に住んでると言った方が正しいね。それより、訊きたいことが有るんじゃないのか？」

訊きたいこと？ありすぎて困るぐらいだ！

「どうして俺はここにいるんだ？ここはどこなんだ？俺は死んだのか？生きてるとして帰れるのか？」

矢継ぎ早に質問するとあきれたようにフルがため息をついた。

「ひとつひとつ答えようか。まずは輝、君は生きている。だから君次第で帰れる」

よかった。俺は生きてるのか。

ひとまずの安心。フルがさらに続けた。

「次にこの場所だ。ここは『精神世界』。『ペンダントの世界』。『心の中』。色々言葉はあるけど、どうせ君には理解できない。知る必要もない。で、なぜ君がここにいるのかというと、タイミングも良かったし、オレが呼んだから」

『精神世界』？
空想やファンタジーじゃねーんだから……と思ったけど、異世界にきて、魔法も体感してる。否定できない。

「でも何で……？」

何で呼び出されたんだ？

訊くと、フルが失笑した。

「何で？何でって君が弱いからだろ。『オク』が導いた少年に対して君は全くの無力だったね。恥ずかしいとか、羨ましいとか思わないの？」

『オク』が導いた少年。……さっきの戦いのことを考えると、きっと空の事だ。

「……認めるよ」

渋々俺はうなずいた。
フルは俺が認めるのをとても嬉しそうに見てくる。

「そう。負けた。あの力が羨ましいだろ？だから君には一つ力を貸してあげたい」

「力を？」

聞き返す。フルはまだ不敵に笑っている。

「まぁとりあえず。オレと戦え」

そう言うフルの手から銀色の光を伴って一振りの剣が出てきた。そして辺りの闇薄くなっていき、巨大な石造りのスタジアムへと変わっていった。
この建築には見覚えがある。

「……コロッセウム」

確か古代ローマだかなんだかの建物だ。世界史やってないからよくはわからないけど写真は見たことがある。間違いなく元の世界の文化財。
グラディエーターの戦いを、見せ物とする建物だ。
地面からはスニーカーを通して、多くの血を吸収したであろう砂の感触がある。

「これは……？」

「昔、オレの力を使用した者の記憶からもらった景色だよ。闘う為の場所らしいね。ピッタリだろう？」

フルは剣をプラプラと構える。
どうやら古代ローマのグラディエーターの中にも、銀のペンダントを使った輩がいるらしい。

「さぁ。行くよ」

「……！」

突然フルが斬りかかってきた。
縦に振り下ろされたそれを、落ち着いて避ける。そしてそのままフルの背後を取った。

え？戦うっていきなり？こっちは武器も何も無いのに？

焦って背後をとったまま何もできずにいると、フルがつまらなそうに背後の俺を振り返り見てきた。

「身体能力は昔の君と同じだからなぁ。動きづらいね」

「ち、ちょっと待て！俺にも武器をくれ！」

「イメージだ。魔法の初歩の初歩。武器を、剣をイメージしてみろ」

「んなこと言ったって」

「君は『オクが導いた少年』と違って才能が無いんだ。追い込んだ方が早い」

「くそ……」

イメージ？イメージって何だよ！

仕方なくがむしゃらに腕に力を入れる。当然のようにピクリとも反応しない。

フルは剣をもう一度構える。

「話は終わりだ。ほら！行くぞ！」

「うぁっ！」

再びのフルの剣撃。一歩下がって避ける。

くそ……やるしかない。

イメージ。剣のイメージ。鋭く細く、煌めく塊。

わずかな手応え。

一瞬の銀色光と共に剣が俺の手に握られていた。

「よっしゃ！」

「安心は早いよ」

「……！」

フルがもう一度斬りかかってくる。俺は造りたての剣で早速それを受け止める。でも手応えがない。

「え……？」

俺の剣を見るとフルの一撃でまるで粘土のようにぐにゃりと曲がってしまっている。

「何で！」

体を無理矢理捻ってフルの追撃の剣を避ける。造った曲がった剣は淡い光と共に空気に溶けるように消えてしまった。

「何でなんだ!?」

フルが薄ら笑いを浮かべる。

「想いが足りないんだよ。イメージと想いが魔力の源。何でも良い。強い感情を込めてみろ」

『想い』と『イメージ』。『イメージ』は大丈夫なはずだ。後は『想い』。

……何でフルを倒さなきゃいけない？

力が欲しいからだ。ミアとエレックを守るために。

手には再び一瞬の強い光と共に剣が造り出された。

さっきよりも重い。頑丈そうだ。

これなら……！

「っらあ！」

剣を上から下にフルに打ちつける。それをフルは剣を横にして受け止めた。

新たな剣は曲がらない。しっかりとした衝撃。

フルは頷きかけてくる。

「うん。さっきと比べて大分硬くなった。……でも」

体勢を変えたフルは俺の剣をはじいて縦に剣を振るう。俺は先ほどのフルのように剣を横にして受け止める。

「……？」

若干の違和感。

構わずフルは何度も打ち付けてきた。俺は見切りですべてを受け止める。

「！」

八回受けとめたところで違和感の正体に気づいた。

剣に、ヒビが。

「まだ、だね」

「うぐっ！」

甲高い音を立てて俺の剣は真ん中から半分に折れた。

またかよ……！

『想い』は充分に込めたのに！

「まだ想いが足りないな。……何を考えて、何を想ってその剣を造ったんだ？」

冷たいフルの言葉。

俺は刃の部分がきれいすっぱり真っ二つに折れた剣を見つめる。

何を想って？決まってる。

「守ろうと思った人たちを想って……」

「弱いな」

「え？」

「理由が、想いが、弱い」

折れた剣から視線をずらしてフルの顔を見る。自分と同じ顔が気味悪い。
あきれたような表情を見せるフルは折れた俺の剣の刃を指差した。

「見てみろ。その空洞は何だ？」

「空洞？」

折れた剣の断面を見る。刀身の芯に大きな空洞が空いている。見た目だけの、ハリボテのような重大欠陥。

「何で、こんな」

「輝。君は人の為なんかじゃ力は出せない。その証拠がソレだよ。外側だけの『想い』だけで、君の芯は、本質は違うんだよ」

フルが諭すような声を発して、続ける。

「オレはフル。月の精霊、銀の王。……そしてオレが持つ大罪は『嫉妬』なんだ。君は『嫉妬』の大罪に選ばれた。オレが選んだ。わかるかな？」

「……嫉妬、だと？」

そんな馬鹿な。俺の本質が『嫉妬』みたいな卑しい感情？

「そう。君はあの『最高の景色』のその後に、ある人に助けて貰ってたね？」

『最高の景色』。あの長いリンチを終わらせたのは。

「……『藤谷カズト』の事か」

その名前に、心が暴れる。

「そう。でも君は『藤谷カズト』へは感謝ではなく嫉妬の感情を抱いているね？それだけじゃない。『オクが導いた少年』に対しても嫉妬と劣等感を抱いてる。簡単だ。嫉妬を受け入れろ。きっと君なら……」

「違う！！」

うるさいうるさいうるさい。コイツの話を聞いていると頭が変になりそうだ。

俺は、『藤谷カズト』が、妬ましい？

違う俺はアイツを偽善者だと軽蔑してる！

狛江空だってそうだ！

綺麗事で固めて、最悪の男だ！

羨ましいわけがないだろう！

フルをにらむ。

「お前が俺の何を知ってる!?勝手な事を言うなよ!!俺は違う!俺の本質は『嫉妬』じゃない!!そんな浅ましいものじゃない!!!」

叫ぶ。それしかない。フルが切ない表情になる。

「そうか」

「……!」

一瞬で間合いを詰められた。目と鼻の先にフルの手のひらがある。

「不合格で、不愉快だ」

刹那、銀の光がフルの手のひらから溢れる。

「うぁっ」

心が、掻き乱される。

「あぁあああああああっ!!」

浮かぶ光景。囲まれて蹴られて。何にも通用しなくて。誰にも想いは届かない。

気づくと手に剣。折れてない。今ならわかる。この剣には『芯』がある。

――邪魔だ!

フルを、過去をフルの剣ごと横一文字に断ち切る。もうろうとする意識。
フルは散り際に愉しそうに口を歪ませて笑う。

「何だ、ちゃんと出来るじゃないか」

――……。

城門前の噴水広場で空に気絶させられ倒れていた輝の目に光が戻る。
ゆっくりと立ち上がる。
彼は今、地面を感じている。野次馬のざわめきを感じている。

「狛江空ぁ！」

叫び、輝は足元の小刀をゆらりと拾った。

「まだ終わってねェ……！」

フルがしたように輝は不敵な笑みを漏らす。目には少しの自我と確かな狂気が宿っている。

「輝、か……？」

ミアとにらみ合いをしていた空は突然起き上がった輝に目を向ける。
空は余裕の表情で剣を構えているのに対してミアは丸腰になっていた。短刀は少し遠くに落ちている。
きっと空に吹き飛ばされたのだろう。

「輝！……ここは僕に任せて」

かなり辛そうな表情をしていたミアが一瞬喜びの表情を見せ、またすぐに苦い顔をする。ミアは体力があまり多くなく、長時間の戦闘には耐えられない。ドーピングのコントロールを取り戻した空の相手は、彼女には荷が重すぎた。

一方輝はミアの声が聞こえているのかいないのか、ミアの言葉に全く反応しない。
不安になったミアはもう一度輝にさっきより大きい声で呼びかける。

「輝、無理しないで！僕に任せ……」

「空！俺と、戦え！」

輝はミアの言葉を遮って手に持っている小刀を空に向かって投げつけた。

「ちっ！」

空は投げつけられた小刀を剣で弾く。
輝の雰囲気の変容に空が輝を訝る。

（輝の様子がおかしい……）

訝る空たちをよそに輝は右の掌を上空にかざした。

「うおあああああ！」

輝の掌からまばゆい銀の光が溢れ出す。光は細長く伸び、輝の武器を型どった。

光が収まったとき、輝の手には一本の槍が握られていた。
形も大きさもごく普通。唯一特殊なのは全体が凍えるように冷たい銀色で出来ているということ。
輝は慣らすために槍を何度かクルクルと回した。
「もう一度、戦え！」

空は突然の槍の出現に驚くが、意を決したように剣をミアから輝に向け直した。
緊張の糸が切れてミアはその場にしゃがみこむ。

「輝……何か、変だよ……」

ミアのその呟きは誰にも届かずにむなしく消えた。

「良いぜ輝……勝負だ！」

（大丈夫、ただ槍を出しただけだ。……ドーピングで一気に片をつける！）

空はゆっくりと体に魔力を通し、ドーピングを使い、超人的な速さで輝の背後を取る。

（終わりだ！）

「――今まで」

「……！」

空が輝に向かって峰打ちで薙いだ剣は、他でもない輝の銀色の槍に

よって止められた。
輝は背後の空を振り返って愉しそうに笑う。
「人の動きが遅いと思ったことはなかった。……動きが読める！ついていける！これが『想い』の力……！」
「くそっ！」
（受け止められた！……輝もドーピングを使えるのか！？）
動揺する空の剣と余裕を見せる輝の槍のつばぜり合い。
空は渋い顔をして受け止められた剣を押すが、逆に輝に押し退けられてしまった。
「ぐっ！」
「死、ね！」
輝は押し退けられて怯んだ空の肩を銀の槍で突く。空の肩から真っ赤な血が流れる。
「ハ！弱いな！」
銀のペンダントが更に強く輝いた。それを見て輝はさらに強い笑みを顔に張り付ける。
「空ァ！俺はまだ強くなれるぞォ！」
狂喜の表情。一種の狂気が輝を覆っている。輝は槍を振り、槍の切っ先についた空の血を飛ばす。

「く……！」

空は後退りながら輝との距離をおいた。

（強い！……でも、俺は負けられない。思い出せ！『あの頃』を！俺は、俺の正義は！）

「大丈夫だ。俺は負けない……！」

空は正面を向いて輝を見る。肩の負傷で力がでていない。彼には剣がいつもの倍以上に重く感じられる。

その空と距離をおいて輝が槍に『風の刃』をまとわせた。

「お前は気に食わない！」

輝が槍の切っ先を空に向ける。

「とどめだァ！」

輝は槍を空に向け突きだしたまま走り出す。突進してからの突きを狙っている。

空は輝の突進に備えて剣を正眼に構えて、向かってくる輝を見据える。

（殺人鬼は罰する！邪魔するなら輝でも、誰であろうと容赦しない！！）

空の鋼鉄の剣を金色の光が包み込む。今まで兵士の剣からドラゴンの鱗まで全てを貫いてきた光。

「おおおおお！」

「うおおおお！」

そして、噴水広場全体に響く衝撃と共に空と輝の咆哮がぶつかった。

邪悪な意思

……意識が薄い。目の前には空がいる。
頭がふわふわする。何かに、取り憑かれてるような……。

腹の底から禍々しい感情が沸き上がってきた。
マグマのような熱気を帯びたこの感情が冷静な思考を妨げて、溶かしていく。

俺が、溶かされていく。

「空ァ！」

自らで動かしている筈なのに、口が勝手に動いているかのような錯覚に見舞われる。

「俺と戦えェ！」

あぁ。そうだった。
俺は『嫉妬』に取り憑かれてるのか。

――……。

「おおおお！」

俺は自前の銀の槍を空に向け突進した。空までの距離がドンドン縮

まる。流れていく景色の速さにまるで虎になったかのような感覚にとらわれる。
俺の視線の先の空は正眼に構えていた剣を斜めやや後ろに振りかぶった。
恐らくは袈裟に斬るつもりだ。

「おおおお！」

「うおおお！」

俺の間合いに入ったその一瞬のうちのさらに一瞬。『憎い狛江空を貫く』これだけで槍をつきだす。
目の前の空は顔に迷いがあらわれていた。剣は振り下ろされていて、迷いを断ち切るように歯を食いしばっている。
……振り、下ろされていて？

「あ、れ……？」

刹那、俺の腕に強い衝撃と痛みが走った。
おかしいだろ……俺の方が速いんじゃねーのかよ。
視界が回る。
地面。
太陽。
狛江空。
俺の足元。
空の剣。

バラバラに砕け散った、俺の銀の槍。

……体を離れて宙を舞う俺の右腕。

「あああぁ！」

俺は叫びながら衝撃で宙を舞い、直後に広場の地面に叩きつけられた。

痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い！

右腕が！腕が！

仰向け、背中に地面。痛み。掠れた視界。遠くに俺の右腕が落ちてくる。

俺の右腕は最初からただの置物だったかのように、地面に転がっていた。

「うわぁあぁあ！」

熱い！肩から！腕が！無い！取れた！

何も聞こえない！

何も見えない！暗い！

――楽に、してやる。

聞こえないのに誰かの声が響く。

誰でも良い！
楽に、楽にしてくれ！
――お望み通りに。
その声が聞こえた瞬間、俺の中で暴れまわっていた一切の痛みが消え失せた。
何も、感じない。
俺はゆっくり見えない目を閉じる。
あぁ、もう、痛くな……。
――……。
輝と空の衝突の数分前。
綾香はひとり、群がる野次馬の人混みを掻き分けて奔走していた。
「舞！速人！一樹！どこ！？」
綾香の声は野次馬達のざわめきと雑踏に吸い込まれては消える。
遠くから空とミア、輝の戦いを見ていた綾香にも輝の変化はすぐに見てとれていた。
そしてその輝の変化に狂気を感じた綾香はそれを止めるために他の仲間達と合流したいと考えている。
（輝の様子、絶対おかしい！正気じゃない！あのままじゃ空が危な

い！……でも輝の親友の一樹なら！）

綾香は王都に来るまでの船旅の途中で何度か、輝についてを一樹に質問されたことを思い出していた。
輝に初めて会ってから日も浅い上、勝手に逃げて行方不明になった彼に対して好印象があるわけがなく、綾香は輝の話をする一樹を適当にあしらってきた。

それでも何度も輝の行方についてを聞く一樹に対し、綾香はある意味感心していた。

それに空が輝をけなした時も、一樹は親友の為だと怒っていた。

ゆえに狂気に陥って空を苦しめる輝を止めるには、説得出来るのは一樹しかいないと綾香は考えている。

（……空を助けるには一樹を探さなきゃ！）

綾香が意気込んでまた駆け出すといきなり人にぶつかってしまった。
ごめんなさい、と強くぶつけた鼻を擦りながら謝る。ふと、耳慣れた声が聞こえてきた。

「あ、すみませ……って何だ、綾香か」

「一樹！舞も！」

綾香は勢い良く顔をあげる。ぶつかったのは一樹だった。一緒に歩いていたのかその横には舞もいる。

「そんなに急いでどうしたの？」

舞は首を傾げて綾香に訊く。
綾香は捲し立てるように話し始めた。

「空が危なくて助けないといけなくてでも変な女の子とか輝が戦ってて！」

「少し落ち着け！何言ってるかわかんねぇ」

慌てる綾香の肩に手を置きながら一樹が制する。綾香はそれでも落ち着きを取り戻せず、一樹の手を振り払う。

「――ああ！もう！時間がないの！二人とも！ちょっと来て！！」

「ちょっととって……。人が多すぎて動けそうにないぞ？」

ゆっくりと一樹は辺りを見回す。
人、人、人だ。溢れ返っている。
既に少し動くことですら『ちょっと』では済まなさそうな苦労を強いられそうだ。
しかし、ゆったりとした一樹の態度が綾香の神経をさかなでる。
綾香はさらに語気を強めて訴えた。

「だ、か、ら！！この際掻き分けて行くよ！！付いてきて！！早く！！」

「だから落ち着けって。つか『この際』って何だよ？」

タルそうに綾香に食い下がる一樹に向き直って綾香は答えた。

「緊急!!空と、輝が、噴水広場で、闘ってる!!!」

「……輝が!?」

一樹の目の色が変わる。

「そんな……!何で……?」

舞は酷く動揺している。
そんな舞を気にしながら、一樹は綾香にうなずいた。

「……わかった。早く行こう!」

綾香は言葉を返さずに、そのままきびすを返して広場の方へ走り出す。かなり切羽詰まっているのだろう。
一樹は人ごみへ突っ込んでいってしまった綾香を追い、舞の手をつかんで無理矢理群衆に割って入る。

「綾香!ちょっと待て!はぐれちまう!」

人を掻き分けながら一樹は少し前を行く綾香に言った。舞は一樹に手を引っ張ってもらってギリギリついてきている。

綾香は少しの焦りを滲ませた声色で一樹と舞に訴えた。

「早くしないと!本当に、空が危ないの!」

「何でだよ?輝は負けた相手にトドメをさすような奴じゃないぞ!」

綾香は叫ぶ一樹に「輝は空や私たちを恨んでいたかも知れない」と

告げると、さらにスピードを上げて人混みを掻き分ける。
そんな綾香の背中を必死に追いながら一樹は考えていた。
（どういうことだ？昨夜の輝の話しぶりに空や皆への憎悪は感じなかった。どっちかっていうと諦めとか、後悔とか……）
そこへ、突如腹の底に響くような爆音が鳴り響いた。
「うわっ！」
突然の轟音が一樹の思考を遮る。立ち止まって我にかえり前を見ると、人混みの隙間から巨大な噴水が見える。音の大きさからすれば、輝も空も、一樹たちのいる場所からすぐそこにいる。
（今の衝撃は戦いの音か。それにしたって……大きすぎる。ひどい音だ）
一樹の額に冷や汗が浮かび上がる。
握っていた舞の手が一樹の左手を強く握り返した。
「一樹。輝も、空も、大丈夫だよね……？」
振り返った一樹が見たのは舞の不安げな瞳。
『もしも』を考え、一樹は歯をくいしばる。
（この音の大きさじゃ、輝と空のどっちかは……！……そんな惨劇

を、舞に見せられない！）

「舞！ここで待っててくれ！」

「一樹！？」

一樹は舞の手を離すと、人混みを半ば薙ぎ倒しながら凄まじい速さで、衝撃音の音源の噴水広場中央に走っていった。
反対に舞は、手を離されて人の波に押し流されて行く。

――……。

気がつくと俺は檻の中に幽閉されていた。

檻の外には高校の教室の風景が広がっていた。違うのは教室の真ん中にあるべき幾つかの机の代わりに俺が入った黒い檻がある事だけだ。

意味がわからない。

「……ッ！」

俺は檻の黒い鉄柵を掴んでガシャガシャとゆする。だが、ビクともしない。
頑丈な南京錠で錠をかけられている。

「くそ……。何で」

俺は檻の中にしゃがみこむ。
落ち着け俺。唐突なのは慣れっこだろ……？

「……あれ？」

そういえば、胸にむかむか来るような『あの感情』がない。『嫉妬』がない。

空に向かって突進したところから記憶があやふやだ。

だけど、この唐突さ。学校という場所。……フルに、『精神世界』とやらに呼び出されたのか。記憶は定かではないけど、空にはまた、負けたんだろう。

俺が空に勝とうというのが、おごがましい。俺は弱いんだから。

考えているとキャスターを車輪が転がる独特の音を立てて教室のドアが開いた。

そして、制服姿の俺が入ってきた。

「……やっぱりか」

俺は溜め息をつく。制服姿の俺、過去の俺の姿で俺の目の前に現れる奴なんてたった一人しかいない。

「フル、だな？」

俺は過去の俺の姿のフルを睨みつけた。フルは微笑む。

「そうだよ。フルだ。またあったね」

前回コロッセウムで対峙した時はコイツの手のひらから出てきた妙な銀色の光で、俺の心が掻き乱された。コイツのせいで色々台無し

になったんだ。

確か『嫉妬』の大罪とか言っていたな。……本当に、ろくでもない。

俺はガシャ、と檻の黒い柵を掴んで、この縦に走る黒い鉄棒たちの隙間からフルを見上げた。

「この檻も、お前だろ？出せよ」

「さぁね？そんなに出たいなら魔法で鍵でも出してみれば？」

ほくそ笑むフル。人の顔でふてぶてしい表情を作りやがって。

でもそうか。『鍵をつくる』。この手があったな。

俺は早速鍵をイメージする。だが、何も出てこない。『風の刃』や、剣を出すときの魔法の感覚すら掴めない。

「あれ？」

「ふふッ。ふはははは！」

檻を挟んで俺の向かい側でフルは激しく笑い始めた。

「ははは！バカだなぁ。君を閉じ込めたのはオレだ！魔法使えるわけねーだろ！！ははっ！」

「どういうことだよ？」

「君の体、有意義に使わせてもらうよ？」

フルは邪悪に口を歪めて笑う。
俺は怒鳴る。

「ふざけんな！ここから出せよ！」

「やだね。もし出たとしても、オレを倒せなきゃこの精神（こころ）の世界を出ることは出来ない」

フルは檻の前にしゃがみこんで俺の目の前に来る。

「君はこの学校という嫉妬の根源の地で苦しみながら生きる。封印という終わりも再生もない死の中で永久生きるんだ」

「な、何いってんだよ」

ここから、出られない？

俺は乾いた目でフルを見る。
フルはニタァとおぞましい笑みを見せた。

「大人しくそこで、生涯死んでろ」

――……。

城門前の噴水広場全体に響くような轟音。風魔法と光魔法と、それぞれに強化された槍と剣の衝突は砂煙を上げておさまった。

「……輝……？」

少し離れたところでエレックを介抱していたミアは不安げに立ち上がる。
同時に、ゆっくりとした一陣の風。もうもうと上がっていた砂煙をゆったりと運んで行く。そして、視界を遮るもののなくなったそこには、血塗れた剣を振り下ろしたままの格好の空と。
倒れたままわずかにも動かない、輝があった。

「輝っ！」

普段の小さい声からは想像もつかないような大きな声で輝の名前を呼んで走り出すミア。輝に近づくにつれて、走る足が遅くなる。

「そん、な……」

今度は逆に、小さく呟く。声からは絶望の色がにじみ出していた。
近づくにつれはっきりと目視出来るようになった輝の体は、とても生きているとは言いがたい凄惨なものだった。
元は白かったその継ぎはぎだらけのパーカーは今や真っ赤に染まり、ちぎれた右腕の断面からは今も鮮血が溢れる。

ミアは輝の隣までくると、嗚咽をこらえてその場にしゃがみこんだ。

「嘘、だよね？魔法、使えるんだよね？ボクの傷、治してくれたもんね？」

たどたどしく訴えかけるミアに、輝は何一つも反応を示さない。示せない。
ついにミアは込み上げる嗚咽を押さえつけられなくなる。

「輝、動いてよ！ボクは何でもするからっ……！ボクが死んでも良いからっ……。……輝ぁ……」

少女の悲しみと痛みに満ちた泣き声、呻き、慟哭。ぼろぼろになってしまった輝に抱きつくミアの服は、赤く赤くなっていく。

そこへ乱暴な足音が近づいてきた。

「輝！空！……！」

野次馬を掻き分け、駆けつけたその足音の主は一樹だった。焦りを覚えている彼の目の前では、返り血を浴びた空が息巻いて立っている。そして、少しずつずらす彼の視線の先には。

「お、い……嘘だろ……」

一樹は空の視線の先にある血と肉の塊に、ミアの抱きつく輝だったものに近づく。足が震えて一歩がしっかりしていない。

「嘘じゃない。俺が、殺した。俺だ。俺の正義だ」

空が虚ろに声を発する。一樹はそれに見向きもしないで足早に輝に近づいて、ミアの肩をつかむ。

「退けよッ」

一樹は輝に抱きつくミアを突き飛ばした。ミアは力なく引き剥がされ、うつむいて泣き続ける。

「……おい、輝。起きろ。はは……何だよこれ」

一樹の声は震えている。血でぐちゃぐちゃになった輝の横でひざまづいた。

輝は仰向けで倒れていた。その目は閉じていて、血の気の引いた青白い顔に、血と涙の線が幾筋か。

最も損傷が酷いのは右半身。右腕は肩から先がもげて遠くの地面に落ちて、そこに血溜まりをつくっている。腕だけではなく、右肩から右脇腹までが皮膚や腱や靭帯が千切れたようになっている。滅茶苦茶で真っ赤で、今も赤い水溜まりが広がる。

わざわざそれの脈を測るまでもないだろう。恐らく止まっている。

わざわざそれの手を触れなくても解るだろう。恐らく冷えている。

「……うっ」

そこまで見たところで一樹は手を口に当てて素早く立ち上がりその場を離れる。

そして数分前まで輝であったそれを視界に入れないように目を固く瞑って嘔吐しはじめた。

「ううっ、おぇっ！」

（輝が……死んだ、うそだ、死んだ）

吐瀉物が石畳の地面に落ち、立てる音にまじって甲高い音が響いた。

片刃の長剣。空の愛用の鋼鉄の剣が落ちて、音を立てたのだ。剣は石畳に弾かれ、付着していた輝の血を散らせる。

空は落ちた剣を拾おうともせずに、ただ立ち尽くす。

「違うんだよ、一樹。正しいんだよ。泣くなよ。何なんだ?正しいのか?俺は、合ってるのか?」

誰に訴えるわけでもない。呟きながら、ただ単純にまっすぐなだけだった空のその心に、疑念が生まれる。

(正しいなら、何で一樹が泣いてるんだ?)

空の目にも涙が浮かぶ。目にたまりきらなくなった涙が流れ出す。

(人を泣かせて、貫いて良いモノなんてあるのかよ。……俺の正しさは、違う?)

空の疑念は確かな間違いに気づき始める。彼は自らの唇を噛み締めた。その隙間から唸り声が漏れる。

(俺は間違ったものを、そんなものを『正義』だと誇って来たのかよ)

空のその目にうつるぼやけた赤い塊を、輝をすがるように見下ろす。

「……お前は、最初から、知ってたのか?」

返ってくることのない疑問をぶつける空。

(だから、あの時、ついてこなかったのか?)

彼の疑問は、止まらない。

「俺は、どうすれば」

（教えてくれ）

「……輝……！」

かたく、目をつむる。

空は、図々しくも、すがるような気持ちで祈る。

（答えてくれよ……動いてくれよ……！）

――鳴動。誰の耳にも、野次馬たちにも聞こえる。

「……！」

「お、おい、アレ見ろよ！」

野次馬の中の一人が血まみれの輝の死体を指差した。

そら耳のように鳴ったひとつの心音と野次馬の声に反応した空はかたくつむっていた目を開き、輝の死体を見る。一樹は未だに吐いている。

「……え？」

空は単純に驚いた。彼の理解の範疇を超えたところで、彼の視界の

中で、何かが起こっていた。
まるで砂漠の枯れた立木のように、動きの無い広場で輝の左手だけが、上がっている。

（輝……生きている？）

「き、きゃあああ！」

空の心に芽生えたわずかな希望を打ち消すように、野次馬集団のうちの一人の女性の悲鳴が響く。それとともに野次馬たちが逃げ始めた。
無理もない。死者が生き返る事に怯えないわけがない。それが好奇心だけでここにいる野次馬たちなら尚更だ。

我先にと、その身勝手な黒い悲鳴と怒号の中で、輝を取り囲む空気が確実に変容する。

「……っ！」

空は恐怖を覚えて反射的に落とした剣を拾い、輝の死体から何歩も何歩も後ずさる。

一方の輝は上げていた左手を自らの心臓に当てる。……いや、胸元をまさぐっている。

「……輝、なのか？」

空は血濡れた剣を下ろしたまま固まって、輝が懐のペンダントを取り出すのをじっと見ていた。

「生きてたのか？輝なのか？この感じ、違うよな。何なんだ？」

呆然とする空の耳に突然、不快な嘲笑が聞こえてきた。

「――ふふ。君の言う『輝』なら、死んだ。でも『久喜輝』は生きている」

笑いながら輝はペンダントの淡い光で体の損傷を治していく。

千切れた皮膚を繋ぎ合わせ、靭帯を繋ぎ合わせ。

「ただし」

ふらっと立ち上がる輝は落ちている自らの右腕を拾って何でもないかのように自身にくっつけた。断面を溶接するかのように銀色の光がほとばしる。

「ただし、何だよ？」

空は輝に問う。壊れた体をやすやすと治すその姿には最早戦慄すら覚えている。

「『久喜輝』だが、ただし――不愉快な名で呼ぶな。オレのことは、『フル』と呼べ」

言って、ほくそ笑む。

「『フル』だと……？ふざけてるのか？意味分かんねぇぞ！！！」

空は剣を構え直して吠えた。彼は今、『フル』と名乗る『久喜輝』に対して得体の知れない恐怖を抱いていた。

逆に吠えられた輝は涼しい顔で「そうだね」と頷いて、にこやかに話し始めた。

「まずはオレの名前からもう一度。オレは『フル』。銀の王で月の精霊で嫉妬の大罪を持ってるんだ。まぁ気に入らないなら『久喜輝』って名前以外であれば、何とでも――」

「――輝！」

遮るように現れた声は舞のものだ。空が声の方を振り向く。野次馬たちはいつの間にか逃げ去ったようで、広場入り口の遠くから、対峙する空たちを覗いているのみ。舞の後ろからは綾香もついてきている。

舞は喜びを帯びた声でもう一度その名を呼んだ。

「輝っ！無事――」

「――『輝』と一緒にしないで欲しいなぁ。オレは彼とは違って利口なんだ」

フルはさっきの仕返しのように舞の声を遮り切り捨てる。

異変に気づき、固まる舞とは逆に、一樹はふらふらと立ち上がった。青白い顔をしている。

「……てめぇ」

一樹が腰の二本の剣の柄に触れながらフルを睨んだ。

「輝を……どうしたんだよ！」

「何も。でも強いて言うなら――」

フルの掌から銀色の光が溢れて一枚の羽根を型どる。光が収まるとフルの手には脇差サイズの銀色の羽根が現れた。そしてその羽根を剣のように持ち、空に向ける。

「――『輝』にトドメをさしたのはコイツ。オレは『輝』の背中をちょいと押しただけさ」

「どういう、ことだ？」

空は敵意むき出しに詰問した。

フルは、ふっ、とため息と嘲笑が混ざった空気を口から出すと説明を始める。

「最初君によって気絶させられた『輝』をオレが『嫉妬』っていう感情に導いた。そして彼は『嫉妬』を制御しきれずに精神は崩壊寸前。彼を支えていた僅かな自尊心は……」

フルは空に極上の笑顔で笑いかける。

「君が輝をズタズタにしたお陰で、『輝』の精神と共に壊された。邪魔な輝の精神が消えてやっとオレが身体をもらい受けたってこと」

「……俺の、せい」

空はまともに力も込めずにゆるゆる首を振る。

「どんな思いで俺が輝を殺したか。死体を見てどんなに後悔したか

……！」

悔やみきれない想いをこぼす空を一目見、やりきれなくなった一樹は触れていた剣の柄をしっかりと握った。

「……くっそお！」

やり場のない気持ちを目の前のフルへと変え、一樹は腰の二刀を引き抜いてフルと名乗る輝に斬りかかった。

フルはその二刀のうち片方を弾き、もう片方を銀色の羽根で受け止める。羽根は硬く、一樹の剣とぶつかる時には金属を思わせる音がした。

フルは笑う。

「ぬるい剣だね。振り切ろうとしてない。……やっぱ『輝』の体を傷つけるのは抵抗あるのかな？」

言われて一樹の顔が険しくなる。

「うるせえ……！良くわかんねーけどお前が輝をオカシクしてるのは十分わかった！だからさっさと輝を返せよ！！」

「全然わかってないね。『輝』は終わったんだって」

フルは空いている左手を銀のペンダントに触れる。すると、フルの左手に魔方陣が浮かんだ。

「風刀（かざがたな）！」

フルの左手の魔方陣が光る。と同時に一樹の肩が見えない真空の、

風の刀で貫かれる。

風刀の威力は殺されず、一樹はそのまま後ろへ飛ばされた。

「うぐっ！」

「一樹！」

舞は倒れた一樹に駆け寄ると青の腕輪に触れ治癒の魔法を使う。

呆然とその様子を見ていた空は、まだ剣に力を込められずにいた。

（『久喜輝』は生きてた、でも『輝』じゃない……身体は生きてるのに、心が違う。だったら何かしなきゃいけない。『フル』と名乗る輝に『輝』と名乗らせなきゃいけない）

そこまで考えて、空は地面に目を落とす。

「だけど俺には、そんな資格……」

「空っ！頼む！輝と剣を交えてくれッ！」

一樹は舞に支えられながら訴える。空が一樹を振り返った。

「一樹！でも、俺は……」

「こんな輝はおかしい！戦ってくれ！取り押さえてくれ！このまま放っておかないでくれ！」

叫び、懇願する一樹。剣を握る空の手に力が入る。

「……！俺は……」

（俺は輝を一度殺した。この罪に報いることは、きっと出来ない。でも今なら。俺に出来ることがある。赦されなくても、償う方法がある！）

空はゆっくりと、剣先をフルへと向けた。

「……フル！輝を……返せ！！」

言うと同時に空は飛び出し、峰打ちでフルを剣で薙ごうとする。フルはそれを一歩下がって避け、銀の羽根の柄で空を打ちつけた。

「ぐっ！」

「何を今さら。『輝』も君には言われたくないだろうに。第一……」

呆れかえりながらフルは手に持つその羽根を、自らの脇腹に刺して見せた。

「！てめぇ……輝の体を」

驚く空の前で、脇腹から血を流しながらフルが笑う。

「そう。人質だね。ま、オレは優しいから」

フルが脇腹から羽根を抜き、その傷口に指先を当てる。すると、銀色の光とともに傷口はきれいさっぱり消えていた。

「大切にこの体、使わせていただくけど」

言いながらフルは羽根を振りかぶる。羽根が空の頭蓋骨に狙いを定めた瞬間、投擲ナイフがフルの頬を掠めた。
フルが手を止め、遠くから投擲ナイフを投げた青年を面倒臭そうに見やった。
青年は余裕たっぷりに眼鏡をあげる。

「空には手を出させません」

そして挑発とも取れる不敵な笑みを浮かべ、飄々と笑って見せた。

「……速人！」

「復讐云々の騒ぎでは無いようですが。後でしっかり説明してくださいね」

「ふん。ちょろちょろと……」

フルは目の前の空を蹴り飛ばすと、銀の羽根を速人に向ける。すると銀の羽根の前方に魔方陣が浮かび上がった。

「こざかしいなっ！」

フルが一喝すると、風の刃が魔方陣から出現して速人に向かって飛んでいく。その大きさは『輝』の扱っていた『風の刃』の数十倍。
速人は両腕で自身を庇おうとする。

「……く、何て大きさだ」

「させない！」

綾香が叫ぶと突然速人の目の前に何本かの木が生えてくる。それぞれの木は互いに絡みながら成長して壁となった。
フルの風の刃は速人の目の前に突然現れた木の壁によって阻まれた。
フルは愉しそうに笑う。

「ふふ、お前ら本当にイライラさせんなァ」

「うるさい！皆を散々傷つけておいて笑ってんじゃないわよ！」

綾香は弓を構えて矢を放った。フルに迫る矢は鋭く速かったが、フルが手をちょいと振ると風が吹き、矢は軌道をそらされて的外れに飛んでいく。

「忘れた？銀のペンダントは風魔法を自在に操れるんだよ？」

またしてもフルは笑う。
綾香はめげずに弓に矢をつがえた。

「この……っ！」

「やめろ！綾香！」

空が蹴られた腹部を押さえながら綾香を止めた。

「みんなもだ！輝の体に、ダメージを増やすわけにはいかない！」

「……だから峰打ちで戦っていたのですか。しかしそれで倒せる相手ではないでしょう？」

速人が両腕に手甲を装着しながら構えを崩さず、それでも攻撃せず一歩も動かない。

結局、倒す気で放ったナイフも矢もフルには届かなかったのだ。

この場にいるほとんどの者の攻撃が通用しなかった、という事実が一同の思いきった行動を妨げている。

そんな空たちをフルはつまらなそうに見た。

「なんだ、この程度か」

フルは銀の羽根を地面に突き立てる。

「疲れたでしょ。終わりにしようか」

なんでもない日常的な声で笑いかけるフル。

その手を地面に突き立てた銀の羽根に置くと羽根を中心として銀色の魔方陣が地面に広がった。

「――トドメだよ」

フルは愉しそうに悪魔の笑みを浮かべた。

「ところでさ……知ってる？」

フルの声と共に羽根を中心とした魔方陣に向かって強い風が吹き始めた。

「空気が一ヶ所に急激に集まると……」

フルは歌うように呟く。

「圧縮された空気は……」

何かに気づいた速人が叫んだ。

「……！危険です！皆伏せてください！」

直後に、フルが嘲るように破顔した。

「……爆発する！……『風爆破』！！」

その名を唱えると同時に魔方陣から風が吹いた。強風や突風のレベルではない、ここに吹き荒ぶは爆風だ。

その攻撃的な風圧に立つことすらままならなくなり一樹やミアたちはその場に転倒する。

魔方陣の中心で満足げな笑みを見せながらフルは魔力を更に魔方陣に注ぎ込んだ。

「まだ終わらないよ。……『風爆破・刃』を見せてあげよう！」

空にはフルが居る魔方陣にエネルギーが集まっていくのが感じられた。

（何だよこれ……！）

フルの魔方陣は徐々に銀色の光を帯び始めている。その光景に空の

生物としての本能が危険を叫んでいる。

（あれはヤバい！どうすればいいんだ……！）

空は地面に伏せてフルを睨みながら、拳を固く握った。

（……わからない。あんな）

フルは魔方陣になおもエネルギーを注ぎ続けている。この一帯全てを無に帰すような巨大な力。

（あんな大きな力にどうやって……）

空の心に小さな諦めが生まれたその時。空の頭に直接誰かの声が語りかけてきた。

（おい、ソラ。スコしカラダをカりるぞ）

独特の訛りのある話し方。空の体が勝手に動きはじめる。

（……！この声は！）

驚く空の思考をよそに空の体は金のペンダントから魔力を引き出しフルの魔法の風を打ち消すバリアを張った。

そして鋼鉄の剣を握って立ち上がると、『ドーピング』を使ってフルに急接近する。

「なんだお前……！？」

急接近してきた空がふりおろす剣を受け止めるためにフルは魔方陣

の中心となっていた銀色の羽根を地面から抜いた。
甲高い音を立ててぶつかり合う剣と羽根。
フルが銀色の羽根を魔方陣から抜いた事によって、吹いていた荒れ狂う風は少しずつ収まっていった。

フルは空を睨み付けた。
その顔からは今まで見せていた愉悦に満ちた表情が完全に消え失せていた。

「わかるぞ。お前は……『オク』だな！」

「ああ、そうだ！ヨくワカったな！」

空の口がまたも勝手に動いて勝手に話し始めた。
フルは鍔迫り合いを避けたかったのか受け止めていた空の剣を羽根で受け流して空と距離をとった。

（おい、これどうなってんだよ！？）

空の不安は募っていく。
無理もない。自分の体が勝手に動いていたら不安にもなるだろう。

（ゴメン。いきなりカラダをトったのはアヤマるよ。でも、ジカンがナかったんだ）

またもや頭に直接話しかけてくる声。

（……この声。前にドラゴンと戦ったときにも……）

（そうだよ、セイカイだ。キンのオウ、タイヨウのセイレイ、ナマ

エは『オク』）

独特の訛りの混じった声が空の頭に響く。
空がドラゴンと戦ったときに金のペンダントを介して力を与えてくれた存在。
それが今、空の体を操り、その口で『オク』という名前を名乗っている。

「何をこそこそやってるんだ？『オク』！」

フルは銀の羽根を構える。かつてフルの顔面に存在していた余裕の表情は完全になく、変わりに憎悪の表情がそこにあった。
オクの訛った声で話しながら空はフルを睨む。

「そのショウネンのカラダ……。またウバいトったんだな」

フルの容貌は輝本人のものと全く同じ。
フルは逆に空を指差さす。

「うるせぇ、お前はどうなんだよ！ソイツの体を乗っ取ってるじゃねえか！」

「カりるだけだ！おマエをフウインしナオすタメにな！」

輝と空が、フルとオクがにらみ合う。
オクは剣を構え直すと『ドーピング』を使ってフルに向かって行く。
その『ドーピング』は異常な速さ。元の空の『ドーピング』よりも格段に速くフルへと突っ込む。
そして一瞬でフルの背後に回り、フルの銀の羽根を剣で弾き飛ばし

た。

「糞がぁ！」

悪態をつくフル。苛立ちに口調が荒くなっていく。

「くらえ！」

即座にフルは自身に銀色の風をまとわせると、その風の一部を手のひらで圧縮させて打ち出す。

「く……」

対するオクは苦い表情をしつつも剣に金色の光をまとわせ、圧縮された風の塊を打ち砕いた。

そのまま一気に詰め寄りオクはフルの足を蹴りつけてフルの重心を崩すとそのままフルをうつ伏せに地面になぎ倒した。

「オク！てめぇぇ！」

フルの叫びを無視してオクは剣をその辺に投げ捨て、両手で印のようなものを結ぶ。

「『強欲』の名において力を行使する！！」

普段の訛りも無しにオクは言うと、空間のいたるところから金の光線が伸びてきた。光線は頑強なロープのようにフルの体を吊るし、縛り上げる。

光の線はそのままフルを縛り上げながら宙に吊るすと、フルの魔力を飲み込みながら銀のペンダントへと吸い込まれていく。

「ぐあぁぁ！」

フルは叫びを上げながら激しく、もがくが光の線がしっかりとフルを縛っているので微動だにすることさえ許されない。

「く、そぉ……『オク』……ふざけるな……」

「マジメだよ。ふざけているようにミえるのか？」

「……は……別にいいさ……『久喜輝』を……もう一度……封印しなおすまでだ……」

ニヤリと、嫌悪に値する厭な笑みを浮かべるのを最後に、フルという意識を失った輝の体は力無く崩れて地面に倒れた。

「……輝！」

一樹とミアが倒れた輝の元へかけてくる。エレックとその治療をしていた舞は少し遅れて駆けつけた。

「輝！しっかりしろ！」

一樹が輝の頬を叩くが輝は起きる気配がない。

さらに強く頬を叩こうとする一樹を止めて舞が倒れている輝の隣に座った。

「任せて！」

舞は青の腕輪から癒しの魔力を取りだし、輝に流し込む。しかし、傷が癒えていくだけで一向に意識は戻らない。

「おい、いくらやってもムダだよ」

見かねたオクが口を開いた。

「そのショウネンのモトのココロはフルによってフウインされてる。そのフウインだけはトいてやった。アトはショウネンのココロがフルにウちカつのをマつしかない」

「そんな……」

うちひしがれたミアの声。

オクは「ナニもデキないんだ」と繰り返して言う。

「カレをシンじてマつしかない……。……そろそろオレもゲンカイだ。ペンダントのナカにモドるよ」

金のペンダントが一瞬煌めいた後、空が感じていた『勝手に体を動かされる感覚』がなくなって、空は体を自由に動かせるようになった。

「空っ！」

「綾香！」

空が自由になったのを見計らって、綾香が空に飛び付いてきた。空はしっかりと綾香の少し華奢な体を抱き止める。

空のことを人一倍心配していた綾香だからこそ、涙して喜ぶ。

だが、喜ぶ綾香を受け止めていながらも空は心の内で、輝を一度殺したことを悔いて噛み締めていた。

（俺に出来ること。生半可な覚悟で『変わる』なんてことじゃない。……償うしか無いんだ。憎まれても、嫌われても）

「空！」

比較的軽傷で済んだ速人が見回りから戻り、少し遠くから空を呼んでいる。

「騒ぎを聞き付けて兵士が大勢噴水広場に向かってきています！逃げましょう！」

「わかった！……皆！行こう！」

「待て空、輝はどうする？」

一樹が空に訊く。すると横からミアが提案する。

「輝の事は、任せて！ボクたちと輝は身分証もってるから大丈夫！」

「でも……」

渋る一樹。

「時間がありません！早くしてください！」

速人が催促をする。一樹は拳を握るとミアに頭を下げた。

「……輝を頼む」

そして速人、綾香、一樹、舞はミアとエレックと倒れている輝をのこして広場から撤退していく。

フルの魔法の風で吹き飛ばされて意識を失っていたアークを担いだ空は、撤退の最後尾でミアの方を振り返って言った。

「……俺にはお前を裁く資格はない。俺も、……同じだからだ。だけどこれだけは言える。……これは業なんだ。付き合うしかない……一生を賭して」

「……うん」

ミアにも、わかっていた。罪を認めなくても、洗脳でも、事実は変わらない。

「ボクは、出来ることを、出来る限り、やるよ」

ミアは空に向かって頷いた。

空もただ頷くだけ。ミアの言葉が合っているとも、違っているとも、判断はつけないが、空はただ頷くだけだ。

「空ー！早くー！」

「……ああ！わかってる！」

空は先を行く仲間の呼び掛けに返事をして噴水広場を後にした。

目をつむればいつも暗闇がある。俺は手元に膨大に残された時間をいたずらに使い続け、何もできずにただ檻の中で、教室の床に座り込む。

これが、封印。これが、死。もう、出れはしないのか。時間と共にフルの言っていた『封印という死』という概念が徐々に理解出来てくる。

意識があろうが、わずかな場所を移動出来ようが何も出来ないのでは死んでいると同義だ。残された膨大な時間こそが俺の心を削る敵となるんだ。

絶望しかない。考えるのをやめて、正気を手放そう。

そう、諦めかけたその時だった。檻の中でうなだれて座っていた俺の耳が鋭い音を聞き取る。

「何の音……？」

久しぶりに声を出した。涸れかかったささくれ声。俺は咳払いをしてから一分の希望を胸に宿して音のした方を見る。

「あ……」

檻の扉を固く閉ざしていた頑丈そうな南京錠が落ちている。鍵が壊

れている。さっきの音は錠の落ちる音だったんだ。

これなら、外に出られる。何が起こったのかわからないが、フルの力が弱まったんだろう。きっと。

俺は静かに黒い柵扉を開けて檻をでた。教室を見回す。黒いカーテンが閉まっていて薄暗い。俺の気持ちを表しているみたいで腹立たしい。

……ここに居ても何も得られない。

直感でそう思った俺は邪魔な机を二、三個退けながら教室を出た。

廊下に出た俺は左右を見渡しめぼしいものを探すが特に変わった所は何もない。いつもの学校だ。違うのは人一人すら居ないということ。

フルは何処にいるんだろう?

フルを倒さないとこの精神の世界とやらを出られないとフル自身が言っていた。

俺は適当に廊下をゆっくりと歩き始める。歩く度に俺のボロスニーカーの磨り減ったゴム底が廊下と擦れて独特の音をたてた。

スニーカーで廊下を歩くという行為に新鮮さを覚えながらも若干の罪悪感を感じる。横目で廊下の窓の外を見ると日が低いところまで落ちていた。オレンジ色の光が少し眩しい。

ここが心の中だというのなら、この夕焼けも俺の心と関与しているのかな。

突き当たりまで歩くと階段があった。壁に書いてある階数表示を見

る。ここは四階だったのか。だとしたら上に上がる階段は屋上ゆきだ。

……屋上に、行ってみよう。

フルがいるかもしれない。確か最初にフルが俺に見せた光景も屋上だった。

眩しいオレンジに目を細めながら俺は階段を登る。

俺はこの階段を登るのには抵抗がある。

夏から冬にかけて、何度も何度も屋上で私刑を受けた。『藤谷カズト』によって止められるまで。

俺は私刑の度にこの階段を自らの足で登らされた。それが、完全なる服従の証だった。

「最悪だ……本当に」

胸を上がってくるムカつきに耐えながら階段を上りきった。そして、階段の先の分厚い扉に手をかける。

この扉の先に屋上が広がっている。私刑を受けた場所。フルがいるかもしれない。心が昂る。怖じ気付いている。

「……はぁ、はぁ」

呼吸が早くなる。苦しい。俺は重い扉に手をかけた格好で立ち止まってしまった。

フルには全く敵わなかった。

体を盗られてからどれだけ経った？
もし屋上でフルと闘うことになったらどうする？
魔法は使える？
逆にフルが屋上にいなかったらどうする？
俺はこの『屋上』で、自分を保っていられる？
様々な疑問と恐怖が俺の心を惑わせる。

「落ち着け。俺」

目を閉じて。
息を吸い込んで。
吐き出して。
しっかり目を開く。
落ち着く呼吸。酸素が行き渡る。体の隅々まで活力が戻ってくる。
……よし。今なら行ける。

俺は扉に少しずつ体重をかけた。徐々に開く扉。扉から漏れるオレンジが俺を照らす。

「――やぁ。遅かったね」

制服姿の過去の俺、フルは屋上の手摺に寄りかかって、遠くの街並みを見下ろしながら俺に挨拶をする。そして俺に向き直ってこっちに向かって歩いてきた。

「輝。君なら屋上（ここ）に来ると、来れると思ってたよ」

「……フル！」

「そんな怖い顔をするなよ。ま、こっちも封印されかけで時間がない。さっさと終わらせようか？」

「おわらせる……」

「何をとぼけてる。わかってるだろ？オレとお前は相容れない」

そういって銀色の風をまとうフル。

そうだ。相容れない。体はひとつ。俺の居場所で容量満タン。フルに貸せるような余裕は無いんだ。

俺は拳を強く握って前に突き出す。その手に力を込める。出来るはずだ、今の俺にはハッキリした『想い』がある。

「体を……返して貰う！」

突き出した拳に『想い』を込める。想いは力となり光に変わる。光は手から溢れ出して槍を形作る。

出来た。何もないところから武器を、槍を造り出せた！

だけど。違和感だ。

光の色が違う。槍の色が違う。かすかだが確かに。

「あれ……？」

俺は疑問と共に槍を手に握った。

「色が、違う」

いつもの切り裂くように冷たい銀じゃない。ほんの少しだけど暖かみのある白銀。

「白銀か。それが君の心の色」

フルは俺の手の内の槍を見て呟く。照らすオレンジの中で小さく息づく白銀。オレンジが白銀に映り込んで一部を黄金色へと変えている。

俺は見慣れない、それでいて妙に落ち着く白銀を見て、その後にフルを睨んだ。

「俺の心の色……？どういうことだ」

「そのまんまさ。君の色。それ以上の意味はない」

フルはそう言うとこちらに歩み寄ってきた。俺は思わず身構える。何をされるからわからない。

フルの手からも俺と同様光が溢れて武器を型どる。光が収まるとフルの手には銀色の大きな羽根が握られていた。その大きさはまるで剣。

俺はフルの手にある銀色の羽根を見る。

俺の色。フルの色。

「……そうか。白銀は俺の色。そして銀色がお前の色……」

少しずつ解ってきた。

最初、俺が使った魔法には銀色が関わってきた。それは多分フルの力を借りていたからなんだ。

でも今は違う。

フルは本気で俺の意識を封印しようとしている。俺の体を乗っとるために。そんなフルが俺に力を貸してくれるわけがない。だから今発動している魔法は俺の本来の力だ。

そう考えると俺が白銀の槍を出せて、フルが銀色の羽根を出せることにも納得がいく。

足りない俺の頭で必死に考え出したこの答え。自分でも概ね頷ける。

……でも、一つ疑問がある。

俺はいつの間に魔法を使えるようになったんだ？

「ふふ。悩んでるようだね」

俺の思考を遮るフルの言葉。人をイライラさせる上から目線だ。それに俺の声で変なしゃべり方はして欲しくない。

「黙れ！」

俺は左の掌をフルにかざす。鋭くアイツを切り裂く風をイメージする。

「とにかく体を返して貰う！」

渦巻く風が掌に集まりこぶし大の小さな竜巻をつくりだす。そして

それを押し出すように放つ。
『風の刃』。
掌から放たれた白銀の風はフルを刻むべく空を駆けていく。

「へぇ。ここまで使いこなせるのか」

フルは言いながら白銀の風の刃を銀色の羽根で受け流す。受け流された風の刃が軌道をそらされて見当違いに飛んでいき、虚空に消えた。

俺の『風の刃』は効かないのか？

「驚いたよ。率直に」

フルは薄ら寒い笑みを浮かべた。俺の顔でこんなに冷たい表情が出来るなんて知らなかった。

「はじめ君の魔法の才能は皆無だった。魔法の使用が容易な精神世界、とはいえ輝に魔法が使えるとは思わなかった。……オレが貸した魔力に感化されたのかな？」

フルは羽根を構える。

「本当、面倒なことになったけど。君には死んで貰いたいな」

フルが一気に俺との距離を詰めてきた。構えた羽根をそのまま横へ薙ぐ。
俺はそれを槍の柄で受け止めた。

「感化、だと……？」

フルの話によると、今俺が使ってる魔法もフルのお陰らしい。磁石にくっ付けた鉄クズが、磁力を帯びるようなものだと。

「まぁ、どうでもいいさ。さっさと封印されていてくれないか？『オク』の封印とくのは大変なんだよ」

フルは両手の力を羽根に乗せる。俺も退くわけにはいかない。受け止めた槍に両手の力を集中させる。

フルも負けじと押し返してきたが、その表情は険しい。そしてとても弱い。

『オクの封印』とやらのせいなのだろうか。力を込めるフルの両腕を金色の光が何度かスパークして、その度にフルの表情は悪くなっていく。

「本当まいるね。『オク』はいつも邪魔をする！」

そう言ってフルは舌打ちする。表情に憎悪と焦りを浮かべていた。

「お前もだよ……！本当邪魔者ばかりだ！！」

口調が荒い。もしかしたら普段の柔らかい話し方は仮面で、この荒れた話し方が本性なのかもしれない。

危険だ。俺の本能がそう訴えてる。こいつを倒さなきゃ俺に平穏はあり得ない。

自己防衛の反射神経に近い反応でとっさに俺はフルのすねを蹴る。フルが小さく呻いてバランスを崩した瞬間にすかさず槍の刃がない方の先端、石突きをフルの鳩尾に入れてそのまま突き飛ばす。

フルは屋上のコンクリの粗い地面を転がっていった。

「……ぐ、う。くそ、オクめ！いつも俺の邪魔をする！」

地面に伏せながら唸るようにフルは呪いの言葉を放っている。吹っ飛んで手から離れた羽根の代わりに新しく銀色の羽根を造り出して杖がわりに立ち上がる。そして俺を睨んだ。

「貴、様ぁ！誰の力でここまで生きてこられたと思ってやがる！俺はお前が危機に陥る度に魔力を貸してきた！」

喘ぐように息を吸うフル。昔の俺の顔を歪めて示すは憎悪だ。恐怖で俺は足を一歩引いた。

「貸したモンは返せェ！俺に体を寄越せェ！」

言葉遣いには出会ったときの丁寧さは微塵もない。そこにはただ醜く崩れた過去の俺の表情があった。

自分の顔と殺し合うのは本当に恐怖でしかない。フルが倒れている今とどめを刺せば確実に勝てる。しかし足が動かない。圧倒的に有利なのに足がすくむ。それは高層ビルの窓から下界を見下ろす感覚と似ている。

俺は吐き気を抑えながら額の汗を拭った。

「力を貸してくれた事は感謝してる。けど、体は渡せない！」

俺が訴えるとフルは歯を食い縛り四つん這いになる。

「くそォ！全員が全員俺の邪魔をする！何だよ！肉体を持つことに

嫉妬するのはいけない事なのかよ！」

叫んでフルは咳と同時に多量の血を吐き出した。コンクリートで跳ねた血が制服の白いシャツを紅く染める。フルは流れる血もそのままに立ち上がり羽根を正眼に構えた。

「仮にも『精霊』と呼ばれた力を見せてやるよ！……『嫉妬』の名において力を行使する！」

正眼に構えられた羽根に風が集まってゆく。何かを感じた俺の全身が総毛立つ。

まずい。『あれ』をさせては駄目だ。

良く解らない直感が俺の体を突き動かした。右手のひらにもう一度白銀の風が集まりだす。

「風刀（かざがたな）・山嵐（やまあらし）！」

俺の対面でフルはそう叫び、銀色の羽根を天に掲げる。羽根のまわりにおびただしい数の銀色の刀のようなものが生えてくる。

その姿はまるで巨大な銀色のヤマアラシ。

俺は恐怖で固まりそうになる右腕をあわてて動かし、『風の刃』を飛ばす。

「……止まれッ」

しかしそれはヤマアラシの出現から少し遅れて吹いてきた突風によ

って流されてしまった。フルは小バカにしたように鼻で笑う。

「そんな初歩の魔法しかできないのなら……諦めろ。この刀を全方位に飛ばす！輝てめぇは終わりだァ！」

「くそ……！」

『全方位』？

あんなのを食らったらひとたまりもない。治癒魔法を使う間もなくヤマアラシの針に切り刻まれる！

何とかしてあの技を止めないと！

でもどうやって止めればいいんだ!?

着ている服の裾が皮膚に打ち付けるようにはためく暴風の中、俺の思案は回り続ける。

止めるんだ……！

『風の刃』はこの暴風の中じゃフルまで届かない。

だからってこの槍であの技に突っ込むのは無謀だ。

「どうすれば……そうだ！」

俺はフルに背を見せ後ろを振り返った。

屋内に逃げよう！屋内ならダメージも少なくて済む！即死さえしなければ治癒魔法を使って凌げるかもしれない。

屋上から校内に戻るための赤い扉が手招きをしているように見える。

走り、扉に手をかけた。背後から殺気を感じる。振り返ってる暇はない。早く、屋内へ！

焦る心で腕に力を入れた。

「……え」

動かない。馬鹿な。今度は全体重をかけて扉を引っ張る。

「……あれ？……そんな」

ビクともしない。

扉が開かない理由……心当たりが一つある。風だ。

フルが使う『山嵐』。その影響で風が吹き荒れている。ただでさえ重いこの扉をさらに重くさせているのはこの風だ。だとしたら、そう――。

ゆっくりと振り返る。フルが意地汚い笑みを浮かべていた。

――あいつを止めない限り、俺が助かる事はない。

けど。

「無理だ……こんなの」

圧倒的な力だ。勝てっこない。そりゃそうだ。俺に力を与えていたのはこいつだ。

幾ら磁気を帯びていたって、屑鉄は屑鉄。屑鉄が磁石に勝てる道理はない。

フルは吹きすさぶ風の中心にいて『山嵐』を掲げている。銀色の羽根から、大量の針とみまごうほどにこれまた銀色の刀が突き出てい

る。
見様によっては美しい。
ここで、死ぬのだろうか。
思い返す。何が原因となって、俺はここでこうしているんだ。
目をつむって記憶を駆け巡る。これを走馬灯と人は呼ぶのかもしれない。
「ビビって諦めたかァ？」
耳障りな声。俺の声ってこんな風に聞こえているんだな。
思い返す。
アレはいつだっただろう？小さい頃に、かさぶたを作って走ったことがある。
思い返す。
中学の頃か。一樹と都市伝説を追ったことがある。
思い返す。
袋叩きにされた。藤谷カズトを信頼し、憎んだ。憎んでいる。
思い返す。
銀のペンダントを拾ったこと。

ソラ、舞、速人、綾香の笑顔。イースっていう医者にも助けられたっけ。

ユリウス、マーカス、エレック、ミア。仲間になってくれた人たち。

そして……王都で再びソラと戦った。手も足も出なくって、『嫉妬』に意識を堕とされた。

こんなモンなのか？

俺の一生なんてのは。

胸の奥に『何か』がたぎる。

他の人はこんな一生じゃあないだろう。ソラたちは元の世界に帰れるかもしれない。

『何か』はゆっくりと俺の体を満たしていく。

これから、俺よりも恵まれて幸福な人生を歩むであろうあいつらが、『うらやましい』。

俺を満たす『その感情』がうっとおしくて、溶岩のように熱くて、目を開いた。

欲しい。命あることに対するこの『嫉妬』を満たしたい。うらやましい、それを手にしたい。僻んでいる。妬みだ！嫉みだ！

命を諦められない！

「うおおああ！」

槍を放っぽって両手の掌をフルにかざす。

問題は簡単だ。距離があるなら『風の刃』を放てばいい。
暴風が吹いているなら流されないほど強靭な『風の刃』を作ればいい！

一点に集中する……！

俺の両掌をかざす所に嵐を一点に凝縮したような小さな塊が白銀に輝きながら現れ始めた。
それを見たフルは嘲笑する。

「惨めなもんだなァ？輝ァ！本気出してもそんな小さい光しか出せないんだもんな！」

今までもったいぶっていたフルはついに風の刀がヤマアラシの針のように生えた羽根を俺に向かって振るった。

「体は貰うぜェ！」

「……！」

振ったことによって羽根から離れた風の刀が無数に飛んでくる。刀の一つ一つは半透明だが銀色に光っている。実体をもって俺を貫こうと迫ってくる。数百の刀が俺に向かう。壮観。威圧感。
でも。

掌に更に力が入る。

諦められない！生への嫉妬を抑えられない！

「うおおおお！」

俺は掌に現れた白銀をフルに向けて放った。小さい小さい点のような光が真っ直ぐに空をきる。
小さく凝縮された嵐はフルが放つ無数の風の刀を吹き飛ばしながらフルに向かって突き進む。

誰の為でもない！エレックの為でもミアの為でもない！守ろうとした人たち？馬鹿馬鹿しい！！

耐え難いこの『嫉妬』の赴くままに！！

俺の祈りを受けて白銀の嵐は更に光を強める。
動揺と焦燥を供としてフルは喚いた。

「俺の『山嵐』が押し負ける？有り得ない！」

「俺は俺の為にここで終わるわけにはいかない！」

光の塊は更に輝きを増す。それは嫉妬という汚い感情と反比例するように綺麗に瞬く。

吹き飛ばす。
突き進む。
輝く。
迫る。

そして。

命中。

フルは悲鳴をあげながら吹き飛ばされる。屋上の高い鉄柵を易々と越えていき、宙に踊る過去の俺。

ちらりと下に目をやり、フルは自分がこれから地面と追突する運命だと悟ると憎しみを込めた目で俺を睨んだ。

両掌をフルに向けてかざしたままの格好の俺と目が会う。急にフルは、それでも嬉しそうにして俺に言葉を吐いた。

「嫉妬、この目で見たぞ。いずれ……」

俺の耳がそこまでを聞き取ると、フルは歪んだ笑顔を見せて重力に引っ張られていった。

「いず、れ……？」

俺は追いかけるように呟いた。その直後。

地面に打ち付けられた人体が潰れる鈍い音。人が純粋な『モノ』へと還る音が聞こえて、そのまま俺の意識も途絶えた。

――……。

空たちは立ち去り、野次馬も逃げてしまって全く近寄らない。つい先程まで『フル』と名乗る輝との激闘があったこの場所は随分と静かになった。わずかに聞こえるのは壊れた噴水が無作為に水を撒き散らす音だけだ。

そこへ、足音と共に、金属が軽く擦れ合う音が混じり始める。

重厚な鎧を身に纏った王都直属の衛兵たちが今は倒れて動かない輝を警戒しつつ近づいてきたのだ。そして横で輝を介抱しているエレックとミアに剣を向ける。

「み、身分証をみせろ」

衛兵の一人が震えた声で身分証を要求する。この震えは寒さではなく、怯えから来るものだ。

しかしそれは無理もない、目の前で風が暴れ、命の危険を感じるような戦いを見ていた。

エレックとミアは身分証を衛兵に差し出した。

エレックの手にあるのは下級貴族の証であるブロンズカード。ミアは家を出たとはいえ、国の重鎮にはそこそこ有名なのであらかじめ役所に行きシルバーカードを再発行してもらっていた。

青銅と銀の身分証を見た衛兵は急に剣を引き姿勢を直す。

「これは失礼致しました！」

そして正した姿勢のままミアを見て、かすかに唇の端を吊り上げた。

よどんだ野次馬根性は兵士も平民も変わらない。

「あなたが件の『ミア』殿ですか。まさかこんな所で御会いできるとは。……それで、彼は？」

衛兵はミアに向けていた好奇の視線を恐怖に変えて輝を見た。

輝は地面に仰向けに倒れている。服は所々破けて着れたものではない。上着にいたっては右の片腕全部が破れている。衣服はボロボロだが、先ほど、舞が魔法で輝の傷を治していったので輝の体自体に

は傷一つない。
ミアは輝の上着の白いパーカーのポケットからシルバーカードを抜き取った。

「輝もシルバーだよ。意識がないんだ。すぐに病院に運んで」

「……了解しました」

いつもよりハキハキと饒舌に話すミア。衛兵たちは好奇の薄笑いを申し訳無さげに引っ込め、素早く敬礼をして輝を担いだ。

ミアの隣ではエレックが少しばかり驚いているようだ。輝がシルバーを持っているとは思わなかったのだろう。

「ミアは何で輝が身分証を持ってることがわかったんだ?」

驚きの顔を普段通りのそれに戻してエレックが訊ねる。
うん、と一度頷いてからミアは担がれている輝の上着のポケットを見て指差した。

「布が少し破れてる所から見えたんだ」

「ホントだ」

パーカーのポケットに小さな穴が開いている。当て布や無理矢理な裁縫でガタガタになっていたからこその隙間だ。
衛兵が歩く度に担がれた輝の上着が風になびいて揺れている。その上着を着ている輝には起きる気配はなく、フルの意識を失って倒れてから全く動かない。

「輝は、どうなるんだろうな……」

不意にエレックの口を突いて出た言葉。ミアに答えられる訳もなく、二人ともを重い沈黙に沈み込ませてしまった。

「……ひとつだけ、良い？」

思い詰めたような表情を見せてミアが沈黙を打ち崩す。エレックは無言でうなずく。ミアは思いきって話し始めた。

「エレックの名字はケイオスっていうの？」

その質問にエレックの目が見開かれる。

「……いつから、気づいてたんだ？」

「さっき、身分証を見せてたとき、見たから」

「……そっか、バレちゃったか」

あきらめたようにため息混じりにそう言ったエレックをミアはその場に立ち止まって見上げた。

「昔ボクがまだ監禁されてなかった時、屋敷にニーグ・ケイオスっていう人がいてボクに対して優しくしてくれた」

「……うん」

「ニーグさんは『ケイオス家の人はダグラス家の人を護る義務があるから』って教えてくれた。……エレックはそのケイオス家なんだよね？」

「あぁ。そうだ」

「じゃあやっぱりエレックはボクがダグラス家だから護ってくれたんだよね」

ミアは自分の掌を見て呟くように言う。

「ボクはもうダグラス家の人じゃないから」

そこまで言うと、その小さな体についている頭を下げた。

「……今日でボクの護衛を外れてください」

ミアが放った一言にエレックは息まで止めて石化されたようになる。必死になって息を吸い込みようやく繋いだ一言は。

「な、何言って……」

戸惑いでエレックの表情が凍っている。
ミアはそれでも構わないとばかりに続けた。

「狛江空、彼に言われて気付いたんだ。ボクの罪は、業は消えることはない。一生背負ってく。でも、その事にエレックや輝を巻き込みたくない」

ミアは含みを持たせるように間をおいて続ける。

「ボクと一緒にいたら、また復讐者に襲われる。もう、巻き込めない」

そう言う彼女は悲しげに目を伏せた。

彼女はエレックが傷付いたことに、輝が自分を見失ったことに、もしかしたら一番深く傷付いているのかもしれない。

自分のせいで自分が傷つくのは自業自得だ。しかし、自分のせいで人を傷つけること。それは、耐え難い苦痛だ。

エレックはミアに向き直った。

「……ミア」

「なに？」

数秒の沈黙。二人は見つめ合う。エレックは少し呼吸を整えてから覚悟を決めた。

「ミアに少し聞いて欲しい昔話があるんだ」

俺は元々湖の街のハリアの生まれなんだ。

ミアが言い当てた通り俺の家はケイオス家。ダグラス家にはその守護家として仕えてた。

じいちゃんが早逝だったからケイオス家の当主はすでに親父になってた。
俺も何度か親父についてダグラス家に行ったんだ。だからミアは覚えてないと思うけど、俺たちは何度か会ってるんだぜ。

それで。

ミアは知らないだろうけど、ダグラス家がここまで大きな権力を持つようになったのは家長が今のサターン、つまりミアのお父さんだな、になってからなんだ。
ダグラス家はハリアの豪族程度の力しかなくてとても王国の中に食い込めるモノじゃなかった。
それが変わったのはサターンがラルガという武将と手を結んでからだ。
ミアを監禁して訓練させる事をサターンに進言したのもラルガだ。
親父はそんなラルガとサターンに嫌気が差してハリアを去ってシュヘルで町長をすることにしたんだ。
俺は反対した。
これでも守護家としてのケイオス家に誇りを持ってたからな。
シュヘルに移った後もごねた俺はケイオス流剣術を免許皆伝まで修めることを条件にダグラス家に仕える事を親父に赦してもらった。

俺はそれから何年もかけてケイオス流剣術を修得した。
その時になって初めてミアが監禁されていることを親父は俺に言った。
そして親父は、
「ダグラス家にとらわれたあの子を助けてやってくれ」
と手をついてお願いしてきた。自分の力不足でミアを助けられなかったことを気に病んでいた親父は俺を鍛え上げてその意志を継がせようとしたんだ。

俺は勿論それを承諾して旅に出た。

苦難の旅だった。

それでも俺は『次回のハリア闘技大会でダグラス家の嫡子が出るらしい』という確かな情報を得てやっと。

「やっとミアを見つけたんだ。今さら退けるわけ無いだろ？」

「でも……！」

「俺は大丈夫。次は守りきって見せるよ」

エレックが有無を言わさずにミアを抱き寄せ、その頭を優しくポンポンと叩いた。

拗ねたようにその手を退けてエレックから離れたミアは口を尖らせる。

「もう。ボクの話なんて聞いちゃくれない」

ミアはきゅっと口を結んでそっぽを向いた。肩が震えている。

エレックはその背中を押して輝を担いでる衛兵に遅れないように病院へと歩き出した。

――……。

「ん……」

目を覚ますと同時に夜の匂いが鼻腔に充満する。目を覚ます覚醒の時の気だるさは何があっても変わらない。
そーっと目を開けると視界の端に白いカーテンが揺らめいているのがわかった。窓が開いている。ここから夜風が室内に入ってきているみたいだ。

「……病室。フルは……」

倒したんだ。両の手足を順に動かす。無くなったはずの右腕が当然のようにくっついていた。

俺の体だ。戻ってきたんだ。

俺は上体を起こして辺りを見回す。個室の病室のようだ。隣のテーブルの上には俺の愛用の小刀と財布がある。俺は白いベッドの上で座り直した。

少し肌寒いな。

自分の上体を見ると病人がよく着ている薄い衣服に着替えさせられていた。下はそのままのようでジーンズの感触がある。
Tシャツとパーカーは空と戦った事で補修不可能な程ボロくなっていたのだろう。病院の人が着替えさせたんだ。それだけでもあの戦いが、腕を切り落とされたことが夢や妄想なんかじゃなかったと教えてくれる。

俺はベッドから這い出した。ジーンズは少し汚れてはいるが大丈夫そうだ。

「暗い……」

明かりは窓から差し込む月の光のみ。
荷物の中にランプを入れておいたのを思い出すがここには愛用の小刀と財布しかない。

「槍と荷物、宿屋に置いたまんまだ」

しょうがない。
今は月も出ている。

宿屋まで行ってこよう。

入り口を探すのは面倒なので窓から外に出る。この部屋は一階だったから出来る芸当。
ヒンヤリとした空気が辺りを包む中、とりあえず俺は件の噴水広場を目指して歩いた。泊まってた宿屋が噴水広場のすぐ近くだからだ。

王都のきれいな街並みを進む。ヨーロッパのような、それでいて中近東。かつ所々ある程度近代的な建築達。
俺のいた世界からすると滅茶苦茶だ。でもきっとこの世界にはこの世界の歴史があって文化がある。ただ否定するなんてことは出来ない。

それらを足早に抜けると月明かりに照らされた噴水広場が見えてきた。石畳の舗装は剥がれて、地面が割れている。噴水自体も派手に壊れて水が変な方向に流れている。
俺は思わず足を止めて壊れた噴水広場を見た。

確か俺はここで『嫉妬』に堕とされて。

「あれ？」

駄目だ！思い出せない！記憶がぼやけてる。

何度思い出そうとしても正確な記憶がわからない。確かなのは俺が魔力で作った銀の槍を空に向けた所まで。

「これが、俺の『嫉妬』が引き起こした結果」

身震いしてしまうような言い知れない不安を感じた俺は割れた地面を抜けてそのまま宿屋まで駆け込んだ。

宿屋の女将さんに無理を言って荷物を引き取った後、槍と荷物を担いでまた自分の病室まで走って戻った。いやに体が重い。病み上がりだからだろうか。それでも走った。走って不安を拭い去りたかった。

病室の窓から荷物を投げ入れ俺自身も窓から入った。

「大丈夫だ、大丈夫なはずなんだ」

俺は精神世界でフルを倒して見せた。今さら失った記憶に怯えることはない。

もう二度と、『嫉妬』に心を明け渡してはいけない。

走ったせいで乱れた呼吸を整える。自分を安心させるため息をついてみる。

倒れ込むようにベッドに寝転がって体の力を抜いてみた。

感覚はいつもと同じ。
確かにいつもの俺だ。

「何を焦ったんだ俺は」

軽く笑いをこぼした俺は、しかしながら完全に安心しきってはいなかった。

学校の屋上から落ちてゆく『過去の俺』がいやらしい笑みを浮かべて『俺』に言い放った一言が俺の体に残ったわずかな不安を繋ぎ止めていた。

「いずれ……」

彼の言葉を思い出す度に首にかけている銀のペンダントに新たな重みが加わった。

衛兵たちは冷たい鎧の音を立てて噴水広場へと向かっていく。
身分証を持っているという輝、ミア、エレックの三人をそのままそこに残して空は意識のないアークを担ぎ直した。そして先に衛兵からの逃走の為に噴水広場を離れ始めていた仲間たちの後ろ姿を追って走り始める。
仲間たちに付いて何度か小路を曲がりつつ街を駆け抜けると、人気の無い裏通りに出た。もちろん、彼の仲間はそこで空の到着を待っていた。

栄えている街ほど格差がある。王都といえどこれに漏れず、この暗い小路の脇には小さい木造建築が細々と並んでいる。

「空！」

そんな陰鬱な通りを一気に明るくさせるような声が響いた。綾香が早く早くと手招きをしている。空はアークを落とさないようにしながらも少しスピードを上げて仲間の元へと走った。

「遅いですよ。追っ手が来るかもしれません。早く行きましょう」

合流一番すぐに速人の忠告が飛ぶ。軽く頭を下げて謝った空を迎えた皆はまた走り始めながらさらに街を駆けていった。

「つか行くって、どこに行くんだ？」

走りながら疑問に思った空は速人に訊いた。行く当てなど全く見当がついていないとばかりに。
確かに彼らを運んでくれた船は既に出港してしまい、ホテルもチェックアウトを済ませている。

「あ！そうか！」

突然閃いて空はうなずいた。

「リザさんの酒場があるな！あそこなら！」

「そう、多分匿ってくれるはずだ。わかったら早く行こうぜ」

思い付いた顔の空を一樹が急かす。納得して頷いた空はリザの酒場に向かって走り始める。後に続いて仲間たちも、噴水広場の戦いで騒然としている街を走り出した。

「リザさん！済みません！少し匿ってください！」

速人が木製のドアを多少乱暴に叩く。その合間にちらりと背後を確認するなど警戒も怠らない。だいぶ、焦っているのだ。ドアを叩く拳にも力が入る。
そして、少しの間を置いてドアがゆっくり開いた。ボサボサの髪を適当に手櫛でとかしながらリザが不機嫌そうな顔をして出てきた。
頭上で光る太陽の光に目を細めている。あまり寝ていないのだろう。

目の周りにはクマが見え隠れしていた。

「朝から何なのうるさいわねー」

「もう昼過ぎですよ！」

空と一樹が同時に指摘した。面倒とばかりにため息をつき、リザは続ける。

「あぁ、あんたらか。どうしたの？」

「あの、少し事情があって、匿って欲しいんです」

舞が焦りながら、しかしあくまでも丁寧にリザに頭を下げてお願いする。その様子にリザはドアを思いっきり開けた。そして微笑む。

「何だか話が読めないんだけど……。いいよ、入んな」

「ありがとうございます！」

リザの酒場に招き入れられた五人と空に担がれたままのアーク。勧められたテーブルに座って一息ついた。

空はアークを長椅子に寝かせてからテーブルにつく。

「で、どうしたのさ」

リザは訊きながら水をコップに注いで持ってきた。空はそれを受け取って水を一口で一気に飲んでから事情を説明しはじめた。

アークとの出会い。復讐の手伝い。エレックとの戦い。輝の参戦。デミアン、そしてフルを倒した所まで。仲間たちも足りない所を少しずつ足したり訂正したりして、３０分位かけて説明した。

いつの間にか髪をまとめて眼鏡をかけ、仕事モードで話を聞いていたリザは腕を組んで、額にシワを寄せながら難しそうに唸る。

「あたしが持っている情報と照らし合わせて考えてみると」

まず第一に、と言ってリザは人差し指を立てた。

「アーク、この子の父親がデミアンに殺されているというのは事実だろう。同様にデミアンがその時洗脳されてたというのも事実だ」

次に、といって中指もたてる。丁度『ピース』をする時の手の形だ。

「エレックという男はシュヘルの町長ニーグの息子だ。あたしも何度か面識がある」

ニーグという名前に反応して驚いた顔をした空が口を開いた。

「あのニーグさんの息子？何でデミアンを守ってたんだ？」

「まぁ色々と事情があってね……。仕方無いんだ」

リザは瞬間目を伏せて、すぐにまた顔を上げた。垣間見えた複雑な表情に空含めその場にいる者は少しの声もあげないように口をつぐ

む。
リザは気にせず再び話し始める。
「おっと。話がずれたな。空、輝と闘った時に現れた『フル』と『オク』についてだが……。これについての情報はほとんど無い」
空は元々期待してなどいなかったように、しかし静かにうなだれた。
人が努力の年月を費やして産み出したこの王都。それを一瞬で掻き消してしまうような滅びの力。それこそが自らを『精霊』だと言わしめる原動力そのもの。そして、およそ人の手の届かないものであることの証明だ。
それぞれに思い出して、空たちの中に落胆の色が滲み始める。その時、リザが手を下ろして今までに無いくらいに鋭い目をした。
「だが、1つだけ希望につながる情報がある。聞くか？」
慎重に発されたリザの言葉に難しい顔でうつむいていた空はバネのように顔をはねあげた。
「希望、に？」
リザは一瞬だけ険しい表情を見せてうなずいた。眼鏡を外し、仕事モードを解きつつ口を開く。
「これは情報屋としての仕事からは逸脱してるから。お願いになる……君たちに、ラルガを倒して欲しい」

リザが二階から持ってきた地図。大きなテーブルを占拠するように広がっている絨毯サイズのそれを囲うようにして全員が座った。

そしてリザが地図上の王都の位置を指差す。

「ここが王都。わかるね？」

確認をとるリザに全員が揃って頷く。誰も言葉を発しはしない。更にリザは大きな街道沿いに指をスライドさせていく。王都から西に位置するその場所には恐らく大陸一の大きさであるだろう巨大な湖が描かれていた。

「ここにハリアという街がある。一旦ここで休んでから『マーカス』という男を探せ」

「……マーカス？」

一樹が首をかしげる。リザはうなずき返して答える。

「そうだ。彼なら必ず、力になる」

そう言ってリザはまた指を滑らせていく。紙ではなく何かの動物の革で出来ている地図を指が滑らかに動く。

先ほど示されたハリアから北北西の方向。荒野と大きな鉱山を一つ。それを抜け、海岸にある街。

「名前は『ヤマト』。ラルガはここを拠点にクーデターを起こすつ

もりだ」

リザは感情の感じ取れないような小さな声でそう告げた。空たちが息を飲む。

沈黙の中でも特に舞はクーデターという聞きなれない言葉に身震いを隠しきれなかった。口元に手をやって地図上のヤマトをじっと見ている。

「……舞？大丈夫？」

そんな舞の様子に気づいた綾香が心配して声をかける。舞はびっくりしたように反応して無理やり笑った。

「……大丈夫。大丈夫だから」

額に脂汗を浮かべながら彼女は今さらのように怖じ気づく。

人は、それが実際に目の前に来ないとわからない。自らで体験しないと物事を理解するのは難しい。

今のいま、舞は徐々に、しっかりと、ラルガの成そうとしている事を理解してきていた。シュヘルで聞いた時とは違う。実感を得て怖じ気づいている。

リザは更に続けた。

「クーデターを止めるなら今だ。ラルガを倒さなくちゃいけない。既にこちらでも義勇兵を募っているがラルガはアクセサリーを持っている。……率直に言おう、力を貸して欲しい」

リザが頭を垂れる。いつまでも目を伏せている舞を除いて他の仲間たちはうなずきあった。隣に座る速人が声をかけて、舞は一拍遅れ

てうなずいた。

「頭を上げてくれ。俺たちも最初からそのつもりだったんだ。俺たちだけじゃ力が足りないから王都に方法を探しにきていた」

空が言った。そして続ける。

「でも、義勇兵がいるなら。仲間がいるなら勝てるかもしれない。……早速、明朝に王都を出ようと思う。皆、どうかな？」

空が自分の考えを述べてから仲間にふる。速人は一瞬考える素振りを見せてすぐに了解の立場をとった。

「良いと思いますよ。確かにアクセサリーの力について何かがわかったわけではありませんが、ここで新しい情報を得られる確証もないままいるより余程建設的に思えます」

速人の意見に誰も異論はなく、明日の出発で意見がまとまり始めたとき、一樹が口を開いた。

「空、アークはどうする気だ？」

言われて空は長椅子に寝せられているアークの方を見た。

あれほどまでに復讐にとらわれていた時の凄惨な表情は微塵もあらわれずに、安らかに眠っている。事情を知らないものが見たら年相応のあどけなさに微笑んでしまうだろう。

その姿を見てリザが言う。

「あたしが面倒を見とくよ。この通り酒場はでかいし、情報屋での報酬もあるから子供１人くらい大丈夫」

「じゃあ、お願いしても良いですか？」

「あぁ、まかせな」

リザさんは胸をポンと叩いて自信ありげに笑った。
うまく事がおさまるかに思えたその時、一樹はもう一度口を開く。

「輝は……どうする？」

また全員が、沈黙する。

そして彼らのその表情はそれぞれだ。
空は苦虫を噛み潰したような罪悪感の。
綾香と速人は恐怖と嫌悪感を。
舞は、今にも泣きそうに。
一樹はそんな皆を見て、絶望を。

「……俺」

「駄目だ」

言いかけた一樹の言葉を空が被せて潰す。

「輝のとこには行かせられない」

「でも」

「俺たちには、一樹が必要だ。輝には、ミアもエレックもいる。輝を思いやる仲間がいる。だけど俺たちには……」

空はそこまで言って声を止めた。一樹は泣き出しそうな舞の顔を盗み見る。盗み見て、一樹は歯を食い縛った。

一樹の心に、舞の泣き顔と倒れた輝の姿が浮かぶ。

「……わかった」

永遠とも思えるような数十秒の沈黙のあとに、一樹は辛そうに呟いた。

――……。

どんなに長い一日でもいずれは夜がやってくる。

その夜空たちは王都中を見回っているであろう衛兵たちを警戒してリザの酒場の二階で泊まった。

空、一樹、速人、綾香の四人、つまり舞以外の皆は下で客と一緒にちょっとだけ酒盛りをしに行っている。しかし舞だけはそんな気分にはなれずに二階で一人でベッドに寝転んでいた。

舞はふとベッドに無造作に投げ出していた手を顔の前に出してよく見てみる。

元の世界では吹奏楽を握っていた小さな手。聴く人を楽しい気分にさせるために使っていたその手は今や、ナイフを握り、短刀を扱う。戦いの為の道具でしかなくなっている。

部屋に短い二回のノックの音が響いた。

「ちょっと、いいか？」

一樹の声。

「うん」

舞の了解を得て、軋むドアの音を立てながら一樹が部屋に入ってきた。

「舞、調子どうだ？」

「……大丈夫」

舞は上半身を起こして笑顔を見せる。一樹も下手くそな笑顔で答えた。そのまま一樹は部屋の窓を開けはなしてそのサッシに寄りかかる。

たっぷりと夜の湿気をはらんだ夜風が部屋に入ってきて、塞いでいた舞の気持ちをわずかに和らげる。

舞の表情が少し柔らかくなったのを見た一樹が苦笑いを見せながら話し出す。

「空も綾香も酒癖悪くて大変だよ。速人とリザさんに押し付けて逃げてきた」

そう言って一樹は小さなため息を漏らす。悪意は無く、ただ、ため息をついた。

「ふふ、そうなんだ」

あの二人が相手では速人もリザさんも大変だろう、と思った舞も少

しだけ微笑む。
そこで、舞は一樹からアルコール独特の匂いがしないことに気がついた。

「飲んでないの？」

「ま……ね。飲む気分じゃないし」

「そっか……。一樹も戦争は怖い？」

舞の問いかけに、ああ、と相槌を打つ一樹。

「怖い。でも俺は輝の方も心配かな」

「そうだよね……。ごめん」

謝る舞に一樹は必死に首を振って否定する。

「いやいや。謝ること無いよ」

「……ありがとう」

舞は気を使わせてしまったことに罪悪感を感じながらベッドの枕を両腕で抱えて抱き締める。

「輝は……『フル』に打ち勝つことは出来たのかな」

「……どうだろう。……ちょっと寒くなってきたな」

一樹は渋い顔をして、開け放していた部屋の窓を閉めた。

「『嫉妬』か……。厄介なモンだ」

「……うん」

空たちを含めた彼らは明日、輝の見舞いには行かずにすぐ王都を出ることにしている。決して輝の居場所がわからないわけでは無いが、わざわざ見舞いに行く理由もない。
そしてこれから行く『ヤマト』はここからかなり遠い街だ。

だから、輝にはもう会えないかもしれない。と考えるのが普通だ。
元々右も左もわからないようなこの『異世界』で一度別れて再会出来たこと自体が奇跡のようなものだった。

空たち五人の中でも輝の事を思いやっていた二人なだけに『輝を置いていく』という事実が心に重くのしかかっている。

「……大丈夫か？」

一樹が舞の顔をのぞきこむ。不安そうな彼の表情を見て、舞はふと考える。

選んだのだ、と。

輝が逃げることを選んだように、彼女は仲間を信じることを選んだ。

「大丈夫……だよ」

微笑む舞。先ほどから無理に張り付けていたものとは違う自然な笑顔が出てきていた。

巨大な王宮

「……ん」

まぶたを透過して赤い光が視界に充満する。寝る前までは鼻腔を満たしていた夜の匂いも今や朝の風となって部屋に充ちている。俺はそっと目を開けて上半身を起こした。ベッドのすぐ横、昨夜から開けっぱなしの窓から涼しい風が吹いてきて俺の長い前髪を揺らす。

病室は朝の光を照り返して昨夜感じたよりもさらに清潔な印象があった。

ふかふかの布団にくるまっていると起きれなくなりそうで、俺はとりあえず布団をはねあげた。

同時に病室の扉が開いた。何の前触れもノックも無しに、だ。ドアの方を見ると、開いた張本人が俺を見て驚いた顔をしていた。いや、それは俺とて同じかもしれない。

「……少年！目ぇ覚めたのか！」

「エレック！……おはよう」

部屋に入ってきたのはエレックだった。こうして面と向かって話すのはいつ以来だろう？　噴水広場ではエレックは既に意識の無い状

況だったからハリア以来になる。

……というか。

「エレック……怪我は？」

「ん、変な服着た女の子が治してくれた。確か、『舞』とか呼ばれてたかな」

「ま、い……」

驚くようなことじゃない……か。空がいたんだ。多分、あいつら全員が。……『嫉妬』にとらわれた俺を見ていたのだろうか。

「……早く。入ってっ」

エレックの後ろから聞いたことのある小さな声。焦りが垣間見える必死さにエレックが微笑んで先に部屋に入り、その後ろにいたんだろう人物を前へと押し出した。

小さな背。黒のショートカットの上に帽子を乗せている。前回見たときはただ怯えるようだった大きな目が今は喜びで溢れているように見えた。

「……輝っ！」

ミアは俺の寝起きの間抜けた顔を見るなり飛び付いてくる。俺は慌ててミアを受け止めた。走ってくる時に帽子が落ちて、俺の鼻をミアのさらさらの髪が直にくすぐる。

「ちょっと、ミア」

「よかった……本当に……！」

朝から焦らせてくれるけど、ミアの安心しきった表情を見たらこっちまで安心してきた。昨夜の不安もぶっ飛んだ。

ちょっとだけ、ほんのちょっとだけミアを抱く腕に力を入れてみてから手を放す。

エレックは、しょうがねぇな、という顔で後ろ手にドアを閉める。

そしてミアが落とした帽子をミアの頭に乗せて言った。

「ミア、そろそろ」

「ん、うん」

エレックが諭すとミアは素直に離れる。そしてエレックは手に持っていた紙袋をこっちに投げて寄越した。

俺はそれを受けとる。

開けてみな、と言うエレックに頷き袋を開けると中には服が入っていた。

「これ……」

「服、ぼろぼろだったろ？新しい服だ。買っといてよかったな」

と言ってエレックはミアの帽子の上に手をのせる。そのまま肩にも手をのせ、ミアの体の向きを扉の方へ向ける。

「じゃ、部屋の外の廊下で待ってるから着替えたら呼んでくれ」

「わかった」

エレックはミアの背中を押して部屋を出ていった。

一人残された俺は取り合えず新しい服に着替えることにした。

くたびれたジーンズと病人服を脱ぎ捨てて新しい服に着替え、最後にベルトのバックルをしっかりと止める。

「よし」

暗い色のジーンズに灰色で薄手のインナー。その上に麻のような素材だろうか、少しごわついた白いシャツ。さらに紺色のベストを着る。

靴もあった。今の腐りかけのようなボロスニーカーから新品の靴に履き替える。良い履き心地だ。

鏡で姿を確認する。全体的にフォーマルなような気がするが、動きやすい。俺はシャツの袖を何度か折ってまくる。

その後軽くベッドメイキングを済ませて荷物をまとめて外で待っているミアとエレックを部屋に入れた。

「似合うよ」

俺の格好を見るなりミアは素直な声で言う。そう言われると本気で照れる。

「あ、ありがと」

俺は若干赤くなってるかもしれない顔を伏せながらお礼を言った。
まともにお礼も言えないなんて自分でも情けないけどそれ以上に恥ずかしいような、嬉しいような。

「……少年」

エレックがいつになく真剣な声色と表情で呼び掛けてきた。舞い上がっていた俺はふと我に返ってエレックの方を向く。

「……どうした？」

「この国が王政をしいてるのは知ってるか？」

「まぁ、知ってるよ」

シュヘルでニーグさんに聞いたような気がしないでもない。自信なく軽くうなずくとエレックがミアと俺に顔を少し近づけてきた。

「その王様の直轄の特務が病院の前に来てる。このままだと少年、あいつらに連れていかれるぞ」

小さな声でそう言うと視線で窓の外を示す。
窓の外、病院の正面の道に馬車が停めてある。その横には細かい細工の入った高そうな鎧を来た兵士が立っていた。恐らくあれがエレックの言う『直轄の特務』だろう。

「特務、って何の仕事してんの？」

俺はエレックに訊いた。もし特務の仕事が抹殺とかだったら洒落にならない。

「基本的に登用、人物召喚の仕事をしてる。今の王様は武術が好きだからな、少年を王宮に召喚する気だろうな」

「行かないとマズイ？」

「まぁ、だろうな。その為に一応ある程度の格好させた訳だし」

なるほど。シャツやベストを着せられたのはそういう理由もあったのか。

「……行くしかない、よね」

俺はさっきまとめたばかりの荷物を持った。槍と小刀はエレックに預ける。王宮内に堂々と武器を持って行くのはマズイらしい。

王様とか全く会いたくないけど、本当に抹殺されたらたまらない。抹殺されなくともこんなところで国の権力者に悪印象を持たれたら王立図書館での情報集めも滞ってしまう。

俺はドアまで行ってノブに手をかけた。背後から俺を呼ぶミアの声。

「僕たち王都（ここ）で待ってるから、帰ってきてね」

「……うん、もちろん」

小さく手を振るミアに俺も手を振り返した。

病院を正面口から出ると目の前に豪奢な甲冑を身に纏った人、多分兵士なんだろう者が立っていた。豪奢な甲冑……兵士だとしてもかなり身分のある者とかなのかな。

「お前は、久喜輝、だな？」

傲慢さを感じるしゃべり方だ。俺は素直に首を縦に振る。

「はい」

「身分証は？」

手を差し出して催促する兵士。慌ててポケットの中を探ると身分証が出てきた。

身分証が必要になる場面があると踏んで二人があらかじめポケットに入れておいてくれてたんだ。

俺はいまだ病院の中にいるであろう二人に感謝しながら身分証を兵士に渡した。

兵士はその銀色に俺の下手な文字で名前を書きつらねたカードを手に取ってよく見ると軽く頷く。

「字が汚くて正直読めんが……確かに、久喜輝なんだろう。人相もあっている。……馬車がある、乗れ」

酷いに反論する隙もなくなかば兵士に押しこまれるように俺は馬車に乗り込んだ。続いて兵士が隣に乗ってきた。これじゃもう逃げられない。

軋む馬車の前方で馬に鞭を入れる音がする。

この世界にも馬がいるんだ、と今さらのように思いながら窓から流

れる景色を見る。向かうは王都中心にそびえ立つ暴力的なまでに巨大な王宮だ。

それからスピードを出す気のないゆったりした馬車に揺られて一時間。隣に座る全く喋らなかった兵士が急に口を開いた。

「外を見ろ。王宮だ。……そろそろ降りるぞ」

「……わかりました」

窓の外には巨大な城壁。見渡す限りに石の壁が積み上げられている。どれだけの労力を注いでこれだけのものを造ったのか、とても気になる。

その一部に小さな扉がついている。近くまで来てみてわかったが扉は小さいとはいっても巨大な城壁に比べたらの話で、実際には馬車一台が悠々と通れる程の大きさだった。

「裏口から入る。……王様に粗相の無いようにな」

この兵士いわく裏口だという扉を通ったすぐのところで俺は馬車から下ろされた。きっと正門は他にあるんだろう。

馬車から降りると石積みの地味な灰色の塔の入り口だった。塔の中腹からは渡り廊下らしきものが延びていて城に繋がっている。

俺は馬車を振り返る。兵士は早く行けと言わんばかりにそっぽを向いた。ついてこない、のか？

もう一度、塔やら渡り廊下やらを見上げる。……うん。複雑そうで、迷いそうだ。困ったな。道がわからない。
不安そうな俺の視線に気付いのか兵士は石造りの壁にある木製のドアを指差す。

「あの扉の奥で案内人が待ってる」

なんだ、道案内がいるのか。
意外と優しい兵士に俺は軽く頭を下げて礼を言って、急ぎ足でドアを開けた。

ドアの奥では正装をした中年の男が待っていた。彼は頭を垂れて優雅に礼をする。仕草ひとつひとつが心地よい。俺はマナーなんて知らないが、それでもこの人が礼儀正しいのだろうということは理解できた。

「お待ちしておりました。私についてきて下さい」

「はい」

返事を返すと正装の男はニコリと笑い、塔の入り口の扉を開いた。

塔の中も外壁と変わらず石造りで灰色だ。入った瞬間ひんやりした石の冷気を感じる。
すぐに螺旋階段があり、男はそこを登っていく。俺も置いていかれないようについていった。
しばらく登り、途中で渡り廊下を渡る。外から見た光景を思い出す限り、ここを渡ると城に行けるのだろう。

それにしても、城の割には簡素なんだな。

「質素な造りでしょう？」
俺の考えを読んだように前を歩く正装の男が振り返りながら話しかけてきた。

「今は隣国から重要な客を招いているので申し訳ありませんが裏口から来て貰ってます」

「はぁ……」

なんとも中途半端な声を出して相づちをうつ。
そんなことをしている合間に迷路のような道を抜け、その先には急に豪華な扉が現れた。

「さあ、つきました」

そう言う正装の男のあとに続いて扉を開けると目の前には高校の体育館の何倍もある広い空間と上に登る為のこれまた異常に大きい階段が現れた。
シャンデリアだか何だか知らないが宝石なりガラスなりが散りばめられた光が爛々としている。磨かれた大理石の床。その上に赤いカーペット。メイドらしきものや兵士、正装の者たち。

豪華絢爛。それがピッタリだ。

同時に、子供の頃ハマったゲームを思い出す。ここの空間は昔やったＲＰＧに出てきたお城に似ている。ＲＰＧの通りなら階段の先には『謁見の間』があってそこに王様がいる。

正装の男は微笑んだ。

「この階段を登った先です。謁見の間に入ってからのことはその場で考えて身を振って下さい」

「え？そんないきなり……」

「あまり王様を待たせない方がいいですよ。さぁ、急いで」

そう言って正装の男は俺を階段の方へと押しやると来た道を戻る。またあの裏口で待機するのだろうか。

「私は仕事がありますので」

笑顔を崩さない正装の男を見送った俺は緊張から来るため息をついて、厚いカーペットによって足音を消されながら大きな階段を登り始めた。

周りの人間が俺を不審そうな目で観察する。その視線を感じとりながら階段を登りきり、謁見の間に続くであろう巨大な扉の前についた。

「……はぁ」

ずいぶん長い階段で息が上がる。というか今朝……いや、昨日の深夜から体が重い。これといって疲れているわけでもないのに体が鉛のようだ。

「久喜、輝だな？」

扉の横で待ち構えている衛兵が確認をとってくる。俺が身分証を出

しつつうなずくと、その重そうな扉を衛兵がゆっくりと開けた。

開いた扉の先には広い部屋が。赤い絨毯の道の先には玉座に誰かが座っているのが見える。

俺は緊張しながら謁見の間に足を踏み入れた。

「ほぉ。そちが久喜輝とな？」

絨毯を歩き、玉座の前までくると玉座に座った若い男が俺を見定めるような目で見下しながら訊いてきた。

この男が、王か。

俺を見下す目は濁っている。権力に、浸かりきった目だ。

別に太っているわけでもない。恐らく引き締まっている方だろう。

顔も整っている。青がかった色の髪は艶やかだ。

なのに、何でだ。怠惰で傲慢で、フルに対するものとは別の嫌悪感が沸々と沸き上がってくる。

俺は特別人を見る目がある訳じゃない。むしろ、無い方だ。でもこれはわかる。誰でもわかる。

腐った排水のような目の色だ。力に溺れた色。その濁った水晶体で俺の姿はちゃんと見えているのだろうか。

「そちが闘技大会にて決勝まで進んだのだな？」

「……はい」

玉座の周りには美しい女官たちがはべっている。どうやって集めた

のだろうか。ひとりひとりが本当に美しい。ミアも綺麗だとは思ったが、それすら霞んでしまいそうなほどだ。
俺はその正面で立ち尽くしている。斜め前には王の側近らしき人や近衛兵がいて、俺を冷ややかな視線でねめつけている。視線に耐えきれなかった俺は自ら口を開くことにした。

「あの、用件は……」

「無礼者！王の許可なくして話すとは！」

斜め前の若い男の家臣だろう人が俺を罵倒した。突然怒鳴られて肩がビクッと震えてしまった。恥ずかしい。

「……かまわぬよ」

家臣を制して王様はいやらしく笑う。俺は下手をこかないように口を閉ざして慎重を心がけた。

「用件は簡単。……ジャックス、前へ出なさい」

王様が玉座の近くにいた騎士を呼ぶ。ジャックスと呼ばれたその騎士は玉座と俺の間に立ちはだかった。
革素材っぽい軽鎧をその身に纏い、つるぎをその腰に帯びている。浅黒い肌と鋭い目付き。軍人特有の威圧感。

「ジャックスは優秀な近衛騎士でな。誰が相手でも負けたことはないのだ。だが武を誇るそちなら倒せるかもしれん。闘って見せよ」

「……え？」

戦えって……どういう……。

「不満か？　なら……」

王様はそばにいる女官を一人、戸惑う俺がいる方へ突き出した。

「コレを与えよう。中々美しいだろう？　コレなら不満はあるまい？」

王様は得意気な顔をしている。その最悪の話しぶりに俺の心は煮え立ってきた。ジャックスといい、この女官といい。この王様は……。

「人のこと、駒みたいに言うなよ……」

俺は目を伏せ、控え目な声で反論した。自らで怒りを感じてはいたが流石に一国の王に対して怒鳴るほどの度胸はない。

俺の言葉に罵声を上げようとする家臣たちを制して王様は若干苛立った顔で言った。

「不満か。なら、ジャックスに勝てたら何でも願いを言え。一つだけ叶えてやろう。もう不満はないな」

「そうじゃなくて！」

「おい」

王様に抗議する俺に向かって、ジャックスと呼ばれた騎士が初めて口を開いた。

「これ以上の文句は止めとけ。こちらも『ミア』と『エレック』の安全は保証できなくなる。……まぁ、早い話あの二人は人質だ」

エレックとミアが！？
……もう何度も迷惑をかけたんだ。これ以上あの二人に負担を強いるなんてできない。

「……わかりました。勝負を受けます」

ジャックスを挟んで向こうの玉座で、王は満足そうに笑った。

「よろしい。ジャックスに勝てばそちの願いを叶えよう」

俺は背中に手をやる。が、武器がない。そうだった。小刀も槍もエレックに預けてしまったので武器がない。

「武器は……？」

「これを使え」

正面のジャックスから投げ渡されたのは短剣。

「お前は短剣使いなんだろう？」

「……」

俺は無言で頷く。
短剣を鞘から引き抜くと綺麗な刃が出てきた。その冷たい輝きに戦いの始まりを感じて一瞬の身震い。

「では……」

ジャックスが腰の剣を抜く。上段に構える。

「参るぞ！」

ジャックスはその一声と共に素早く間合いを詰めてきた。俺は戦いに放り出された圧迫感を肌身に感じる。

迫り来るジャックスの剣。上から下へと振り下ろされた刃を左手にある鞘で受け止めた。だがジャックスの剣を左手一本で抑えきれずに俺は徐々に押されていく。

「う、ぐ」

力が強い！

片手じゃ無理だ！

俺は慌てて、剣を受け止めた鞘を、短剣を握っている右手の拳で押した。相手は右手一本に対して俺は両腕の力を込めている構図になる。

俺は腕一本の力の差の分ジャックスの剣をどんどん押し返していく。

しかしそれもジャックスが剣の柄に左手を添えるまでだった。

「ヌン！」

ジャックスが気合いと共に力を加えてくると、俺は簡単に鞘を押し返された。駄目だ、力の込めすぎで腕が震えてきた。

「……っ！」

俺はすぐに鍔迫り合いを中断してバックステップで距離をとる。俺

はさっきから体に違和感を感じていた。

体が、重い。

最初は病み上がりだからだと思っていた。だけど、これは違う。明らかに。

ジャックスは飛び退いた俺を追撃しようと間合いを詰めながら剣を縦に振り下ろしてきた。

俺は戦いで培ってきた見切りを使って紙一重でそれを避けた。

……そのハズだった。

「ってぇ！」

避けたハズのジャックスの剣が俺の左肩を掠め斬った。俺は反射で今度は大きく後ろへ後退する。肩から赤い水が流れ始めているのがわかった。

血を見た王様や家臣が好奇にどよめく。戦いについて難癖つけても結局血の争いには好奇心が働くんだ。「やはりジャックスは無敵かのう」

王様は満面の笑みでジャックスを見た後、俺に対して嘲笑を突きつけた。家臣たちも皆顔を見合わせて含み笑いをする。

笑っていないのは俺とジャックス。さらに加えて恐怖を浮かべてるのは俺だけだろう。

俺は、思い出したんだ。

体が重く感じる理由を。
重くなった、と勘違いするほど弱体化した理由を。
背筋をヒヤリとした何かが駆け抜ける。焦りと、絶望感と、吐き気。
ああ、そうだった。
元々俺はただの高校生なんだ。そして部活動にいそしんでる訳でもない。体育だって平々凡々。そんな俺がどうして戦ってこれた？
俺は自分の胸元にぶら下がる銀のペンダントに触れる。
しかしそれはいつものように光ることも力を与えてくれることもなくなってしまった。
酷い勘違いをしていた。
俺が今まで戦ってこれたのは。
……俺の力じゃない。フルの力だった。
俺は、やっぱり、弱い。
しかし真理に気づいたところでジャックスの剣が手を休めるわけがない。
俺に狙いを定めて確実に仕留めにきている。力も体力もなくした俺は既に息が上がっていた。
「はぁ、はぁ……」
どうする。今からでも土下座して謝ろうか。……許されるわけがない。でも、死にたくない。どんなにカッコ悪くても死ぬよりはマシ

だ。その為なら靴の裏でも舐めてやる。

でも、この状況は……。

どうにかして……どうにかして……。

目の前でジャックスが笑みを浮かべた。

「微温いな、本当に決勝まで進んだのか？」

俺の軟弱さを見抜いたような声色。それでも構えを崩さないのだから、俺を殺す気なんだろう。

「くそ……ぉ」

結局俺は……！

力がない……！

勝てない……！

周りを見る。貴族の笑顔。誰も俺を助ける気はないみたいだ。

そうだ。ここにいるのは貴族。俺とは違って生まれながらにして力を持っている。

俺は違うんだ。何もなかった。権力も才能も。人に誇れるものが無いんだ。

どうせ俺なんかに、安全地から傍観するなんて権利は無いんだ……！

『ここにいる俺以外は、俺が欲しかった力を、生きる権利を持っている』。

『それ』を心から思った時だった。

――やっぱり、俺が選んだだけあるな。

その声は、何の前触れも無しに語りかけてきた。高くて、低くて、クリーンで、ひずんでいて、太くて、細くて、イライラするほど捉えようのない声。

この声は。

――あの程度じゃ、消えないさ。

この滲み出す嫌悪感……フル！あの時『精神世界』で死んだハズじゃなかったのか！

俺は目の前の剣を避けることに集中しながらフルの声に耳を傾ける。

――体を、貸してみな。こんな雑魚、スグに倒してやるよ。

ダメだ！それだけは！
この体は渡せない！

――へぇ。良く考えろよ。

俺はジャックスの横薙を短剣で辛うじて受け流す。そして相手と距離をとるために後ろへ。が、俺が後ろへやった足は壁にぶつかった。後ろへ下がれない。背後には壁しかない。
目の前のジャックスは不敵に一瞬笑うと俺に狙いを定める。

「終わりだ」

――さぁ、どうする。終わりだとさ。

迫るジャックスの剣。

――選びな。このまま死ぬか、それとも。

絶体絶命。

俺が何をしようと結果はバッドエンドだ。死か、からだの引き渡しか。

俺は目を固く閉じた。

もう、終わりか……！……なら、いっそ！

俺はひとつ、選択した。

……フル！俺の体を使え！

――安心しな、輝ァ。

声と共に、意識が体から離れていく。俺の、『久喜輝』の体の外の傍らへ意識が追い出される。

今やフルのものとなった『久喜輝』の目に冷たい色が浮かび上がるのが、見えた。

――オレは負けねえよ。

決断と槍

ジャックスが俺を、『輝』を仕留めるために突いた剣は『フル』によって弾かれた。弾いてすぐに右足で中段蹴りを放つ。ジャックスは数歩下がってそれをよけた。

「ハッ！こんな雑魚に手間取ったとはなァ」

さっきから、体が勝手に敵の攻撃を弾き、中段蹴りを放り込み、挑発的な言葉を口にしている。

俺は、体をフルに明け渡した。これはその結果だ。

ジャックスはいきなりの俺の豹変に動揺して俺とさらに距離をとった。

「一体何をした……！？」

ジャックスの口調に微かに震えが交じる。動揺と……恐怖の色だ。

「何もしてねえよ。……そんなビビんなよ。震えてるじゃねぇか」

「……くっ！怖じ気づいてなど」

ジャックスが反論しようとした瞬間、ジャックスの右手の剣に亀裂が入った。さっき弾いた時に入れられたんだろう。

「馬鹿な……っ！」

「馬鹿じゃねえ。終わりだよ」

さらなる動揺で大きな隙を見せたジャックスの懐に瞬時に潜り込んでフルは笑う。そして短剣をジャックスのヒビの入った剣に打ち付けた。

短剣を打ち付けられたジャックスの剣はその衝撃で簡単に砕かれる。

「あ、が……」

剣を折られたショックで呆けた様に口を開けるジャックス。騎士が折られたのはその剣だけではないみたいに見える。

フルはその間抜けな表情を堪能したあと、ジャックスの腹に思い切り蹴りを入れてぶっ飛ばす。ジャックスはそのまま謁見の間の端の方まで転がっていった。

「魔力がありゃあ身体強化なんて簡単なんだがな……輝には出来ないだろ」

小声でフルが俺に話しかける。身体を動かす権利を持っていない俺は、答えることも何も出来ずにいた。

「……さて」

砕かれた剣の刃が散らばってキラキラと光る玉座への道。遮る者のいなくなったその道をフルは短刀をだらしなく構えながら堂々と歩む。

「さァ、王サマ。俺の願いを叶えさせて貰おうか」

「わ、わわかった。願いを叶える。だからその短剣を下ろしてくれ」

王様は恐怖に顔をひきつらせながら壊れたおもちゃのように首を縦に何度も振った。

フルは薄笑いを浮かべながら短剣をそこら辺に棄てた。そして同時に『風の刃』を天井に沢山ぶら下がっているシャンデリアのひとつに向かって放つ。

シャンデリアは風で炎が消され、粉々になりながら床に叩きつけられた。

「武器なんて、あってもなくても変わらないな……そうは思わないか？衛兵さん」

そう言ってフルは背後を振り返る。先ほど謁見の間の扉にいた衛兵が槍をこっちに向けて固まっていた。背後から仕留めるつもりだったんだろう。……フルには見抜かれていたみたいだけど。

「妙な事はしないことだな。……まあいい。俺の願いは一つ、俺を王宮内にある『イッソスの部屋』へ連れていけ」

「い、イッソスの部屋、だと？」

王様が酷く狼狽する。

「そうだ。そして部屋の中のモノを貰う。……さァ！早く案内しろ！」

フルが怒鳴ると狼狽える王様に代わって、側近とおぼしき家臣の一人がフルの前にひざまづいた。

「わかりました。私についてきてください」

側近はそう言うと踵を返して王様が泡食って座っている玉座の後ろの壁へと歩いた。複雑な装飾の壁の一部にある穴に側近が懐から取り出した鍵を入れると壁の一部が音を立てて崩れた。
崩れたところの奥は真っ暗だが通路のようになっている。隠し部屋と言うわけか。

「この奥で御座います」
「ご苦労さん。この先の案内はいらない。俺一人で行く」

壁の中の通路は暗かったが、フルは銀のペンダントから光を出して明かりを確保していたので歩けなくはない。

相も変わらず勝手に動く体。

――ああ、俺の選択は本当に正しかったのかな。そもそも何でフルが復活してしまったんだ。

「お前のおかげだよ、輝」

驚いたことにフルが、俺の口を使って返事を寄越してきた。

「お前が『嫉妬』に心を埋める事がある限り、オレに終わりはあり得ない」

……そうか。

劣等感に嫉妬に、そういう感情を持つ限りは結局逃れられなかったのか。

……もう一度、意思の疎通をはかってみよう。

――なぁ、フル。……体を、返してはくれないか？

ふん、と鼻で笑われた。

「図々しいな。助けてやったんだ。文句言うなよ」

厄介な事になってしまった。自分で選んだこととはいっても……。

このままじゃ一生、体が戻ってこない。

――お前は、何が目的なんだ？

フルはめんどくさそうに俺の質問に答えた。

「順序立ててはなそうか。……俺が昔、体を奪い取った銀のペンダントの所有者。それがイッソス。今から向かうのはイッソスが最後の力で俺から体を奪い返して俺の力の一部を封印した場所。……イッソスの部屋。イッソスは俺の力を何ヵ所にも分けて封印した。だから俺は力を取り戻すために各地を回るさ」

――何で、そんなことを？力は十分じゃないのか？

「お前だって自分の腕をちぎれたままで居させられたら嫌だろ？」

――そうか。それで、その後どうするんだ？

「イッソスの封印を解き、手にした力で『オク』を倒す」

――『オク』……。何でだ？

「倒したいから。……もういいだろう、輝。黙ってろ」

フルはそう言うと更に歩く速度を上げた。暗いトンネルの様な道を足音だけが響いていく。

……イッソスの部屋。

フルの力の一部を封印したイッソスは話を聞く限りアクセサリーの所有者。ということはイッソスはこの世界の住人じゃない。フルを封じてその後、自分の世界に帰れたんだろうか。

フルが通路突き当たりの石造りの扉の前で足を止めた。石造りの扉には銀のペンダントに刻まれているような奇妙な刻印が彫られている。

「ここだ……。扉を隔てた向こうでオレの力がオレを呼んでる……！」

そう言ってフルはその重そうな扉を押し開けた。

中は暗い。が、しかし少し待つと明るくなった。部屋の中の燭台や松明に勝手に火がついている。もちろんきっと魔法だ。

ゆっくりと部屋に入っていく。

イッソスの部屋は正方形で高校の小教室ほどはある。良い質感の木製の本棚やテーブルが置いてあり、部屋全体に広がる魔方陣の中心に剣と槍の中間のような形の武器が刺さっているコトを除けば普通の部屋だ。

剣と槍の中間のような形の武器を見てフルは独り言のように呟き始めた。

「あれはグングニル……。オレがイッソスの体を使ってた時に使っていた武器……」

グングニルは俺の身長よりも短い。剣のような刃の部分が地面から俺のヒザ上までである。残りの部分は柄だ。

グングニルという名前からすると槍なのかも知れないが、それにしては刃の部分が長い。刃は幅広で片刃。真っ黒な刀身とつい最近研がれたかのような銀色の刃の部分が対比している。

――グングニルって……。北欧神話に出てくる投槍だろ？全然それっぽくないけど。

「知らねぇよ。この槍に名前をつけたのはイッソスだからな。……さァ」

フルは舌舐めずりをして部屋の中央のグングニルの柄に手をかけた。

「戻ってこい！オレの力！」

フルは一気にグングニルを地面から引き抜いた。
同時に魔方陣から溢れてくる光。青みのかかった銀色。
青みのかかった銀色の光を見てフルは喜びの顔を戸惑いの顔に変えた。

「な、に？どういうことだ？」

溢れた青銀色が集まって、人の形を成した。周りには淡く青い光を放つ風の帯らしきものが見える。

「これは、お前は、イッソス！……邪魔すんなァ！」

フルは右手に銀色の風を集めてイッソスと呼ばれた人形の光に向かって放った。しかしイッソスも同じく右手から青い『風の刃』を放ち相殺する。

イッソスはさらに青い『風の刃』を何度も放つ。フルは左手に持っていたグングニルを捨てて同じく『風の刃』で応戦する。
でも、イッソスの方が上手だったのかもしれない。
気づくとフルの周りに青い風の帯が巻き付いていた。気づいたフルは悪態をついた。

「クソがっ、また、封印術かよ！」

風の帯に縛られ徐々にフルの動きが制限されていく。

「ぐ……！」

フルが、俺の体が小さな悲鳴の様な声を上げて、視界が歪んできた。
俺の体がフルに奪われてても、俺の精神は俺の体を通して世界を見

ていたんだな。……と、下らないことを発見しながら意識が落ちていく。

青銀色の人の形の光が役目を終えたかのように消えていく様子が、最後に見た景色だった。

――……。

「あ、れ？」

目が覚めると俺はイッソスの部屋の魔法陣の上に転がって寝ていた。石造りの床の冷たさ。魔力を失ったことによる身体の重さ。フルが中途半端にしか治さなかった肩の傷の痛み。

「あー、あー」

声を出して全身を一通り動かしてみた。全部、思い通りに動く。

「元に戻ってる」

ついさっきまでフルに奪われていたのに。

体がこんな呆気なく戻ってきた上、何で戻ってきたかもよく解らない俺は素直に喜べずに引き抜かれて横たわるグングニルの傍らで座っていた。

「……」

多分、フルがイッソスとかいう青い光に封印された。……ということであってるんだよな……？

さっき起こったことにしばらく混乱してボーッとしていたが視界の端に本棚を見つけて俺は動き始めた。

ここは『イッソスの部屋』だ。何か、書いてあるかも知れない。わかるかもしれない。

そう思った俺は早速本棚から適当に一冊引き抜いてパラパラと開く。

革装丁の本。
走り書き。
手記か？
見たこともない文字。
読めない。

「あれ……？」

読めない、ハズなんだけど。

文字一つ一つを読むことは出来ないのに書いてあることは理解できる。徐々に理解が進んでくる。最後にはその文章が日本語にしか見えなくなってきた。

「意味わかんねぇけど……。読めるならいい、か」

考えても仕方ないし、何で見たこともないような文字が読めるかなんて考えたところでわかりそうもない。それよりも、本だ。

分量が多いので斜め読みでさっさとページを進めながら流し読む。

コロッセオだのグラディエーターだのと、これを書いた人はどうや

ら古代ローマか何かにいた人らしい。恐らくは。
その時代で文字の読み書きが出来るということは、それなりに教養のあったものなんだろう。

その手記の内容は、この世界に対する驚きから始まって自己紹介と続く。いわく、この手記を書いた人の名前はイッソスというらしい。これは、思った通りだ。
全体的な内容としては、彼がこの世界に来てからのこと、この世界についての考察が記されている。

俺と同じように、唐突にこの世界に送られて、戸惑って、フルを封印して。……不思議と、イッソスが先輩の様に思えてきて少し可笑しかった。

「……ん？」

その本を読み終わって本棚に戻すとき、本棚の中でも異質な本が一冊あることに気づいた。
革装丁だが、他の本とは違い所々金属が用いられている。手にして見るとズッシリと重く、立ち読みするのはキツそうだ。
俺は本を部屋にあった机の上に置くと、その重い表紙を開いて読み始めた。

「……これ」

本の題名を見て思わず声を出してしまった。

『魔法の装飾品と元の世界への帰還』。

俺が求めていた情報が！見つかるかもしれない！

俺は逸る気持ちをそのままに本を読み始めた。

そして俺は見つけた。

「これだ……！」

興奮で声が震える。

「魔法の装飾品はその所有者が死を迎えると約三日後、自動で消える。恐らく元の世界へ戻ったのだと思われる……」

そしてその横のページ一杯に複雑な魔法陣の設計図が書いてある。

その図の右下に小さく、強大な魔力増幅の効果がある、という意味の文章が添えられていた。

所有者の死。

三日後自動で帰るアクセサリー。

そして魔力増幅の魔法陣。

この三つのキーワードは、俺に恐ろしい連想をさせるのに充分だった。

「そうか……。そういうことか……」

つまり。

他の所有者を殺し。

奪い取ったアクセサリーを三日間守り。

アクセサリーが元の世界に帰還する時に魔法の魔力を増幅させて。

アクセサリーと一緒に元の世界へ帰還する。

喜びは冷たい氷のような絶望にとって変わった。

一樹、舞、綾香、速人、空。……もしくは俺。

「誰かを殺さなきゃ帰れない……！」

逆にいえば6人の内1人が死ねば5人は帰れる。ということだ。

今空たちはどこにいるんだ？

確かシュヘルではこの国の将軍を倒すだとか抜かしていた。馬鹿みたいに将軍を倒しにいって死んでなければいいが。

絶対に見つけて、殺さなくちゃ。

その時、俺は空の姿を思い浮かべていた。申し訳なさそうに俺を切り裂いた空。

力も、人望も、俺に無いものを持っていて……。

「……あぁ！駄目だ！」

気を抜くと『嫉妬』に心を明け渡しそうになる！

この感情だけは、我慢していかなければならない。

冷静に。冷静に。

心が落ち着くと俺の視界の端、開けっ放しの扉の奥の通路から松明の光と足音が聞こえてきた。

まさか。

俺は部屋の中にある松明を暗い通路に向かって一本投げた。

松明の光で一瞬、怒りに顔を歪めながらゆっくりと歩いてくるジャックスの姿が照らし出された。

「くそっ！やっぱり！」

フルの奴！

アレだけ王様にケンカを売るような真似したんだ。

無事に帰してくれるハズもない！

俺は急いで部屋に戻ってさっきの重そうな本から魔力増幅の魔法陣の設計図が書いてあるページを破りとってポケットに入れた。

後は……武器。小刀と槍はエレックに預けてるし、さっき渡された短刀はフルがどっかに捨てた。

魔法はもちろん――俺は胸元の光らないペンダントを見た――使えない。

別にジャックスに勝てなくても良いんだ。その場を切り抜けられる武器を……。どうする？この重そうな本なら戦えるか？無理だろ……。

爪先に何かがぶつかった。

「これだ！」

俺は地面に落ちていたグングニルを拾い上げる。

「あれ」

軽い。

重そうな外観と比べると軽過ぎるくらいだ。

光を失ったペンダントからもわかるようにペンダントの力で俺の腕力が強くなって軽くなっているわけじゃない。

「……」

あまりにも軽いので不安に思った俺は、グングニルをテーブルに向かって振り下ろしてみた。

木製のテーブルは斬られて真っ二つとはいかないが、グングニルが武器としての威力を充分持っているということを示す傷をのこしていた。

「すっげ」

今まで使っていた槍よりも断然軽くて、片手で扱えそうだ。

「久喜輝！」

突然暗い通路から声が響いてきた。ジャックスだ。

「王の前での侮辱……！赦さぬ！」

「そんなつもりは無かったんだ！」

「屈辱だ……！今ここで晴らさせてもらう！」

直後にジャックスが通路を走り始めた音がする。
俺もグングニルを構えてそのまま音がする方へ走り出した。
ジャックスが出す足音と、俺が出す足音の重なる瞬間。

「覚悟！」

「う、お！」

ジャックスは俺に向かって走りながらの抜刀術を仕掛けてきた。速さに速さをかけた攻撃。

俺はグングニルでその抜刀術を受け、かろうじてかわすと、そのまま止まらずにジャックスに背を向けて走り続けた。

「逃げる気か！」

ジャックスが俺の後方で吠えるが俺は知らない振り向かない。

このまま通路を抜けて謁見の間も抜けて王宮からも抜けてやる！

ジャックスがおいかけてくる音を聞きながら通路を抜けて玉座の後ろの壁を出る。謁見の間には唖然とした顔の王様と家臣たちがいて、俺はその視線の中を走り抜けた。剣の破片に砕け散ったシャンデリア。靴で踏み抜かないように細心の注意を払う。

そして謁見の間を抜け重い扉を開けて階段を転がるように降りる。

と、ここで俺は重要なことに気づいた。

帰り道がわからない！

行きは裏口から案内して貰って来たけど……。

長い階段を降りた所で立っていると、謁見の間の扉が開く音がする。

振り返って見ると、階段の一番上で俺を睨むジャックスの姿があった。

「敵だ！捕まえろ！」

ジャックスの一声で周りにいた召し使いやメイドが俺から逃げていく。反対に鎧を着た物騒な人たちが近付いてきた。

「うっわ！」

道なんて考えてる場合じゃねえ！

とりあえずまっすぐ進めば正門から出れるはずだ！

俺は慌てて走り出した。

俺は体力があるわけではないけど、追いかけてくる人たちは重そうな鎧を来てるためスピードが出ないのでどんどん俺と鎧たちの差が広がっていく。

長い通路、中庭、間に部屋を何度か挟む。この城、広すぎる。こんなもの完全に長距離走だ。

途中で大きな置物や家具に隠れて何度か休憩を挟む。汗が吹き出して、肺は休みなく酸素を求める。学校の体育の授業で何度も感じた感覚。圧倒的な疲労感。本当に、元通りだ。

魔力の有り無しでこんなに違うものなんだ。

必死に必死に走り、正門脇の小さな扉から敷地外に出よう時にはほぼ追手をまけた。

しかし、いざ城門を通ろうとした所で衛兵三人に止められてしまった。

「ここは通さん！」

他の二人の衛兵を脇に引き連れて真ん中の衛兵が言った。他二人の鎧がただの鉄製なのに対してひとりだけ鎧の色が緑色だ。恐らくはこの緑色が三人の隊長だろう。

俺は走り続けて苦しい胸を押さえながらその場に膝をつき、成り行

きで持ってきてしまったグングニルを地面に置いた。

「はぁ、はぁ。……頼む。退いてくれ」

息も絶え絶えな俺はもはや衛兵にお願いするしか無かった。もう、戦うなんて力は欠片も残っちゃいない。

「……本当に、お願いします」

頭を地面にこすりつけた。もう、なりふりかまってはいられない。

「黙れ！賊め！」

侮蔑を含んだ言葉が頭上から降り注ぐ。
後ろの方からは金属が擦れる音も聞こえてきた。鎧たちが追い付いてきたのだ。

もう無理か……。

諦めかけた瞬間だった。

「ぐ……！」

目の前で鈍い音がしたかと思って頭を上げると衛兵が三人とも倒れていた。
俺は衛兵を倒してくれた二人組を見て思わず笑顔をこぼした。

「ミア！エレック！」

そこには短刀を鞘にしまうミアと、長剣を構えたエレックがいた。

「心配だったから……」

ミアは帽子をかぶり直す。その横でエレックはヒラヒラと笑った。

「少年。生きてるか？あと、男が土下座はあまりおすすめできないぞ」

「二人とも！ありがとう！助か……」

「逃がすなー！」

各々思いを口にする時間はなく、背後からジャックスの怒気を纏った声が響いてきた。

「げ！近衛隊長ジャックスじゃん！」

明らかに慌てるエレック。

「輝、何したの……？」

ミアは若干蔑んだ視線を俺に送った。ジャックスは世間で余程、人気があるらしい。

「ま、まあね」

何って言われてもそう……王様に脅迫とかかな？

もちろん、悪いのはフルだ。

「ああ、もう……とりあえず逃げよう！」

――……。

俺、ミア、エレックの三人はまた走り通して王宮の衛兵たちを上手く巻いて路地裏を進んでいた。

「それにしても、二人とも、どうして？」

俺は呼吸を必死に整えながら二人にきいた。一足早く落ち着いたエレックが説明し始めた。

「俺とミアに妙な尾行がついてたんだ。そいつをのして口を割らせたら少年が王様の戯れで殺されるみたいなことを聞いたからな。そしたらミアが泣……」

「ちょっと、エレック！」

ミアが遮るようにエレックの背中を叩く。そしてばつの悪そうな顔をしたあと、静かにため息をついた。

「……とりあえず、今は、僕は、少し、休ませて、欲しい」

まだ整いきってない呼吸で喘ぎながらお願いする。体力は相変わらず無いみたいだ。

それを見てエレックは微笑みながら頷いた。

「そうだな。よし。俺がとっておきの場所に案内する。ついて来てくれ」

そう言ってまた路地を歩き始めるエレック。俺とミアはそれについ

ていった。一応衛兵たちを警戒してまた路地裏を歩いていく。

「とっておきの場所って？」

俺はエレックに訊いた。エレックは適当に手をフラフラさせながら説明した。

「行けば解る。もうそろそろ着くぞ」

エレックが動くのにあわせて俺が王宮に入る前に託した槍が左右に大きく動く。今は持っていて貰おう。俺はグングニルを持ってるし。

「そういえば輝、その武器どうしたの？」

ミアが俺の右手に握られてる武器について質問してきた。

「これ？王宮でパクってきた。持ってみる？すごく軽いよ」

俺は羽毛のように軽いグングニルをミアに手渡す。同時にミアは若干重そうな顔をした。

「んっ……！重いよ！ウソつき！」

「ご、ゴメン！」

俺はミアからグングニルを受け取って謝った。少し怒った顔をするミア。俺の手には相変わらず嘘みたいに軽い銀の槍。

一瞬、ミアにからかわれているんじゃないのかと思ったけど、ミアの表情に嘘は見えない。

ミアには重く感じられ、俺にはすごく軽く感じる。何故だろう。

「……ついたぞ」

ごちゃごちゃ考えていると先頭を歩いていたエレックが足を止めて俺とミアに呼び掛けた。
エレックが指し示す先には大きな酒場が建っている。木造建築で、味がある。時間が早いからか客はいなさそうだ。

「ちょっと待っててくれ」

エレックはそう言って俺とミアを路地裏に隠したまま酒場へひとり走っていった。そしてその木製のドアを叩く。

「すみませーん。俺です。エレックです」

そして一拍おいて扉が内側から開いた。エレックがこっちを振り返って手招きする。
ミアと一緒に素早く酒場の入口へ移動すると、エレックが酒場の中から出てきた長い髪の美人な女性と親しげに話していた。

「……エレック！久し振りじゃない！」

「はい、お久し振りです。リザさん！」

どうやらこのリザさんというのはエレックの昔の知り合いらしい。
エレックが事情を話すとリザさんはすぐに中に入れてくれた。

酒場の中に入る。ほんのりとしたアルコールの匂い。木の床は年季を感じる軋みを歩いた後に残していく。

落ち着く場所だ。

思い出したように傷口が痛み、身体中の疲労が染み入るように降りてくる。

魔力の無い中での運動は今までのようにはいかないな。この世界でもうしばらく生きていくためにも、……空たちの内誰かを倒すためにも、少し、体を鍛えないと。

「輝、これ……大丈夫？」

ミアが俺のシャツの袖を引っ張ってきた。振り向く。ミアは心配そうに俺の肩の傷を服の上からそっと撫でてきた。

白いシャツは今朝おろしたての新品なのに、刀傷で切れてる上に赤い血で台無しだ。幸い、ベストまでは染みていないけれど。

「ゴメン。せっかく買ってくれたのに」

謝ると、傷口から手を話してかぶりをふる。

「そんなのいいよ。……死ななくて、よかった」

言って、安堵なのか微かに笑った。

でも、その安堵は長くは続かなかった。

「『死ななくて、よかった』だと……？」

底冷えするような寒い声が広い酒場のホールに響く。聞いたことが

ある声だ。幼くて、それなのにがさがさと刺々しい。

「父さんに対しても、そう思ったのか？」

声の方に目をやると、二階に続く階段の近くに見覚えのある少年が佇んでいた。たしか、空と一緒にいた……アークという名前だったか。

「違うよな？あの時お前は人を殺して笑っていた」

年頃にして十歳前後に見える。前回着ていたボロきれのような服ではなく、街とかで普通に見かけるような服を着ている。
そして、その右手には光るものが。

「人を殺して笑うやつ。父さんを殺したやつ……」

包丁だ。それを両手で握って突き出す。そして、その凶器以上にアークの目が煌めいた。涙を浮かべている。

「あああああ！！」

叫びながらアークが突進してきた。標的はもちろん、ミアだ。

俺があわててグングニルを構えようとした時、エレックが一足早く動く。

「危ねえ！」

エレックは素早く長剣を抜くと、アークが持っていた包丁を一瞬のうちに弾き飛ばした。

俺は咄嗟に前に出てこの少年の突進からミアを庇い、突き飛ばした。
俺とエレックの反撃を受けてアークが尻餅をついてこちらを睨む。
「アーク！何してるの！」
エレックが何か言おうとするのを遮ってリザさんがアークを叱った。
それをきっかけにアークの目にたまっていた涙が溢れだした。
「うるさい！コイツは、父さんを……」
嗚咽混じりにそう言って立ち上がり、アークはまたミアに向かって突進してきた。
俺は反射的にもう一度アークの前に立ちはだかった。
「どけよ！コイツを倒さな――」
「――赦して、欲しい」
怒鳴るアークの言葉を俺のうしろから謝罪の言葉でミアが遮った。
「簡単には赦して貰えないって事は僕だってわかってる。……でも死んで償うなんて事はしたくないんだ。僕を殺すことで君が手を汚すなんて、もっとして欲しくない」
「……」
アークは歯を食いしばって黙りこくる。その目は間に立っている俺を突き抜けてミアを刺すように睨んでいる。

「そんな……。じゃあ、この怒りは何処へやればいいんだ！」

小さな体を震わせて精一杯に理不尽を、怒りを体現する。その姿に俺も、やりきれなくなる。

「……そうだな。これじゃミアのわがままだ。アークの心を無視してる」

ぼそぼそと呟くように俺の口から出てきたのは、アークに同調するかのような言葉だった。

アークの復讐を認めるかのようなこの言葉に対し、アークを含めて皆が驚いた表情で俺を見る。

俺は、顔が真っ赤になるのにも構わずに続けた。

「確かに、ミアの言う通りかもしれない。でも、ミアの言ってる事はあまりにも甘過ぎる」

そう、それは狛江空のように甘い。目の前でおずおずと縮こまる怯えたミアに苛々する。

「理想や綺麗事だけで、人の心は推し量れない。そんな言葉で相手に理解を求めるなんて、強欲だよ」

「でも、そんなの……！」

反抗的に俺を見上げるミアの綺麗な目が、あいつの、狛江空の目と重なる。

『この世界の人を放っておけない』と、皆に訴えかけた時のその目付き。

……気に、食わない。

「……なんで、わかんない！なんで、そんなに自分に都合のいい考え方が出来るんだよ！」

「おい……少年、落ち着け」

彼にしては珍しい、重く静かな声でエレックが俺を制する。おかげで胸のうちにあった苛々が収まっていく。

「……はぁ、はぁ」

落ち着け、ミアは、狛江空じゃない。

「……ごめん、ミア」

ミアはうつむいてしまう。少し、震えてる。

自分で言っていて恥ずかしい。何熱くなってんだ俺は。
自分に都合のいい考え方ばっかりなのは、俺の方だ。

「でも……でも、僕は……。死んで償って逃げるなんてことできない」

きっ、とミアが顔をあげる。俺は少し考えた。
俺だってミアに死んで欲しいわけじゃない。むしろ、心配だ。こんなに甘い考え方をしていて、これから自分の罪悪感と向き合っていけるのか。

「……生かすも殺すも、アークが決めればいいよ」

俺はエレックを向き直った。

「……エレック、俺の槍を返してくれ」

「……ん、ああ」

エレックは背中の槍をとって俺に渡した。俺はその槍をそのままアークに投げ渡す。

「うわっ！」

アークは慌てて槍を受け止めると、俺に疑問の視線を送ってきた。

「ミアはわがままだ。……でも、お前だってわがままだ。ミアは洗脳されていた。全部が全部、ミアが悪いわけじゃない」

アークは目付きをまたギラギラさせる。

「関係あるか……！こいつのせいなのは事実なんだ！」

「だから、仇を討ちたいんならその槍を使え」

俺がそう言うと、アークはしがみつくように持っていた槍を真剣な顔で構えた。

同時に、俺もグングニルを構えた。

「でもな、俺が一番わがままだ。お前がミアを殺すってんなら俺は」

右手で剣のように突きを繰り出した。切っ先はアークの首筋の近くで寸止めだ。身動きひとつとらせない。

「お前を殺す。ミアを殺したいならまずは俺を倒せ」

死の恐怖にアークが目を見開く。見開かれた目には涙がたまっている。怯えと憎しみがごちゃごちゃに入り交じった表情だ。

俺は軽く息を吸った。

「ミアを洗脳したのは俺だ。お前が復讐すべきは、俺だ。その槍はお前にやる。強くなったら俺を殺しに来い」

そしてすぐにエレックに目配せした。エレックは渋々うなずくと、アークの首筋に柔らかく手刀をいれてアークの意識を奪った。

俺は力なく崩れるアークを支えた。そしてそのまま抱き抱える。一瞬肩の傷が痛んだが、随分軽い。そりゃそうだ、まだほんの十歳前後なんだろう。

床に落ちた槍はエレックが拾った。エレックには俺の意図が伝わっているみたいだ。

少しの間沈黙が流れる。

「輝！？何でそんな嘘！」

沈黙を破ったのはミアだった。アークを抱えた俺の前に回り込んでくる。リザさんも困惑している。

俺はミアに無理やり笑いかけて、リザさんに向き合った。

「あの、リザさん、とりあえずアークを寝かせたいので寝室か何かに案内してくれませんか？」

言いながらちょっとだけアイコンタクトを送る。リザさんは相変わらず困惑した表情のままうなずく。

「え、ええ。わかった。こっち」

そう言って二階へと上がり始めた。俺もそれについて行く。ミアを振り返ると不満げな顔をしていた。

二階のベッドのある部屋に案内された。俺はそこにアークを寝かせる。

イビキをかいていない。流石はエレック。加減がわかってる。

「で、どういうこと？あなたがデミアンを洗脳した？随分と下らない嘘ね」

リザさんが呆れ気味に訊いてくる。俺は少し驚いた。

この女は何でミアが洗脳されてたことを知ってるんだ。

「ミアが洗脳されてたこと、エレックに聞いたんですか？」

訊き返したら軽く笑われた。

「これでもあたし、情報屋よ？あなたがイセカイから来たってことも知ってる」

「……！」

バレてた、のか。見抜かれていたことに俺は少し不愉快になりながら答えた。

「だったら『さっきの』もわかるだろ。このままだとアークは何度でもミアを殺そうとする。俺が本当の黒幕だと勘違いしてくれたら、アークは俺を殺しに来る。でも俺はイセカイの住人だから、いざとなったらイセカイに逃げりゃいい」

「……そう。嫌われるのが好きなのね」

「……」

皮肉と取れるリザさんの言葉。俺がそれに答えず無言でいると、階下から俺を呼ぶエレックの声が聞こえた。

「……俺、先におりますね」

呟くように言って扉のドアノブに手をかける。俺の背中に追いかけるように「あたしも後でおりる」と声が降ってきた。

階段をおりるとミアとエレックがホールのいくつかあるテーブルのうちのひとつに座って俺を待っていた。

ミアは俺をにらんでいる。さっきの『嘘』で多少怒ってるんだろうな。うまく取りつくわないと。

エレックはエレックでそんなミアを見て苦笑いだ。俺の意図が伝わってるようなだけに何とも言えない立場にいるみたいだ。

「アーク、寝かせてきた」

俺はなるべく笑顔でそのテーブルに座る。早速ミアが口を開いた。

「何で、あんな嘘ついたの？アークが輝を狙っても良いの？」

単刀直入に来たか。俺がミアを庇ったということをうまく隠し通さなきゃいけない。

もし俺がミアを庇ったことがバレたらミアは意地でもアークの誤解をとこうとするだろう。

最悪、その場でアークがミアを攻撃したっておかしくない。

バレるのだけは避けなきゃ。

目の前のミアが申し訳なさそうな顔になった。

「……何で、僕を庇うようなことをしたの？」

……バレてた。

「あ、ああ。やっぱ分かっちゃった？で、でもリザさんが正義感強い人みたいで『嘘は良くない。後で正しい事情をアークに教える』って言ってたから」

慌てながらそう言ってエレックに目配せした。軽くうなずいた、エレックは俺の話を引き継いで話し始めた。

「そっか、リザさんは正義感強いからなぁ！でも大丈夫だ、ミアは俺がしっかり守るから」

やや早口でそう言って、それから落ち着いた表情でミアの頭をポンと柔らかく叩いた。

「大丈夫だって、安心しろよ」

口を閉ざし、目もしばらく閉じたミアが不安そうにため息をついた。

「……信じるよ？」

「……うん、大丈夫だから」

ミアの真剣な声色に目を反らしそうになりながらギリギリうなずいた。

「……ところで、輝はこれからどうするんだ？」

場をとりなすようにエレックが俺に違う話題をふってきた。

しかし、これから、か。どうしたものだろう。

「……俺はこれから王都中の宿屋なりホテルなりを探して空たちを探そうと思う」

俺はとりあえずの方針を告げる。

「どうしてだ？」

理由を聞き返してくるエレック。殺されかけたのにわざわざまた空たちを追うのは確かに疑問かも知れない。

だけど、俺には空たちを追いかけなきゃいけない理由がある。元の世界に帰る為に。

そろそろ、誤魔化しきれない。潮時だ。二人には話してしまおう。

「多分、二人にはまだ言って無いと思うけど。一つだけ、言わなきゃいけないことがあるんだ」

「何？」

聞き返すミアに俺は懐から銀のペンダントを取り出して見せた。魔力の輝きを失ったペンダントがきらきらと表面的な輝きを見せる。

「……俺は、この世界の人じゃない。このペンダントのせいでこの世界に飛ばされてきたんだ」

「……！！」

衝撃を受けるミア。

「ま、俺は気づいてたけどね」

納得の表情をするエレック。

俺は構わず続けた。

「空たちも同じくアクセサリーの所有者だ。彼らなら元の世界に帰る方法についての情報を何か知っているかも知れない」

この理由はもちろんウソだ。「空たちを殺しに行くんです」なんて言えるわけがない。

「アクセサリーとイセカイの話は親父から聞いてる。図書館には帰還の手がかりは無かったのか？」

エレックが訊いてくる。俺はうなずいた。

「ああ、無かった。だから空たちに話を聞きにいく」

そういえば、エレックは気づいていたんだっけ。俺が異世界から来たことも。

「でも、輝。王都内は僕たちあんまり動けないよ？」

ミアの言う通りだ。

おそらく今は衛兵が俺たちを探してるはず。派手にやっちゃったからな、フルが。

「そうなんだよなぁ……」

「空たちは王都にはいないよ」

階段の方から声が聞こえてきた。

「……リザ、さん」

リザさんは言いながら階段を降りてくる。ずいぶん階上（うえ）にいたようだけど、何をしていたんだろう。

「空たちは今日の朝早く、ハリア経由でヤマトに向かった」

「ヤマト……？」

「ハリアから北西に行った所にある海岸の街だ」

わからない俺にエレックが説明する。

「でも、どうしてだ？」

エレックはリザさんに訊いた。が、リザさんは笑顔で口の前に人指し指でばってんを作った。

「これ以上は情報料を貰うよ。あたしの情報は高いよー」

「そんなっ、ちょっとぐらい良いだろ？」

「だーめ。諦めなさい」

いっつも飄々としていて頼りがいのあるエレックもリザさんの前ではどこか弱々しい。

「いや、もういいよエレック。居場所さえわかれば十分」

俺は壁に立て掛けてあったグングニルとさっきアークに渡した槍をつかんだ。

ハリアまでは自力で行ける。その後はハリアでヤマトへの行き方を訊けばいい。

「俺は今からでも空たちを追うよ」

エレックがたしなめるように顔をしかめる。

「早いな。もっとゆっくりしようぜ？」

俺は目を閉じ、かぶりを振った。

「いや、俺は一人で行くよ。俺の事に二人を巻き込むのは悪いしな」

「……そこだよ。そういうところだよ」

ミアが小さな声を出す。わずかばかり声に怒りがこもっている。

「さっき僕が怒ったのは、嘘をついたから、だけじゃない。そうやって、すぐ、ひとりになろうとする」

「ま、ミアに賛成だな」

エレックがミアの頭に手を乗せる。大袈裟にため息をつきながら笑う。

「少年には前、ハリアでもそんな風に断られたっけ。そういうのはほっとけなくなる」

俺はうつむいてテーブルの板に目をおろす。

それは確かに二人についてきてもらった方が心強い。いや、魔力を失った今の俺が旅をするには信頼できて腕の立つ仲間が必要だ。

「でも……」

もしかしたら、迷惑をかける事になるかもしれないし。

「じゃ決定だ！」

渋る俺をリザさんが横から無理やり仕切る。

「……もう『嫉妬』にとらわれては無いみたいだし、いい加減『一人で……』は止めたら？あたしはあなたがエレックを助けてミアちゃんを救い出したって聞いてる。恩返し、させてやったらどう？」

……恩を感じてくれたのはありがたい。だけど。

「だけど俺は、またいつ『嫉妬』に心を許すかわからない。もしそうなったらエレックもミアも、無事で済むとは思えない」

言うとエレックが、仕方ないとばかりに再びため息をついた。

「……ミアは、また復讐者に狙われてもおかしくない」

エレックの言葉に気づかされて俺は顔を上げた。

……そうだった。復讐者はアークだけじゃない。

エレックは続ける。

「『こんなか弱い少女が窮地に追い込まれてるってのに、放っておいて試合に行くのか？それに――名付け親だろ？』」

「……！」

この言葉は……！

前、ハリアで俺がミアを見捨てて闘技大会決勝トーナメントに行こ

うとした時にエレックに言われた言葉だ。
ミアはというと、あの時と同じく申し訳なさそうな顔。
俺は、少しだけ笑った。
「……エレック。それはちょっと、ズルくないか？」
エレックも吹き出しそうになりながらも笑う。
「ああ、俺もそう思うね」
ミアだけが申し訳なさそうな表情を崩さない。
笑みを止めて、俺は二人に向き直る。
「ミア、エレック。後少しだけ、付き合ってくれないかな？」
「ま、当然だな！」
満面の笑顔を見せるエレック。
「……いいの？」
嬉しさと不安が混じったような表情をするミア。
「むしろこっちがだよ。完全に私用に付き合わせるけど。……本当に良いのか？」
「……うん！」

ミアは大きくうなずいた。

不意に鼻の奥がツンとした。

……こんな俺についてきてくれてありがとう。二人とも。

――……。

「準備出来たか？」

俺は二人に声をかけた。

二人がついてくる事が決まった後にリザさんに昼食までいただいて、結局出発は昼過ぎになってしまった。

ミアとエレックが荷物の確認を終えて酒場の入り口までくる。

リザさんが見送ろうと近づいてくる後ろ、アークが階段を降りてきた。

まずい。アークは俺のことを親の仇と思い込んでるんだ。早く行かなきゃ！

「待てよ」

眠そうに目を擦りながら歩いてくるアークのその顔は年相応の幼さをたたえている。そこについ先程まであった憎しみは見当たらない。

「その槍、俺にくれるんだろ？」

アークは俺の左手にある槍を指さす。

「あ、ああ」

近づいてきたアークに槍を手渡した。サウルという村で手に入れて、一度ドラゴンに折られ、ハリアで甦った愛槍。

アークはそれを手に、決意に満ちた目を見せる。

「俺は強くなる。とりあえずは、アンタを越せるまで。そんで、アンタを越えたらそん時は、目の前の大切なひとぐらい、守りたい」

「……そうか」

「じゃあ、ばいばい」

「ああ」

アークは槍を手にまた階段を登っていった。

『そうか』と『ああ』しか言えなかった。アークがあまりにも立派に振る舞っていたから。

「……本当のことを言ったの」

「え！？」

リザさんは腕を組みながら言った。

「アークは、あの子は強いわ。仇を討ったって何にもならないって、もう気づいてる」

「……そう、なんだ。それじゃもう、俺を越えてるよ」

感情に任せて人に妬いて人を傷つけた俺なんかよりよっぽど強い。
よっぽど大人だ。

俺も、アークを越えるように努力しよう。

「……じゃあ、そろそろ行こうか」

「正門は衛兵が張り付いてる。この酒場の建物の裏に隠し通路があるからそこから街をでな」

リザさんの助言に三人でお礼を言って、俺たちはその酒場を後にした。

――……。

隠し通路を抜け出ると、すでに王都を囲う城壁の外に出ていた。

その巨大な城壁とさらに巨大な王宮を振り返って独り言。

「王都か。大変だったな」

空たち、フル、ジャックス、アーク。それぞれと戦った。勝ち負けは色々だったけど、今俺はひとつの手がかりを持ってここに立っている。

新しく着替えた白いシャツのポケットにはイッソスの部屋にあった本の一ページを破り取って入れてある。

帰る方法を見つけられた。それが耐え難い罪悪感と犠牲を伴うだろうとしても。

俺の目的は当初から変わっちゃいない。

絶対に。

絶対に元の世界に帰ってみせる！

反乱の蠢動

ヒュルーという村があった。村のある地方は荒野が広がってはいたが、少し離れたところには大きめの川と田畑があり、生活用水もそこからひいている。
近くには鉱山があり、そこでは貴重な鉱石が産出するため鉱夫もたくさん住んで『いた』。

木造の建物が多く建ち。
茅葺き屋根だってあった。

それが今はすでに、灰と化す。この村は二日前に侵略者によって火がかけられた。

「はぁ、はぁ……」

ひとりの男がその村を逃げ惑う。三十半ばとみられる薄いシワ。顔中に煤と脂汗を張り付けて泣きそうな表情をしている。
二日前にかけられた火はいまだに燻るようにして木材を熱と煙と灰に分解している。

「……！」

男はまだ火のついていない家屋を見つけるとその中に滑り込むように隠れる。
燃え残った家屋はまだいくつも存在している。男は短期間のうちに家々を移動しながら侵略者たちに見つからないように生きていた。

「……はぁ」

男は震え、涙をこぼしながらその滑り込んだ無人の家にへたりこむ。
流す涙に恐怖を封じ、その右手に握る鍬には憎しみを込める。

『黒衣の軍団』が村に攻めてきたのは二日前のことだった。

男は二日前のその日もいつもと変わらず畑での仕事を終えて村へ、
家へと向かっていた。
異変に気づいたのはその時だ。男の村から煙が上がっていた。

「一体何が……！」

男は鍬も鋤もほっぽって村へ走った。

妻が、子供が。危ない。

男は出せる限りの速さで走った。

しかし、彼が村についた時に見たのは、既に侵略された村だった。
こだまする悲鳴と怒号。そして火の独特な熱気。黒い鎧や衣を纏っ
た集団が武器を手に村中の家屋を襲っていた。

「……何だこれは！」

男は黒衣の侵略者に見つからないように隠れながら惨劇の村を自ら
の家に向かう。だが、毎日帰りを待つ家族のいたその家は。

「嘘だろ……」

男の家は焼き付くされて既に潰れていた。

それから二日がたつ。

男は村を家族を滅茶苦茶にした黒衣の軍団に復讐するためにゲリラ戦をただ一人で続けていた。

「……っ！」

男は涙を拭う。まだ何も終わってはいない。

無人の家に無造作に置いてある鍬を掴んで立ち上がる。

彼の目的は二つ。

黒衣の軍団から捕虜にされた村人を助ける。

そして。

黒衣の軍団を率いるラルガを打ち倒す。

「覚悟しろよ……ラルガ」

男は憎しみと共に呟いて鍬を手に復讐を誓った。

――……。

海に臨む港町ヤマト。大陸西側の海運を一手に引き受けて富を蓄えたこの町は今、数日前に突如としてやって来た『黒衣の兵士』によって統治されていた。

町長は殺害され、町長がいるべき領主館の一室には黒衣を率いる将軍の姿が在った。
軍人特有の厳しい表情。黒い鎧。腰に日本刀。目は鋭く、鷹の様。
「失礼します」
部屋に佇む彼の元に、一人の兵士が訪ねてきた。聡明そうな顔立ちをしている。
「ラルガ様！ヒュルーも既に我が軍の支配下となりました！」
「……うむ」
黒い鎧を纏った男は厳しい顔を崩さずに部下の報告を聞き遂げる。
「先ずはハリアを落とすため。我等は力をつけねばならぬ」
「次の指令はございますか？」
「お前は、どう考える？」
訊かれた部下はわずかに考える素振りを見せて意見をまとめる。
「制圧した町村の反乱分子や抵抗勢力の駆逐を優先するべきかと考えます」
「うむ。同感だな。そうしよう」
「了解しました。では各師団に伝令を飛ばしてきます」
そう言って黒い鎧の男の元から去ろうとする部下を彼は止めた。

「待て。抵抗勢力の駆逐は私も出撃る（でる）と皆に伝えておけ」

「ラ、ラルガ様が……わかりました。……では」

黒い鎧の男、ラルガは部屋を出ていく部下を見送った後に、腰に帯びている日本刀に手を伸ばした。

しっくりと手のひらに馴染む剣を少し抜き、目を細めて白い刃の輝きを確認する。そして納刀、またしっかりと腰に帯び、海のみえる窓から天を仰ぐ。

白い羽を持つ海鳥が海上を鳴く。その更に上空。太陽をおおうように薄雲がかかっている。

「力こそが、國を導くと……」

呟いて、右手に嵌めている指輪に軽く触れた彼の厳しい表情からは、彼の心情を読み取るのは難しかった。

――……。

大きな館の廊下を足早に歩く男がいた。ラルガの部屋を退室し、部下へと伝令を飛ばすべく急ぐ。

この館は今まで海沿いの都市ヤマトの領主館として使われてきたものだ。

一週間ほど前にこの国に仕える将軍ラルガが領主を秘密裏に殺害し、ヤマトの領主権を略取。極めて静かにクーデターは始まった。

今現在も恐らく王都にはこのクーデターのことを知るものは極一部。

その上、王は愚かで、その臣下たちも自らの利権についての謀で頭が一杯となっている。

永く平和を貪った国の力は、根元まで腐っていた。

よって国よりも真に恐ろしいのは民衆。

ラルガは動きを大衆に悟られないように静かに、秘密裏に、徐々に、確かに。侵略を進めていった。

ヤマトの周辺の町村を精鋭『黒衣の軍団』を各一個師団ずつ送り、一瞬で制圧する。更に制圧した町村の住民を絶対に外に出さないことでクーデターが行われていると言う情報が流出するのを防いでいる。

人権を完全に無視した戦略で確実に力を伸ばしていく。

今、館の廊下を急ぎ足でゆくこのラルガの部下は、時々、このやり方に疑問を持つことがあった。

確かに今の王は民の為になる政治をしているとは思えない。だが人権を無視した政治に民の幸せはあるのだろうか？

男の脳裏には『国の為』と言うラルガと無惨に制圧されていく民間人の姿がちらついていた。

「おい！ノーバート！」

男の名前を呼ぶ声。

考え事を中断した男――ノーバートは声の主を探して振り返った。
そしてその視界に一般兵と同じ鎧を着た背の高い男を捉え、足を止める。

「……ラーズか」

ラーズは王国軍時代のノーバートの同期であり、信頼できる部下でもある。

「丁度良い、探してたんだ」

「探してた？俺を？」

ラーズはきょとんとした顔でノーバートに返事をする。

「あぁ。さっきラルガ様から次の指令が出た。各師団は抵抗勢力の駆逐を開始するように、とのことだ」

「……そうか、わかった」

伝令を告げるノーバートにラーズは一瞬暗い顔を見せて頷いた。

「もう一つ。駆逐作戦にはラルガ様も出撃るそうだぞ」

「は。今日は死人が沢山出るな」

自棄気味に笑うラーズ。
その目にはクマが出来ていた。まともに眠れてないのか、それとも、悪夢に惑わされているのか。
いずれにせよ、戦場を駆る軍人としては失格だ。

友人の弱った姿を見てノーバートはため息をついた。

「寝れてないようだな……夜はしっかり休め。……頼むぞラーズ中将、いや、第一師団長」

「……あぁ。了解だ。ノーバート上将」

ノーバートとラースは皮肉の様に名前と立場を呼び合って、各々の持ち場へと歩き始めた。

「……」

ノーバートは廊下を歩きながら思う。ラーズが一瞬見せた暗い顔を。目の下のクマの意味を。

だが、いかなる理由があろうと戦場において迷いは命取りだ。迷った奴から死んでゆく。

割りきる以外には無い。

「……ラーズ！」

ノーバートは廊下を反対側に向かって歩いているだろう背後のラーズに向かって呼びかけた。

「……何だ？」

お互いに振り返って対峙する。距離があるので声が大きくなる。

「俺たちが軍に入った頃の約束、まだ覚えてるか！？」

「当たり前だ！」

ノーバートの問いかけにニヤリと笑ってラーズが口を開く。
ノーバートもそれに合わせて口を開いた。

「民を守る！！」
「民を守る！！」

二人で揃って、短いながらも力強い、その約束を唱和した。

鬱屈していた二人に自然と力強い笑みがこぼれる。

「ラーズ！……死ぬなよ！」
「お前もな！ノーバート！」

それだけ言ってお互いに背を向け歩きだす、今度こそ持ち場へと急いだ。

暗示のように誤魔化すように、彼らは軍務に戻った。

――……。

焦げ臭い村。その男は気取られないように焼け落ちた建物の陰から鍬を振りかざし飛び出す。
そして鎧の継ぎ目となっていた首を狙って勢いよく振り下ろした。

「ぐぁ……！」

男の目の前で首筋から血を吹き出しながら一人の兵士が倒れた。
それを見届けてから左右を確認。すぐに血まみれの鍬をもう一人いた兵士に投げつける。
もう一人の兵士も鍬を頭にくらい、そのまま倒れて動かなくなった。

「はぁ、はぁ。みんな！もう大丈夫だ！俺について来い！この村から逃げるぞ！」

廃屋の陰から静かに沸き上がる歓声。見張りの兵士が居なくなったことで人々が廃屋から出てくる。

突如として村にやって来た兵士を倒した男に、捕らわれていた村人たちは口々に礼を述べる。

「目的地はハリアだ！この事を国に伝えるんだ！」

村人を率いた男はしかし、すんなりとこの村を出ることは出来なかった。

ふいに男は背後に殺気を感じる。
振り返るとそこには頭に包帯を、その身には黒衣を纏った兵士が大剣を構えて立っていた。

「残念だったねオジサン。もう少しで逃げられたのに」

黒衣の兵士はそう言って包帯の下に歪んだ笑顔を見せると、大剣を振り下ろした。

――――……。

俺、ミア、エレックの3人は王都を出て数日後、再び湖の街に足を踏み入れた。
俺はヤマトに直行した方が空たちを早く見つけられると訴えたのだが、ハリアからヤマトまでは距離があるため、ハリアで補給した方がいいとエレックに諭された。
それはつまり、空たちも補給の為にハリアに寄るということなんだ。
逆にハリアに寄ることでもしかしたら空たちを見つけられるかもしれない。

見つけたら……その時は。

「またこの街に来ることになるとはね。……ミア、大丈夫？」

エレックがミアを気遣って声をかけた。
だが当のミアは無言で曖昧に頷いて帽子をさらに深く被るだけ。さっきからこの調子だ。

きっと複雑な心境なんだろう。

ハリアにはミアが昔いたダグラス家がある。催眠されてたとはいえ、殺人をした闘技場もある。

気が滅入るのも無理はない。

「少年、これからどうするんだ？」

エレックが街での行動について聞いてきた。

本音を言えばすぐにでも空たちを探すために聞き込みを始めたい。
でも、ミアを連れて町の人に積極的に話しかける程俺は目的に対し

てシビアにはなれない。

……一人の方が、動きやすいかもな。

俺は少し唸ってから答えた。

「俺は空たちの居場所とヤマトに向かう目的について、何か情報がないか街の人に訊いてくるよ。ミアとエレックには……買い出し頼んでも良いか？」

「わかった。じゃ、早速行こうか、ミア？」

「……うん」

心ここにあらずという感じのミアを連れてエレックが買い出しに向かう。

その後ろ姿を見て、俺は少し不安になりながらも聞き込みに向かった。

――……。

「すみません！」

鎚の打ちふるわれる音に負けじと声を出す。

すり鉢状の地形のハリアの坂道の一つ、その中腹に、少し前にお世話になった武器屋がある。

俺は店内に聞こえるように店の前から大声を出して呼び掛けていた。

聞き込みをする前に、どうしても寄っておきたかった。武器のことで少し聞きたいことがある。

「すみませーん！」

返事がないので俺はもう一度叫んだ。
するとようやく鎚の音が止み、中から懐かしい顔が出てくる。

「何だ？……お前は……！」

「あの、お久しぶりです」

俺を見て驚く武器屋の主人に会釈程度に頭を下げる。
武器屋の主人は俺を見て驚きつつもすぐに笑みを見せ、店内に招き入れてくれた。

店内は焦げた鉄の臭いがした。奥の工場では店長の他に数人の作業員が休憩をとっていた。
椅子を勧められて、応接用の小さなテーブルに向かい合わせに座る。

「随分と、長い間行方をくらましていたみたいだな」

「あ、はい。用事があったもので」

店長が不意に険しい顔をする。店の奥から熱い空気が流れ込んできていた。

「突然闘技大会の決勝を辞退してハリアから姿を消す程の用事か？」

鉄を焼く熱い空気とは逆に体の芯が冷えていく。

まずい。怒ってる。

「……すみません」

謝ると、店長はいきなり屈託無い笑みを浮かべてから豪快に笑った。

「はっは！冗談だ！だが普通に心配したぞ！……それより今日は急にどうした？また槍を壊したか？」

何だ、冗談かよ……。少しビビったぞ。

胸を撫で下ろす。

「いや、あの槍は俺よりもあの槍を必要にしている人に渡しました。今日はこの武器についてです」

そう言ってから俺は背中に手を回して、嘘の様に軽いグングニルを店長に手渡した。

「……中々、重いな」

店長が一人呟く。これでわかった。王都でミアに持たせた時に重がったのは俺をからかっている訳じゃなかった。

俺は軽く感じる。ミアと店長は重く感じる。人によって重さが変わる……そういう事なのか？

「……ふむ」

店長の手によって調べられているグングニルの深い黒色の刀身が怪しく照る。峰と刃、黒と銀の対比がきれいで、美術品かと見紛ってしまう。

一通りグングニルを調べ終わった店長は訝しげに呟いた。

「まず、質問をさせてくれ。……これは何なんだ？剣なのか、槍なのか」

協力したいが、そんなの俺がわかるわけ無い。

「……名前はグングニルというらしいです。名前以外のことは全く分かりません」

「そうか。……それにこれは銀、で造られてるのか？この重さの銀武器なんて壊れやすい。だとしたら武器としては失敗作だ」

「いや、それが。全く重くないんです。強度も問題ないはずです」

俺は店長の考察に反論した。

「どういうことだ？」

俺の反論に不思議がる店長に俺はグングニルについて起こった事を説明した。

「それ、俺には軽く感じられます。頑丈そうなテーブルを切りつけることも出来ました……ちょっと、良いですか？」

俺は店長からグングニルを返してもらうと、その場でぐるぐる回したり、片手で一通り操って見せた。

「重かったらこんなふうに扱えません。あと……壊れても良い硬いものありますか？」

「あ、ああ」

驚く店長はその辺にあった歪んだ形の分厚い大剣を持ってくる。

「潰す予定の大剣だ。硬いが……これを斬りつけたらグングニルの方が壊れるんじゃないのか？」

「ありがとうございます。多分大丈夫だと思います」

礼を言ってから俺はそれをグングニルで思い切り斬りつけた。手に衝撃。思い切りやり過ぎて手がしびれたが、グングニルの刃に傷ひとつついていない。鋳潰される予定の大剣の表面には派手なえぐり跡がついた。

「……確かに。刃こぼれひとつない。驚異的な強度だ。信じられん」

グングニルの性能を前にして店長は唸っている。俺の説明を聞いて余計にわからなくなったようだ。

しばらくしてから店長はぼそりと話し始める。

「やっぱり良く分からない……が。多分これは魔法武器だ。本来の鍛冶屋の守備範囲外」

そこまで言って、店長はいっそう険しい顔をした。

「俺には関係ない。帰れ」

「……わかりました」

店長の謎の威圧感にビビりながら俺はグングニルを背に納め直す。

ここでこれ以上、店長は協力してくれなさそうだな。……王都でリザさんから情報を買えば良かったのかもしれない。

俺はゆっくりと立ち上がった。

「色々ありがとうござ……あ」

頭を下げてお礼を言おうとした瞬間にシャツの胸ポケットから一枚の折り畳まれた紙が滑り落ちてしまった。

店長がそれに気づいて紙を拾って無造作に広げる。

「何か落としたぞ。……ん？」

店長の手の内で広げられた紙には複雑な円やら図形やらが描かれていた。

そう、イッソスの部屋で手に入れたあの魔法陣の設計図だ。

……マズい。俺が違う世界の人間であることはあまり知られるわけにはいかない。

俺は若干焦って素早く店長の手の内から魔法陣の紙を奪った。

その様子を見て店長は不思議そうな顔をする。

「魔力増幅の魔法陣を、何故必死に隠す必要がある？」

「……へ？」

「違うのか？少し図形が複雑なのは古代の魔術様式だからだ……知らなかったのか？」

事も無げに店長は言い放つとそこら辺の棚から一枚の鉄板をつかみとって俺に見せた。

鉄板にはあの紙に描いてあった魔法陣を簡略化したようなものが描かれていた。

俺は恐る恐るあの紙を開いて、鉄板の魔方陣と紙の魔方陣を比べた。

「確かに……似てる」

独り言の様に呟いた俺をよそに、店長はまだ不思議そうな顔をしている。

「だがこれは……？」

店長が俺の手にある紙に描いてある方の魔法陣を睨む。そして急に顔を上げてその鋭い視線を俺に向けた。

「一般人はこんな巨大な魔法陣を使わない。一体これを何に使うんだ？」

「いや、それは。俺は……。……そうだ！俺は田舎出身だから魔法陣とか良くわからないんです」

俺はシラをきって、わからない、というジェスチャーをした。
確か、俺は今まで何度も田舎者扱いをされたことがある。だからここは『田舎者だから疎い』ということにしてやり過ごそう。
店長は厳しい表情をしばらく続けて、それからため息をついた。
「そうだったな。前来たときはちょっと変わった当て布だらけの服を着ていたし、サウル製の槍を使っていた。……俺が変に勘繰り過ぎたみたいだ」
仕方ないな、と呟いた店長は先程の鉄板を手に魔法陣についての説明を始めてくれた。
「魔法陣はこのように鉄板に彫っておいて使う。ちなみにこれは火力増大の魔法陣。ま、そこまで普及はしていない。それには理由があってな」
火力増大。鍛冶屋だから使うこともあるんだろう。
でも、そんな便利なものが普及してないなんておかしい。今までの旅でもあんな鉄板はあまり見た覚えがない。
「普及しない理由って、何ですか」
「……魔力だ。魔法陣を発動させるためには当たり前だが魔力が必要。魔力が無いならただの図形なんだよ」
「あ、そうか……それは、そうですね」
車があってもガソリンがなきゃ動かない。それと同じだ。……車か。
もう排気ガスすら懐かしいな。

「だが、魔力を持ってなくても陣を発動させる方法がある。……『魔導石』という石を使う」

「『魔導石』……」

そういや王都についたばかりの頃、噴水広場の露店街で魔導石なるものを売っている怪しい店があった。

あの時聞いた話からすると、とても高価で庶民にはまずおりてこない。

そりゃ普及しないわけだ。

「魔法陣の大きさに比例して、必要な魔導石の量が違う。この紙に描いてある設計図の通りに陣を敷くには巨大な魔導石が必要になるぞ」

やっぱりそうか。面倒な事になった。空たちを倒す前に高価な魔導石、それも大きなものを見つけなければならない。

「……魔導石は、どこで手に入るんですか？」

俺は説明を終えた店長に訊いた。

「ここハリアから少しヤマト方面に行った所にヒュルーという村がある。そこに魔導石を産出する鉱山が有る。だが……」

店長は意味深にそこで言葉を切った。そしてしばらく考えるようにして黙った後、続けた。

「今ヒュルーは危険地帯なんだ。……そうだな。詳しいことは以前闘技大会で使った競技場に行けばわかる。一回行ってみると良い」

「危険地帯……わかりました。ヒュルーについては競技場で訊いてみます」

店長の真剣な雰囲気に深く追求することができなかった俺は今度こそ立ち上がって店を出る。

店長は武器屋の入り口で見送ってくれた。

「また来い。今は前とは違って仕事が山積みだから忙しい。次来たらもう少し構ってやる」

ありがとうございます、と頭を下げて礼をした俺はついでに、気になっていた事を訊くことにした。

「あの、もう一つだけ良いですか？」

「ん、なんだ？」

「武器屋のわりには魔法について詳しいのは……？」

ああ、と言って店長は苦笑する。

「昔、そのグングニルみたいな魔法武器を補修する依頼がきた」

「補修は成功、したんですか？」

踏み込んで訊く俺にまた顔をしかめる店長。

「アレは人間の扱える代物ではない。……少し前に空き巣に盗られてそれから行方は分からないがな」

「そう、だったんですか」

「あの大剣は無くなるべきだった。鋳潰せないうちに盗まれたのが後悔だ。あるいはグングニルなら壊せたのかもしれない」

そう言って店長は俺の肩を叩いて続ける。

「だけど、良い。……お前はグングニルに呑まれるな」

店長は険しい表情のまま軽く手を振って、店へと戻っていった。

「……気をつけます」

聞こえていないだろうけども呟く。武器屋から鎚の音がまた聞こえ出したのを合図に俺はそこを後にした。

……ヒュルーか。

空たちを殺す前に行って魔導石を確保すべき場所。

俺は今後の動き方を胸の内で大まかに決めて、競技場へと向かった。

――……。

輝が街へ聞き込みに向かった後、エレックとミアは財布を預かり、王都からの旅路で足りなくなった食料などの消耗品を買い出しに行っていた。

「他にいるものあるかな？」

エレックは食べ物が入った大きな麻袋を両手に持って市場を歩く。

「うん……」

その隣を歩くミアの反応は薄い。心ここにあらずで何度も帽子を深くかぶり直してはうつむく。

どうしてもミアには視線が集まりがちになる。急いで王都を発った都合上、ミアは今男物の旅服を着ていた。

いくら女らしくなったとはいえ、今のミアの姿はハリアの人たちが恐怖に震えた『デミアン』の姿と酷似している。

「……それにしても輝って実は金持ちだったんだな。財布にこんなに入ってるとは思わなかった」

エレックが唐突に口を開く。ミアはちょっと反応してうなずいた。

「……うん。僕もそう思った」

「貴族の身分証も持ってるし、この世界に住めば幸せに暮らせそうだよな」

「……うん」

エレックの気遣いにも関わらずミアは変わらず落ち込んだままでいる。

無理も無いことではある。

事実として二人はこの市場に来てから何度も殺気を感じている。しかもミアに対してだ。

ミアだって気付いているだろう。

今は市場の人混みの中にいるから襲われはしてないが、不特定多数の悪意にさらされ続け、さらに自らの罪悪感にも苛まれるミアは辛いに決まっている。

それがわかっているからエレックはミアを気遣っていた。

「……そうだな」

エレックが小さく呟く。

「ミア、少し他の店にも寄ってかないか？」

ずっとうつむいてエレックの後ろをとぼとぼ歩いていたミアが足を止めた。

「……え？」

不思議そうに顔を上げるミア。エレックはその手を無理やり取って市場を出た。

「まぁ、ついてきてよ」

「……？」

――……。

『義勇兵、募る』と大きく書かれた看板が掲げられた競技場には大勢の屈強な戦士たちが詰めかけている。たぶん、志願兵たちだ。俺はヒュルーに関する話を求めてその人混みの中に混ざっていた。そのはずだったのだけど。

「義勇兵……？」

ヒュルーについて教えてくれるんじゃないのか？

意味不明で苛立つ俺をよそに周りの志願兵どもは騒々しく、それがさらに俺を不愉快な気持ちにさせる。

でも、義勇兵を募るってことは……戦争があるのか？王都にはそんな雰囲気微塵も感じなかったけど。

「……？」

ふと、顔をあげると視界の中に、俺を凝視する戦士がいた。ずいぶん驚いた表情をしている。失礼だな。

「おい。あいつ……確か……」

俺を凝視していた若い志願兵が、隣にいる熟練者っぽい志願兵に話しかけていた。

「そうだよ！あいつって闘技大会中に失踪した戦士の久喜輝じゃないのか？」

「何だと……？」

熟練志願兵が俺を振り返る。俺は咄嗟に二人に背を向けて場所を移動するべく人混みに紛れ込んだ。

「あ！ちょっと！」

後ろから俺を追いかける声がしたが、俺は人混みを使い必死になって振り切る。

今は目立ちたくない。ここまで来るのにやましいことをしてない訳じゃないんだ。ここで目立って大勢の目にさらされるのは避けなきゃ。

遠くから若い志願兵が俺を見失うのを見届けて俺はため息をついた。

「嫌なことばっかりだ」

俺は若干悪態をつきながら、人混みにのまれないように観客席を見上げた。

観客席の中央、闘技大会の時には王国の重役が座っていた席の上にある三人が立っていた。

「……あ！」

懐かしい三人だった。

「マーカス、ユリウス、あと、エリスか……」

向かって右。白い鞘の長剣を腰に帯びている背の高い短髪の男はユリウス。
今度は左。腰と背に短刀を二本帯びている長髪を後ろで纏めている男はマーカス。
そしてその二人に挟まれて立っている少女がエリス。
全員、闘技大会の時にお世話になった人達だ。

「皆さん！聞いてください！」

ユリウスが競技場に集まっている志願兵たちに大きな声で呼びかけた。
ざわざわとしていた集団は徐々に静かになっていく。
とりあえずは、文句言ってないで話を聞くしかないか。
俺は若干のイラつきを抑えて観客席の三人を仰ぎ見た。
ゆっくり口を開けたユリウス。
「ついにヒュルーまでもがあのラルガの手に落ちた！」
確かにヒュルーの話だ。
でも、ラルガ？手に落ちた？
話が見えてこない。

「王国には期待できません！皆さん、力を貸してください！」

エリスがユリウスに続けて悲痛な声で頼む。
エリスが頭を下げると同時に競技場では関の声が上がった。
俺は周りの熱気に包まれながらも、ただ立ち尽くしている。

ラルガ、ヒュルルー、義勇兵。一体何が起こっている？

詳しい状況を教えて貰おうと隣の人に声をかけた。

「あの……」

だが俺の声は競技場に響く関の声にかきけされた。隣の人は俺に気付かず両の拳を天に突き上げ叫んでいる。

義勇兵のボルテージが臨界まで高まると、観客席でマーカスが手を高くあげた。それを見て義勇兵たちはまた静まる。

「これからあなた達を二つの隊に分けます！まず第一隊は……」

「直接、聞いた方がいいな」

マーカスの指揮を聞き流しながら俺は群衆を掻き分けて競技場の出口へと向かった。

競技場から出た俺は入り口近くで地面にしゃがみこんで待っていた。先程の競技場の熱気に当てられて火照った頬が湖の涼風でおさまっていく。

小一時間程そうしていると、競技場から義勇兵たちがぞろぞろと出てきた。

集会が終わったんだ。

「やっとかよ……」

俺はため息をつきながら地べたを立ち上がる。
そして適当な義勇兵をつかまえて聞いた。

「なぁ、ユリウスさん達はどこに居るか知っているか？」

「へ？まだ競技場に居るよ。てかアンタ……どっかで……」

訝しげな顔をして答える義勇兵。

「ありがとう」

俺はその義勇兵に追求されない内に礼を言って競技場へ走っていった。

アレほど人がいた競技場には今、人一人すらいない。
俺はその広い空間に入るとすぐに観客席の三人を見つけ出して見上げた。

「おーい！」

観客席まで届くように大きな声で呼びかける。難しい顔をして話し合う三人のうち一人が俺の声に気づいた。

「……ん？あ……輝か！」

マーカスが俺を認めて笑顔になる。

「待ってろ！すぐそっちに降りる！」

――……。

確か、田舎に住んでいる祖父の家がこんな感じだった。

畳、襖、欄間、木造、障子。でも、少しずつ違っている。

何故か畳の上に平気でソファーやテーブルを置いているし、障子には和紙ではなく麻のような手触りの布が張ってある。

「それにしても突然戻ってきて、王都の用は終わったのか？」

ユリウスが腰の長剣を外しながら俺に利いた。

「まぁ、うん」

ソファーに小さく座る俺は、外した剣を専用のスタンドのようなものに立て掛けるユリウスに曖昧にうなずいた。

俺は今、競技場で再会した三人とマーカスの家に来ている。マーカスやユリウス、エリスの家は皆一様にこんな造りだと闘技大会の前にユリウスに聞いた。それは彼ら三人の家が湖の神殿を守る家系だから、らしい。

既にマーカスとエリスは向かいに座っている。そこに剣を片したユリウスが加わったところで俺は口を開いた。

「それで、訊きたいことがある。……ラルガとヒュルーについて」

俺は三人を前にして訊いた。

「それについては私が説明します」

「いや」

エリスが説明しようとするのをマーカスが止める。

「俺が説明しよう」

「あ、ああ。頼むよ」

「そうだな。まずラルガのことだ」

「ラルガって将軍の……？」

確認する俺にいや、といってマーカスは否定する。

「クーデターを起こした今、奴は将軍じゃない。ラルガはヤマトという街を足がかりにしてその周辺の町村を侵略していっているんだ。そこで俺達は義勇兵を募ってラルガに対抗している。既に第一陣はヒュルーに向かった。さっきは第二陣、ヤマトに攻め込む本隊を集めていたんだ」

そこでマーカスは一息ついて続ける。

「率直に言おう、輝。俺達と共にラルガと戦ってくれないか？」

「……」

俺は考えあぐねていた。

確かに侵略者であるラルガは許しがたい存在だ。

だけど俺の目的は一つ。

元の世界に帰る。

そのために魔導石を手に入れ、そして……アクセサリー所有者の誰かを殺す。

関係のないところで危険を冒すわけにはいかない。

「……少し、考えさせてくれ」

「……そうか。第二陣の出発は明日の朝だ。それまでに決めてくれ」

――……。

立派な庭園を抜け、住宅街を歩きながらマーカスの家を離れる。

俺はミアとエレックとの待ち合わせ場所である宿屋に向かって歩いていた。宿屋は以前俺が泊まったところではなく、闘技大会の時にエレックが泊まったところらしい。

「どうするかな……」

ちょくちょく地図を確認しつつ、呟く。

危険を冒すわけにはいかない。けどヒュルーを取り戻さないと魔導石は手に入れられない。

これでもかとばかりのトレードオフだ。

でもその前に……ラルガさんがクーデター？

ラルガさんには世話になったし、何より悪い人には見えなかった。

練兵場を使わせてくれたし、ドラゴンに狩られそうになった時も助けてくれた。俺がすぐ命を諦めかけた時も叱ってくれた。

そんなラルガさんがクーデター？

にわかには、信じがたい。だけどマーカスもユリウスもエリスも冗談であんなに兵士を集める訳がない。

やっぱり真実なんだろう。なら俺は……。

地面を見ながら考えていた俺は、その頭をふと上げると待ち合わせ場所の宿屋が見えてきたことに気付いた。

「……二人に、相談してみようかな」

俺は宿屋へと足を急がせた。

――……。

待ち合わせ場所の宿屋に入る。俺が王都にいた時泊まっていた宿屋よりもきれいだ。コンクリと木を組み合わせてるような建築。建物自体は古いのだろうけど、手入れがされているからか汚さを感じない。

この宿でエレックかミアが部屋を取っといてくれてるはずだ。……というかエレックだな。エレックが今のミアに受付させるとは思えない。

早速若い男が受付をしているカウンターへ向かった。

「あの。エレックっていう名前の人が部屋取っといてくれてるはずなんですけど……」

こちらに気づいてカウンターは爽やかな笑顔になる。

「お名前をどうぞ」

「久喜輝です」

俺が名乗るとカウンターは手元の名簿を照会しはじめた。
すぐに俺の名前を見つけたようだ。

「確かに。ご案内します」

「いえ、大丈夫です。お手数はかけません。場所を教えてください」

俺はカウンターの提案を退けて部屋の場所を訊いた。

「お部屋は三号室です。階段を登って左です」

「ありがとうございます」

リズム良く階段を登る。魔力を無くしてこのかた筋肉痛続きだったから一時期は階段や坂を登るのも辛かったけど最近はそれもおさまってきた。
普通に旅をする筋力はついてきたのかな。いや、王都・ハリア間は舗装されてたから歩きやすかったのかもしれない。
そして階段を登りきり、『三号室』と書かれた扉に手をかける。

そういえば、鍵開いてるかな？

ぼんやりと考えながら、扉を開けた。

「悪い。遅くなった……え？」

殺風景な部屋の中に、綺麗な少女が座っていた。

短めの黒髪に髪飾りをつけている。何か全体的に白くてフリルのついたふわふわした格好をしている。

どこだかのお姫様のようだ。

ほんのりと化粧もしていてキョトンとしてこちらを見上げているその顔は何となく見覚えはあった、のだが……。

誰だ？コイツ。知らないぞ。エレックとミアは何処だ？

部屋の中をざっと見るが、ミアとエレックは居ない。二人の荷物以外にはその少女しかいない。

俺はそこで悟った。

随分動きづらそうな格好をしているが……空き巣だ！

俺は背中のグングニルに手をかける。

「動くな！手をあげろ！妙な真似すんなよ……」

「え、あ……」

少女が戸惑う。いや、戸惑っているフリか？
戦いになったらどうする？
今の俺にはインチキ槍術しか無い。かといって背中に隠し持っている小刀を引き抜く隙も見せられない。

「輝？何やってんだ？」

唐突に後ろから声をかけられた。俺はグングニルを構えたまま少しだけ振り返る。
エレックが訝しげに俺を見て立っていた。

「どうした輝？」

「エレック！部屋に知らない人がいる！……空き巣だ！」

エレックが部屋をのぞきこむ。不思議そうな顔をする。

「……。もしかして、ミアのことか？」

「……え？」

俺はもう一度部屋の中の少女をよく見た。
服装、髪型が違うものの確かにミアの顔だった。見覚えがあったのはそのせいだったのか。

「……。ミア、なのか？」

「う、うん。そうだよ」

俺が問いかけると自信無さげに小さくうなずくミア。そして俺の後

ろのエレックに視線を投げかける。

「……やっぱ変だったんだよ。僕には合わないよ」

「そんなこと無いさ。なぁ輝？」

エレックが急に話を振ってきた。

「え？う、あ。うん」

動揺してつい変な声を出してしまった。

俺は慌てて作り笑いを添える。

改めて目の前の少女を見る。うん、ミアだ。ああ騙された！

いつもは少年のような服装だったし髪だって無造作だった。だからわかんなかったんだ。

顔に血がのぼってきた。恥ずかしくて死ぬ。

エレックが未だにグングニルを片手に持って固まる俺の肩にポンポンと手を置いて、笑いをこらえた小さな声で囁いてきた。

「ぷぷ。少年、面白いなッフフ」

「頼むから忘れてくれ……」

小声で話す俺とエレックをミアが疑いの目で見る。

「何、話してるの？やっぱり、変？」

「いやいや！ミアが可愛いって少年が言ってただけだよ！」

「何言ってん」

「ほらほら！輝もそんな所に突っ立ってないで部屋入れって」

「あー！もー！」

何か、何かもう敵う気がしない。

――……。

俺、ミア、エレックの三人は部屋の床に車座になって座っている。
この宿は珍しく部屋に玄関があってそこで靴を脱ぐみたいだ。

今はお互いにあったことを報告しあっている。
ミアが何でこんな格好をしているのかもエレックに聞いた。結構真面目な理由だった。

ミアは闘技大会の事もあり、この町では依然、アレな戦士だと思われているようで、ミアに向けて殺気を放つ者が多かったと言う。殺された戦士の遺族や知人が始末屋を雇っている可能性も無くはない。
そこでエレックはミアを変装（おめかし）させて追随の手を逃れたのだそうだ。

「名案、だろ？」

エレックはいたずらを成功させた子供のように得意気だ。
対するミアはそわそわしている。数年ぶりのスカートに慣れないんだそうだ。

「やっぱり落ち着かないよ。僕が服選びたかったな」
エレックに文句を言うミア。着ている服はエレックが選んだそうで。
……というか何でお嬢様な服選んできたんだ。少なくとも町娘には見えない。肩とか出てるし。確かに可愛いんだけどさ……。
この服を購入するエレックを想像するだけでえらくシュールだ。
「エレックって……すごいな」
「そうか？でもやっぱミアは元が良いから合わせやすかったよ。この服もこんなに着こなせるとは思わなかった」
さらりとキザな言葉を放つエレックに顔を真っ赤にして照れるミア。
「そんなことより！輝はどうだった？」
ミアは無理やり俺に話をふって必死に照れ隠しをした。
やっぱりまだ子供なんだな。俺と一歳しか違わないけど。
ミアをからかうのは面白そうだけど、こっちも時間がない。俺は手に入れた情報を反芻して話し始めた。
「まぁ、収穫ありかな。……それで一つだけ。二人に相談したいことがあるんだ。いいか？」
「うん。いいよ」
「ああ」

ミアとエレックは頷く。
俺はそれを見てから続ける。

「俺、ある事情があって魔導石が必要なんだ。それも大量に」

「だったらヒュルーという村の近くに魔導石の鉱山がある。あそこなら大分安く買える。少年は何故か金持ちだからな。たくさん買えるんじゃないか？」

エレックが提案した。
というか俺って金持ちなんだ。スクバとかペットボトルとかフォルの商業施設で売っておいて良かった。
……と、そんなことは関係ない。

俺はエレックの提案に首を振る。

「そのヒュルーがラルガ将軍に占拠されている」

俺が『ラルガ将軍』と言葉するとエレックもミアも渋い顔をする。

やっぱり国民にはラルガさんの印象は悪いようだ。良い人だと、思うのだけど。

「昼に競技場で、ラルガに対抗する義勇軍を募集していたんだ。……俺は」

ちょっと迷う。でも結論はすぐに出た。どちらにせよ、魔導石が必要なことにはかわりない。

「……俺も行くつもりだ。二人はどうする？危険だし無理には奨め

ない」

目の前の二人は少し考えてから俺の目をしっかり見据えて言った。

「行くよ」

「僕も」

「……ありがとう」

俺達はそう言った後、変に可笑しくなって、笑った。

――――……。

「なぁ、少年」

気の抜けた声でエレックが声をかけてきた。

「ん、何？」

こちらも脱力して返事を返す。

夕食の後、部屋の中。

ミアは大浴場へ風呂に行ったので今はいない。

荷物を整理している時にエレックに声をかけられた。

「ミアの事、どう思う？」

「どうって？」

聞き返した俺の言葉にエレックは中々答えない。
俺は整理している手を止めてエレックを振り返った。

エレックは窓を開けて闇夜の外を眺めていた。
ゆっくり、口を開く。

「……輝にはまだ話してなかったな。実は俺の家はダグラス家の側近だったんだよ」

「ダグラス家って……」

「あぁ。ミアの家だ。だから俺はミアを護んなきゃいけないんだ」

「そうか」

俺は軽く相づちを打つ。

何故か『それを俺にいってどうするんだ?』とは訊けなかった。

「ミアは今までダグラス家に縛られて生きてきた」

「……うん」

「今も洗脳の事実に縛られて生きている」

ミアは狙われている。ミアも罪悪感を感じている。

「……うん」

「ミアに忘れろとは言わない。でも、もっと楽しんで欲しい。今日

みたいに良い格好したりさ」

「それは、俺も思うよ」

「だからな。だから……もし少年が向こうの世界に帰れるようになったとしても、少しだけ、せめてミアが大丈夫になるまで――」

消え入りそうな声でそこまで言って、エレックは自嘲気味に笑った。

「――なんてな！冗談だよ！全部忘れろ！覚えてもミアにはこの話、するなよ？」

「あ、うん。わかってる……あ」

階段を上がる音が聞こえた。足音が階段を登りきり、少しのタイムラグがあって部屋のドアが開く。

湯上がりのミアが部屋に入ってきたんだろう。

すっぴんになってまたいつものミアに戻るのかなと思いながら俺は振り向いた。

「さっぱりしたか？」

「うん。僕は化粧はもっと大人になってからで良いや」

そう言う彼女は控え目に笑う。

なんだ。元から綺麗だったのか。

ミアのこと、ちゃんと見てるようで見てなかったのかな。

エレックは、ミアのことをよく見てる。何となく、負けた気分だ。

それから一時間と少し、ミアの髪が乾くまで。

「明日もあるし、もう寝ようか」

眠くなってきた俺はそう言って先に自分のベッドに潜り込んだ。

「そうだね」

「明かり消すぞー」

目を閉じる。

最近嬉しいことが一つ増えた。今まで長らくなかったことだ。

「……んじゃ、お休み」

エレックの眠そうな声。

「うん、おやすみ」

ミアの小さな声。

「……おやすみ」

俺も小さく、返事を返す。

嬉しいことだ。

ここ何日間か。俺は独りの夜の震えを忘れることが出来ていた。

二人の決意

噴水広場での魔法を交えた決闘事件、王宮でとある闘技大会の功績者が不届きを働いた事件。
立て続けに大きな事件が起こった王都バルクではあるが、犠牲者が出なかったこともあり、住民は日々の忙しさの中で徐々に平静を取り戻していっていた。

そのような中、またしても大きな事件の報せが王宮へと届いた。

「陛下！やはりラルガ将軍……いえ、ラルガは裏切った様です！」

謁見の間、王の前にてひざまずきながら諜報担当の一人の文官は伝える。
青い髪の王はその整った顔と濁った目で焦りと動揺をあらわして狼狽える。

「な、まさか……」

次の言葉をひねり出せずにいる王に対して文官はさらに続けた。

「ヤマトを拠点として次々に周辺町村の侵略を行っています！どうか早めの対策を！」

文官は王にそこまで告げると許可なく王に背を向け謁見の間を退く。
彼も焦っているのだろう。非礼を詫びることすら無く、逆に王にも

非礼を責める余裕は無かった。

しばらくの沈黙。それを破ったのは謁見の間にいる他の高官たちの騒ぎ声。

王はあからさまに不機嫌になる。

「ええい煩い。反乱したのなら誰かがラルガを討ち取ってくればよかろう」

その言葉に高官達は皆怖じ気づいて沈黙した。自分にだけは白羽の矢をたてられたくないのか目立つまいと口を閉ざす。

さらに不機嫌になる王。

「陸軍元帥よ。ラルガを討ち取ってこい」

名指しされて冷や汗をかく元帥。腰には武官である証の剣、胸には勇将で『あった』証の勲章が煌めいている。だが、それらの輝きを一気にくすませてしまうような青い顔をしている。

「ですが王様。ラルガを正規兵で倒せるかと考えると、可能性的に……」

「もうよい」

王は元帥の言い訳じみた意見を一蹴した。

いよいよ訪れる沈黙。

そんな中、玉座のすぐ横に待機していたジャックスが玉座の前に歩み、片膝をついた。

「王様。私に軍隊を与えてください。ラルガを下して見せます」

褐色の頬を弛め、目には相変わらず強い光を宿す。

――……。

早朝。晴れ。湖から涼しげな風が吹きつける今日この日。ハリアの競技場にはたくさんの戦士が集まっていた。
皆昨日とは違い、武装も旅支度も済ませている。

俺はミアとエレック二人と一緒にその集団にまざっていった。

「将軍のラルガと戦うのには微妙に足りない気もするけど……結構いるんだな」

言いながらエレックが少し顔をしかめる。エレックは軽装だ。兜はかぶらず弛いパーマの金髪はそのまま。右腕にはわずかに板金をあしらった革手袋。足は動きやすそうなブーツ。

「闘技大会に出てた奴も見かけるな……。……まあ、大丈夫だろ」

そう言って不安そうなミアの頭を帽子越しに柔らかく撫でた。

「……うん」

ミアは流石にスカートではないものの、ホットパンツみたいなのをはいていて、少し服装に気を遣っている。髪型もちゃんと整えてい

た。

もちろん、いるかも知れない刺客を警戒してのことだ。

町の人はミアを男だと思っていた、はずだ。今のミアならきっと大丈夫。こんな脚きれいなら男だとは間違っても思われるはずがない。

正直、脚見せたりとか軽装すぎて他のところで不安だけど。

俺はというと、……俺もまともな防具は装備していない。

それは二人のように身のこなしに自信があるからではなく、俺が鎧なんかを着たりしたら重みで動けなくなってしまうからだ。

幸いグングニルは軽いけど、慣れたとはいえ旅の為の荷物だけで充分重い。

考え込んでいると競技場の観客席に誰かが上がっていくのが視界に入った。

「……あ、マーカスたちだ」

マーカス、ユリウス、エリス。いつもの三人が上がると戦士たちは自然と静かになっていく。

二十歳にもならないぐらいの少年少女三人にこれだけの率いる力があるのは、湖の神殿と深い関係にあるからなのかな。

勢い良く腰の短剣を抜いたマーカスは叫ぶ。

「反攻の時は来た！王国に頼るな！自らの平和は自らで掴み取る！……いざ、出陣！！」

マーカスの宣言に被せるように、地響きのように沸き上がる関の声が競技場の空気を大きく震わせた。

――……。

歩き詰めて1日目の夜。つまりは出陣の日の夜。起伏はほぼ無いが荒れ地が続くヒュルーまでの道のり。広い平地を見つけて全軍休息。キャンプとなった。

ハリアを出てすぐはフォリア橋とハリアを結ぶ道と同じく緑の草原が広がっていた。しかし、道を進むにつれて草木は減っていった。今キャンプを張っている場所は近くにきれいな川があり、気候もやや温暖ぐらいで悪くない。
草が沢山生えていないのは不思議だ。わからないことは色々あると再確認出来る。

夜のとばりは落ちているが、あらゆるところでかがり火が焚かれている。だからそこまで暗さを感じない。

そういえばヒュルーまで徒歩で三日四日かかると聞いた。
食糧などの消耗品は何台か同行している馬車にたっぷり積んである。

今、俺は馬車のところに行って分けて貰った食料を調理しながら何となく考え事をしていた。

……フルについてだ。

ちなみにミアとエレックは2人で見張りに行っている。ラルガの軍隊『黒衣の軍団』とやらに警戒している。

だから久しぶりにミアとエレックもいない。俺一人だ。

一人で考え事するのって久しぶりかも知れないな。

料理を粛々と進めながら俺は呟いてみる。

「フル、か」

イッソスの部屋で青銀色の人の形の光に封印されなおされてからなんの音沙汰もない。もちろんペンダントは光を失ったままだ。

体の重さには慣れてきた。というか『元に戻った』というのが正しいんだろう。

体の重さを感じて、つまりはフルの力が消えてすぐは少し動くと筋肉痛やら何やらで辛かった。ちょうど例えるなら、自転車のギアを一番軽いのから一番重いのにした時。そんな感じだ。

「……」

目の前で野菜の皮がツルツルと剥けていく。俺の調理も随分上達した。今なら家庭科で5取れる気がする。裁縫だって前より得意になったし。

「……何考えてんだ俺」

自分につっこんで呆れ笑う。

本当に帰りたいんだ、俺は。

帰ったところで楽しいことは無いかもしれない。もしかしたらミアやエレックみたいな仲間のいる『この世界』の方が楽しいのかもしれない。

でも、一刻も早く帰りたい。俺はこんな物騒な武器を持って旅なんかしたくない。

一日中ぐうたらして、働かずとも無条件にご飯にありつける。自分がどれだけ甘ったれた環境に身を置いていたのかがわかる。

そういえば母さんの手料理も懐かしいな。まぁ、こんな状況にならなかったら俺の料理も上達しなかっただろう。

成長したのは料理だけじゃない。

フルの力を失ってしばらくたった。アクセサリーの魔力に頼らないことで俺自身に体力がついてきてることはわかる。

だけど、不安がある。

そう、戦闘の事だ。

俺は皮を剥き終わった野菜を火をかけた鍋の中に入れて、その蓋を閉じる。

魔力だけじゃないんだ。腕力から体力まで。あらゆる能力が弱くなった。

グングニルっていう優秀な武器があるからいいものの、それがなかったら俺はただのザコだ。

ヒュルーを取り戻すためには戦いになるってのに……。

このままじゃ俺は役立たずだ。ミアもエレックも俺のわがままに付き合わされてるのに、当の俺が足を引っ張るなんて惨めすぎる。

「どうすりゃいい……？」

「……大丈夫？」

周りに聞こえないよう呟いたはずなのに、返事が帰ってきた。

不意に後ろからかけられた声に俺は振り返る。

「……ミアか。見張りは良いのか？」

「……でも。こっちの方が、重要だから」

不意打ちでかけられた声の主であるミアは火にかけられている鍋を挟んで俺の向かいに座りこんだ。

「重要……？」

「……僕とエレックは気づいてるよ？……輝が、弱くなってるって」

「何、で……？」

今のところ二人の前で戦闘はしていない。バレるタイミングは無いはずだけど。

ついつい眉間にシワを寄せて考える俺を見てミアは弱々しく笑う。

「わかるよ、仲間だもん。それに最近の輝はやさしいし」

「やさ、しい？」

首を傾げる俺に、うん、と頷いてミアは続ける。

「輝は自分では気づいてないかも知れないけど、水汲みとかキャンプの片付けとか薪拾いとか。今だって料理を率先してやってる。……負い目、感じてるんだよね？」

「そん、な、こと……」

負い目を感じてるのは……図星だ。でも雑用を率先してる自覚は無い。

目の前では独特の音をたてながら火がはぜている。

ミアもエレックも、たまにだけど妙に鋭い時がある。お見通しだ。

誤魔化せない。

「……弱くなった事、隠してごめん。やっぱり、負い目だよな」

ミアは必死に首を振った。

「僕達は輝を負い目に感じたことないよ。輝が強いから仲間になった訳じゃないもん」

ミアは励ましてくれる。

そりゃそうだ。ミアは「負い目か？」って訊いて「負い目です」って答えるような子じゃない。

我ながら卑怯なことを言ってしまった。

でも、どちらにしろ、わかってるんだ。この優しさに甘えちゃいけない。

俺はゆっくり立ち上がる。

「俺、決めた」

「……？」

ミアもつられて立ち上がる。

俺はこっちを見上げるミアの目をしっかりと見た。

「このままじゃカッコつかないしさ。俺、強くなりたい。だから、ミア。俺に武術を教えてくれ」

頭を下げる。少ししてちょっと顔を上げてミアの表情を窺う。

ミアは、笑顔だった。

「もちろん。僕で良ければ！」

そう言ってミアは嬉しそうに両手で俺の手を握った。まめのある右手と、滑らかな左手。

これからの為に、もう少しだけその優しさに甘えさせてもらうよ。

「ミア、ありが――」

「――良く言った！少年！」

俺は突然のその声と共に突然頭をくしゃくしゃ撫でられた。

「うわっ！」

エレックの声だ。

「エレック！見張りは良いのかよ？」

振り返り様に言うとそのまま俺の頭をポンポン叩きながらエレックは笑う。

「戦士は沢山いるから大丈夫。まだここはラルガの制圧範囲外だしな」

そこまで言ってから急に真剣な顔になった。

「正直、会った時から少年の強さには疑問があったんだ。求めた上の強さを持ってる様には見えなかったんだ」

……それは、そうだ。あの力は巻き込まれるようにして突然手に入れたものなんだから。

「力は求めるから意味がある。それがわかったならきっと強くなれる。それに……」

今度は一転、優しい表情になった。

「それに……やっと俺たちのことを頼ってくれたな。俺もミアも、それが嬉しい」

エレックも、ミアも、優しい。俺は今だってどこか心の隅で『強く

なったら空たちを殺しやすくなる』とさえ考えていたのに。

申し訳なくなってくる。

「……今までだって頼ってるよ。今も俺のわがままについてきてもらってる」

エレックは苦笑しながら顔の前で手を横に振る。

「違う違う……何て言うか、弱味を見せてくれてやっと俺たちのことを認めてくれた気がしたんだ」

「僕も、そう思う」

俺の手を握るミアの力がわずかに強くなる。

「輝は隠し事が多いから……。でも、隠したり偽ったりは疲れるから……」

俺は運が良い。違う世界へ飛ばされるという極限の状況下で、俺をおもってくれる人たちがいる。

「二人とも、ありがとう」

強くならなきゃ駄目だ。

俺は地面に刺さっているグングニルを見る。冷たいだけの筈の輝きが今は焚き火の光を映して暖かく見える。

巻き込まれて望まない力を手に入れたあの時とは違う。

俺は自ら望んで力を求める。

絶対、強くなる……！

――……。

その山は気高く天を衝く。

標高は高く、空気は澄みきった深い青。空に申し訳程度に浮かぶ白雲。大自然の荘厳な風景画。

しかし、誇りがあったはずの壮大な広さを持つ赤茶けた山肌には、無惨にも小さな穴がいくつもあいていた。

それはまるで、山を解体しているかのようだ。

「あれが、『魔導石』ってのが採れるって言う例の鉱山か」

彼はその巨大な山に敬意と少しの哀れみを感じながら歩き続ける。この鉱山はヒュルーの近くにそびえ立っている。それが鉱山開発の拠点としてのヒュルーの価値を高めている。

故にヒュルーは昔から戦いの驚異にさらされてきた。否、今もさらされている。

「空！もう少しだね！」

鉱山を眺めながら歩いていた彼の後ろから、嬉しそうに彼の名を呼ぶ少女。

ポニーテールが印象的な彼女、白石綾香は足を少し早めて狛江空と並んだ。

「絶対にヒュルーの人たち、助けなきゃ」

乾いた地面を踏みしめ、山の麓の村を目指しながら空は綾香の言葉にうなずく。

「ああ。ヒュルーにはきっと『黒衣の軍団』もいるはずだ。気、引き締めてこうぜ！」

空、綾香、舞、速人、一樹。五人は輝たちより一足早くハリアを発ってヒュルーという村に向かっていた。

王都を出、リザの忠告通りに湖の町ハリアに寄った空たちはマーカスらと会って話を聞き、ラルガ討伐の義勇兵として第一陣に参加した。

そして今、大勢の戦士と共に、最初の拠点であるヒュルーにもう少しでたどり着く。

第一陣の彼らがするべき事はヒュルーの奪還。

例の鉱山の奪還は輝たちのいる第二陣の仕事だ。

「……おい空、アレって」

先を歩く空に、一樹が不安げな声で呼びかけた。空が振り向くと一樹は遠くの方を指差していた。

山あいに見える人家の集落。おそらくヒュルーだと思われる場所から煙が立つのが見えている。

空たちの後ろを歩いていた義勇兵たちもその村の惨状に気づいてざわつき始めた。

「思っていたよりヒュルーはマズいかも知れません。急ぎましょう！」

速人が渋い顔で眼鏡を上げて言う。

「くそっ」

空の脳裏では壊されていくヒュルーが、同じくラルガによって滅ぼされた町、シュヘルに重なる。

彼は悔しさに歯をくいしばった。

「ラルガはやりすぎだ！住んでる人が何かしたのかよ！ここまでする必要ないだろ……！」

呟いてから空は後ろの仲間たちを振り返った。

「ヒュルーの人はきっと俺たちの助けを待ってる。皆、行こう！」

――……。

燻る炎が木製の家を食らい続けている。炎が出す熱気はしかし淡く、鎮火に向かっていた。

村は、既に炎に蹂躙された後だった。

「く……！」

空は『ヒュルーへようこそ！』と元気な字で書いてある看板が無惨に倒れているのを見てやりきれなくなる。
立ち込める死の匂い。
異常なまでの静寂。

ヒュルーは滅ぼされていた。

「酷い……！」

舞は悲痛な声で悲しみを訴えている。
舞だけではない。
ここに来た義勇兵もそれぞれにやりきれない想いを訴えていた。

「……何で！」

空は跪いて、固く握った拳を地面に何度も打ち付けた。

彼が自らの無力に涙を溢しかけたその時、微かな音がした。空たちや義勇兵の人の立てた音とは違う方から聞こえてくる。

「……生き残りだ。きっとそうだ！」

無様に地面に崩れていた空は素早く立ち上がる。そして先ほどの微かな物音の源へ向かって走り出した。

「空！？何処に行くんだ？」

「今音がした！誰か生きてるかもしれない！」

問う一樹に振り返らないで答えて、焦げ臭い空気の中を駆けていく。

細い通りをいくつか過ぎ、比較的無事に焼け残った一件の家に突き当たる。

空は直感を働かせた。

「この裏か……？」

即座に回り込む。すると、服も身も泥塗れの男に向かって黒い衣を纏った包帯だらけの男が今まさに、真っ白な大剣を振り下ろそうとしているところだった。

和服の羽織の様な独特な黒い衣。ラルガが率いる精鋭『黒衣の軍団』だと空は一瞬で識別した。

腰に帯びた鋼鉄の剣を素早く引き抜きながら空はほぼ反射で懐のペンダントに軽く触れて魔力を引き出す。

あふれ出しそうなほどの力の波を自らの体におさめ、身体能力を格段に向上させる魔法奥義。『ドーピング』を使い、剣を持って走り出す。

「させるかっ！」

空は常人には再現不可能な速さで踏み込んで横薙ぎに斬りつけるが、その存在に気付いた黒衣の大剣使いが横薙ぎを大剣で受け止めた。

「まだまだぁ！」

第一撃が止められ、すかさず空は剣が光を纏う様子をイメージする。すると胸元のペンダントが金色に輝いて鋼鉄の剣は光を纏った。

ラルガの手下の兵士も、ドラゴンの皮膚でさえも、今まで全てを貫いてきた光だ。

「くらえ！」

瞬間に剣を少し引き、勢いをつけてその真っ白な大剣に打ち付ける。

金属と金属がぶつかり合い、特徴的な高音を奏でた。

……しかし、光の剣は黒衣の男の大剣を砕くことはなかった。

それどころか剣が帯びる光は徐々に弱くなっていく。

「ふふ、アクセサリーの魔法か。ここまで使いこなせるようになったんだな」

大剣使いがその顔中に巻いた包帯越しに厭な笑みを漏らす。

（魔法が、効かない……！）

戦慄を覚えた空は剣を引き、後ずさって間合いを取った。

「お前、誰だ？アクセサリーを知っているのか？」

疑問をその顔に浮かべて空は尋ねる。大剣の男はさっきまでの笑みを打ち消し、包帯で素顔の見えない表情を歪めた。

「その力が原因で……俺の町は葬られた。忘れるわけないだろ……！」

黒衣の大剣使いは若干の怒りをその声に滲ませる。

「貴様らが来なければシュヘーー」

言葉を中断していきなり空に背を向けて振り返る黒衣の男。

「――クソが！邪魔だ！」

「話は、いい！村を、返せ！」

空が駆けつけるまで襲われていた泥だらけの男が鍬を持って大剣使いに殴りかかっていた。

対する大剣の男はその白い大剣を盾の様に使って鍬の一撃を防ぐ。

ボロボロの男は攻撃を受け止められてもなおそのまま鍬を大剣使いに向かって押しつけ続ける。

「面倒なことしやがってこの雑魚が！」

「雑魚でも何でも構わない！俺は家族とこの村を守る！」

男はすでに満身創痍の体にむちうって更に体重をかける。

大剣の男と鍬の男の力が拮抗し、両者の動きが止まる。空がそこに割り込もうとしたところだった。

「空ー！待ってよー！」

突然緊張感の無い綾香の声が聞こえて来た。それに続いて複数の足音。義勇兵のものもある。

「クソ、増援か。分が悪いな」

そう呟くと大剣使いは苦い顔をしてボロボロの男の鍬を受け流す。
そして空に向き直った。

「この村はすぐに俺が取り返す！……待ってやがれ！」

そう言うと彼は大剣を担いで黒衣を翻し、走り去っていった。空は数歩走って追いかけるが、鍬の男が心配になり、剣を納め、足を止めて引き返す。

「大丈夫ですか？」

鍬の男は頷きながら、大剣の男が去るのを見遣ると脱力し、崩れるように膝をついた。

直後沸き上がる歓声。

建物や瓦礫の影から男と同じ様に汚れた格好の人々が出てくる。
皆傷ついてはいるが生きている。空は喜びで泣きそうになる。

「村人か……！良かった。まだ滅んじゃいなかった……！」

――……。

「もう、大丈夫ですよ」

舞はさっきまで鍬を持って戦っていた男に魔法で治癒を施した。男の傷ついた体を青い光が包み、癒していく。
ここはヒュルーで無事だった建物の一つ。普段は村会議で使われる集会所だ。

舞は魔法で、他の人は応急処置で村人の治療を必死にしていた。たった今魔法をかけられた男が最後の怪我人だ。

男は頭を下げる。

「ありがとうございます。本当に助かった」

「いえ。……う」

礼を言う男に謙遜して首を振る舞は力が抜けたように突然倒れる。

「舞！」

一樹が駆け寄って倒れかけた舞を抱き止めた。

「少し休め！魔力の限界だ！」

舞はヒュルーの村人の傷を癒すために連続で魔法を使い続けた。その代償が極度の疲労となって返ってきたのだ。

「私が頑張れるのは、こういう時だから……」

力なく笑って舞は目を閉じる。

「……ゴメン。少し眠るね」

「ああ。お疲れさん」

一樹は心配しながらも微笑むと、舞を床に寝かせて荷物から毛布を出してかけた。

空はその一部始終を心配そうに見守ってから、先程鍬一本で黒衣に挑んで戦っていた男に歩み寄った。

男は空に気づいて会釈をする。

「あ、先程の。ええと」

「狛江空、だ。空ってよんでくれ。俺たちはヒュルーをラルガから取り戻すために来た」

言いながら空は男の向かいに腰かけた。

「そうですか。本当にありがたい。俺はシグといいます。しばらく王国軍の将校をやっていましたが、今はしがないヒュルーの農家です」

シグはやつれた顔に薄く笑顔をのせて名乗った。

「……早速だけどシグさん。この村に起こった事を教えてください。……一体なんでこんなに……」

シグは空の言葉に軽くうなずくと、無理やり感情を押さえたような声でゆっくり話し始めた。

「……もう、二日も前の事になる。突然襲ってきた『黒衣の軍団』は俺たちの村を蹂躙していったんだ。妻も子供も失った……！……それから俺は、ラルガの兵士を村から追い出すために戦った」

シグは床に置いていた鍬を握りしめる。その手にシグの涙が溢れ落

ちた。

「ひどすぎる」

空の手が怒りで震え始める。

「絶対にラルガを赦すわけにはいかない」

彼の目の前で涙を流すシグ。それだけではない。戦いだ。大切な人を失った人は大勢いる。

村人たち皆が悲しんでいる。

「俺はラルガを絶対に倒す。この世界に生きる人たちの為に」

空は小さく呟くと顔を上げた。

「皆、聞いてくれ！」

それぞれ休養を取っているみんなに向かって呼び掛ける。

「あの大剣使いは『村を取り返す』って言ってた。だからまたヒュルーを襲って来る」

戦士たちは息をのみ、村人たちは絶望の嘆息。空は言葉を止めて立ち上がる。

「だからここで待ち伏せて全力でヒュルーを守る！これ以上ラルガの横暴は認めない！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6276j/

アクセサリー(改訂版)

2011年10月12日10時54分発行